

# ロクでなし魔術講師と吸血鬼

ユキシア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

変人、異常者、狂人。 ■■■は周囲から浮いている存在で、実の親からでさえ気味悪がれ、恐れられた。

けれど、■■■はそんなことに気にも止めず変わらない生活を送っていたある日に■■■は人を殺した。その理由は「殺そうとしてきたから殺した。それだけ」。余りの異常性に■■■は“怪物”と苛まれて殺された。その理由は「お前みたいな怪物が生きていいわけがない！」■■■が聞いた最後の言葉に納得した。ああ、自分は怪物だったんだと。そして■■■は邪神の力により、真正正銘の怪物“吸血鬼”として第二の人生——怪物生を謳歌する。

目次

怪物誕生	1
彼の名は	7
魔術学園	13
講師	20
魔術は魔術	30
看破	38
テロリスト	44
怪物	51
怪物と人間	57
事件後の邂逅	63
競技祭の練習	69
説教癖	77
魔術競技祭	82
罪人	90
ゲイル・ブリット	103
温かさ	112
授業参観	123
早朝と拳闘と	133
趣味は	139
仕返し	146
遠征学修	153
浜辺	159
白金魔導研究所	164
止まらない怪物	173

偉大な力は	338
その声は	331
怪物VS魔人	321
魔人	314
細切れと浄化	309
扉	302
二人だけの温泉	296
心の病気	290
魔女と吸血鬼	283
出発	277
調査隊募集	271
君、クビね	264
新しい住人	258
何もできない	253
二人	245
正義と悪	238
正義	231
恐怖を感じない	225
彼氏の務め	219
婚約者	211
広まる噂	206
安息	203
そんな二人に朝日は	196
涙を流すのは	186
人外の領域	180

天使の抱擁

346

イヴⅡイグナイト

352

ルミアを巡って

357

どちらが相応しいのか

362

練習の間際

367

夜の公園

372

## 怪物誕生

周囲から見て彼はおかしかった。

それは容姿でも勉強でも運動でもはたまた才能でもない。ただそこにいるだけでおかしいと思われるほどに彼はおかしかった。

周囲から薄気味悪がれ、孤立している彼はそんなことに気にも止めずに普通に勉強し、普通に遊んで、普通に笑って、普通な生活を送っていた。

唯一孤独という点を除けば彼は順風満帆な人生と呼べるだろう。

これはまだ彼が小学校の低学年の頃の話。

彼は小学校の高学年となっても周囲の変化は変わらない。

いつも孤立している。用事がある時以外は誰も彼に話しかけるようなことはなかった。

中学生になり、彼に変化が訪れた。

それは虐めだ。

いつも孤立している彼を見て数人の男子生徒が彼で遊ぼうと彼を校舎裏へ連れて行った。

その日に暴力事件が起きた。

彼を虐めていたはずの男子生徒達が救急車に運ばれるほどの重傷を負い、病院に運ばれた。

両手両足は何度も叩かれたのか複雑骨折。一人は今後満足に足を動かせれないほどの後遺症を負った。それ以外にも片目を潰された者、アバラが折れて肺に突き刺さった者など明らかに過剰な暴力を受けていた。

学校側は彼を呼び出してその理由を問いただした。

——どうしてあんなことをしたのか？ と。

すると彼はこう答えた。

——暴力を受けたからそれを返しただけですけど？

恐ろしいほど平淡に、当然のように話した彼に教師は言った。

——それでもやり過ぎだ。どうしてあそこまで酷いことをした

んだ？ と。

——暴力を振るうのにやり過ぎなどがあるんですか？ 暴力は暴力でしょう？ 向こうから手を出して来たんですから僕は被害者ですよ。

そこで教師は彼を恐れた。

確かに先に暴力を振った男子生徒達が加害者で彼は被害者なのは間違いはない。彼が行ったのはいわば正当防衛だが、恐れたのはそこじゃない。

過剰な正当防衛を彼は男子生徒達にされた一つの暴力として当然のように行った彼自身にだ。

怒りに身を任せた様子も見れず、我武者羅で気が付いたらこうなっていたわけでもなければカツとなつてしてしまつたわけでもない。

彼は冷静に淡々と男子生徒達を暴力で病院送りにした。

されたら何倍返し。という言葉を彼は実行した。男子生徒達を重症に追い込むまでに。

下手をしたら彼は男子生徒達を殺していたかもしれない。

その事件を境に彼はより孤立した。

恐れられ、怖がられ、警戒される。それでも彼は普通に学校生活を送っていた。

そんな姿に誰かが言った。

あいつはおかしいと。

あいつは異常者だと。

あいつは変人だと。

あいつは狂人だと。

誰が聞いてもまともな言葉が一つも出ては来ない。

周囲は彼を人として理解できない“何か”だ。

彼はそんな周囲に向けてこう言った。

なら、君達はおかしくないのか？

なら、君達は正常なのか？

なら、君達は普通なのか？

なら、君達は常人なのか？

——教えてよ、僕が異常なら君達はなんなんだ？

彼の質問に誰もが口を閉ざした。

彼は進学して二中学校の二年生となった。

変わらずも彼の周囲には誰もいない。そんなことに気にも止めずに彼は家に帰ろうとする。すると、金属バットを持った男子生徒に彼は襲われた。

その男子生徒は一年前に彼を虐めようとして重傷を負った一人。

彼は脚に後遺症を残し、もう走ることもさえできない人になってしまった。

だから、自分をこんな目にした彼に復讐し、殺そうと血走った目で殺すと呟きながら彼に金属バットを振り下ろす。

だけど、それよりも速く彼は鞆からカッターを取り出して喉を掻き切った。

何の迷いも躊躇いもない鮮やかすぎるほどの殺傷行為に男子生徒は喉から大量の血が噴出してその返り血を彼は頭から浴びた。

彼は人を殺し、警察署で事情聴取を受けてこう答えた。

——殺そうとしてきたから殺した、それだけ。

警察官は言葉を失った。

しかし、彼の言葉は事実だ。多くの目撃者が彼を殺そうとしていた男子生徒の姿を見ている。彼が行ったのは正当防衛だ。

その日に彼は釈放された。

詳細は追って伝えるという意味合いも含めて彼は自分の家に帰ろうとするも不意にドンと何かが当たり、背中が熱かった。

後ろを振り返ると一人の男子生徒が顔を怒りで歪ませて手に持っている包丁で彼を突き刺した。

——お前のせいであいつは死んだ!?

そう叫んで彼を押し倒し何度も包丁の刃を彼に突き刺していく。

——お前みたいな怪物が生きていいわけがない!

その言葉に彼は納得した。

——ああ、自分が周囲と違うのが自分が“怪物”だからかと。そこで彼の意識が途絶えた。



——お前は面白い。気に入ったから俺様が新しい命をくれてやる。

暗闇の空間のなかで誰かがそう言った。

——誰ですか？

彼はそう尋ねた。

——俺様は神様だ。まあ、邪神だけだな。

そうですか、と驚くこともなくすんなりと答える。

——俺様はお前が気に入った。だから、新しい世界に怪物としてお前を送ってやる。そうだな………吸血鬼にするか、それに簡単にくたばっても面白くねえからハイスペックな力と条件付きの不老不死を与えてやる。ちなみに拒否権はねえからな。

見えてはいないが、きつとあくどい笑みを浮かべている邪神に彼は頷いた。

——わかりました。

——ハハ、怯まねえとはやっぱ面白いな、お前。

態度が変わらない彼の反応に面白そうに笑った。

——吸血鬼となったお前を殺す方法。それは——。

邪神は彼に自分を殺す方法を告げると彼の意識が途絶え始める。

——期待してるぜ？ ■■■。

邪神の最後の言葉を聞いて彼の意識が完全に消えた。

彼は目を覚ました。

上半身を起こし、周囲を見渡す。どこかの街の路地裏のようだ。

映る鏡に今の自分の姿を見る。

黒髪に紅の瞳。年齢は10〜13ぐらいに見え、口を開けると人間よりも長い犬歯。

吸血鬼になった証だ。

すんすんと鼻を鳴らすとどこからかい匂いがする。

クルルル、と腹が鳴る彼は食事をする為に動き出す。

吸血鬼になったばかりなのにもう身に染みているかのように彼の背中から蝙蝠の翼が出現して彼は空を飛び、匂いを辿る。

匂いを辿って彼はそこに辿り着くと複数人の男性に一人の金髪な少女が泣いていた。

美味しそうな匂いの正体はその少女。

彼は少女から血を少し貰おうとそこに飛び降りた。

突然空から現れた彼に男性達も少女も驚き、男性達は何かを唱える  
と指先から一閃の雷光が迸り、彼の身体を貫いた。

それを見た少女は小さい悲鳴を上げた。

男性達は自分達の攻撃が彼を貫いて倒したと安堵するも束の間、貫かれた傷は消え、彼は爪を伸ばして振るう。

爪は鋭利な刃物のように男性達の身体を容易く切り裂いた。

血塗れの空間に彼は少女に視線を向ける。

——お願い、殺さないで……………。

——殺さないよ？ 少し血が欲しいだけ。それよりもどうして泣いてるの？

命乞いをする少女は涙を流していた。

——何かあるなら話してごらんよ？ 僕でよければ聞いてあげるよ？

少女と目線を合わせて優しく語りかけるように話しかける彼に少女は半分ヤケクソ気味に自分の中に溜め込んでいる物を彼に吐き出した。

全ての話を聞いた彼は少女に告げる。

——それがどうしたの？ 不満や文句があるなら言えばいいと思  
うし、別に一人でも生きていけるよ？

傷心の少女にかけるとは思えないほど思いやりのない言葉だった。

——それに一人でいるのが辛いのなら仲間を作ればいいよ。そういうのは人間の得意分野だろう？ 誰かいないの？ 君の傍にいてくれそうな人、君のことを少しでもなんとかしてあげようとする人。  
今の君は情緒不安定だから周りが見えていないだけで実は近くにい

ることだつてあるよ。

それでも、と彼は少女に手を差し伸ばす。

——世界中の誰もが君のことを嫌っているのなら僕が君を助けてあげるよ。対価は君の血でいいかな？

その言葉に少女は泣き止む。すると、彼はピクリと何かに反応する。

——誰か来たみたいだから僕は消えるね。君の血はまた今度頂くから。

翼を広げて羽ばたく彼に少女は尋ねた。

——貴方は何者なんですか？

その問いに彼は笑みを浮かばせて答えた。

「僕は吸血鬼。ただの怪物だよ」

それだけを言って彼は飛び立った。それと同時に少女の下に一人の青年が駆け付けた。

少女は彼の飛び立った空を見ていた。

## 彼の名は

彼が吸血鬼として誕生して早くも二年が経過していた。

そんな彼が真つ先に行動を始めたのが情報収集。この世界に関するあらゆる情報を集めていると一つだけ前の世界とは大きくことなるものがある。

それは魔術。

呪文を鍵キイワード句とした自己暗示からの深層意識改変によって、人と世界は等価で互いに影響を及ぼし合うという魔術理論に従い世界法則へ介入、様々な超常現象を引き起こす奇跡の業。肉体と精神を扱う『白魔術』、運動とエネルギーを扱う『黒魔術』、元素と物質を扱う『錬金術』、使い魔などを呼び出し召喚する『召喚術』、生命そのものを扱う白魔術と錬金術の複合術を『白金術』。それ以外にも多くの魔術に関わるものが多い。

魔術と一言でいってもその分野は幅広く、深い。

これまで彼は吸血鬼として生活している内に魔術に長けた魔術師を幾重にも相手にしては殺してきた。だからか、魔術に興味がわいた。

吸血鬼でも魔術が扱えるのかという疑問が脳裏を過つたが、きつと扱えると彼は踏んでいる。

何故なら彼をこの世界に誕生させた邪神は娯楽、快楽主義者だ。

自分が面白くするためには徒労も苦ではない。そんな神だ。

だから、彼は思う。

魔術が使えない吸血鬼なんて面白くない。なら、魔術が使える吸血鬼の方が面白いはずだ。

吸血鬼である彼が魔術をどのように使うのか、何の為に使うのか、もしくは魔術で何をもたらすのか。想像するだけでその寄り幅が変わる。

しかし、彼には問題があった。

例え魔術が使えたとしても魔術という未知なものをどうやって身に付けられるのか。

魔術に長けて、それを彼に教える。いわば教師、師匠の存在が彼には必要だった。

これまで魔術師は殺してきたのが失敗だった。

吸血鬼の能力の一つ『眷属』。

自分の血を対象に与えることで対象を自身の眷属にすることができきる。

眷属になった者は彼と同じ吸血鬼となり、人間離れた身体能力を得るだけでなく、寿命も延び、その身は不老となる。

だが、主となった彼の命令には逆らえず、主が死ねば眷属も死ぬという欠点もある。

もつとも条件付きとはいえ不老不死である彼が死ぬことはまずない。

その条件を満たす者が現れるのもまずいない。

「……………御飯にしよう」

道中を歩きながら彼は食事をする為獲物を探す。

吸血鬼となつて良かったと思うのは食事をする際に人間の血で済むということだ。わざわざ働いて金を稼いでその金を食費に使うこともない。

更にはハイスペックなこの身体と能力のおかげで苦労は少ない。

人間だった時よりも便利だ。

「あ、いい匂い……………」

彼は鼻を鳴らすと血の匂いを嗅ぐと首を傾げる。

その匂いは路地裏からだ。それも大量の薬物と血が混じった不味そうな匂いとそれに交えて芳醇なワインのようないい匂いを嗅ぎ分けてその出血量と濃度から死にかけているのがわかる。

こんないい匂いをしている人間が死ぬ前に血を貰おう。死にかけているのなら問題もないだろうと解釈して彼は路地裏に入ると大量の死体があちこちに転がっていた。

だけど彼は気にも止めずに匂いを辿って行くと——見つけた。

それはほぼ死にかけている女性だ。

穢れなき新雪のような白い髪と雪も欺く白い肌。神秘的に整った

美しい顔立ち。頬や腕に呪文のような紋様を赤い顔料で複雑に描かれている。

奇抜な意匠は血で染まっただけで、呼吸も止まっている。

普通では死んでいると考えるが、人間は呼吸と心臓が止まっても五分間ぐらいいは脳がまだ生きていると本で読んだことがある。彼女から腐敗臭がしないということは彼女はまだ辛うじて生きている証拠。

彼は早速彼女の血を頂こうと口を大きく開けて犬歯を剥き出しにする、不意に思った。

これだけの死体がいる中でどうして彼女はここで死にかけているのだろうか？

つまり、それは彼女が魔術師であるから。その可能性が非常に高い。

それも恐らくは凄腕の魔術師。

彼は彼女の血を頂くのを止めて自分の手首を噛み千切って血を彼女に垂らす。

すると、彼の血を浴びた彼女の体にある致命傷が塞がって行く。

吸血鬼の再生能力と彼の不死性も合わさり、超再生能力が発揮して瞬く間に彼女の傷が消えるとそれと同時に彼女の左手の甲に黒い五芒星の紋様が浮かぶ。

それは彼女が眷属として誕生した証。

「さてと、離れよう」

多少は離れてはいるが、どこかで戦闘を行っている音が聞こえてくる。

巻き込まれても面倒だ。彼は彼女を抱えて空を飛んでここから離れていく。

翼を羽ばたかせて彼は森奥にある山小屋に入る。

今は誰も使われていない山小屋で彼は彼女を寝かせて、暖房器具に火種と薪を放り込む。

「……………ん？　ここは……………？　それに、私……………生きて……………」

「目が覚めましたか？」

「……………君は？　それにグレン君はどこにいるの？」

起き上がって周囲を見渡して状況を把握しようとする彼女に彼は答える。

「そのグレン君という人間は知りませんが、ここは森奥にある山小屋で僕は吸血鬼です」

「吸血鬼……………？」

何を言っているのかわからない。そんな表情をしている彼女に彼は翼を広げて見せる。

「そして、貴女は僕の眷属として生を得ました」

彼は彼女に全てを説明した。

どうして生きているのか、ここにいるのか、吸血鬼とはなんなのか、眷属とは、彼女の質問にも嘘偽りなく答えると彼女は難しい顔をしていた。

「……………一つ、いいかな？　私の近くに黒髪の男の人はいなかった？」

「見てませんが、近くで戦闘音は聞こえてましたよ」

その答えを聞いた彼女は飛び跳ねるように起き上がって山小屋から出て行こうとする。

『動かないでください』

「!？」

命令を下し、彼女の行動を止める。

「お願い！　急がないと、グレン君が……………!」

「今から駆け付けても戦闘は終わっていますよ」

変った人だな、と彼は思った。

普通なら自分が人間ではなくなった、下僕にされたと聞いたら混乱するものだと思ったが、彼女は自分の事よりもそのグレンという人間の身を案じて行動しようとした。

「もう諦めるか、無事であることを祈るぐらいしかないでしょう。だ

から、『落ち着いて僕の話聞いてください』

命令を下して彼女を強制的に宥める。

「お姉さんは魔術師ですよね？」

「うん、一応ね……………」

「僕に魔術を教えてはくれませんか？ その為に僕はお姉さんを眷属にしたのですから」

「……………君は、魔術を習ってどうするの？」

「特にどうもしませんよ？ 強いて言えば趣味です」

彼女の質問に彼は素っ気なく答える。

「もし、私が教えないって言ったらどうするの？」

「他の魔術師を探して眷属にします。お姉さんは好きに動いていいですよ？ 用がない人を傍に置く理由もありませんし、死にたいのならご自由にしてください。止めはしません」

日常会話のように普通に答える彼に彼女は恐ろしくも哀しい瞳を浮かべる。

(まだ、子供なのに……………)

彼女は思う。きつと吸血鬼という特殊な環境で育ってしまったが故に生死を気にかけてもいない。言葉通り、彼は彼女を開放して別の魔術師を眷属にするだろう。

彼は何かがズレている。彼女はそう感じた。

「……………わかったわ。私でよければ君に魔術を教えてあげる。だけど、一つだけ約束して」

「何ですか？」

「自分を傷つける為に魔術を使わないで欲しいの」

「？ わかりました」

相手ではなく、彼自身を傷付ける為に魔術を使っではいけない。その言葉の意味が彼にはわからなかった。

「うん、よろしい。それじゃ自己紹介から始めようね。私はセラ。セラシルヴァース。よろしくね」

微笑みながら彼女——セラは自己紹介をすると彼はあ、と思い出す。



彼には名前がなかった。生前の名前はもう覚えていない彼はこの世界で生きる自分の名前を決めることをすっかり忘れていた。

「どうしたの?」

「……………名前、考えていませんでした」

「え?」

名前がない。それには流石のセラも呆気を取られた。

「思いつかないので、ナナシ」でいいです」

「駄目よ、名前は大事なことよ。しっかり考えて、自分に合う名前を決めないで。私も一緒に考えてあげるから、ね」

諭す様に優しく声をかけるセラに彼は首を上げる。

「そうね、吸血鬼だからキュウ……………駄目ね。ん、『テラス』え?」

「僕の名前はテラス。テラスⅡヴァンパイア」

ヴァンパイアは英語で吸血鬼。テラスはギリシヤ語で怪物。

怪物と呼ばれて殺され、吸血鬼として誕生した。だからその二つの意味を込めて彼は怪物と吸血鬼。二つの言葉を名前に取り入れた。

「……………テラス、うん、いい名前だね。それじゃテラス君。改めてよろしくね」

「よろしく、セラさん」

差し伸ばされた彼女の手を握り、彼——テラスに魔術の先生ができた。

## 魔術学園

アルザーノ帝国魔術学園。アルザーノ帝国の人間でその名を知らぬ者はいないだろう。

今から四百年前、時の女王アリシア三世の提唱によって巨額の国費を投じられて設立された国営の魔術師育成専門学校だ。今日、大陸でアルザーノ帝国が魔導大国としてその名を轟かせる基盤を作った学校であり、常に時代の最先端の魔術を学べる最高峰の学び舎として近隣諸国にも名高いその学園に彼——テラスⅡヴァンパイアは学園の制服を身に纏い、学園に到着した。

「……がセラさんの言っていた魔術を学ぶ学園かな……?」

彼がこの世界に誕生して三年。一年前から魔術師であるセラから魔術を学び、セラの強い要望もあつてテラスはこの学園に転入生として訪れた。

何故、吸血鬼であるテラスが学園に通うことになったのか、それは一週間も前の事を昨日のように思い出す。

「ねえ、テラス君。学園に行ってみないかな?」

「学園……?」

「うん、魔術を学ぶ学び舎でテラス君と同じ歳ぐらいの子と一緒に魔術を学ぶの」

テラスはセラに魔術を教わり、一年が経っていた。

その一年でテラスはそれなりに魔術を身に付け、使いこなせる様になったのはセラの熱心な教育と呑み込みが早く、理解も速いテラス自身の才能と努力が実を結んだ結果。

魔術を教わる前に不安だった吸血鬼が魔術を使えるのかという不安は杞憂に終わり、今は『汎用魔術』の呪文改変も当たり前のように行えている。

セラはテラスに魔術を教え、正直に彼の魔術師としての才能に驚いていた。

吸血鬼だからだろうか? キャパシティ 魔力容量も メモリー 意識容量も システム 系統適正も魔力

制御に対する感覚も優れている。

セラの知る限り、帝国宮廷魔導士団でもテラス以上の逸材はいない。

だからセラは彼に魔術学園に通わせようと決断した。

彼ほどの才能を腐らせない為に。彼自身にももつと同年代の子供と関わって欲しいという思いやりを込めてテラスを魔術学園に通うように勧めた。

「どうかな？ きつと色々なことが学べると思うよ」

「吸血鬼が人間の学園に通えるのかな？」

「テラス君なら上手いこと誤魔化せるでしょ？」

「まあ、そうだけど……………」

吸血鬼としての能力は完全に掌握している。学生として転入することぐらいわけない。

「将来のことも考えて、ね？ 行ってみようよ」

断る理由もなく、セラの強い要望もあり、テラスは魔術学園に転入生として転入することができた。

「忘れ物はない？ お弁当は持つてる？ 最初の挨拶はしっかりとしないと駄目だよ」

「大丈夫だよ」

今朝もセラに見送られながら住処を出たテラスは学園に到着すると一人の女性がテラスに歩み寄ってきた。

「転入生だな？ 私はここで教授を務めているセリカ・アルフォネアだ」

「初めまして。今日からこの学園で学ばせて頂きますテラス・ヴァンパイアです。よろしく願いいたします」

セリカと名乗る女性は教授と呼ぶには相応しくない女性だと思った。

超絶と呼べるほどの美女。豪華な金髪に鮮血を想起させる真紅の瞳。身にまとうは丈長の黒いドレス・ローブ。低癪な雰囲気を漂わせながらも、解放された胸元やベルトで強調されたボディラインはそれを超えてなお、艶美。

教授よりも貴族の娘の方がしっくりくる。

「ああよろしく頼む。早速、お前が学ぶ教室へ案内しよう」  
「ありがとうございます」

セリカの案内の下、テラスは学園内に視線を泳がしながらついていく。

「ここだ。少しここで待っていてくれ」

「はい」

案内された教室は魔術学士二年次二組の教室。今日からこの教室でテラスは魔術を学ぶ。

『では、転入生を紹介しよう。入っていいぞ』

「はい」

セリカに呼ばれてテラスは扉を開けて教室に入ると、教室内にいる今日からクラスメイトとなる同級生達の視線が集中するもテラスは緊張した素振りも見せずに教卓に立つて黒板に自身の名前を書く。

「テラスⅡヴァンパイアです。趣味は食事と読書。特技は……………な  
いかな？ わからないことも多いので皆さんには迷惑をかけるとは思いますが、どうかよろしくお願ひします」

やや控えめに、無難な自己紹介を済ませる。

「まあ、同じ校舎で学ぶ者同士仲良くしてやってくれ。席は——」

「アルフォネア教授。私の隣が空いています」

「ああ、ではあそこに座るといい」

「はい」

挙手して自分の隣の席を空いていることを告げる金髪の少女にセリカはテラスにそこに座る様に促すとテラスもその少女の隣に腰を下ろす。

「よろしくね。えっと、テラス君でいいかな？」

「いいよ。えっと……………」

「あ、私はルミア。ルミアⅡティンジェル。ルミアでいいよ」

「よろしく、ルミア」

お隣同士で軽い自己紹介を終わらせるとセリカが話を続ける。

「今日からこのクラスに、ヒューイ先生の後任を務める非常勤講師がやってくる。まあ、なかなか優秀な奴だよ」

これから訪れるであろう非常勤講師を評価して教室から出て行くセリカ。非常勤講師が来るまで時間が余ったホームルームを使い、ルミアの隣に座っていた銀髪の少女がテラスに声をかけて来た。

「この時期に転入なんて珍しいわね。私はシステイナⅡフィーベルよ。よろしくね」

「よろしく、フィーベルさん」

「システイナでいいわよ。私も名前で呼ぶから」

「わかった、システイナ。僕の事もテラスでいいよ」

「ええ、一緒に頑張りましょう。テラス」

ルミアとシステイナ。二人の少女との挨拶を終えてこれから来る非常勤講師を待つ。

「……………遅い！」

システイナが苛立ちを隠そうともせず吐き捨てた。

その理由は明白。今日来るはずの非常勤講師が授業開始時間を過ぎていまだに現れてはいない。

この学園で講師が遅刻するなどという事態は通常あり得ない。にも関わらずに授業時間が半ばも過ぎているのに向に現れる気配がない。

「えつと、ここはね」

「なるほど、ルミアの説明はわかりやすく助かるよ」

システイナの隣では本日の授業で習う勉強範囲をルミアに教わっているテラスに背後から男子生徒の鋭い視線を感じられるが無視していた。

「ふふ、そうかな？ でもそれならテラス君の力になれて嬉しいな」

微笑むルミア。転入してきて数分で仲睦まじい様子を見せる二人を置いてシステイナはこれからくる非常勤講師に一言言おうと考えていた時。

「あー、悪い悪い、遅れたわー」

がちや、と教室前方の扉が開かれた。

どうやら噂の非常勤講師とやらが今、やっと到着したらしい。魔術

学園設立以来、前代未聞の大遅刻だ。

「やつと来たわね！　ちよつと貴方、一体どうということなの!?　貴方にはこの学園の講師としての自覚は——」

早速、説教をくれてやろうとシステイナが男を振り返って……硬直した。

「あ、あ、あああ——貴方は——ツ!？」

「……………違います。人違いです」

「人違いなわけじゃないでしょう!?　貴方みたいな男がそういてたまるものですか?!？」

「こちら、お嬢さん。人に指をさしちやいけませんってご両親に習わなかったかい?」

「システイナの知り合い?」

手を止めて男と話しているシステイナに尋ねた。

「知り合いじゃないわよ!?　今朝会った変態よ!!」

「それは知り合いって言わない?」

最もな疑問を投げたテラスにルミアは苦笑。

「ていうか、貴方、なんでこんなに派手に遅刻してるの?　あの状況からどうやったら遅刻できるの!？」

「そんなの……………遅刻だと思つて切羽詰まっていた矢先、時間にはまだ余裕があることがわかつてほつとして、ちよつと公園で休んでいたら本格的な居眠りになったからに決まってるだろう?」

「なんか想像以上に、ダメな理由だった!？」

清々しいまでのその物言いにテラスは逆に感心した。

しかし、教室中がざわめくなかで男は教卓に立ち、黒板にチョークで名前を書く。

「えー、グレン＝レーダスです。本日から約一ヶ月間、生徒諸君の勉強の手助けをさせていただくつもりです。短い間ですが、これから一生懸命頑張っていきま……………」

「挨拶はいいから、早く授業を始めてくれませんか?」

苛立ちを隠そうともせず、システイナは冷ややかに言い放った時、テラスは男の名前に心当たりがある。

(偶然? それとも……………いや、今はいいかな)

セラの口からよく出てくるグレンという男の話。教卓に立っている男がそのグレンなのか疑念を抱いたが、それは今は置いておいた。「あー、まあ、そりやそうだな……………かつたるいけど始めるか……………仕事だしな……………」

先ほどの取り繕った口調はどこかへ消え、たちまち素が出てきた。「よし、早速始めるぞ……………一限目は魔術基礎理論Ⅱだったな……………あふ」

あくびをかみ殺してグレンがチョークを手に取り、黒板の前に立つて文字を書いた。

自習。

黒板に大きく書かれたその文字に、クラス中が沈黙した。

「え? じしゆ……………え? じしゆ……………う? え? ……………え?」

「自習って書いてあるね」

真っ先に思い当たる意味とは別の意味についての解釈を何度も試みたシステイーナ。

「えー、本日の一限目は自習にしまーす」

さも当然、とばかりにグレンは宣言した。

「……………眠いから」

さりげなく最悪な理由をぼそりとつぶやいて。

「……………」

圧倒的な沈黙がクラスを支配する。その中で教卓に突っ伏して十秒も経たずにいびきが響いてくる。

テラスは席から立ち上がってグレンの傍に歩み寄り、確認するかのようグレンをつつくと頷く。

「ぐっすりだ」

「ちよおつと待てえええええ——ツ!?!」

システイーナは分厚い教科書を振りかぶって、猛然とグレンへ突進

していった。



## 講師

一言で言えば、グレン＝レーダスの授業は最低だ。

だらだらと間延びした声で要領を得ない魔術理論の講釈を読み上げ、時々思い出したかのように黒板に判断不能な汚い文字を書いている。

授業内容が何一つ理解できない生徒でもこれだけはわかった。このグレンという非常勤講師は恐ろしいほどにやる気がない。

まだ独学でしたほうが良かったです。

テラスも教科書を開いたふりをしてノートには別のことを書いている。

それは二反響唱<sup>ダブル・キャスト</sup>。一度の呪文詠唱で、二度同じ魔術を起動する高等技法。セラはその技法に長けた同僚からコツなどを聞いていて、ならば己もその技法を身に付けられないかと思ひ、自分なりに研究している。

セラから教わった範囲を中心に考え、完成に近づけていく。

(練習したいな……………)

実際に試してどこまで形になっているのかを知っておきたい。だが、生憎も今は授業中。勝手な行動は許されない。例えそれがやる気のない講師の授業であつても。

テラスは孤立していても時間を無駄にすることはしない。空いている時間があれば何か得るものがないかと考えるほどだ。

不毛な時間を無駄にせずグレンの初授業が終わりを告げて、次の錬金術実験もとある暴力事件により、担当する講師が人事不省に陥ったために中止となり、その時間も別の事で埋めたテラスだった。

「あ、テラス君、こっちだよー！」

「あ、うん。今行くよ」

アルザーノ帝国魔術学院の食堂は、巨大な貴族屋敷のような学院校舎本館の一階に存在し、生徒達からは伝統的に評判がある食堂だ。

テラスは初めは教室で食事を済ませようと思っていたが、ルミアに誘われて食堂まで弁当持参で足を運んだ。

ルミアとシステイーナと同じ席に座ると、教室と同じように鋭い視線が背中にひしひし伝わってくるも無視する。

「システイーナ、機嫌が悪いの?」

「別に機嫌悪くなんてないわよ」

明らかに不機嫌そうな顔をしているシステイーナだが、本人はそうではないらしい。

「もう機嫌直そうよ、システイ。せっかくの昼食の時間なんだしさ」

ルミアも機嫌が悪いシステイーナの機嫌をなんとかしようとしていた。

「失礼」

テラスの隣、システイーナと正面にグレンは腰を落ち着かせた。

「——ッ!? あ、あ、貴方は——」

「違います。人違いです」

華麗にスルーして、グレンは食事を開始した。それを見てテラスも弁当の蓋を開けて食事にする。

「うわあ。それ、テラス君が作ったの?」

「ううん、お姉さんが作ってくれたんだ」

ルミアは色鮮やかな弁当の中身を見て積極的にテラスに話しかけていた。

「お姉さんがいるの?」

「血の繋がりはないけどね。母親、姉代わりに僕の面倒を見てくれるんだ」

「ふふ、いいお姉さんだね」

「なんなら一口食べる? 先生やシステイーナもよかつたらどうぞ」

「え、いや、悪いわよ………せっかくお姉さんが貴方の為に作ってくれのに」

「お、いいのか? サンキュー」

遠慮するシステイーナとは対極にグレンは弁当のおかずをつまんで一口で食べる。

「先生!? 貴方には遠慮というものが無いのですか!？」

「いや、くれるって言ったから貰ったんだが? なんか悪いのか？」

「……………ん、この味」

「お口に合いませんでしたか？」

「あ、いや、美味しいぞ。うん、いいお姉さんを持って幸せだな、えつと……………」

「テラスです」

「おう、テラス。是非ともお姉さんに俺の分も作って貰えるか頼んでくれ」

「はは、一応言っておきますね」

「テラス! 言わなくてもいいわよ! こんな男に貴方のお姉さんの料理を食べさせる必要はないわ!」

「まあまあ、システイ。でも、これ凄く美味しいね」

システイーナを宥めながらもテラスのお姉さんが作った料理を絶賛するルミア。

「……………ところで、そっちのお前。お前はそんなに足りるのか?」

グレンは当然、テラスもルミアもしっかりと食べているに対し、システイーナはジャムを薄く塗ったスコーンが二つだけ。

「お前、成長期だろ? 食わないと育たないぞ?」

「余計なお世話です。私は午後の授業が眠くなるから、昼はそんなに食べないだけです。真面目ですから。まあ、先生にはそんなこと、関係なさそうですけどね」

グレンの大量の料理を一瞥して言い放ったシステイーナの挑発的な言葉に、空気が一気に重たくなる。

(食事中にこれ以上のいざこざは面倒だし、仕方がないな……………)

せっかく緩和した空気をまた重くなって余計な面倒を抱えたくない。流石のテラスも転入初日は人間らしく振る舞いたいものだ。

「システイーナ」

「なによ?」

目を合わせるとテラスは吸血鬼の能力を発動させる。

「先生はシステイーナの健康を気遣って言っているんだから、そんな

に邪険しないであげてはくれないかな？ 食事の楽しみ方も人それぞれって言うし」

「……………わ、わかったわよ」

ふいっと視線を横に逸らして、納得してくれたシステイーナにルミアは驚いた。

てつきり反論でもするのかと思っていたが、あっさりと頷いて納得したシステイーナに驚きを隠せなかった。

吸血鬼の能力『魅了<sup>チャーム</sup>』。

異性限定で対象を魅了する。数秒から数分までしか効果がないのが玉に瑕の能力だ。白魔「チャーム・マインド」に似た能力だが、精神汚染はない為に幾分良心がある能力でもある。

「……………」

グレンの瞳はほんの僅かだが、訝しげな眼差しをテラスに向けていた。

「あ、システイーナそれにルミア。少しいいかな？」

「どうしたの？」

転入初日の授業と呼んでいいかはわからないが、全て終了して放課後にテラスは二人に声をかけた。

「実はちよつとわからないことがあって二人に聞きたいんだけど、時間は大丈夫？」

「……………貴方の真面目な態度がああ講師に少しでも伝わってくれたらいいのに。それで？ どこがわからないのかしら？」

真面目に魔術に取り組むテラスの姿勢と不真面目で適当な授業をするグレンを見比べて嘆息しながらもテラスの質問に答えようとする二人にテラスは教科書を持って尋ねた。

「今日一日教科書を読んでみて思ったんだけど、どうしてこんな的外れなことばかり教えているのかな？」

「え？」

テラスの質問に二人の目が丸くなる。

「的外れってどういうこと……………」

「グレン先生の授業を無視して自分で魔術の復習と予習を思っていたんだけど、どの教科も覚えろといわんばかりで肝心の魔術に関する仕組みや理解が載っていない。これがこの学園の魔術に関する授業なの？」

テラスの言葉に二人は顔を見合わせた。

テラスもこの学園に来た時はセラから教わったこと以外に何か役に立つことぐらいは見つかるかもしれないと内心は期待していた。

しかし、グレンのやる気のない授業のおかげでこの学園の魔術に関する捉え方、考え方を知って正直落胆した。

これなら学園で魔術の勉強するよりもセラに教わるか自分で学ぶかしたほうがましだ。

「食堂で話したお姉さんのこと覚えてる？ 僕はその人から魔術を教わったんだけど、こんなの外れなことは教わっていないんだ。根本的な理屈が抜けているし、ひたすら覚えろなんてことはしなかった」

システイーナもルミアもテラスが話した理屈をそういうものだと勝手に聞き流していた。そんなことを考えなくても術式と呪文を覚えられた方が使える魔術が増えていくから。

「今からお姉さんに教わったことを少しだけ二人に話すからそれを聞いたうえで答えて欲しいんだ」

セラから教わったことを二人に伝えると二人の表情が驚き、未知に触れる好奇心の興奮。自分達では見えていない何かは彼には見えていた。

「……………凄い、これまで私達が習ってきたのがなんだったのかと思いき知らされたわ」

その式の意味、理屈、構造などの説明を聞いたシステイーナの目色が変わってくる。

テラスの話を聞いたらこれまでの講師達の授業が如何に的外れだったのかがよくわかる。

「テラス！ お願い、私達に魔術を教えて！」

やや興奮気味で顔をずいと近づけてくるシステイーナに少し引き

ながらまあまあ落ち着いてと宥める。

「それはいいけど、僕も学士で誰かに教えたことがないから上手く説明できるかはわからないよ?」

「それでも貴方の魔術の質の高さは講師以上よ! お願い!」

「わ、わかつたら頭を上げて! 空いている時間でよかつたら教えるから!」

頭を下げて必死に懇願するシステイーナに戸惑い、了承するテラスとシステイーナの隣で苦笑いを浮かべているルミア。

「じゃ、今からの方がいい?」

「もちろんよ!」

魔術に対する真っ直ぐで情熱的なシステイーナにテラスは苦笑した。

転入初日。その様子をセラに聞かれたテラスは同級生に魔術を教えたことを話したら、どこか嬉しそうな表情をしていた。

テラスが転入し、グレンが講師着任から一週間。

空いている時間があれば二人に魔術を教えているテラスにムキになっっている節すら感じられるほどにやる気がないグレンの授業。

始めはそれらしく授業をしていたグレンも段々面倒臭くなってきたのか、教科書を黒板に釘で打ちつけるほどにまてななな。

「いい加減にして下さいッ!」

ついに怒りが頂点に達したシステイーナは机を叩いて立ち上がった。

「む? だから、お望み通りいい加減にやってるだろ?」

「子供みたいな屁理屈こねないで!」

肩を怒らせ、システイーナは教壇に立つグレンにずかずかと歩み寄っていく。

「まあ、そうカツカすんなよ? 白髪増えるぞ?」

「だ、誰が怒らせていると思ってるんですか!」

「ほら、そんなに怒るからその歳でもう白髪だらけじゃないか

……………可哀想に」

「これは白髪じゃなくて銀髪です！ 本当に哀れむような顔で私を見ないで！ ああ、もう！ これならテラスに教壇に立って貰った方がマシよ！」

「え……………？」

教室内の誰の視線がテラスに集まる中で、自分の名前が出るとは予想していなかった彼自身は驚きを隠せなかった。

(勘弁してよ、システイーナ……………)

二人に魔術のことを教えているとはいえ、それは自分にとって魔術の再確認も意味合いも含めて教えているだけでわざわざ講師のような真似事はしたくはなかった。というよりも吸血鬼である彼は出来る限りは目立つ行動は避けたかった。

郷に入っては郷に従え。ここは人間が魔術を学ぶ学園なら人間のように振る舞いのが当たり前だ。

「ほう、テラス。自習にするからお前、ちよつとこいつらに教えてやれ。俺も楽が出来ていいし」

「貴方って人は講師としての最低限の矜持もないのですか!？」

うわあ、と滅多にしない嫌そうな表情を浮かべるテラスの隣で苦笑しながら頑張つてと応援してくれるルミアの優しさが心に沁みる。

周囲からも怪訝と好奇心の視線がテラスに向けられる。その理由はシステイーナが優秀で学年首位という成績を持ち合わせているからだ。

そのシステイーナが推したテラスに興味を示さない者は誰もいない。

「テラス！ この駄目講師に教えてやって！ 魔術がいかに偉大で崇高なものかを！」

期待の眼差しを向けられるテラスは肩を落とす。

どうしてこう持ち上げてくるのかな、とため息を吐きながらグレンに視線を向けるもとてもいい笑顔で親指を立てて来た。

——ハハハ、楽できていいぜ。

瞳がそう語っているようにしか見えなかった。

「はあ、わかったよ」

諦念し、教壇に立つテラスにキラキラと瞳を輝かせているシステイーナが視線が痛い。

「さてさて、お手並み拝見と行かせて貰おうか」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら上から目線の物言いに正直イラ、ときた。

「それじゃ、始めますよ?」

チョークを片手にテラスの授業が始まった。

「——というわけです。何か質問はありますか?」

テラスは魔術式に関する解説、説明をしながらそれを黒板に書き終えて質問がないかと促すも、システイーナとルミアを除くクラス全員が驚かされた。

一週間前に転入したばかりの同じ学士であるテラスの魔術に対する造詣の深さに声が出なかった。

途中で噛んだり、言葉を詰まらせるところはあっても説明などに不備もなく、わかりやすい。同じ学士とは思えない。

「ほお、普通にすげえな……」

グレンから見てもテラスの授業に関心の声を出す。

点数をつけるとしたら80点だろう。それでもグレンからしてみたら高得点だ。

「どうですか? これで少しは危機感を持ったはずです。先生が授業に対する態度を改める気がないと言うなら、私達は彼に教わります」  
(いや、無理だと思うよ……)

講師ではなく学士としてこの学園に来たのだから、いくらグレンにやる気がないといえ講師であることには変わりない。

そもそも学士が学士に授業する行為自体がおかしい。

システイーナはテラスに授業をさせてグレンに危機感を持たせれば態度を改めると考えていたらしいが、この講師は違った。



「よし、今日から俺の授業はテラスに任せた。うん、それがいい」  
自分の仕事をテラスに丸投げした。

「貴方っていう人は——ッ！」

忍耐の限界を超えたシステイナは左手に嵌めた手袋を外し、グレンに向かって投げつけた。

「痛え!」

「貴方にそれが受けられますか?」

静まる教室に、システイナはグレンを指差し、力強く言い放った。

「お前……………マジか?」

グレンも眉をひそめ、柄になく真剣な表情で床に落ちた手袋を注視している。

魔術師にとって左手とは心臓に近い位置にあり、魔術を使うのにより適した手である。そして、その左手を覆う手袋を相手に向かって投げるといふ行為は魔術による決闘の意思表示。

「私は本気です」

「シ、システイ! だめ! 早くグレン先生に謝って、手袋を拾って!」

駆け寄るルミア。だけど、システイナは烈火のような視線でグレンを射抜き続ける。

「……………お前、何が望みだ?」

「その野放図な態度を改め、真面目に授業を行ってください」

「……………辞表を書け、じゃないのか?」

「もし、貴方が本当に講師を辞めたいなら、そんな要求に意味はありません」

「あっそ、そりゃ残念。だが、お前が俺に要求する以上、俺だってお前になんでも要求していいってこと、失念してねーか?」

「承知の上です」

「……………お前、馬鹿だろ。嫁入り前の生娘が何言ってるんだ? 親御さんが泣くぞ?」

「それでも、私は魔術の名門フィーベル家の次期当主として、貴方のよきな魔術をおとしめる輩を看破することはできません!」

「あ、熱い……………熱過ぎるよ、お前……………だめだ……………溶ける」

グレンはうんざりしたように頭を押さええてよろめいた。

完全に空気と化しているテラスは先ほどの自分の授業はなんだったのかと、思う。

「テラス君も見えてないで二人を止めて！」

「……………いや、もうここまでできたらぶつかり合った方がいいと思う」

まさに一触即発。触れれば爆発するような空気を醸し出している。

なら、今後の事も考えていつそのことここで爆発させた方がいいと判断した。

「やーれやれ。こんなカビが生えた古臭い儀礼を吹っかけてくる

骨董品がいまだに生き残っているなんて……………いいぜ？」

グレンは底意地悪そうに口の端を吊り上げた。床に落ちている手袋を拾い上げ、それを頭上へと放り投げる。

「その決闘、受けてやるよ」

そして、眼前に落ちてくる手袋を横に薙いだ手で格好良く掴み取るうとして——失敗。

グレンは気まずそうに手袋を拾い直した。

こうして講師と学士の決闘が始まった。

## 魔術は魔術

「このように三属呪文は——」

——どうしてこうなったのだろうか？ テラスはチョークで黒板に三属呪文の解説をしながら深く、深く思った。

グレンとシステイーナの決闘は結果から言えばシステイーナの圧勝だった。

黒魔【シヨック・ボルト】の呪文のみの決闘で一節詠唱ができないグレンと一節詠唱ができるシステイーナでは大きな差があった。

決闘でシステイーナは確かに勝利した。だが、グレンは屁理屈をこねにこねて引き分けと言い放って逃走。

誰もがグレンに酷評し、侮蔑と軽蔑の眼差しを向けるなかで全員の視線がテラスに向けられた。

『え……………う？』

決闘直後、テラスはグレンの授業は自習になって自分が勉強に取り組める時間が増えると予想していたが、その予想は大いに崩れ去った。

同じ学士とはいえ、テラスは既に講師を上回るほどに魔術の造詣が深い。

自主的に魔術を学ぶより、テラスに教わった方がいい。クラス全員（一部の成績優秀者を除き）がテラスに魔術を教えて欲しいと頼んできた。

初めは断った。

あくまで自分は学士という立場、まだまだ足りないものも多い、講師ではないなどと様々な理由を述べて断ろうと試みたが、引き下がないクラスメイト達に折れてしまった。

決闘騒動から三日経った今なんかは講師のように同じ学士に魔術を教えている。

グレンは窓際に椅子を持ってきて腰を下ろし、呆然としている。文句一つも言わない。

それが既に暗黙の了解となっている。

「あ、あの……………先生……………」

それでも何かを学ぼうと健気で真面目な生徒はグレンに声をかけて来た。

「ん？ 質問があるなら俺じゃなくてテラスにしたほうがいいぞ？」

（それはダメでしょう？ 非常勤講師……………）

学士が授業している時点でもう駄目だが、それでも自分から質問してくる真面目な生徒の質問を他の誰かに投げ渡すのはよくないだろう内心でぼやく。

「無駄よ、リン。その男に何を聞いたって無駄だわ」

「あ、システイ」

質問したリンは、グレンとシステイナに挟まれて所在なさげにおろおろする。

「その男は魔術の崇高さを何一つ理解していないわ。むしろ、馬鹿にしている。そんな男に教えてもらうことなんてない」

「で、でも……………」

「大丈夫よ、テラスや私が教えてあげるから。一緒に頑張りましょう？ あんな男は放っておいていつか一緒に偉大なる魔術の深奥に至りましょう？」

システイナがうろたえているリンを安心させるように、笑いかけたその時だ。

一体、何がその男の気に障ったのか。

「魔術って……………そんなに偉大で崇高なものかね？」

ぼそりと、グレンが誰へともなくこぼしていた。

それを聞き流せるシステイナではない。

「ふん。何を言うかと思えば。偉大で崇高なものに決まっているでしょう？ もっとも、貴方のような人には理解できないでしょうけど」

鼻で笑い、刺々しい物言いではっきりとシステイナは切り捨てた。

普段ならここでこの話は終わっても不思議はなかった。だが――

「何が偉大でどこが崇高なんだ？」

その日はなぜか食い下がった。

「……………え？」

想定外の反応にシステイーナも戸惑う。

「魔術ってのは何が偉大でどこが崇高なんだ？ それを聞いている」

「そ。それは……………」

「ほら、知っているなら教えてくれ」

一呼吸置いて言葉をまとめ、自信もって返答する。

「魔術はこの世界の真理を追究する学問よ」

「……………ほう？」

「この世界の起源、この世界の構造、この世界を支配する法則。魔術はそれらを解き明かし、自分と世界がなんのために存在するのかという永遠の疑問に答えを導き出し、そして、人が高次元の存在へと至る道を探す手段なの。それは、言わば神に近づく行為。だからこそ、魔術は偉大で崇高な物なのよ」

自分でも会心の返答だとシステイーナは思った。

だから、返ってきたグレンの言葉は不意打ちだった。

「……………何の役に立つんだ？ それ」

「え？」

「いや、だから。世界の秘密を解き明かした所でそれが一体なんの役に立つんだ？」

「だ、だから言っているでしょう！ より高次元の存在に近づくために……………」

「より高次元の存在ってなんだよ？ 神様か？」

「……………それは」

即答できないシステイーナにグレンはつまらなそうに追い討ちをかける。

「そもそも、魔術って人にどんな恩恵をもたらすんだ？ 例えば医術は病から人を救うよな？ 冶金技術は人に鉄をもたらした。農耕技術がなければ人は飢えて死んでいただろうし、建築術のおかげで人は快適に暮らせる。この世界で術と名付けられた物は大体人の役に立

つが、魔術だけは何の役に立ってないのは俺の気のせいか？」

魔術の恩恵を受けるのは魔術師だけだ。魔術師ではない者に魔術は扱えない。

それ以外にも大勢の魔術師は魔術の研究成果が一般人に還元されることを頑なに妨げている。一般人が普通に生きていく分には見ることも触れることもない代物だ。

「魔術は……人の役に立つとか、立たないとかそんな次元の低い話じゃないわ。人と世界の本当の意味を探し求める……」

「でも、何の役にも立たないなら実際、ただの趣味だろ。苦にならない徒労、他者に還元できない自己満足。魔術つてのは要するに単なる娯楽の一種ってわけだ。違うか？」

システイーナは言い負かされ、歯噛みするしかなかった。

あまりの悔しさにシステイーナが唇を震わせていると……

「悪かった、嘘だよ。魔術は立派に人の役に立っているさ」

「……………え？」

突然の掌返しにテラス以外のクラスの全員が目丸くする。

「ああ、魔術は凄え役に立つ……人殺しにな」

酷薄に細められたその暗い瞳。薄ら寒く歪められた口から紡がれたその言葉。それを聞いてテラスは確信した。

この非常勤講師こそが、セラが言っていた《愚者》のグレン＝レーダスだと。

「実際、魔術ほど人殺しに優れた術は他にないんだぜ？ 剣術が人を一人殺している間に魔術は何十人も殺せる。戦術で統率された一個師団を魔導士の一個小隊は戦術ごと焼き尽くす。ほら、立派に役に立つだろ？」

「ふざけないでッ！」

流星に看過できなかった。魔術を無価値と断じられるならまだしも、外道におとしめられるのは我慢できない。

「魔術はそんなじゃない！ 魔術は——」

「お前、この国の現状を見ろよ。魔導大国なんて呼ばれちやいるが、他国から見てそれはどういう意味だ？ 帝国宮廷魔導師団なんていう

物騒な連中に毎年、莫大な国家予算が突っ込まれているのはなぜだ？」

「そ、それは——」

「お前の大好きな決闘にルールができたのはなんのためだ？ お前らが手習う汎用の初等呪文の多くがなぜか攻性系の魔術だった意味はなんだ？」

「——それは」

「お前らが大好きな魔術が、二百年前の『魔導大戦』、四十年前の『奉神戦争』で一体、何をやらした？ 近年、この帝国で外道魔術師が魔術を使って起こす凶悪犯罪の年間件数と、そのおぞましい内容を知っているか？」

「——っ！」

「ほら、見ろ。今も昔も魔術と人殺しは切っても切れない腐れ縁だ。なぜかって？ 他でもない魔術が人を殺すことで進化・発展してきたロクでもない技術だからだ！」

普段のすつとぼけた顔とは違う何かを憎むようなグレンの形相はテラスに向けられた。

「テラス。お前もそれを知っていてあえて避けて教えてるだろう？」

そこまで魔術の造詣が深いお前のことだ。魔術がどのようなものか理解しているはずだ」

「っ！ う、嘘よね……そうよね？」

グレンの言葉にシステイーナは最後のよりどころのようにテラスに縋る様に見るとテラスは小さく息を吐いた。

「ええ、先生の仰る通り、魔術による戦争、犯罪。魔術で多くの人が死んでいることぐらいはね」

「——っ!？」

裏切られたかのようにシヨックを受ける。

「だろう？ まったく俺はお前らの気が知れねーよ。こんな人殺し以外、何の役にも立たん術をせこせこ勉強するなんてな。こんな——」

「誤解しないでください。僕は別に先生の考えを全面的に肯定したつ

「もりはありません」

「はあ?」

「え?」

グレンの言葉を遮って言い放つテラスに訝しむ。

「……………じゃ、なんだ? 魔術は人殺し以外にも役に立つって言うのか?」

「確かに先生の言う通り、普通に生活している人は魔術を見ることも触れることもないでしょう。それは肯定します。だが、人殺し以外に役に立たないのは流石に極論じゃありませんか? 何が先生をそうさせているのかは知りませんし、僕には興味ありません。しかし、魔術があったからこそ救われた人もいるんじゃないですか? 白魔【ライフ・アップ】なんかは傷を癒す魔術で、到底人殺しには向かないものです」

語るテラス。その言葉にグレンの顔が歪む。

「そもそも僕から言わせれば二人とも極論過ぎますよ。グレン先生は魔術を人殺しに、システイーナは魔術を神聖視している。その時点でもうおかしい。まるで魔術に善悪の感情があのようなではありませんか? 魔術はあくまで魔術です。魔術をどう扱うかは使い手の判断によって大きく変わります。真理を追究するのも、人殺しに使うにも人間が決める。人間という生物は自分にとって都合の悪いことを自己解釈し、正当化する。わかりやすい例えで言いますか? 人を殺した人間がいるとしましょう。だけど、その人間はこう言います『違う、だって、あいつが……………』などと何かに自分の不都合を押し付ける。人間という生物は自分にとって良いものしか受け入れず、悪いものは追い払う。システイーナの場合、魔術を神聖視しているあまり、悪いところ、グレン先生が言ったことを受け入れようとしない」

「————それは」

「グレン先生は魔術を人殺しと断定し、システイーナが抱く魔術の情熱を無下にしようとする。この際ですからはっきり言いたしましょう。どちらも子供だ」

歯噛みする二人を無視してテラスは告げる。



「納得しろとまでは言いませんよ。ただ、理解はしてください。魔術は神聖視するものでもあり、人殺しの道具でもあるということ。それを理解しているだけでも違うんじゃないですか？」

互いの考えを肯定するように促すテラスにグレンは尋ねた。

「テラス。それじゃお前はなんで魔術師を目指してる？」

「え、目指してませんよ？」

『はあ!?!』

呆気なく答えるテラスの言葉に全員が反応した。

「じゃ、じゃあ貴方は何の為にこの学園に転入したのよ!?!」

「趣味」

これ以上にならないぐらいに簡潔に答えたテラスにクラス全員が頭を押さえた。

あれほどに魔術の造詣が深い者が魔術を学ぶその理由は趣味と聞いてシステイーナは先ほどまでのグレンに対する怒りなどがテラスに向けられ、左手の手袋をテラスに叩きつける。

「決闘よ！ 貴方に決闘を申し込むわ！ 私が勝ったら今すぐその考えを改めなさい！」

「えくと、どうしてこうなるの……………?」

何故か決闘を申し込まれたテラスは困惑してグレンやクラスメイトに視線を向けるとどうやら全員がシステイーナの味方だったようだ。

「あはは……………テラス君、流石に今の言葉を聞いて趣味はないよ」

苦笑しながら唯一ルミアだけが、何がいけなかったのかを教えてくれた。

高々と語ったくせにその本人は趣味で魔術を学んでいるのは流石にどうかと、そう思っている。

しかも、講師以上に身に付けているから余計に質が悪い。

たかが趣味でそこまでいけたら誰も苦労はしない。

「え、えくと、とりあえずシステイーナ。少し、落ち着いて……………人間とは話し合いができる生物なんだから」

必死に笑顔を取り繕い宥めようとする。

そもそも仮にテラスが決闘を受けてもたかが学士の魔術など効かない。例え「シヨック・ボルト」を百発受けても平然としていられる自信がある。

「うるさいうるさい！ いいから黙って受けなさいよ!!」

どうやら話し合いは通じなかった。

意地でも決闘を受けさせようとするシステイーナにテラスはグレンに視線を向けるが逸らされる。ルミアに向けても苦笑するばかり。そもそもどうしてこうなった？

グレンの考えは全面的に肯定していかないだけであって、一部は肯定している。システイーナのように神聖視はしていなくても真理を追究するものだとは思ってる。

だからどちらにも完全に肯定も否定も取らずに、その使い手である人間に問題があると教えただけでどうしてこういう風になったんだ。

若干涙目で睨み付けてくるシステイーナに戸惑うテラスは観念するのように息を吐く。

「わかったよ……………。ルールはシステイーナが先生とした時のように「シヨック・ボルト」のみで決着。僕が勝っても要求は何もしない。これまで通りにしてくれると助かる」

「~~~~ッ！ もうそれでいいわよ!」

何故かヤケクソ気味になっているシステイーナにテラスはわからなかった。

以前に行われた決闘の場所、中庭でその決闘は始まった。

「《雷精の——》」

「《バン》」

システイーナよりも短く切り詰めた一節詠唱であっさりと勝敗は決まった。

その理由は趣味であってもテラスの実力は本物。超絶技巧の術行使にシステイーナは敗北した。

「なんか、ごめんね……………」

システイーナが怒っている理由はわからなくも取りあえず謝っておいた。

## 看破

「えくと、どうかな?」

「ここが綻びてるよ」

「あ、本当だ」

システイーナとの決闘を終えて、テラスは放課後にルミアに捕まっ  
て魔術実験室で魔力円環陣、法陣の構築を教えていた。

教科書を見ながら法陣の構築をしていくルミアに時々助言をしな  
がら完成させていく。

法陣が苦手なルミアは本来ならシステイーナに教えて貰おうと  
思っていたらしいが、そのシステイーナは「ショック・ボルト」を受  
けて医務室で休んでいる。

法陣の復習がしたかったルミアはテラスに付き合ってもらって  
いた。

「それにしてもルミアって意外にやんちゃだね」

「えへへ……………皆には内緒だよ?」

ぺろっと舌を出して、ルミアは手に持った鍵をかざしてみせる。

事務室に忍び込んで鍵を盗み取るとは。まあ、バレなければ問題は  
ない。

「それよりも先生が来る前に早く済ませておこう」

「そうだね、後は……………水銀かな?」

水銀が入っている壺を持って法陣へと零していくルミアを見守り  
ながらテラスは生唾を呑み込む。その理由はルミアにある。

(凄く、美味しそうな匂い……………)

吸血鬼としての本能が、嗅覚が、牙がうずく。

ルミアの血を飲みたい。あの柔肌に牙を突き刺してその血を啜り  
たいと。

これまででも牙はうずいたことはある。

その血を飲みたいと思ったことも何度かはあってもこれほどまで  
に強い吸血本能は初めてだ。

ここ数日、血を飲んでいないという原因もあるかもしれない。

吸血鬼といっても人間のようには普通の食事でも栄養は取れる。それでも、吸血鬼としての本能が生き血を求めている。そんなことつゆ知らずにルミアは法陣に意識を集中させて、無防備な状態。

しかも、今は二人きりという空間。

まるで誘っているかのようだ……………。

ゴクリ、と喉を鳴らす。

振り返った瞬間に魅了チャームを使って血を啜ろうか？

割と本気でそんなことを考えていた。

「ねえ、テラス君って吸血鬼って信じてるかな？」

「どうしたの？ 唐突に」

法陣を構築しながらルミアは本当に唐突にそんなことを言い出した。

「実は私ね、三年前に吸血鬼に会ったことがあるんだ」

「それはまた……………で？ 血でも吸われたの？」

「ううん。彼は私の血が欲しかったみたいだけど、その後に来た魔術師に気付いて血も吸わずにいなくなっちゃんだ」

「それは良かったと思うよ？ 吸血鬼に血を吸われたら吸血鬼になるってよく御伽噺でもでてくるし」

「ふふ、そうだね」

何かを探っているかのように話すルミアに適当に合わせていると、ルミアは不意に立ち上がって振り返る。

「それで吸血鬼さんは今でも私の血が欲しいのかな？」

お前の正体は見抜いている。と言わんばかりの笑みで告げるルミアに苦笑する。

「僕がその吸血鬼とでも？ まさか。吸血鬼は太陽の光を浴びると灰になっちゃうんだよ？」

「あれ？ でも私は日光を浴びても大丈夫な吸血鬼もいるって本で読んだことあるよ」

にこにこ微笑むルミアに観念するように両手を上げた。

「はいはい、負けたよ。ルミアの言葉通り、僕がああ時の吸血鬼だよ。」

ほら」

人間ではありえない程に発達している鋭い犬歯を見せるテラス。

「やっぱり、あの時助けてくれたのはテラス君だったんだね」

「そうだよ、偶然だけどね」

吸血鬼と誕生したその日にルミアと出会ったのは本当に偶然。美味しそうな匂いを辿ったからだ。

「それにしてもよく僕だとわかったよね？」

「だってテラス君、さっきから私のことを見過ぎだよ。女の子って異性の視線には敏感なんだからね？」

「う……………」

確かに注視し過ぎた、と項垂れる。

「それに見た目もそんなに変わってないし、転入した日から気になっていたんだ。まあ、半分以上は女の勘なんだけどね」

女の勘って恐ろしいと、テラスは戦慄した。

「でも、やつと会えた……………」

嬉しそうに微笑むルミアはそつとテラスの頬に触れる。

「……………僕をここに呼んだのはそれを確かめるため？ だとしたら不用心だよ、吸血鬼は怪物。人の血を啜り、恐れ、疎まれる存在だ。正直に言えば今すぐにもルミアの血が飲みたい」

「テラス君は私に怖がって欲しいの？ だったらごめんね、私はテラス君のことが少しも怖くはないんだ」

「だったらルミアは僕にどうして欲しいの？ 正体をばらされたくはなければ——てきな、ベタな展開でもあるのかな？」

「……………それもいいかもね」

余計な事を言ってしまった。

悪戯な笑みを浮かべているルミアを見て思わず自分の発言に後悔した。

「ふふ、冗談だよ。本当はお礼がしたかったんだ」

ルミアはそう言って首筋をテラスに差し出すかのように見せる。

「“対価”を払わせて欲しいの」

「……………いいの？」

「うん、でも、初めてだから痛くはしないで欲しいかな……………」  
「恥ずかしいのか、少し頬が赤い。」

でも、三年前の口約束を守る為に自分から血を提供してくるとは思わなかった。

正直、了承を得ているのだから吸いたいのだが、訝しんでしまう。  
そんなことの為に自分を差し出してくるような真似をすれば疑心暗鬼にもなってしまう。

躊躇いが生じるテラスにルミアが口を開いた。

「あの時、私が話したこと覚えてる？」

「……………確かお母さんに捨てられ、誘拐されて殺されかけた、だったよね？」

「うん、あの時の私はこの世界に私の味方になってくれる人なんていないって、思ってたんだ。どうして私ばかりこんな目になって何度も泣き叫んでた」

誰か助けて。そうルミアは願った。

「その時に空から現れたのがテラス君なんだよ？ 人じゃなかったけど、テラス君が来てくれたおかげで私はこうしてお礼ができる」

「そんなことの為に？ 運がよかったと思っただけならいいのにそんなこと」

「できないよ。だって約束したじゃない」

「世界中の誰もが君のことを嫌っているのなら僕が助けてあげるよってアレだよな？ 律儀だね、怪物の言葉を三年間も忘れずに覚えているなんて」

「あの約束のおかげで、あの時の私は救われた。なら、私も約束を守らないと」

たったそんなことの為に血を差し出してくるとは、と内心ルミアの律義さに驚き、感謝した。もう牙がうずきすぎて我慢の限界。

「痛くはしないから」

「うん……………」

口を開けて犬歯を剥き出しにするテラスの牙はルミアの首筋に近づく。

「ん……………」

生暖かい吐息がかかり、声を漏らす。

牙がルミアの柔肌に当たり、後はそのまま顎に力を入れてその柔肌に牙を突き刺す。

ばんっ！

突然、二人だけの空間だった魔術実験室の扉が外から乱暴に開けられ、中に入ってきたのはグレンだった。

「相変わらずボロ……………いい……………」

目が合った。

言葉を失い、静まり変える。

驚きを隠せない三人。

テラスとルミアがまるで逢引でもしているかのように抱き合っている姿を目撃したグレン。

「……………」

空気が死んだ。

それを体験した三人。いち早く正気を取り戻したテラスとルミアは耳まで顔を赤くする。

何かに察したように優しい眼差しを向けるグレン。

「先——」

「みなまで言うな。大丈夫だ、俺は何も見えていない。じゃ、ごゆっくり」

弁明しようとするもそれよりも速くグレンが魔術実験室から出て行った。

「ちよつと待ってください！ 先生、絶対誤解しています！」

慌てて駆け出してグレンを追いかけるルミアにテラスは出て行ったルミアの血が吸えないことに悔やむ。

変なことを考えてないでさっさと吸えばよかつたと思う。

「……………何があつたのよ？」

「システイーナ。もう起きてても大丈夫なの？」

「ええ、まだ少し身体は痺れるけど問題はないわ。それよりもルミアが慌てて先生を追いかけていったのだけ……………ルミアに変なこ

としてないでしょうね？」

「ちよつと先生にタイミングが悪いところを目撃されてね。誤解を解きに行つたんだ」

睨むように見据えるシステイーナにテラスは弁明する。

一応は嘘は言つてはいない。

「はあ、まあいいわ。私はルミアを追いかけるからもし、先生が明日もあの調子なら貴方が授業をしてちょうだい。理由はどうであれ、貴方の授業は凄いもの」

「……………出来ればグレン先生がして欲しいんだけどね」

割と本気でそれを願う。

「それじゃ、また明日ね、テラス」

「ああ、また明日」

ルミアを追いかけていくシステイーナの後ろ姿を見て、テラスはすぐに住処に帰ることにした。

「ルミアの血はまたの機会にしよう……………」

そうぼやいてテラスは足を動かす。



## テロリスト

ダメ講師グレン、覚醒。

その報せは学院を震撼させた。噂が噂を呼び、他所のクラスの生徒達も空いている時間に、グレンの授業に潜り込むようになり、そして皆、その授業の高さに驚嘆した。

専属講師としてグレンがあてがわれたシステイナー達二年次二組のクラス以外にも目を追うごとに他のクラスからの飛び入り参加者で席は埋まり、さらに十日経つ頃には立ち見で授業を受ける者もいた。

また若くて熱心な講師の中にはグレンの授業に参加して、グレンの教え方や魔術理論を学ぼうとする者もいた。

そんなわけでテラスは御役目御免。講師の真似事をするのもなく、一人の学士として授業を受けられる。

そう思っていた時もあった。

「テラス君、ここがわからないのだけど」

「論文を見てくれないかな？」

「ルーン語学で聞きたいことがあるのだけど」

「あー、ちょっと待って」

グレンが覚醒する前の講師の真似事が響いて同じ学士から意見や質問を投げられるようになってしまった。

質の高さはグレンほどではなくても、他の講師よりも遥かに質の高さを持っているテラスはひっぱりだこ状態。

四方八方から飛んでくる質問などに答えている為に自分の魔術に取り組む余裕がなかった。

「どうしてこうなったんだろう………？」

遠い眼差しでフェジテの空に浮かぶ『メルガリウスの天空城』を眺める。

「おーい、そこで黄昏ている青春生徒。黒板に書いたこの問題解いてみる。お前なら余裕だろう？」

「元はといえば誰のせいですか、誰の」

教壇に立ち、やや乱暴気味にチョークで書かれた問題を止まることなく解いていく。

答えを書き上げると後ろから驚嘆の声が飛んでくる。

「はあくやっばお前は凄えな。これ、生徒ならまず解けない問題なんだが」

「そんな問題を出さないでくださいよ」

わざとか、と叫びたい。

「いや、お前マジで今からでも講師として食っていけるぞ？ 教え方も上手いし、いつそのことその道を目指すのもいいんじゃないか？」

「……………まあ、考えておきます」

席に戻るテラスは嘆息する。

「ふふ」

「どうしたの……………？」

「ううん、なんでもないよ」

隣で微笑むルミアにテラスの口からはまた息が漏れる。

休み時間になればまた質問責めか思うとやや憂鬱だ。

「頑張つてね、学士講師さん♪」

「止めてくれ……………」

学士の身でありながら講師以上の授業をしていたことからそう呼ばれるようになったテラスは元々の元凶のグレンを睨むも本人は気にもせずにチョークを動かしていく。

「……………おのれ、ロクでなし講師」

愚痴を一つ溢して僅かに空いているこの時間を自分の為に使う。

「ふふふ、そうなんだ」

食卓を挟んでいつものように今日の学園での出来事を話すとセラは嬉しそうに微笑んでいた。

「ごっちは自分の勉強に集中したいよ……………」

「それも大切なことだけど、友達と交流を深めるのも大事だよ。私は

テラス君が人気者になってくれて嬉しいな」

「それは単純に皆が魔術を理解ではなく暗記に集中していたから、そうじゃない僕やグレン先生に尋ねているだけだよ」

「そうだよね、私もテラス君の話の話を聞くまでどうしてそんなことしているのだろう？　って思っちゃったよ」

ぱくつと料理を口にしながら同意する。

「でもグレン君が講師か。グレン君らしいといえばらしいかな。誰かに教えるのも上手だったし、正義感も強いからきつといい講師になれるよ」

遠い目で、しかしその顔は自分事のように嬉しそうに笑っていた。自分の死で辛い想いをさせてしまった。

現実を知らながらも全てを救える『正義の魔法使い』という理想を目指しているグレンに酷いことをしてしまった。

「……………会いに行ったらいいのに」

「……………できないよ、私にはもうグレン君に会う資格はないもの。それに今はテラス君のことで精一杯だからね。昨日だつて遅くまで魔術の勉強していたでしょ？　頑張るのはいいことだけど、ちゃんと休まない駄目だよ」

「吸血鬼はそこまで睡眠は必要なのはセラ姉さんも知ってるでしょ？」

「それはそれ、これはこれだよ。無理は絶対にしちや駄目。たださえテラス君は天才なんだからそこまで自分を追い詰めなくても問題はないんだよ。それに……………くどくど……………」

呪文詠唱の省略、簡略化を頭で考案することでセラの説教を聞き流す。

一度始めると長いセラの説教はこの一年一緒に過ごしたからよくわかった。

命令をすれば説教は消えるが、こんなことに命令をする気はない。

(やっぱりこの魔術に使う呪文詠唱は……………)

説教をするセラとそれを華麗に聞き流すテラス。

この二人のやり取りは日常茶飯事だ。

そして、一通りの説教が終えるとセラにテラスが転入する前の講師が一身上の都合で退職したために遅れた分を休日を使って授業することになって話を話す。

「うん、お弁当用意しておくね」

「お願いします」

食事と説教を終えてテラスは自室で魔術の研究に没頭する。

「えっと、この魔術における流体制御ベクトルは……………」

興味がわき、それが趣味へと変わり、魔術馬鹿吸血鬼となつてしまったテラスはそのことを自覚しないまま今日も遅くまで魔術に没頭してしまった。

「……………遅い！」

システイーナは懐中時計を握りしめる手をぶるぶる震わせながら唸っていた。

それはグレンの遅刻だ。

「そういうわけで風の魔術は操作しなければならないパラメータが多すぎて威力は炎熱、冷気、電撃に比べて劣るけど、基本三属に比べて、呪文改変のバリエーションが無限大と言えるほどに——」

そんな遅刻講師グレンに変わった空いた時間を学士講師という不名誉な名称を頂戴したテラスが代わりに授業を行っている。

受けるも聞き流すも自由なテラスの授業の真つ最中だ。

「あいつつたら……………最近はずいぶん良い授業をしてくれるから、少しは見直してやったのに、これなんだから、もう！」

「でも、珍しいよね？ 最近、グレン先生、ずっと遅刻しないで頑張っていたのに」

その隣でテラスの授業に耳を傾けながらルミアが不思議そうに首をかした。

「あいつ、まさか今日が休校日だと勘違いしているんじゃないでしょうね？」

「そんな……流石にグレン先生でもそんなことは……ない、よね？」

グレンの事を信頼しているルミアでも完全否定はできなかった。

「でも、その場合だとテラス君が今日一日先生になっちゃうね」

「……そうね。魔術を学ぶ理由が趣味なのは納得はできないけど、講師として本当に向いているわ」

満席御礼の教室。その中にいる殆どの生徒がテラスの授業に耳を傾けている。

元々はグレンの授業を聞きに来た生徒は、二組の押しに負けてテラスが教壇に立つと、不安と疑問の声でざわついていた。

それでも、一度始めるテラスの授業にその不安も疑問も消えた。

「本当に何者なのよ、あいつ……。実は講師でしたって言われても納得できる私がいるわ」

「ふふ、そうだね」

意味深な微笑みを見せるルミアにシステイーナは首を傾げ、何かを言おうとした時、教室の扉が無造作に開かれ、新たな人の気配が現れた。

「あ、先生ったら、何考えてるんですか!? また遅刻ですよ!? もう……え？」

説教をくれてやろうと待ち構えていたシステイーナは教室に入ってきた見覚えのないチンピラ風の男とダークコートの男がいた。

「あー、ここかー。いや、皆、勉強熱心ゴクローサマー！ 頑張れ若人！」

突然、現れた謎の二人組に教室全体がざわめき始めた。

「えくと、どちら様でしょうか？ 一応この学園は部外者は立ち入り禁止ですよ？」

そんな中、テラスが臆することなく声をかけた。

「あ、君達の先生はね。今、ちよつと取り込んでいるのさ。オレ達が代わりにやって来たっつーこと。ヨロシク！」

「それはそれはよろしくお願ひします。それで貴方方は何者でしょうか？ 僕からは犯罪者のようにと失礼極まりないように見えますが

？」

「ハハ、当たり前！ 俺達はね、テロリストってやつだよ。要は女王陛下サマにケンカ売る怖ーいお兄サン達ってワケ」

クラス中のどよめきが強くなる。

(まずいな……………)

テラスはこの状況をどうするかを思索する。

この二人は魔術師のなかでもかなりの実力者だ。超一流と言っていいほどに。

吸血鬼になつてから多くの魔術師を殺してきたテラスだからわかる直感だが、負ける気はしない。

吸血鬼であり、条件付きとはいえ不老不死。今では魔術まで身に付けているテラスなら二人でも殺せる自信はある。

だが、この場で戦闘になれば必ず何人かは死ぬ。

横目でこの教室にいる同じ学士達を見る。流石に彼等を巻き込むのは気が引ける。

どうにかしてこの二人を教室の外に連れ出すか。そう考えていた時。

「ふ、ふざけないで下さいー！」

臆せず二人の前に歩み寄るシステイーナ。

「あまりにもふざけた態度を取るなら、こちらにも考えがありますよ？」

その言葉にテラスは悪手という単語が脳裏を過ぎる。

だが、そのおかげで閃いた。

「え？ 何？ 何？ どんな考え？ 教えて教えて？」

「……………っ！ 貴方達を気絶させて、警備員に引き渡します！ それが嫌なら早くこの学院から出て行って……………」

「きゃー、ボク達、捕まっちゃうの!? いやーん！」

「警告はしましたからね？」

魔力を練る。呼吸法と精神集中で、マナ・バイオリズムを制御する。

そして、指先を男に向け——黒魔【ショック・ボルト】の呪文を唱えた。

「《雷精の——》」

「《ズドン》」

「危ない！」

テラスはシステイーナを叩き飛ばし、テラスの胸に光の線が貫いた。

「……………え？」

飛ばされ、尻餅をついたシステイーナは自分でもわかるぐらいに血の気が引いた。

胸に風穴が空き、そこから血を流しているテラスがそこにいた。

「あーあ、当てる気はなかったんだけどな、自分から飛び込みまじやがった」

テラスを見下し、面白そうに拍手を送る。

「勇敢な生徒に拍手！ よかったね、こいつのおかげで君は助かったよ」

チンピラ男が使ったのは軍用の攻性呪文黒魔<sup>アサルト・スベル</sup>「ライトニング・ピアス」。その威力、弾速、貫通力、射程距離は桁外れであり、分厚い板金鎧すら余裕で撃ち抜いてしまう。

「あ、ああ……………」

血に染まって行くテラスにシステイーナの目をこれ以上にないぐらい見開いてしまう。

「い、いやあああああああああああああああああああああああああ  
ああっっ!!」

自分のせいでテラスを殺してしまったそのショックにシステイーナは悲痛の叫びを上げる。

(どうしよう……………凄く気まずい……………)

この状況をなんとかする為にシステイーナを利用したとは口が裂けても言えず、更には現在進行形で死んだふりをしているテラスは悲鳴を上げているシステイーナにも凄く罪悪感を抱いていた。

「さーて、この中にルミアちゃんって女の子いる？」

(まあ、今はこのまま奴等が動くのを待とう)

男達が自分から教室を出て行くまでテラスは死んだふりを続けた。

## 怪物

「さて、と」

テロリストの二人組が生徒達を拘束し、ルミアとシステイナを連れて教室から離れていくのを確認してテラスはむくりと起き上がった。

それにぎよつと目を見開いた生徒達はまるで幽霊でも見ているかのような信じられない顔をしていた。

「テ、テラス……………お前」

「ごめん。死んだふりをしていた」

軽く謝って生徒達を拘束している「スペルシール」を「ディスプレイ・フォース」で解いていく。

「これで動けるけど、ここにいて。下手に動かれたら流石に手が回らないし、僕は二人を助けに行かないといけないから」

「お前、一人で行くつもりかよ!?!」

「そうですね！ 相手はテロリスト！ 殺されてしまいますわ！」

同じクラスのカツシュとウエンデイがテラスを止めようと声を飛ばすもテラスは心配させないように優しく告げる。

「ああ、大丈夫だよ。あれぐらいの魔術師なら何度も殺してきたから」

「は?」

「え?」

しかし、生徒達はその言葉に目を丸くする。

「だから安心して。二人は必ず連れ戻すから」

そう言っただけで扉にかけられているロックを解いてから教室の外に出ようとした時。

「……………システイナは、ひどく自分を責めていましたわ」

ウエンデイのつぶやきに足を止める。

「ですので、ちゃんと謝ってくださいまし……………」

「平手打ちの覚悟はしておくよ」

そう答えて教室から出るとテラスは鼻を鳴らす。

「……………凄いな、ルミア。足跡を残しているなんて」



ルミアの血の匂いが僅かに廊下から漂っている。少量の血の匂い、恐らくは唇を少し噛み切つて血を流したのだろう。

唯一テラスを吸血鬼だと知り、不老不死であることを知っているルミアなら。

それでもルミアの精神の強さに驚いた。

あの状況でよくもそこまで冷静な判断ができたものだ、と感心する。

すると——不意にとつともない破碎音で学園が震えた。

「あつちか……………」

恐らくは誰かが——いや、グレンが敵と遭遇し戦っているのだろう。

死んだとテロリストは言つてはいたが、帝国宮廷魔導師団特務分室所属に所属していたグレンがたかがテロリスト一人に負けるとは思つてもなかった。

駆け出すテラス。

そして、辿り着いたその先にはグレンとシステイーナ。それとダークコートの男——レイクと呼ばれた男がいた。

更にはレイクの背後には五本の剣が浮いている。

「ああ、やっぱり生きてましたね、グレン先生」

「テラス!？」

「え、嘘? ……………だつて貴方は……………」

テラスの登場に三人が驚愕する。グレンはきつとシステイーナからテラスが死んだということを聞いていたからだろう。

「ごめんね、システイーナ。聞きたいことや言いたいことはあるだろうけど後にしよう? 今は目の前の敵に集中しないと」

死んだ、そう思われていた人物が突如現れたら驚くのも無理はないが、状況が状況の為にそれは後回しにするよう頼む。

「……………言いたいことはやまほどあるが、ちようどいい。テラス、お前は白猫をつれてここから離れてろ!」

「何言つてるんですか? 逃げるのなら先生でしょう? マナ欠乏症の状態でするんですか?」

「そんなこと言っている場合か!? いくらお前でも生徒が勝てる相手じゃねえんだ!」

「これでもですか?」

指先をレイクに向けると同時に一条の雷光が迸り、突き進む。

「!?」

死の危険を察知したレイクは浮いている剣を操作して、それを弾いた。

「ライトニング・ピアス」だと!? たかが一介の生徒が何故軍用魔術を!?!」

辛うじて防御に成功したレイクの表情から驚きを隠せれない。だが、本当に驚くのはそこじゃなかった。

「デイレイブ・ブード時間差起動……!?! どうしてお前がそんな技術を!?!」

そうテラスは呪文を唱えることなく、「ライトニング・ピアス」を放った。

予め呪文を唱えておき、後は任意のタイミングで起動する高等技法。それがデイレイブ・ブード時間差起動。

それを当たり前のように使ったテラスの技量に驚きを隠せない。

「まあ、そこで休んでいてください。《愚者》のグレン先生」

「ツ!? お前、どうして……!?!」

「そうですね、『白犬』と先生が呼んでいた方から先生の話は聞きましたからと言っておきましょう」

「もう何度目かになるかわからない驚きの中でグレンは言葉を失った。

「………いや、あいつは………あいつは、あの時に………」

「生きてますよ。その事も含めてこの事件が終わったら僕の住処に来てください」

「………ああ」

小さく頷くグレン。事情が呑み込めないシステイナは二人の間でおろおろする。

「えっ、ど、どういふことよ」

「システイーナは先生を頼むよ。僕はあいつを倒してルミアを助けに  
いけないといけないから」

「《炎獅子——》」

「《消えろ》」

黒魔「ブレイズ・バースト」の超高速起動させようとしていたレイ  
クの魔術を対抗呪文黒魔「トライ・バニッシュ」の呪文改変で打ち消  
した。

「不意打ちとは卑怯ではありませんか？」

「抜かせ。戦闘中に敵に隙を見せた方が悪い」

「ごもつとも」

レイクの言葉にわざとらしく同意し、二人の前に立つ。

「貴様、何故生きている？ 確かにあの時、貴様はジンに殺されたはず  
だ」

「さて、何故でしょう？ 《貴方は・どう・思いますか》？」

呪文改変による黒魔「アイス・ブリザード」。この呪文によつて発生  
した吹雪を有効射程内で魔術的防御なしで受ければ、あつという間に  
全身の血が凍りつき、心臓の鼓動すら止められ、さらに続く無数の氷  
の礫弾に凍りついた身体が粉々に破壊される軍用魔術。

息を吸うように呪文改変を行ったテラスだが、敵も一筋縄で勝てる  
相手ではなかった。

「《光の障壁よ》」

黒魔「フォース・シールド」。レイクの眼前に展開される光の六角形  
模様が並ぶ障壁で防御した。

しかし、それは承知済み。

テラスの狙いは宙に浮いている剣に付<sup>エンチャント</sup>呪の正体を見抜くこと。

（「ライトニング・ピアス」も通さず、「アイス・ブリザード」でも凍ら  
ないところを見ると「トライ・レジスト」が付<sup>エンチャント</sup>呪されている……）

熱・電気・冷気の耐性を付与する「トライ・レジスト」。

ただ剣を操作するだけならそこまでする必要はない。それが付<sup>エンチャント</sup>呪  
されているということはレイクの用心深さがよくわかる。

「……………なるほど、一介の学生とはもう呼べんな。俺は貴様を敵と

して認めよう」

氷のような笑みを浮かばせ、浮遊している剣を操作し、攻撃に移るレイク。

「《戦風》」

「なっ!?!」

剣がテラスに向かっていく中でテラスは風の軍用魔術「ブラスト・ブロー」を超高速起動。剣を無視して攻撃を行うとは予想していなかったレイクは圧搾凝集された風の破城槌をその身に受ける。

だが、攻撃を受けたのはレイクだけではない。

敵の攻撃を無視して攻撃を行った代償にテラスの身体に剣が突き刺さり、左腕は切断された。

「テラス!?!」

それを見て悲痛の叫びを上げるシステイーナだが、その光景に自分の瞳を疑った。

切断されて床に落ちた左腕が消えて、新しい左腕が生える。

剣が突き刺さった身体も剣を抜くと、その傷も瞬く間に塞がる。

「うそ……………治癒魔術……………ううん、ちがう」

「お前、もしかして……………異能者だったのか?」

異能者。

ごく稀に産まれる魔術に依らない奇跡の力をその身に宿す者。だが、異能者は悪魔の生まれ変わりとも呼ばれ、今でも迫害の対象となっている。

【感応増幅者】【生体発電能力者】【発火能力者】など様々な異能がある。その中でテラスは確認されている異能【再生能力】をその身に宿した者だと思ったグレン達だったがテラスは首を横に振る。

「違いますよ。僕はそんな人間の枠内にいる存在ではありません」

す、と立ち上がろうとしているレイクに手を伸ばして呪文を唱える。

「《数多の大气・颯風の刃・顕現せよ》」

三節の呪文を完成させるとこの空間に数十本の風の刃が出現する。

「【エア・ブレード】!?! それを三節で複数出現させたのかよ!?!」

本来、黒魔【エア・ブレード】には節数がかかる大呪文。それを三節で複数出現させたテラスにグレンは驚きの声を上げる。

風を操る魔術は弱い、というのは通説だ。重力、流体制御ベクトル、気体状態、気圧、気温、密度………操作しなければならぬパラメータが多すぎるために弱い。

しかし、彼にはそれがどうしたといわんばかりの常識外れな技法を見せつけた。

「敵とはいえ、敬意を表して僕のできる最大限の技で貴方を殺しましょう」

「舐めるな！」

吠え、五本の剣を操作してテラスが風の刃を発射する前にその命を奪おうとするレイクだが、相手は最悪だった。

「恥じる必要も悔やむ必要もありません。何故なら」

——人間が怪物に勝てる訳がないのですから。

一斉攻撃される風の刃はレイクの剣を砕き、レイクの身体を細切れにしていく。

しばらくしてパチンと指を鳴らして風の刃を消すと、レイクがいた場所には肉片しか残されてはいなかった。

「見るな、白猫！」

咄嗟にシステイーナの視覚を手で覆い、奪う。

見れば心に傷を負いかねないこの光景にテラスはいつものように二人に声をかけた。

「二人は休んでいてください。ルミアは僕が助けに行ってきますから」

「……………ああ」

そんなテラスに表情を強張らせながらも頷くグレン。

二人を置いてテラスはその場から離れていく。

まるで何もなかったかのように平然とした顔で。

## 怪物と人間

テラスは転送法陣がある転送塔の螺旋階段を延々と上がっていた。ルミアの血を匂いを辿り、辿り着いた転送塔には侵入者を迎撃する為のゴーレムがいたが、テラスの敵ではなかった。

容易に突破して螺旋階段を上がって行き、最上階の大広間——転送法陣のある部屋に辿り着く。

「ルミア、いるかー?」

緊張感もないいうもの声音で扉を開けるテラス。

「テラス君!? その声はテラス君!」

大広間の中心にルミアがそこにいた。吸血鬼だから暗闇でも昼間のように明るく見える視力で唇に僅かに血がついていることも確認できる。

(やっぱり、死んだとは思ってなかったんだね……………)

足跡として血を体外に出していたルミアに納得するように頷いた。

「それで、貴方が黒幕ですか?」

「ええ、そうです」

ルミアの隣にいる二十代はんばくらしいの優男。柔らかい金髪、涼やかに整った顔立ち、ダークブルーの深い瞳を持つ美青年は動じることなく穏やかに応えた。

「何を企んでルミアを攫おうとしたのかは知りませんが、この中途半端な法陣を見る限り、白魔儀【サクリファイズ】——換魂の儀式。口クでもないことを考えているのはわかります」

「おや、凄いですね。これだけでそこまで言い当てる生徒がいるとは思いませんでした。教育者として優秀な生徒がなくて嬉しく思います」

微笑みを崩さず、感心するように褒める。

「大人しくルミアを返して頂けるのなら命までは奪いません。拘束して眠って頂きます」

「ええ、そうします」

投降するように促したテラスに青年は素直にそれに頷き、ルミアを

解放した。

「僕の負けです。君みたいな生徒を計画に入れなかったのが敗因でしたね」

「ヒューイ先生……………」

テラスの傍まで駆け寄るルミアは苦笑しているヒューイを見据える。

「随分と素直に負けを認めるのですね」

「はい、僕ではどう足掻いても君には勝てる気がしません。それに……………」

ヒューイはルミアに視線を向けて小さく笑みを見せる。

「不思議ですね。計画は頓挫したというのに……………どこか、ほっとしている自分がある」

「そうですか」

テラスはヒューイを拘束しようと「マジック・ロープ」で動きを封じ、「スペル・シール」で魔術を封じてから「スリープ・サウンド」で眠りにつかせて動きを封じようとした。

「……………最後に一つだけ」

「どうぞ」

ヒューイはとつとつと胸に内をテラスに問いかける。

「僕は一体、どうすればよかつたんでしようか？ 組織の言いなりになって死ぬべきだったのか……………それとも組織に逆らって死ぬべきだったのか？ こうなった今でも僕にはわからないんです」

「知りませんよ。最終的には貴方は流されるがままに行動したのですから今更そんなことを悔いても仕方がないでしょう？ でも、あえて言わせてもらおうとしたら」

一呼吸置いてテラスは告げる。

「人間は常に後悔する。言いなりになろうと、逆らおうとね。なら、自分自身が望む道を選んだ方がまだ自分を納得させられる。要は自分の道ぐらい自分で決めろってやつです」

「……………そうですか、なるほど、その通りだ。生徒に教わるなんて教師、失格ですね」

「それではお休みなさい」

魔術を発動させてヒューイの意識と動きを封じる。

「さて、戻ろうか。システイーナ達が心配していると思うし」

「テラス君……………」

捕えたヒューイをつれてシステイーナ達がいるところに戻ろうとするテラスにルミアは言葉を詰まらせる。

「……………ごめんなさい。私のせいで皆に迷惑かけて」

「別にルミアは悪くはないと思うけど？ どう考えてもテロリストの方が悪いし」

「でも、私のせいでシステイアやテラス君に酷いことを……………ツ！」

「自分を責めるのはお門違いだと思うよ？」

自分がテロリストに狙われたからテラスの皆やシステイーナ、テラスにまで酷い目に合わせてしまったと自分自身を責めるルミアにテラスは困ったように頬を掻く。

「じゃあさ、ルミアはどうしたいの？ 皆に謝りたいの？ それとも皆の前からいなくなりたいの？」

「それは……………」

「少なくとも死ぬのは止めた方がいいと思うよ？ もし、そうなったら今度がシステイーナが自分を責めるだろうし」

「う……………」

その光景が容易の想像できる。

きつと私のせいで……………と呟きながら心に酷い傷を負わせてしまふ。

「どうしてテロリストがルミアを狙ったのか、ルミアが何を抱えているのかは僕は知らないけど、これだけは言える」

向かい合い、対面する。

「世界中の誰もが君のことを嫌っているのなら僕が君を助けてあげよう」

「……………!？」

その言葉はかつてテラスがルミアに告げた言葉だ。

「ど、どうして……………そこまでしてくれるの……………?」



「……………まあ、ルミアになら話してもいいか。僕は元々は人間だったんだ。あの日、ルミアと出会った日に僕は吸血鬼になった」

「え……………?」

「人間だった頃の僕は両親からでさえ気味悪がれ、恐れられた。周囲からもあいつはおかしい、あいつは異常なの言われた。僕は産まれた時から孤立していた」

生前の事を語る。

「僕はそんなことに微塵も気にも止めていない。人間は自分とは違うものを恐れ、怯え、孤独においやる。そういう生物だと理解しているからだ。だから怪物に、吸血鬼になることを受け入れて真正銘の怪物になった」

ばさつ、と背中から翼を広げて人間ではない証を見せつける。

「世界中から嫌われた存在、殺害すべき対象、それが怪物。もう僕は世界中を敵に回している存在なんだよ」

「それなら……………どうして?」

——私を助けてくれるの?

その疑問にテラスは苦笑しながら話した。

「……………初めてだったからかもしれない。三年前の口約束を信じ、尚且つ僕を怖がらなかつたのは産まれてからルミアが初めてだったからだと思う。おかしいよね、こんな理由で人間であるルミアを助けるようなんて。所詮怪物は嫌われ者——」

「そんなこと言わないで!」

テラスの言葉を遮って急にルミアが大声を出した。

「……………おかしくない、おかしくないよ。私なんかより、ずっとずっと辛くて、苦しんでいるのに、それでも自分のことを置いて助けてくれるテラス君が怪物なわけがない!」

「ル、ルミア……………?」

「だから、怪物なんて、嫌われ者なんて言わないでよ! 私は、私は……………そんな貴方に救われた! 助けられた! あの時も、今も!」

「お、おい……………」

声を荒げているルミアを宥めようとするも瞳に涙を溜めているルミアに声が出なかった。

「世界やテラス君自身が怪物と認めるなら——私はそれを否定する！ 人間だって何度も言うよー！」

「……………それは無理だよ」

怪物であるテラスの否定。

だが、それは不可能だ。

今はいいかもしれない。だけど、数年、数十年経てばどうなる？

不老不死で歳を取らないテラスとは違い、ルミアは人間だ。成長し、歳を取り、最後は寿命が尽きてこの世を去る。

ルミアが寿命で亡くなってもテラスはそのままの姿だ。

正真正銘の怪物であるテラスを否定することなど誰にもできない。

「……………無理じゃないよ。きつと、この世界のどこかにテラス君が人間に戻る方法があるから」

「それは何の根拠もない」

「魔術はこの世界の真理を追究する学問。なら、その真理の中に人間に戻る術があっても不思議じゃないよ」

ルミアの言葉に確かにとと思う自分がいる。

この世界にはまだ解き明かされていない謎が多く存在している。

『メルガリウスの天空城』がそのいい例だ。

ルミアの言葉を空論だと断言することはできない。

「私はそれを絶対に見つけるよ。そして、テラス君と一緒に歳をとっていきたい」

「……………う」

思わずたじろぐほど、ルミアの瞳からは強い決意が感じられる。

その可能性は無いに近い。それはルミアもわかっている。

それでもルミアからは一切の諦念がない。

本気でテラスを人間に戻そうとしている。

「私は諦めないからね」

どうしてそこまで躍起になるのかテラスにはわからない。

この身体に不満などない。吸血鬼になったことだって後悔などし

ていない。

それなのにどうしてルミアはそんなにも強い眼差しで見ているのかわからなかった。

こうしてアルザーノ帝国魔術学院自爆テロ未遂事件は幕を閉じた。

表向きでは一人の非常勤講師の活躍とされたが、その裏では一人の学生が活躍したことは本人の希望により伏せられ、事件の真相は闇に葬られた。

## 事件後の邂逅

アルザーノ魔術学院自爆テロ未遂事件から数日してグレン、システイーナ、ルミアはテラスの住処に足を運んでいた。

「ここだな……………」

「ここですね」

「ここだよね」

テラスから渡された地図を見ながら到着した一軒家はありきたりに言えば普通だ。

特にこれということもない普通の家。

「……………」

グレンはその家をじつと見据える。

ここにセラがいる。そう思うだけで何とも言えない気持ちになる。

「先生？ どうかしたのですか？」

「いんや、なんでもねえよ」

はぐらすように誤魔化してその家の扉を叩く。すると、中から小走りで走ってくる足音が聞こえてくる。

「はい、どちら様でしょう……………か……………」

「え？ システイ？」

「え、ええ？」

扉を開けて出てきたのはシステイーナと瓜二つの姿をした女性――セラが目丸くしながらグレンから眼を離さなかった。

「グレン……………君……………」

「セラ……………なのか？ やっぱ……………」

二人の間に何とも言えない空気が漂う。

「いらっしやい」

セラの後ろからテラスが顔を出してグレン達の中に入れる。

<sup>リビング</sup>  
居室にあるテーブルに腰を下ろした五人。

「……………」

「……………」

グレンもセラも何も言わず、ただ重苦しい空気が漂る。

互いに思うことがあり、何を言えばいいのかわからない。ただ、顔を俯かせて表情を曇らせている。

「それじゃ、システイナ、ルミア。僕の部屋に来てくれる？」

「そ、そうね」

「う、うん」

二人にさせよう。二人はテラスが言いたいことを察してその場から離れていく。

三人が離れてからも互いに口を開かず、無言になるなか、無言に耐え切れなくなったグレンが先に口を開いた。

「あー、その、なんだ。生きていてくれてよかった。正直、なんつーの？ また会えてよかったぞ、セラ」

「……………うん、私もまたグレン君と会えて嬉しいよ」

ぶつきら棒に言葉を紡ぐグレンにセラも答える。

「大体の事情はあいつから聞いた。こうしてまたお前と会えるなんて思ってもみなかった」

「そうだね、私がこうしていられるのはテラス君のおかげだよ」

グレンはセラが吸血鬼になっていることを知っている。

テラスからある程度の事情を聞いたうえでここに来た。

「……………一年前、俺はお前を——」

「違うよー！ 私がグレン君を守りたかったの！」

守れなかった。

グレンを庇って、身代わりとなったセラ。

自分のせいで守れなかったことを悔やみ、謝ろうとするもセラが首を横に振った。

もし、あの場にテラスがいなければセラは確実に死んでいた。

「吸血鬼になっちゃったけど私は今は幸せだよ？ こうしてもう一度グレン君にも会えたんだから」

「セラ……………」

「と、こんな感じで僕とセラ姉さんは出会い、僕はセラ姉さんから魔術を教わったんだ」

「……………そういうことがあったのね」

自室にてテラスは自分の素性、これまでの経緯を二人に隠すことなく話す。システイーナは納得するように頷く。

「でも、今でも信じられないは貴方が本当に吸血鬼つてことよ」

話を聞いて疑ってはいるが、それで全部を納得しろというのはまた別の話になる。

それは流石のテラスも承知済みだ。

「まあ、すぐに信じてというのも難しいよね……………」

「あ、それじゃあテラス君が私の血を吸ってみるのはどうかかな？ 対

価もまだだったし」

「ちよっ!? ルミア!？」

笑顔で血を提供してくれるルミアに驚くシステイーナ。

「だってシステイ、このままだとテラス君が誰構わず血を求めて人を襲っちゃったら大変でしょ?」

「……………ルミア、僕はむやみやたらに人間を襲ったりは……………たまにしかしてないよ」

「そこは堪えなさいよ! 魔術でもなんでも抑制すればいいでしょうが!？」

「できるけど、下手に抑制すると反動が酷いからね……………」

セラに出会う前は腹を空かしたら男女問わずに血を飲んできたが、セラから吸血行為は控えるように言われて控えている。

「だけど、テラスは吸血鬼。」

どうしても生き血を求めてしまう。最悪の場合は理性が働かずに血を求める獣のように動く。

一度、それで外道魔術師が干物になるまで血を飲みほしたことがあるが、黙っておいた。

「それに……………テラス君なら私いいよ」

「ルミア……………」

頬を僅かに赤くなっているルミアに同じ女性であるシステイーナは察知する。

当の本人は首を傾げてはいるが。

「ルミアが血をくれるのなら僕も嬉しいけど……………本当にいいの？」

「うん、でもあまり痛くはしないでね？」

「勿論」

歩み寄ってルミアの首筋を噛みやすい場所——ルミアの背後に回る。

髪をどかしてうなじを見せるルミアから香るのは女性特有の甘い匂いと穢れを知らない白い肌にドクンドクンと鼓動が高まる。

うずく、吸血鬼としての本能。剥き出しになる鋭い犬歯。

システイーナから見て、それは物語に出てくる吸血鬼テラスに囚われた聖女ルミアのようだ。

テラスの牙がルミアの肌に触れ、噛みつく。

「……………ふ、ん……………」

痛みはさほどない。

あるのは妙にくすぐったい感覚と血が抜けている感じ。

慣れていない感覚にルミアの口から艶のある声が漏れる。

(なに、これ……………)

ルミアの血を吸っているテラスは驚愕に包まれていた。それはルミアの血があまりにも極上だったからだ。

美味、で片づけられるものではない。

これまでに味わったことのない極上の味が口に広がり、喉を潤していく。

こんなにも美味しい血が存在していたのか。そう思わされるほどにルミアの血は美味しかった。

「ちよ、ちよっとー…いつまで吸ってるのよ!？」

「あ、ごめん……………」

システイーナの声をかけられるまで我を失っていたテラスはルミ

アの肌から牙を抜いて噛んだ跡をペロりと舐める。

「ひゃ!？」

「なに舐めてるのよ!？」

「へふ!？」

システイーナの拳がテラスの顔面を捉え、殴る。

「ちよつと待つて! 最後のは不可抗力! というより今のは噛み跡を消すために必要な行為なんだ!？」

「え……………? あ、傷がない」

噛まれた場所に手を当てるも噛まれた跡も傷も残っていない。

「吸血鬼は高い再生能力を持っていて、傷を消すために必要なことなんだよ」

「……………まあいいわ。それで納得してあげる」

拳を収めるシステイーナにふうと安堵するテラス。

「これで僕が吸血鬼だつて納得してくれた?」

「……………ええ、流石に今のを見たら嫌でも納得するわ」

しゅしゅ、といった感じを取りあえずは納得してくれたシステイーナ。

「えっと、それで私の血は美味しかった?」

「言葉にできないぐらいに美味しかった。正直、ルミアの血の味を知ったら他の血なんて求められないほど」

「そうなんだ、ふふ……………」

自分の血の感想に嬉しそうに微笑む。

「それで? 貴方はこれからも学院に通うのかしら?」

「その為にグレン先生やシステイーナに僕の正体を明かしたんだよ。今後の事を考えて動きやすくするためにもね」

テロリストがルミアを狙い続けている可能性がある以上は協力者は多い方がいい。

その為にも信頼できる二人に正体を明かした。

「……………それと関係ないことんだけど。ここ、魔術関係ばかりね?」

改めて部屋中を見渡すと部屋中いたるところに魔術に関わるものばかりがある。



分厚い本から論文、魔術公式がびっしり描かれた羊皮紙。部屋を見たら魔術馬鹿の部屋だと一目でわかる。

「いや、自分でも予想以上に魔術にはまって……………」  
趣味に没頭するとそれ以外に周りが見えなくなる。テラスはその典型的だ。

「テラス君は魔術のことが大好きなんだね」

「まあ、使えたら便利だしね。《ほら・こんな・感じ》」

白魔【サイ・テレキネシス】で机の上に置いてある本を手元に持つてくる。

息をするような呪文改変に二人はもう驚きの声も出ない。

「システイーナもすぐにこれぐらいの呪文改変はできるようになるよ」

「そう、なのかしら？ 自分ではわからないわ」

「少なくとも風の魔術との相性はいいと思うよ？ それにシステイーナは天性的な素質はある。後必要なのは精神的な強さだと思うし、そこを鍛えれば即興改変も容易になると思う」

システイーナの長所と短所を語り始め、そこから魔術のうんちくを語り始めるテラスに二人は心情は一致した。

(これは長くなるやつだ……………)

二人は苦笑しながらテラスの話聞いた。

## 競技祭の練習

『魔術競技祭』。

アルザーノ帝国魔術学園で年に三度に分けて開催される、学院生徒同士による魔術の技の競い合い。

その競技祭にテラス達二年次二組も種目を決めようとしているのだが。

「はいー、『飛行競争』の種目に出たい人、いませんかー？」

壇上に立ったシステイナーがクラス中に呼びかけるが、誰も応じない。

それどころか、無反応と呼べるぐらいに静まり返っている。

「……………じゃあ、『変身』の種目に出たい人ー？」

誰も手を上げない。

「……………ねえ、ルミア。どうして皆は種目に参加しないの？ 祭りなんだから特に難しく考える必要はないと思うけど？」

「えつとね……………それが」

隣にいるルミアからその理由を聞いた。

魔術競技祭は毎年、クラスの成績上位陣が出場してくる。

めつたなことじゃ魔術の技比べができないこの学院で誰が本当に一番優れた魔術の技を持っているのか。それを学院の卒業生のアピールするチャンスでもあるし、成績下位陣を出して恥をかきたくはないということもある。

故に毎年魔術競技祭になると成績上位陣だけが出場するようになった。

「祭りを楽しむではなく、将来を見据えて自分の土台を構築するチャンスでもあるのか。なるほど、本当に無駄な誇りと威厳を優先するよね、人間は」

「テラス君も人間だよ？ それにテラス君も何か出場してみようよ」

種目参加を催促してくるルミアだが、正直全種目に出ても勝てるテラスにとってそれは皆の出番も取ってしまい、一人無双してしまう。

それは流石に悪いと思っっているテラスは余りものに参加しようと

考えていた。

しかし、皆が参加しないのにはもう一つ理由がある。

それは女王陛下が賓客として御尊来になる。

女王陛下の前で無様な姿をさらしたくはない。

「ん〜僕は余りものでいいからね。それにそろそろ来るよ?」

ドタタタタ——と、外の廊下から駆け足の音が迫ってきたかと思えば……………次の瞬間、ばあんっ! と、派手な音を立てて教室前方の扉が開かれた。

「話は聞いたツ! ここは俺に任せろ、このグレンIIレーダス大先生様にな——ツ!」

「ロクでなし講師が……………」

謎のポーズを決めたグレンを見て嘆息する。

「……………ややこしいのが来た」

システイーナもテラスと同じ心情だった。

「喧嘩はやめるんだ、お前達、争いは何も生まない……………何よりも——」

グレンはきらきらと輝くような、爽やかな笑みを満面に浮かべて——。

「俺達は、優勝という一つの目標を目指して共に戦う仲間じゃないか」

(——キモい)

その瞬間、クラス一同の心情が見事に一致した。

「まあ、なんだ。なかなか種目決めに難航しているようだな、お前達。まったく何やってんだ、やる気あんのか? 他のクラスの連中はとつくに種目を決めて、来週の競技祭に向けて訓練してんぞ? やれやれ、意識の差が知れるぜ」

「やる気がなかったのは先生でしょ!」

『『お前らの好きにしろ』』ってと言って教室から出て行ったのは誰ですか?」

「……………え? 俺、そんなこと言ったっけ? いや、マジで覚えがないんだけど」

「《思い出せ・この・ロクでなし》」

三節の呪文改変での「ショック・ボルト」を放ったテラスにグレンは容易に躲した。

「ふっ、今の俺には当たらん！　そして、そんな血の気の多いお前には『乱闘戦』に出て貰おうか？　お前なら楽勝だろう？」

「まあ、負ける気はしませんが………はあ、もうそれでいいですよ」諦念の声を出して肩を落とすテラスはグレンの采配で次々と種目が決まって行く。

それもクラス全員が出場できるように。

「あ、テラス。お前、全員の指導、補助を頼むな」

「わかりましたよ………」

「カツシュ。先生も言っていたが、君は使える呪文は少ないけど、持ち前の運動神経と状況判断がいい。とはいえ、手の内が少ないのは痛手だ。その場合は焦らず、相手を観察し、隙を伺うように気にかけておく。冷静さを欠けない様に」

「お、おう！　やってみるぜ！」

中庭で二組は競技祭に向けて訓練を行う中でテラスはクラスメイトに助言を行っていた。

ここにいない先生の代わりに。

ここにいないグレン先生の代わりに。

ここに影も形も存在していないグレン＝レーダス大先生の代わりに。

「勝つ気があるのなら自分で指導して欲しいよ………」

「アハハ………」

溜息をもらすテラスの隣で『精神防御』に出場するルミアは苦笑していた。

「あ、あの………テラス君、いいかな？」

「どうしたの？　何かあった？」

「あ、あのね、『変身』の種目に使う魔術なんだけど………」

「ああ、それなら「セルフ・イリュージョン」の変身魔術がいいかな？」

同じ変身魔術の「セルフ・ポリモルフ」とは違い、光を操作してその見せかけているだけだから、後は変身するもののイメージトレーニングを欠かさなければ大丈夫だよ。あれは術者のイメージに反映する術式が組み込まれているから」

「そ、そうなんだ……………」

「そう。例えばこんな感じかな？ 《変身》」

呪文改変で「セルフ・イリュージョン」を使い、テラスの周囲の空間が一瞬、ぐにやりと揺らいで……………テラスの姿の焦点があやふやになり……………再び焦点が結像した時。

「シ、システイーナ……………ッ!？」

そこにはテラスではなく変身魔術によってシステイーナに姿を変えたテラスがいた。

「イメージを固められれば見分けがつけにくい。ついでに声真似をすれば……………リン、私の変身魔術はどうかしら?」

「す、すごい……………違和感がないよ」

「うん、あそこにシステイがいなかったら私も騙されていた」

「……………と、こんな感じでイメージトレーニングを積んでいたら問題は無いよ。参考になった?」

「うん、ありがとう。テラス君」

「どういたしまして」

自信がついたリンは変身に使うものを探しに入ると、ルミアが急に袖を引っ張る。

「ねえ、テラス君。私にはなにかないかな? 心構えとか、そういうのでいいの」

「え? うくん、別段ルミアは必要ないから考えてなかったんだけど……………ルミアなら負ける要素なんてないし、負けるとも思っていないから」

「……………え?」

腕を組んで頭を悩ませるテラスの呟きにルミアはたじろぐ。

「ルミアなら万が一もないから大丈夫だよ。だってこんな怪物を恐れないほどの胆力を持っているなんてルミアぐらいだよ」

「もう！ またそんなこと言って！」

自分を怪物という度にルミアはこうして怒る。

「さつきから勝手なことばかり……………いい加減にしろよ、お前！」  
突然、激しい怒声が耳に飛び込んでくる。

見ると、カツシユと別のクラスの男子で何か言い争っているとグレンがそこに介入してきた。

「……………おい、何があつたんだ？」

「あ、先生!? こいつら、後からやってきたくせに勝手なことばかり  
言つて——」

「うるさい！ お前ら二組の連中、大勢でごちゃごちゃ群れて目障り  
なんだよ！ これから俺達が練習するんだから、どっか行けよ！」

「なんだと——ッ!？」

「はいはい、ストップ」

グレンは取っ組み合いを始めたカツシユと男子生徒の首根っこを  
掴んで、左右へ強引に引き剥がした。

「あがが……………く、首が……………痛たた……………」

「うおお……………い、息が……………く、苦し……………」

「つたく、くつだらねーことで喧嘩してんじゃねーよ……………お前ら沸点  
低過ぎるだろ」

大人しくなったのを確認してグレンが手を離す。

「えーと? そつちのお前ら……………その襟章は一組の連中だな。お  
前らも今から練習か？」

「え……………あ、はい。そうです……………その……………ハーレイ先生の指  
示で場所を……………」

「ふーん、そう……………」

がりがりと頭を搔きながら、周囲を見渡す。

「うーん、まあ、確かに俺ら、場所取り過ぎか……………悪かつたな。全  
体的にもちつと端に寄せるからさ、それで手打ちにしてくんね？」

「ば、場所を空けてくれるなら、それで……………」

なんとなく丸く収まりそうな雰囲気、様子を見守っていた生徒達  
は安堵するが——。

「何をしている、クライス！ さっさと場所を取っておけと言っただろう！ まだ空かないのか!？」

怒鳴り声と共に二十代半ばの男。この学園の講師を務めているハーレイがやってくる。

「あ、ユーレイ先輩、ちーす」

「ハーレイだ！ ハーレイ！ ユーレイでもハーレムでもないッ！

ハーレイⅡアストレイだッ！ グレンⅡレーダス、貴様、何度、人の名前を間違えれば気が済むのだ!? てか、貴様、私の名前を覚える気、全ツ然！ ないだろッ!？」

ハーレイは物凄い形相で詰め寄った。

「……………で？ ええと、ハー……………なんとか先輩のクラスも今から競技祭の練習つすか？」

「……………貴様、そこまで覚えたくないか、私の名前」

離れたところから見ているテラスも流石にそれはないだろうと内心でぼやいた。

ハーレイが怒るのも無理はないと同情の眼差しを向ける。

拳を震わせるハーレイはグレンとは付き合いきれないといわんばかりに話を進め、ハーレイが指導している一組も優勝を目指している。

まあ、それはどこも同じだろうとテラスは聞き流して今度はテレサの様子を見ておこうと動こうとした時。

「何を言っている？ お前達二組のクラスは全員、とつとこの中庭から出て行けと言っているのだよ」

その一方的な物言いに流石のテラスも足を止めた。

更には。

「勝つ気のないクラスが、使えない雑魚同士で群れ集まって場所を占有するなど迷惑千万だ！ わかったならとつとと失せろ！」

その酷い言い草にテラスは溜息を出した。

「いますよねーそうやって上から目線で他人を見下し、碌に知りもしないくせに勝手に勝手に決めつける傲慢な人間」

「テラス君……………ッ！」

わざとらしく大声で話すテラスにルミアが声を飛ばしてくるが今はそれはいい。

「何だ?!」

怒りの形相で睨み付けるハーレイにテラスは歩み寄りながら話す。「というよりも今のは教育者としてどうなんですか? 生徒を雑魚だの、迷惑など、教育者失格だと思えますが?」

「……………貴様は。フン、なるほど。どうやら凶に乗っているらしいな。学士講師などとふざけた呼び方をされているようだが、自分の立場も弁えない者は引っ込んでいろ」

「……………なるほど、グレン先生が名前を覚えられない理由がわかりましたよ。道端に転がっている石ころをわざわざ覚える馬鹿はいませんか」

「貴様……………ッ! 調子に乗るのも大概にしろ!!」

「他人は雑魚呼ばわりする癖に自分がそういう風に言われると怒るとは。やれやれ、沸点の低さに呆れを通り越して感動すら覚えますよ?」

ハードゲイ先生

「ハーレイだ! 学生の方際で講師である私に楯突く気か!」

「おや、今度は講師としての権利まで振るうとは。自分の力では生徒には勝てないと自分で証明しましたね? ご苦労様です」

一触即発状態。

二人を見守る生徒達は困惑しているなかでハーレイが左手の手袋をテラスに投げ放つ。

「そこまで言うのであれば、それなりに自信があるのだろうか? なら、その手袋を拾ってみせろ! 私との決闘を受けるといふのなら特別に貴様の得意なルールで相手をしてやろう!」

「はあ、言い負かされて、権利も振るおうとして、最後は力づくですか? 本当にわかりやすい人間ですね、ハードボイルド先生は」

嘆息して、テラスは手袋を拾う。

「いいでしょう。その決闘受けて立ちます。ルールは何でもありの相手に降参と宣言させた方の勝ちです」

「フン! 望むところだ!」



「怪物に決闘を申し込んだこと、地獄で後悔させてあげますよ」

## 説教癖

「もう！ バカバカバカ！ どうしてあんなこと言うの!？」  
「痛い痛い痛い、ごめんったら」

ハーレイとの決闘を受けたテラスはルミアに中庭の隅まで引つ張られて胸をぼかぼかと叩かれていた。

「ハーレイ先生の言い方にも嫌だったけどそれでテラス君が決闘を受ける必要はないでしょ!? それにまた自分のこと怪物って言うし!」  
「いや、流石にハーザン先生の言葉にはイラっときて……………まあ、大丈夫だよ」

「ご立腹のルミアをなんとか宥める。

頬をぷくーと膨らませていかにも私、怒っています。の顔を見せるルミアに苦笑い。

「ハボルト先生の位階は第五階梯<sup>クインデ</sup>。その実力を知らないいい機会だし、それにあのままだと皆の士気に影響が出てくるからここで勝つて二組の士気を高めるいい機会だ」

集めた情報の範囲だと、ハーレイは魔術戦ではなく研究の方に力を入れている魔術師。実戦経験はテラスほどなくてもこの学院の講師を務めている以上は並み以上の戦闘は期待できる。

「……………無理は駄目だからね」

「わかったよ、無理しない程度に頑張る」

ルミアに心配されながらもテラスは中庭の中心で待ち構えているように仁王立ちしているハーレイの前に足を動かす。

「フン、やっと来たか。てっきり私の恐れて逃げたのかと思ったぞ?」

「冗談は頭だけにしてください、ハゲ先生」

「ハーレイだ! グレンIIレーダスといい、貴様といい……………まあいい! 私が勝てば立場と身分を弁えることだ! 貴様が勝てば私を煮るなり焼くなり好きにしろ!!」

「それで構いませんよ」

「よし、では二人とも準備はいいな?」

「……………いや、なんでお前がいるんだよ? セリカ」

「何を言う？ お前の大事な教え子が戦うんだ。こんな面白いことに首を突っ込まないでいつ突っ込めばいい？」

二人の中心に立ち、審判役を引き受けたセリカにグレンは肩を竦める。

「それに私自身も興味があるんだ、中々優秀のようだしな」

「ありやー優秀を通り越した天才だぜ？」

「ええいつ！ いつまでくっちゃべっている!? さっさと始めんか!?」

いつまでも始まらないことにハーレイは怒声を響かせた。

「はいはい、わかったよ。では、始め！」

セリカの決闘の合図と同時にテラスは予め呪文を唱えていた【シヨック・ボルト】を時間差起動で任意起動。

しかし、これはあくまで牽制だ。

ハーレイはこの【シヨック・ボルト】を【トライ・バニッシュ】で打ち消し、それから攻撃性呪文で攻撃に移る。

ハーレイは自身の面子も気にして、生徒相手に本気を出して大人げないと言われない為に初等魔術でテラスを仕留めに来るだろう。

だが、テラスはハーレイが攻撃を行う前に白魔【フィジカル・ブースト】の呪文詠唱を今のうちに取り掛かる。

テラスなら《強化》と切り詰めた一節詠唱で身体能力を増幅<sup>エンハンス</sup>。元々の吸血鬼の身体能力を合わせればハーレイが呪文詠唱を完了する前に懐に潜り込める。

しかし、ハーレイはそれを読んでいるかもしれない。

テラスと同じように時間差起動<sup>タイム・ブロード</sup>で攻撃、防御のどちらかを行う可能性も捨てきれない。

それでもテラスは実行する。

それでハーレイの実力の片鱗を知れば上々。そうでなくても得意な魔術を見極めて――。

「あああああああああああああああああッツ!!」

「へ……………?」

【フィジカル・ブースト】の呪文詠唱に入ろうとした瞬間、悲鳴が中庭

に響いた。

その悲鳴は牽制用で放った【ショック・ボルト】を受けたハーレイだった。

ばかり、と前のめりに倒れたハーレイに空気が固まる。

テラスだけでなく二人の決闘を見守っていた生徒達も言葉がでなかった。

「あー、つまらん結果になったものだ。うん、テラスの勝ち」

愚痴りながら勝敗を告げるセリカの言葉に二組が歓声を上げ、一組は驚きの声を上げるなかでテラスだけは戸惑いを隠せなかった。

「え……………？ 終わり……………？」

「あー、テラス。お前もしかして今の【ショック・ボルト】を牽制用だったのか？」

「はい、あれぐらい簡単に回避すると思いましたが……………」

特務分室という数多の死線を潜り抜けてきたグレンは戸惑うテラスの考えを察して声をかけてきた。

「実戦的に考えれば次の一手を用意しておくのは悪くはねえが、お前、普通に考えてみる？ 時間差起動タイムリフトっていう高等技法を身に付けている生徒がいると思うか？ お前がおかしいんだよ」

「そ、それでも予測するぐらいはできるでしょう？」

「俺やセリカみたいな魔術戦に長けた奴ならともかくハーレイクイン先輩は魔術の研究が専門だ。そりゃ、多少は戦闘は出来るだろうが、生徒が初手から時間差起動タイムリフトで魔術行使したら不意を突かれて直撃もするぞ？」

頭をぼりぼりと掻きながら説明をするグレンにテラスは茫然としたまま頷いた。

「……………ま、結果はどうであれ、お前の勝ちだ。少しは誇ったらどうだ？」

慰めるように肩に手を置くグレン。

すると、二組のクラスメイト達が駆け寄ってきた。

「凄えな、テラス！ ハーレイ先生に勝つなんて！！ でも、それ以上にスカッとしたぜ！」

「驚きましたわ。私達と同じ歳でそれほどの技量を持ち合わせておられるなんて」

「学士講師、その名に恥じない実力見させて貰いました。ぜひ、私にも競技祭での助言が欲しいのですが」

クラスメイトに囲まれて褒めちぎられるテラスを少し離れたところでルミアはほつと安堵していた。

「まったく、もう驚きもしないわね……………」

「システイ……………」

「ほら、ルミアからも何か言ってあげたら？　きっとあいつも喜ぶわよ?」

「そうかな?」

「そうよ、むしろ喜ばなかったら私が許さないんだから!」

「ふふ、ありがとうシステイ」

親友であるシステイに背中を押されて二人もテラス達がいる輪の中に入って行く。

「あ、ルミア。無理せず勝ったよ」

「うん」

近づいてきたルミアに気付いて軽く手を上げるテラスにルミアは微笑んで返した。

「さて、と《そろそろ・起きて・ください》」

「ぬあああああああああああああああああツツ!!?」

「容赦ねえー!」

気絶しているハーレイに「ショック・ボルト」で強制的に目覚めさせるテラスは地に伏せているハーレイの前に歩み寄る。

「ハザクラ先生、言わずともわかると思います但貴方の負けです」

「……………くっ」

「今の気分はいかがですか?　ご自身から決闘を申し込んだ上に負けた言い訳でもしますか?　別にいいですよ?　負け犬は負け犬らしくお好きだけ遠吠えしてください」

辛辣な言葉をすらすらと並べるテラスにハーレイはただ悔しそうに歯を噛み締める。

「ですが、その前に二組に謝罪を要求します。足手まとい、使えない雑魚と教育者とは思えない言動を撤回して謝ってください」

決闘でのルールに則って二組の謝罪を要求する。

「この競技祭に向けて勝ちに行く姿勢については悪く言うつもりもありませんし、成績上位陣で種目を固めることについても何も言いません。ですが、勝ちに行こうと努力している生徒を成績下位者という理由で陥れるのは流石に黙認できません。ですので謝罪を」

「……………すまなかった」

二組に頭を下げて謝罪するハーレイはすぐに立ち上がり、テラスを指す。

「今回は勝ちを譲ってやる！　だが、競技祭では勝てると思わないことだ!!」

「はいはい」

負け惜しみを置いて去って行くハーレイにどうでもよさそうに応えるテラスは溜息が出た。

(セラ姉さんの説教癖がうつった……………)

ハーレイの言葉に苛立ったのは本場で決闘を受けたのもいいが、最後の説教は完全にセラと同じだった。

常日頃から説教を聞いていたら説教癖もつくものなのか……………？

そんな疑問が脳裏を過る。  
すると、

「お前、今の説教の仕方セラにそっくりだったぞ？」

グレンが呆れるようにそう言ってきてテラスは内心で頭を抱えた。その後すぐにシステイーナのあおりにクラスメイト達はより練習に力を入れて、テラスは皆の練習にとことん付き合わされた。

魔術競技祭までの一週間、休む暇もなく皆の練習に振り回された。

## 魔術競技祭

魔術競技祭当日。

学年次ごとのクラス対抗戦で行われるこの魔術競技祭で今回は二年次のみ限り、女王陛下自ら表彰台に立ち、優勝クラスを直接下賜するという帝国国民ならば誰もが羨むような名誉。

その中でテラスがいる二年次二組だけが全員参加という注目を浴びるなかで、誰もが奇異な目で見ては期待はしていなかったのだが……。

『そして、さしかかった最終コーナーッ！ 二組のロッド君があ、ロッド君があああ——ぬ、抜いた——ッ!? どういうことだッ!? まさかの二組が、まさかの二組が——来れは一体、どういうことだああああ——ッ!』

魔術の拡声音響術式による実況担当者、魔術競技祭実行委員会のアースが実況席で興奮気味の奇声を張り上げている。

それは『飛行競争』でグレンの担当クラスである二組が——。

『そのまま、ゴオオオル——ッ!? なんとおおお!? 「飛行競争」は二組が三位! あの二組が三位だあ——ッ! 誰が、誰がこの結果を予想したアアアアアア——ッ!』

誰もが予想していない奮闘ぶりに注目の的となっていた。

「うそーん……………」

「それ、心の中で言ってくださいよ、先生」

目を点にして呆然としているグレンにテラスは半眼を作る。

「ペース配分の練習をしると言っていたのは先生ではないですか?」

「そりゃ、そうだが……………まさかな……………」

「それに他のクラスと違い、僕達のクラスは一回の競技で全力を出せれるという強みもあります。それが後押しにもなったのでしよう」

全員参加の二組とは違い、他のクラスは成績上位者を使い回しにしている為に次の競技のことも考慮しておかなければならないが、二組にはその必要がない。

一つの競技のみに集中して行えることが出来る。

「まあ、まぐれでも勝ちですし。良しとしましょう。……………」  
ところで、どうして日を追うごこにやつれているんですか？」

「……………ほつといてくれ」

グレンは力なくはぐらかした。

それからも二組の快進撃は続いた。

セシルの『魔術狙撃』、ウエンディの『暗号解読』も好成績を収めて会場も盛り上がっている中で午前の最後の競技——『精神防御』が始まろうとしていた。

「ふう〜」

『精神防御』。白魔【マインドアップ】と呼ばれる自己精神強化の術を用いて耐えるという形で競わされる。

そして、少しずつ受ける精神汚染呪文の威力は上がっていき、最終的に正常な精神状態を保って残った者が勝者となる敗者脱落方式の耐久勝負。

その競技に出場するルミアは緊張を誤魔化す様に深呼吸をしていた。

「大丈夫？」

「テラス君……………少し、ううん、結構緊張してるよ」

声をかけてきたテラスにルミアは苦笑で返した。

【マインドアップ】は素の精神力を強化させるだけの呪文。元々の精神制御力が強い者ほど、大きな効果がある。だから先生はルミアをこの競技に選んだと思う」

「うん……………」

「だから僕はルミアに関しては何の心配もしていない。少なくとも学生内でルミアを上回る精神力を持つ人はいないと断言できるほどだよ」

「ううん、少しは心配して欲しかったな……………」

励ましてくれているのはわかるけど、そこは少しは心配してくれる素振りを見せて欲しいという乙女心のおの字も理解していない魔術馬鹿吸血鬼は言葉を続ける。

「まあ、無理しない程度に頑張っつね」



「……………それはテラス君には言われたくないよ」

唇を尖らせるルミアに苦笑する。

「さて、それじゃあ僕はそろそろ皆のところに戻るよ」

「うん。皆で勝とうね」

「そうだね」

そこでルミアと別れて二組がいる場所に戻る。

「あ、テラス。ルミアは？」

「フィールドに行ったよ。調子も良さそうだったし大丈夫だと思うよ」

親友であるルミアを心配するシステイーナを安心させる。

だが、システイーナはフィールドにいるルミアを心配そうに見つめていた。

「ねえ、テラス……………今からでもルミアと貴方が変わらない？」  
「どうして？」

「だって、こんな過酷な競技、あの子には無理よ。それに他のクラスの出場者は皆、男の子じゃない！ 女の子はルミアだけよ！」

システイーナの指摘通り、いかにも精神的にタフそうな男子生徒達  
が揃い踏みする中、ルミアだけが紅一点だ。

「だから、今からでも先生に言っ  
て貴方と変われば……………ツ！」

「その必要はないよ、ルミアは勝つからね」

それが当たり前のように断言した。

「精神の強さに見た目も性別も関係はないよ。一見弱そうに見える人でも、そういう人が実は強いなんてことはある。ルミアはまさにそれだよ。さつきルミアにも言っただけど、学生内でルミアを上回る精神力を持つ人は……………どうしたの？」

言葉の途中でシステイーナが嬉しそうとか微笑ましいとか  
か慈愛の眼差しをテラスに向けながら笑みを浮かばせていた。

「……………ルミアのことよく見てるのね」

「まあ、よく話もするし……………よくよく思い返せば転入した日から話さない日なんてなかったような……………って、どうしてそんなに嬉しそうなの？」

「なんでもないわよ。ルミアを泣かせたら承知しないんだからね」  
「よくはわからないけど、努力するよ」

「……………はあ、鈍感」  
「？」

溜息を吐きながら小声で何か呟いたような気がするが、それよりも『精神防御』の競技が始まる歓声にフィールドに視線を向ける。

『ではでは、今年もこの方にお出まし願います！ はい！ 学院の魔術教授、精神作用系魔術の権威！ 第六階梯<sup>セ</sup>、ツエスト男爵です！』

「ふっ、紳士淑女の皆さん、御機嫌よう。ツエストⅡルⅡノワール男爵です」

伊達姿の中年男性——ツエストは一礼する。

「さて、それでは早速、競技を開始しよう。選手諸君、今年はどこまでこの私の華麗なる魔術に耐えられるかな……………？」

『それでは第一ラウンド、スタート！ ツエスト男爵お願いします！』  
「それではまず、小手調べに恒例の「スリープ・サウンド」の呪文あたりから始めてみようか……………いくぞ！」

こうして『精神防御』の競技が始まった。

ツエスト男爵の白魔術に生徒達は対抗呪文<sup>カウンター・スペル</sup>として白魔「マインド・アップ」で耐えていく。

だが、威力が上がって行く精神汚染の白魔術に脱落する生徒達も増えていく中で、テラスの予想通りにルミアは残っている。

「う、うそ……………」  
「だから言ったでしょう？」

啞然とするステイナーの隣で当然のように言い放つ。

しかし、それでもテラスでも一つだけ予想外だったのは五組のジャイルという魔術師らしからぬ風貌を醸し出している男子生徒の存在だ。

ルミアと一騎打ちになるまで生半可な精神汚染呪文は出ていない。テラスの予想ではもう勝敗はルミアが勝っていてもおかしくはないと踏んではいたが、ジャイルという男子生徒もよほどの修羅場を

潜っているように見える。

(ここから【マインド・ブレイク】……………やめておこう)

ルミアを勝たせる為にこの場所からジャイルに【マインド・ブレイク】を与えようと一考したが、それがバレてルミアが失格になったら元の子もない。

(頑張れ、ルミア……………)

ただ、心の中でルミアを応援する。

ツェスト男爵の「マインド・ブレイク」を耐えたルミアだったが、額から脂汗が浮いており、今もやせ我慢で立っているようなものだ。

洪水のような歓声と嵐の拍手の中、ジャイルがルミアに声をかける。

「ふん。お前……………女のくせにやるじゃねえか。ここまで気合の入っているやつは野郎でも、めつたにいやしねえ」

「そ、そうかな?」

「へっ。だが、そろそろきついんじゃないか? 脂汗浮いているぜ?」

「あ、あはは……………わかる? うん、実は結構、きついかも……………今も一瞬、くらつとしちやったし……………」

「棄権したらどうだ? 三日昏睡は嫌だろ?」

「心配してくれてありがとう、ジャイル君。でも……………だめ。私だって負けるわけにはいかないんだ」

気丈に笑うルミアにジャイルはやれやれと肩を竦める。

「はっ……………わからねえな。どいつもこいつもが自己顕示欲と名誉欲にまみれたこのクソくだらねえ競技祭ごときに……………一体、何がお前をそこまでさせている?」

「……………信じてくれている。私が勝つことに疑わないで信じてくれているんだ」

観客席にいる親友であるシステイーナの隣にいるテラスに視線を向ける。

「だから、それに応えたいの……………」

自分の勝利を疑わずに信じてくれている。それを裏切らずに応えたい。

その本心を聞いたジャイルは小さく口角を上げた。

「なるほど、男か」

「ち、違うよ!？」

慌てて否定するもその顔は赤く染まり、ジャイルの呆気ない一言にルミアに精神は簡単に揺さぶられた。

それからラウンドが重なるごとに威力が上がって行く【マインド・ブレイク】に耐えていく二人の膠着状態は続くも、第三十一ラウンドでルミアの身体がぐらりと傾いた。

それに対してジャイルは全く動じず仁王立ちしたまま。

「大丈夫かね、君……………ギブアップかね？」

「……………いえ」

少し意識が朦朧としていたらしい。

返答にラグが数秒あったが、ルミアは頭を振って気丈に顔を上げ、立ち上がった。

「……………大丈夫です。まだ、行けます!」

力強く言い放つその言葉と目にはまだまだ力が灯っている。

『な、なんととおおおお—— ツ!? 続行です、続行——

—— ツ!? まだまだ勝負の行方はわからない—— ツ!?』

実況のアナウンスに観客が総出で大歓声を上げた。ここまですれば誰もが見てみたいのだろう。可憐な少女が屈強な男に勝つその光景を。

「棄権だ!」

だが、突然上がったその叫びに、会場は水を打ったように、しんと静まり返った。

「……………え? 先生?」

その声にルミアが振り返る。

そこには、いつの間にかやってきたグレンが立っていた。

「二組は三十一ラウンドで棄権だ。何度も言わせんな」

微妙な沈黙が競技場全体に流れていく。

『な、なんと……………二組ルミアちゃん、棄権……………これはまた、あつけない幕切れ……………』

実況が残念そうに呟いた、次の瞬間。

嵐のような大ブーイングが観客席から巻き起こった。

ふざけんな、最後まで勝負させてあげろ、ひっこめ馬鹿教師！

そんな大ひんしゃくの空気の中で競技場の中央の空に爆発が巻き上がる。

「黙れ」

指先を空に向けたまま静かに口を開いたテラスの異様な気配に誰もが口を閉ざした。

「魔術で強引に観客を黙らせたテラスはルミアに労いの言葉を送る。

「お疲れ、ルミア」

はっと我に返り、ルミアはグレンに抗議する。

「そ、そんな、先生！ 私はまだ……………」

「いや、もういい。本当はお前、わかってんだろ？ 今が限界だつて。次はないって」

「……………そ、それは……………その……………」

「それにな、俺じゃなくてもこいつが強引にでも止めに入るぞ？」

「ごめん、ルミア。ルミアならと慢心してた」

ルミアなら余裕で勝てると思い、相手を見誤った。

「ルミアが負い目を感じる必要はないよ。僕と先生の采配ミスだから。それに無理をしてルミアを三日間も昏睡状態にしたらシステイナーにタコ殴りにされそう」

やや冗談交じりに告げるその言葉にグレンは同意するように頷いていた。

「そういうことだ。マジですまん」

「ううん、そんなことないです、先生、テラス君。楽しかったですよ？

負けちゃったのはちよつと悔しいけど……………私も皆のために戦えているんだって気持ちになれたから」

「……………そうか」

『えー、それでは、去年に続いて見事、「精神防御」の勝負を制した五組代表ジャイル君。何か一言お願いします』

「ふっ、流石だね、ジャイル君。……………ん？ ……………ジャイル君？」

呼びかけても、まったく微動だにせず終始無言を貫くジャイルを不審に思い、ツエスト男爵がジャイルの顔を覗き込んだ。途端に、その顔色が変わる。

『おや？ ……どうかしましたか？ 男爵』

「じゃ、ジャイル君はすでに——」

『え？ ジャイル君がどうしたんですか？』

「た、立ったまま気絶している——」

『……………は？ えーと、ということ……………？』

「……………ルミア君の勝ちだろう。棄権したとはいえ、第三十一ラウンドをクリアできなかったジャイル君に対し、ルミア君は一応、クリアはしたからね」

数瞬の間。そして——

『……………な、なんとおおおお——ツ!? なんといどんでん返し！ この勝負を制したのは紅一点、二組のルミアちゃんだったああああ——ツ!?!』

爆音のような大歓声が渦巻いた。

「おめでどう、ルミア」

「うん！ テラス君！」

何一つ曇りも憂いもない、花のような笑顔だった。

## 罪人

魔術競技祭の午前と午後の部に分かれた、小一時間ほどの昼休みの間にシステイーナ達と昼食を共にしていたのだが。

「まったく、もう！ あいつつたら……………ッ！」

「まあまあ、システイ」

弁当を持つてくるまでの間に何かあったのか、システイーナはお冠だ。

その隣ですで見慣れた光景のようにルミアがシステイーナを宥めている。

（またグレン先生か……………）

システイーナが怒っている原因を容易に察して何も言わず、何も聞かずに黙々と弁当を食べる。

（そういうえばセラ姉さんも来てたな……………）

『テラス君！ グレン君とルミアちゃんの為でもあんな風に魔術を使っちゃダメ！』

出会い頭に説教を受けてしまった。

テラスの応援にきたらしいが、まさか説教まで受けるとは思いもしなかった。

軽く説教をして自分の昼食にどこかに行ったセラはとりあえず置いておく。

「あ、テラス君が出る種目は午後からだったよね？ 頑張つてね」

「まあ、貴方なら問題ないでしょう」

「一応任せて」

テラスが出る種目『乱闘戦』。

簡単に言えばバトルロイヤル。代表選手の生徒が出場して戦い、最後まで立っていた生徒に得点が入る種目。

しかし、二人はテラスが負けるとは微塵も思っていない。

それほどの実力を持っているからだ。

「それじゃ、私はこれをグレン先生に届けてくるね」

昼食を食べ終わるとルミアは布包みを抱えてグレンのところに小

走りでこの場から離れていく。

「いいの？ 自分で渡さなくて」

「べ、別に誰が渡したって同じよ！」

素直じゃない。

テラスはそう思いながらも立ち上がる。

「じゃ、僕もその辺りを適当にぶらついて時間を潰してから戻るよ」

「わかったわ。ちゃんと戻ってきなさいよ」

「はいはい」

テラスの時間まで適当に時間を潰そうとその辺りを歩いていると。

「その貴方。少し、よろしいでしょうか？」

「はい？ ……………え？」

声をかけられ、振り返るとテラスは目を見開いた。

何故なら自分のすぐ後ろには女王陛下——アルザーノ帝国女王

アリシア七世がそこにいた。

「じよ、女王陛下……………ッ！」

「貴方はエルミアナ……………ルミアの友人ですよね？」

優しい微笑みを見せるアリシアにテラスは足元を見るとなにかしらの魔術がアリシアに施されているのがわかった。

護衛一人も付けずにたった一人でここまでお忍びで来るその理由。

「ルミア、エルミアナ王女を探しておられるのですか？」

「ええ、どこにいるかご存じないかしら？」

娘に会いに来た。そのことを肯定したアリシアは少し困ったように笑みを見せる。

恐らくはこの昼休みという僅かな時間、それも護衛の目を欺いてとなれば会える時間は本当に数分程度だろう。

「では、護衛も兼ねて御案内しましょう。ご安心を、並大抵の者なら容易にあしらえますので」

「ふふ、それではお願いしますね」

流星は親子、笑った顔がルミアそっくりだ。

そんなことを思いながらルミアの匂いを辿りつつ女王陛下をルミアの下へ案内する。



「あの子の学院での生活はどうかしら？　楽しんでいるのならいいですが」

「ご安心を。ルミアには親友とも呼べる良き友人と毎日楽しい学院生活を送っております。それに彼女自身も分け隔てなく周囲と接し、友人も多く、多くの人達に慕われております」

「そうですか。それはなりよりです」

安心するように胸を撫でおろしたアリシアはテラスにルミアの学院生活について訊いてきた。

その質問の一つ一つが娘であるルミアのことを想っているというのはテラスでもわかる。

「あ、おりましたよ」

ルミアとグレンを発見し、二人はその近くまで歩み寄る。

「グレン、ですよね？　あの………少し、よろしいですか？」

「はいはい、全然よろしくありません、俺達、今、すっごく忙し——  
——って、ええええええええええええええええええええええ——ツ!？」

「不敬ですよ、グレン先生」

正体を知るなり、素っ頓狂な声を上げるグレンに呆れた。

「じよ、じよ、じよ、女王陛下——ツ!?　ど、ど、どうしてアナタのような高貴なお方が、下々の者のたむろするこのような場所に、護衛もなしで——ツ!？」

「護衛はおりますよ?　この子に護衛をお願いしましたので」

微笑みながら告げるアリシアにグレンはひたすら恐縮だ。

「あ、いえ、その、さっきの無礼なことを言って申し訳ございませんでした——ツ!」

いつもの横柄で傍若無人な態度はどこへやら。

グレンは畏まって片膝をつき、その場に恭しく平伏する。

「そんな、お顔を上げてくださいな、グレン。今日の私は帝国女王アリシア七世ではありません。帝国の一市民、アリシアなんですから。さあ、ほら、立って」

「いや、そうは言ってもその………し、失礼します……」

恐る恐るグレンは立ち上がると、今度はアリシアが目を伏せて謝っ

た。

この国の為に尽くし、不名誉な形で宮廷魔導師団を除隊させたことについての謝罪を述べるもグレンはアリシアの謝罪を固辞する。

「女王陛下。失礼ながらお時間の方が」

「そうでしたね」

時間を確認し、時刻が迫っていることを伝えるとアリシアは呆然と立ち尽くしているルミアに視線を向けた。

「……………お久しぶりですね、エルミアナ」

「……………」

そんなルミアに優しく語りかけるも、ルミアは目を伏せた。

「元気でしたか？ あらあら、久方見ないうちに、ずいぶんと背が伸びましたね。ふふ、それに凄く綺麗になったわ。まるで若い頃の私みたい、なあんて♪」

「……………あ……………う……………」

「フィーベル家の皆様との生活はどうですか？ 何か不自由はありますか？ 食事はちゃんと食べていますか？ 育ち盛りなんだから無理な減量とかしちゃうだめですよ？ それと、いくら忙しくても、お風呂はちゃんと毎日入らないとだめよ？ 貴女は嫁入り前の娘なのですから、きちんとしておかないと……………」

「……………あ……………そ、その……………」

硬直するルミアをよそに、アリシアは本当に嬉しそうに言葉を連ねていく。

「ああ、夢みたい。またこうして貴女と言葉を交わすことができるなんて……………」

そして、感極まったアリシアは、ルミアに触れようと手を伸ばす。

「エルミアナ……………」

だが――。

「……………お言葉ですが、陛下」

ルミアはアリシアの手から逃れるように、片膝ついて平伏した。

「！」

「陛下は……………その、失礼ですが人違いをされておられます」

ルミアのぼそりと呟いた言葉に、今まで嬉しそうだったアリシアが凍りついた。

「私はルミア。ルミア＝ティンジェルと申します。恐れ多くも陛下は私を、三年前にご崩御されたエルミアナ＝イエル＝ケル＝アルザーノ王女殿下と混合されておられます。日頃の政務でお疲れかと存じ上げます。どうかご自愛なされますよう……」

「……………」

慇懃に紡がれるルミアの言葉に、気まずそうに押し黙る。

「……………そう、ですね」

そして、アリシアは寂しそうに薄く微笑み、目を伏せた。

「あの子は……………エルミアナは三年前、流行病にかかって亡くなったのでしたね……………あらあら、私だったらどうしてこんな勘違いをしてしまったのでしょうか？ ふふ、歳は取りたくないものですね……………」

「勘違いとはいえ、このような卑賤な赤い血の民草に過ぎぬ我が身に、ご気さくにお声をかけていただき、陛下の広く慈愛あふれる御心には感謝の言葉もありません……………」

しばらくの間、重たい沈黙が周囲を支配する。

ルミアは何も言わない。アリシアは何かを言おうとして口を開きかけ……………そして、諦めたように口を閉ざす。その繰り返しだ。

そして――

「……………そろそろ、時間ですね」

未練を振り切るように、アリシアはグレンを振り返った。

「グレン。エル……………ルミアを、よろしくお願いしますね？」

「……………わかりました。陛下」

次にテラスに視線を向ける。

「あの子の傍にいてあげてくださいね？」

「はい」

アリシアは静かに去って行く。

その場に平伏したままのルミアはついぞ一度も、去り行くその背中に目を向けることはなかった。

魔術競技祭、午後の部が始まった。

午後の部最初の競技は念動系の物体操作術による『遠隔重量上げ』だった。白魔【サイ・テレキネシス】の呪文で鉛の詰まった袋を触れずに空中へ持ち上げる競技である。

アリシアとの密会の後、消沈するルミアを連れて競技場に戻り、テラスはクラスの指示だし、助言を行っている間、グレンは上の空だった。

ぼんやりと考えていることは、当然、ルミアとアリシアのことだ。ルミアの正体とその身の上の複雑な事情を政務上層部から極秘に聞かされた者の一人。だから、二人の気持ちは理解はできても、どうしたらいいのかわからない。

「……………先生」

むう〜っ、と不機嫌そうにむくれたシステイーナが、突然グレンに声をかけてきた。

「うお!? な、なんだよ、白猫!? やんのかコラ!?!」

昼休みのやりとりを思い出し、グレンは思わず拳闘の構えで身構える。

「……………ルミアがいなくなったんだけど」

「は、はあ!?!」

「考えてみれば、あの子……………先生に会いに行つて、帰つて来てから、ずっと様子がおかしかった」

「あれ? 何でお前、俺がルミアと会っていたこと知ってるんだよ?」

「うるさい!」

「ひゃい!…ごめんなさい!?!」

ぴしやりと切り返され、グレンは情けなく縮こまる。

「午後の部には、もうあの子の出番はないけど、だからと言ってサボるような子じゃない」

「だから、何も言わずに姿を消したのはおかしいなって、思つて」

「……………まあ、そうだな」

システイーナもグレン同様に、ルミアの身の上を知る数少ない一人だ。

だからグレンは何が起きたかを知った方がいいと、判断し、昼休みのことを話した。

「そんなことが……じゃあ、あの子がいなくなったのって……」

「十中八九、お前の想像通りだろうな。そんな状況、俺だって一人になりたいわ」

やれやれ、とグレンは溜息をついた。

「だが、一人になりたい気分はわかるが、一人になり過ぎるのもよくないな。なんの解決にもならんが、仲間達と一緒に騒いでいた方が気も幾ばくか紛れるだろ。どーせ、一人で塞ぎ込んで解決する話でもねーし。探して、連れ戻して来てやるよ」

頭を掻きながら面倒くさそうに物言うと、グレンは席から立ち上がった。

「白猫。お前も来るか？」

「そうね、私も——」

と、システイーナが反射的に首肯しかけて……

「——ううん、ここはあいつに行かせましょう」

助言しているテラスに歩み寄ってシステイーナはルミアを迎えに行くようにテラスに告げるとテラスは困ったように頬を掻く。

「それはいいけど……こういう時って人間は一人になりたいものじゃないの？ それに行くなら僕じゃなくて親友であるシステイーナの方が」

「親友同士だからこそ、よ。こんな時……あの子が誰に一番そばにいて欲しいくらいわかるの」

「そんなものなの？」

「そんなものよ」

テラスもテラスなりにルミアを気遣っているつもりだ。

一人になりたいのなら一人にさせておくれ、傍にいて欲しいのなら傍にいる。

「わかったよ。僕の競技までまだ時間はあるし、少し行ってくるよ」

「ええ、ルミアの事をお願いね」

「わかった」

テラスは競技場の外へ向かって歩き始める。

「何を見てるの？」

「テラス君……………」

木々の木陰にいたルミアは何かを見つめているのを見て、テラスは声をかけた。

ルミアの小さな手の中には簡素な作りのロケット・ペンダントがあった。ルミアはその蓋を開いて、その中をじっと見つめているようだった。

「このロケットにはね、何も入ってないの……………」

テラスの接近に察したルミアは、ぱちんとロケットの蓋を閉じ、それを握りしめた。

「昔は、誰か大切な人達の肖像が入っていたような気がするのだけど……………いつの間になくなっちゃって」

ルミアは寂しげに笑い、ロケットの鎖を首後ろで繋ぎ、ロケット本体を胸元から衣服の中に落とし込んだ。

「これ自体、特に価値があるものでもないのに……………変だよ。こんなものを今でも大事に肌身離さず持ち歩いているなんて」

「まあ、変だよ。僕なら躊躇いなく捨てるよ」

ルミアの言葉を肯定するように答えたテラスだが、

「でも、ルミアには違うんでしょ？ 捨てられない理由があるのなら、それには何か大事な何かがあるんじゃないの？」

「……………テラス君は知ってるんだよね？ ……………私と女王陛下の関係を」

「前の事件後に無理矢理政府の人に聞かされたよ」

一か月前の事件の後に政府の上層部から極秘に聞かされたテラスだが、そんなものどうでもよかった。

「ルミアが何者だろうと僕には関係ないよ。ルミアはルミアだ。王女

だろうと異能者だろうと僕にとってはルミアはこの世界でただ一人だ。戻ろう？ 魔術競技祭の午後の部はもう始まつてるよ？」

くすり、と。ルミアはほんの少しだけ微笑んだ。

「ここは落ち込んでいる女の子に、何か優しい言葉をかけてあげる場面だよ？」

「生憎と、これまでの人生で誰かを励ましたことはなくてね」

そんなテラスを見て、ルミアはクスクスと含むように笑う。

「じゃあ……もう少しだけ私の話に付き合ってくれないかな？」

「いいよ」

とつとつとルミアは語り始めるのは実に取り留めのないことだ。

まだ、自分が王女だった頃の話。日々の政務で忙しい中、それでも時間を作って遊んでくれた優しい母親。いつも自分の面倒を見てくれた優しい姉。王室直系の娘として何一つ不自由なく、王室直系の娘としてやはりどこか不自由だった日々。それでも、確かに幸せと呼べた在りし日の記憶——。

「……………私はどうすればよかつたんだろう？」

一通りの思い出語りが終わると、ルミアはテラスに静かに問う。

「陛下が私を捨てた理由……………わかるの。王室のために、国の未来のためにどうしてもやらなければならぬ必要なことだったって。それでも……………私は心のどこかで陛下を許せなかつた……………怒っていると、思う……………」

「人間のそういう感情は理屈じゃないからね」

「だけど、あの人を再び母と呼びたい、抱きしめてもらいたい……………そんな思いも、どこかにあるの……………ずるいよね……………私……………」

「そうかな？ いったって人間らしい考えだ」

「でも、あの人を母と呼んだら、私を引き取って、本当の両親のように私を愛してくれたシステイのお母様やお父様を裏切ってしまうよ……それが申し訳なくて……………」

「別に裏切ってはないでしょう？」

「だから、私、わからないの。どうしたらいいのか、どうしたらよかつたのか……………」

目を伏せるルミア。

「なら、本音を女王陛下にぶつけなければいい。怒りも不満も寂しさも悲しさも自分の胸の中にあるもの全部をぶつけたらいい。その上でお母さんって呼べばいいと思うよ?」

「そ、そんな簡単に言わないでよ……………」

「簡単だよ。というよりもそれしかない。人間って生物は勝手に都合を合わせて、勝手に自己完結する。それが後悔するようなことでもこれでもいい、と思いつまませる。ルミア、今の君はそれだ。ここは理屈など体裁など気にせず感情のままに動いてみることをお勧めするよ」

「で、でも……………私……………自分の心がわからなくて……………」

「それは嘘だよな? ルミアはもう気付いている、自分の気持ちに。なら、それを言えればいい」

「私……………怖いの」

消えそうな声でぼつりと呟く。

「私を追放した前日まで、あの人はとても優しくかった。でも、私を追放されたあの日、あの人に呼び出されたら、国の偉い人達が険しい顔で沢山集まっっていて……………あの人は凄く冷たい目で私を見つめていて……………まるで別人のように豹変していて……………」

「……………」

「さっきのあの人はとても優しくかったけど……………また、いつ私に対して、突然、あの冷たい目を向けてくるかと思うと……………怖くて……………だから……………その……………」

「傍にいるよ。ルミアの気が済むまで僕が君の傍に続ける。こんな怪物でよければ、だけどね」

「本当に……………?」

「嘘はつかないよ」

二人の間に流れる穏やかで気安い空気。

魔術でも吸血鬼の能力を使ってでもルミアを女王陛下に会わせてあげようと考えていた。

——だが。

「……………あれは王室親衛隊だっけ?」



こちらに向かつて歩いて来ている軽甲冑に身を包み、緋色に染め上げた陣羽織を羽織り、腰には細剣レイピテを佩剣している。

帝国軍の中でも精鋭中の精鋭であり、最も女王陛下に忠義厚い者達で構成された王室一族を何よりも優先して護衛する、王室の守護神——それが王室親衛隊。

興味本位でグレンから王室親衛隊を聞いていたテラスはそれがすぐに分かると同時に頭を悩ませた。

女王陛下の警邏と護衛を務めているはずの王室親衛隊がどうしてこんなところにいるのかを。

すると、王室親衛隊はテラス達の前で足を止め、二人を囲むように、音もない足捌きで素早く散開した。

「ルミアⅡティンジェル……だな？」

二人の正面に立った、その一隊の隊長格らしい衛士が低い声で問いかけてくる。

「……………ルミアⅡティンジェルに間違いはないな？」

「え？ は、はい……………そ、そうですけど……………」

念を押す様に再び重ねられた問いかけに、ルミアは戸惑いながら答える。

ルミアが返答した次の瞬間。

衛士達は弾けたバネのように一斉に抜剣し、ルミアにその剣先を突きつけていた。

「何の真似ですか？」

そんなルミアを庇うように前に立つテラスは静かに問いかける。

「傾聴せよ。我らは女王の意思の代行者である」

一隊の隊長格らしい衛士は、そんなテラスを忌々しそうに一瞥し、朗々と宣言した。

「ルミアⅡティンジェル。恐れ多くもアリシア七世女王陛下を密かに亡き者にせんと画策し、国家転覆を企てたその罪、もはや弁明の余地なし！ よって貴殿を不敬罪および国家反逆罪によって発見次第、その場で即、手討ちとせよ。これは女王陛下の勅命である！」

あまりにも現実離れした、その現実にルミアは凍りつくしかなかつ

た。

「わ……………私が……………陛下の暗殺をたくらんだ……………？　手討ち……………？」

ルミアは呆然と、肩を震わせていた。

「少しお待ちを。何かの間違いではありませんか？　彼女はそのようなことをする人物ではありません」

「証拠は拳がっている。情状酌量の余地も弁明の機会もない。大人しく我が剣の露となつてもらおう」

「それなら証拠もしくは罪状の開示を。それにいくら罪人といえど裁判もせずに処刑とあればそれこそ女王陛下の顔に泥を塗る行為ではありませんか？」

「もう一度告げる。これは我ら女王陛下の勅命だ。それに部外者に開示義務はない。これはお前のような一般市民が触れてはならぬ、高度な政治的な問題だ」

「……………高度な政治的問題だとしても即手討ちとはどういう意味ですか？　仮にも人の命を一方的に奪う貴方方の行為で何かしらの問題が発生することも考慮しているのですか？　王室親衛隊が罪人を一方的に手討ちにしたなどという問題が世間に知らされたら国の信用問題になるのでは？」

「ここで法解釈議論を行うつもりはない。どこの馬の骨か知らぬが、これ以上、その重罪人を庇い立てするようならば、貴様も共犯者としてこの場で処刑するが？」

剣先がテラスに向けられる。

それでもテラスは真つ直ぐと王室親衛隊を見据えながら尋ねた。

「……………どうしてもルミアを殺すのですか？」

「そうだ」

「……………そうですか」

肩を竦め、力を抜いて目を伏せるテラス。

「なら、死ね」

伸びた爪が鋭い刃のように王室親衛隊を瞬く間に切り裂いた。

「な、んだと……………？」

血を流し、地面に崩れ落ちる王室親衛隊を見下しながらテラスは爪を元に戻す。

「……………無意識に致命傷を避けましたか。流石といいましょう。ですが、たった五人で怪物を相手にできるわけがないでしょう?」

嘆息しながら告げるテラスは隊長格の衛士に言葉を投げる。

「ルミアを殺すというのなら不老不死の怪物が敵に回ると思ってください。まあ、これから死ぬ貴方に言っても無駄なことですが」

爪を伸ばし刺突で喉を突き刺して絶命させる。

「ダメ!!」

そのつもりだったが、ルミアが唐突に抱き着き、狙いが逸れた。

「何を考えてるの!? こんなことをしたら、も、もう……………ツ!」

「国家反逆罪になる? それがない? そもそも怪物なんて全世界、全人類を敵に回している存在だ。それが公になっただけのことだから何も問題はないよ。それに」

テラスがルミアを守るように抱き寄せる。

「こんなふざけたことでルミアを死なせるぐらいなら、僕は喜んで世界を敵にするよ」

はつきりとそう告げた。

「いたぞ—— ツ!? あそこだ—— ツ!?」

突如、新たな第三者の怒声が響き渡った。

見れば向こうから、新手の衛士がこちらに向かって駆け寄って来ていたのを見て、テラスは頭を掻く。

「殺してもいいけど、ルミアの前ぐらいは控えようか」

ばさつと翼を広げてルミアを抱きかかえるとテラスは空を飛んで逃走を決断する。

「追え! 逆族を逃がすな—— ツ!」

## ゲイル・ブリット

ルミアを狙う王室親衛隊から逃れたテラスはルミアを抱えて人気がない路地裏へ降りる。

「よつと」

地面に着地、ルミアを下すもその顔は怒っていた。

「どうしてこんなことするの!? このままじゃテラス君まで殺されちゃう!？」

「いや、僕は死なないけど?」

「馬鹿!・ そう言う問題じゃないの!? 私なんかの為にあんなことをして……………ッ!」

容赦も躊躇いもなく、王室親衛隊を殺そうとした。

いや、ルミアが止めに入らなければ殺していただろう。だけど、それはいい。

問題はこのままでは自分のせいでテラスまで巻き込んでしまう。

「私は……………私は……………」

「ル、ルミア……………?」

気が付けばルミアは涙を流していた。

いつかはこんな日が来るだろうと覚悟していた。

元々、三年前に死ぬはずだった。自分という存在が公になれば国内外に要らぬ混乱をもたらす猛毒だと自覚しているからだ。

しかし、アリシアが無理をして生かしてくれた。

死ななければならぬ自分が今日まで生きることができた——  
—それは幸運だ。

だが、いつかは事情が変わり、やむ得ず自分を処断することを決意する日が来る……………いつも心のどこかでそんな覚悟をしていた。

仕方がないこと。だと理解している。

三年前に死ぬはずだった自分が今、死ぬ。それだけの話だ。

それでも死ぬのは怖かった。

覚悟はしているつもりだった。それでも死ぬのは嫌だった。

それなのに……………この男は世界よりも自分ルミアを選んだことがどう

しようもないぐらいに嬉しかった。

「死にたくない……………死にたくないよ……………」

幼い子供のように彼の胸で嗚咽も漏らし、涙する少女。

自分の問題に彼を巻き込ませてしまい、これは我儘だということもわかつている。

それでも自分の正直なこの気持ちを彼に漏らすにはいられなかった。

「了解。任せて」

彼は涙を流す少女の頭を優しく撫でた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おツツ!!」

瞬間。空から絶叫と共に二人の男女が飛び降りてきた。

「先生……………それにセラ姉さんも……………」

「テラス君!? こんなところでなにしてるの!? 早く戻らないと……………どうしたの?」

「おお、セラ……………お前、俺を殺す気か……………?」

ルミアの表情から尋常じやない何かに察したセラの隣でグレンは顔を青ざめていた。

「ああ……………? なんかあったのか……………?」

「はい、実は——」

テラスは信用できる二人の先ほどの王室親衛隊がルミアを殺害しようとしていたことを告げて事情を説明する。

すると、二人は顎に手を当てて首を傾げる。

「王室親衛隊ついたら女王陛下に忠義厚いやつばかりだ……………それがどうなってルミアを殺すことになる……………?」

「それよりも、よくここがわかりましたね」

「ああ、お前がルミアを抱えて飛んでいるのが見えてな。偶然会ったセラに頼んでお前の後を追った」

「ああ、【ラピッド・ストリーム】」

黒魔【ラピッド・ストリーム】。

激流を身に纏い、機動力を爆発的に向上させる魔術。

セラがもつとも得意としているこの魔術を使えばテラス達を追跡することも容易だ。

ついでに吸血鬼として身体能力も人間離れしているセラなら同じ魔術を使用してもその機動力に勝てる者はいないだろう。

「……………色々面倒なことが起きてはいるが。テラス、お前はすぐに戻れ。お前が出場しねえと勝てる競技も勝てねえだろう？ ルミアのことは俺達がなんとかする」

「わかりました、ルミアをお願いします」

二人にルミアを任せて、テラスはすぐに競技場に戻ろうとする。

「テラス君……………」

テラスの袖をルミアは抓んで、その顔は何か言いたくても言えない。そんな顔だった。

「競技祭にも勝って、ルミアも助ける。だからちよつと我慢してて？」

ルミアの頭にそつと手を置いて告げると、テラスは「ラピッド・ストリーム」を起動させ、この場を離れて競技場に戻る。

「遅い！ いったいどこをほつつき歩いていたの!？」

「ごめん、ちよつと色々あってね」

戻るすぐにシステイーナからの叱責を頂戴してしまったテラスは申し訳なきように謝罪を述べる。

「ほら、すぐに行って！ 本当にギリギリで皆心配したんだから！」

システイーナに背中を押されてフィールドに姿を見せると、選手が全員揃ったことにより、実況のアースが声を張り上げる。

『さあ、やってきました「乱闘戦」！ 今回注目する選手はやはり二組——ツ！ テラスⅡヴァンパイア!! 学院では既に講師を上回る彼の实力は計り知れず、つーか、本当に生徒か!? 講師として派遣されているんじゃないのか!？』

実況から妙な自己紹介を受け流しながら他のクラスの代表選手から鋭い眼差しを貰う。

それから種目『乱闘戦』のルール説明が流れ、実況が競技開始を告

げる。

『それでは「乱闘戦」を始めてください!!』

「《雷精の紫電よ》!」

「《大いなる風よ》!」

「《白き冬の嵐よ》!」

開始と同時に二組のテラスを除く全クラスがテラスに向けて一斉に呪文を唱えた。

電撃、突風、冷気が一度にテラスに向かって放たれた。

「手を組むのはいいのだけど、狙いがバレバレだよ?」

空からその声が届き、生徒達は顔を上げるとそこにはテラスがいた。た。

生徒達の狙いを見抜いていたテラスは黒魔「グラビティ・コントロール」の重力操作で重力を弱め、空に跳ぶことで回避した。

それに気付いた生徒達は空にいるテラスに向けて手を伸ばし、呪文を紡ごうとしたが

「遅い」

手を銃の形にして予唱呪文の「ショック・ボルト」を時間差起動。瞬間に代表選手の生徒達に的中させる。

彼が再び地面に着地した時には立っている生徒はテラスだけだった。

『き、決まった—— ツ! 圧勝! 文句なしの圧勝だ! やはりテラス君に勝てる生徒はいなかった!? 本当になんで生徒なんてしてるんだ!? もう講師になっちまえ! 二組のテラス君の勝利だ—— ツ!!』

熱が入っている実況の声に歓声が巻き上がる中でテラスはクラスメイト達がいるところに戻る。

「流石ね」

「まあね」

二人は笑みを浮かばせながらハイタッチする。

「決闘。任せたよ」

「誰に言ってるのよ?」

勝利を果たしたテラスはシステイーナに残りを託す。  
すると――。

「お前達が二組の連中だな？」

「そ、そうですけど……………あ、貴方達は一体……………？」

不意にテラス達の前に姿を現したのは見覚えのない男女だ。

長髪、鷹のように鋭い目つきの青年と、感情と表情の死滅した人形のような少女。

「俺は、グレン＝レーダスの昔の友人、アルベルト。同じくこの女はリリエルだ」

「……………」

システイーナの問いにアルベルトと名乗る青年が答え、リリエルと呼ばれた少女は無言で微かに頭の角度を下げた。

「唐突で戸惑うと思うが、あの男は今しばらく手が離せないらしい。ゆえに俺はこのクラスのことをグレンに頼まれた。が、指揮はテラスに任せると言っていた。そして――優勝してくれ。あの男からの頼みだ」

「優勝してくれって……………なんで？」

システイーナはもちろん二組の生徒が戸惑いを隠せない。

グレンの旧友と名乗るこの男はなんだろうか？ どう判断すればいいのかわからなかった。

「わかりました、アルベルトさん。指揮は任せてください」

そんな中でテラスが真っ先に口を開いてアルベルトの言葉に頷いた。

「テ、テラス。いいの……………？ そんな簡単に決めて……………」

戸惑いを隠せないシステイーナの手をアルベルトの隣にいた小柄な少女が、その手を取った。

「……………お願い。信じて」

システイーナは互いの吐息も感じられる距離で、その少女の瞳を深く覗き込んで、テラスに視線を向けると静かに頷いた。

「……………わかったわ。テラス、指揮は任せるわよ！」

「了解」



手を上げて了承するテラスにシステイナは今度はクラスメイト達に告げる。

「グレン先生が今、どこで何をやっているのか知らないけど………せっかく皆で勝とう！ テラスや先生のおかげで皆、ここまで来れたのよ!？」

「それに考えてみてよ？ あのグレン先生が自分がいなくても僕達が負けたらきつと『ぎやははは！ お前らって俺がついてないと全然ダメダメなんだなあ！ あっ、ゴメンねえ、キミ達い、途中でボク抜けちやつて、てへぺろっ!』って言うよ?」

「ご丁寧にグレンの声真似してまで焚きつけたその言葉にクラスメイト達の心に火がついた。

「う、うざいですわ………それは、とてつもなくうざいですわ……」  
「あのバカ講師に、んなこと言われるのだけは我慢ならないな……」  
「ああ、もう、くそ！ 考えただけは腹が立つ！ わかったよ、やってやるよ!」

「皆その意気だ。それに流れはこちらに向いている。ここはグレン先生に一泡吹かせてあげよう」

『おおっ!!』

闘志に燃える二組。テラスはリエルに視線を向けて小さく笑みを見せた。

勢いを上げる二組。テラスの指示、時折のアルベルトの助言も受けながらも二組は次々に得点を重ねていき、最後の『決闘戦』に託された。

システイナ、ギイブル、カツシュ。『決闘戦』に出場している二組の代表選手の三人はトーナメントに勝ち続け、最後の一組との決勝まで勝ち残った。

「大丈夫。システイナ達を信じて」

隣にいる少女——リエルに安心させるように声をかける。

決勝戦の最後の戦いで優勝が決まるその大勝負、その命運を託されたシステイーナは気合を入れ、掌と拳を合わせる。

「システイーナ」

「何も言わなくていいわ。勝ってくるわよ」

助言など不要とばかりにシステイーナは決闘場に立ち、大将戦が始まる。

一組のハインケル。システイーナに負け劣らずの優秀な生徒であり、常に学年主席の座を争っている強敵で、勝率は五分五分。

だが――

先の事件で本物の魔術戦を目の当たりにしたシステイーナに一日の長があった。

しかし、それだけではない。

（負けるわけにはいかないのよ………ッ！）

熱い魔術戦よりもシステイーナの心は燃えていた。

それはテラスにある。

同じ歳で、同じ学士でありながら先の事件でテラスは敵を倒し、親友であるルミアを守った。

それが酷く悔しくて、弱い自分が許せなかった。

今のままではテラスの足元にも及ばない。だけど、ここで諦めるわけにはいかない。

強くなりたい。大切な家族<sup>ルミア</sup>を守る為にもシステイーナは挫けるわけにはいかなかった。

（テラスのように………強く………ッ！）

システイーナはマナ・バイオリズムを整えてルーンが引き起こす深層意識の変革を魔術文法と魔術公式を使って頭の中で演算していく。

（少し癪だけど、貴方の力を信じるわ）

以前、テラスの家に訪れたときにテラスが長々と話した魔術の呪文改変。そして、テラスが先の事件に見せた風の魔術をシステイーナは自己流にアレンジした。

「《集え大気・大いなる風・撃ち果たせ》！」

呪文を完成させると大気の塊が、ハインケルに襲いかかる。

「う、うわああああああ——ッ！」

風の塊が弾丸のような速度で放たれ、ハインケルの【エア・スクリーン】を容易に突破して場外にまで弾き飛ばした。

……………

一瞬の静寂。そして——。

『き、決まった——ッ!? 場外だああああああああ——ッ!? 二組

が、あの二組が優勝だああああああ——ッ!』

次の瞬間、会場は総立ちで拍手と大歓声を送っていた。

「はあ——はあ——か、勝った……………」

辛うじて勝利を拾ったものの、その激しい消耗と疲労から、システイーナはぐったりと脱力して、その場に片膝をついた。

「やったああああああ——ッ！」

「よっしゃああああああああ——ッ!」

「え!? その、きやあッ!」

二組の生徒達が観客席から飛び出し、次々システイーナのもとに駆け付けてシステイーナを胴上げする。その光景を眺めているテラスは目を見開いていた。

「うそ……………? システイーナ凄いな……………」

最後にシステイーナが放ったのは呪文改変による風の魔術、黒魔【ゲイル・ブロウ】だ。

威力は軍用魔術の【ブラスト・ブロウ】よりも劣るも通常の【ゲイル・ブロウ】を上回る威力があった。

名付けるなら黒魔改【ゲイル・ブリット】。

だが、なによりも驚くのはシステイーナはそれをこの場で即興改変を行なった事だ。

天性の素質はあるとは思っていたし、風の魔術との相性はいいとも思っていた。いつかは呪文改変もできるようになると予測もしていたが、こうも簡単にやっつてのけるのは予想外だった。

「いずれ、風の魔術限定で戦えば負けるかも……………」

うかうかしてられないな、と呟きながらテラスはこの後の事に備える。

温かさ

——魔術競技祭閉会式は肅々と進んだ。

競技場に学院の生徒達が整列し、開式の言葉から始まり、国歌斉唱、来賓の祝辞、結果発表……………つつがなく、なんの滞りもなくその行程を消化していく。

そして、いよいよアリシアが表彰台に立った。その背後に王室親衛隊の総隊長のゼーロスと学院が誇る第七階梯セブテンデのセリカが控えている。『それでは、今大会で顕著な成績を収めたクラスに、これから女王陛下が勲章を下賜されます。二組の代表者は前へお願いします。生徒一同、盛大な拍手を』

(そろそろだね……………)

拍手が上がるなかでテラスは消えるようにその場から姿を消した。まだ収まらない興奮と女王陛下の存在に誰もがテラスが消えたことに気付かない。

拍手が疎らになっていき、次第にざわざわと会場が沸き立て始める。

「……………あら？ 貴方達は……………？」

表彰台に立ったアリシアは、生徒達の間縫って自分の前に現れたその人物達を、目を瞬かせながら見つめていた。

現れたのはグレンではない。しかし、アリシアが見知っている男女である。

「アルベルト……………？ それに、リエル……………？」

「……………来たか」

戸惑うアリシアをよそに、セリカはぼつりとそんなことを漏らしていた。

「……………陛下。そやつが二組の担当講師グレンIIリーダーダスとやらなのですか？」

「いえ、違います……………けど」

と、その時だった。

「なあ、そこのおっさん」

敵めしい面構えのアルベルトが突然、似合わないくらいくだけた口調で言い放った。

「いい加減、馬鹿騒ぎも終いにしようぜ」

「なん、だと……………ッ!？」

そして、アルベルトらしき男が、ぼそりと呪文を唱える。

すると、男女の周囲が一瞬ぐにやりと歪んで――

再び焦点が結合し、そこに現れたのは――

「き、貴様らは――ッ!？」

グレンとルミアだった。

突然現れたグレンとルミアにゼーロスはまだ狼狽するしかなかった。

「馬鹿な!?! ルミア殿、貴女は今、魔術講師と学生と共に町中にいるはず――」

「俺の仲間と途中ですり替わったんだよ。【セルフ・イリュージョン】でな。こんな単純な手に引つかかるなんてお前、もうちよつと部下の教育した方がいいんじゃないの?」

「くっ!・ 親衛隊ツ!・ 何をしている!?! 賊共を捕えろツ!」

ゼーロスがアリシアを背に庇いながら指示を飛ばすと、会場を警邏していた衛士達が生きていた。

我に返って一斉に抜剣、グレンとルミアの二人を取り押さえようと殺到する。

その瞬間。

ゼーロスの足場から炎が渦巻き、帯状になってうねり、瞬時にゼーロスに絡み付き、縛り付ける。

「動かないでください」

「なっ!?! いつの間に……………ッ!」

「ナイスだ! テラス! セリカ、頼む!」

ゼーロスの横からゆらりと姿を現したテラスにグレンは親指を立てると、無数の光の線が猛速度で地面に走り、表彰台を中心に結界が瞬時に構築され、そびえ立つ光の障壁が結界内と外界を切り離す。

「ほう? 音も遮蔽する断絶結界か。随分と気が利くな、セリカ」

グレンの賛辞に、セリカはにやりと笑った。

「つーか、テラス。お前、どっから湧いてきたんだ？」

「吸血鬼の力を甘くみないでください」

吸血鬼の能力『霧化』

身体を霧のように姿を変える吸血鬼の能力で姿を晦まし、黒魔【フレイム・バインド】でゼーロスを拘束する。

身を焼き焦がす苦痛はそのままに、肉体そのものにはまったく負傷<sup>ダメージ</sup>を与えず、火傷の一つもなく敵を拘束・無力化する拷問用の術。

「馬鹿な！ わしの装備には【トライ・レジスト】が付<sup>エンチャント</sup>呪われているはずだ……………ッ！」

「それなら先に【ディスプレイ・フォース】で付<sup>エンチャント</sup>呪を中和させましたから。これで貴方にも魔術は通りますよね？」

容易に言うが、強固な【トライ・レジスト】が付<sup>エンチャント</sup>呪されている装備を【ディスプレイ・フォース】するには対象物に存在する魔力量に比例する。

それを容易に中和し、尚且つ拘束するなど並大抵の魔術師ではできない芸当だ。

「セリカ殿……………貴様、この期におよんで裏切るのか!？」

結界と炎の拘束を忌々しそうに睨むゼーロスだが、セリカは飄々とした表情で沈黙を守る。

「ぬううううううううううううッ!!」

「無駄ですよ。残りの魔力の殆どを使って拘束しているんです。呪文を唱えようとしてもすぐに口を塞いで防ぎます」

炎の拘束から抜け出そうともがくが、テラスの拘束魔術はびくりともしない。

それでもテラスには余裕がない。

(なんなの、この人……………?)

正直、人間なのか疑いたくなるほど素の力が強い。

本気で拘束していなかったら危なかったのはこちらだった。

「お、おのれ……………逆族共め……………ッ！」

ゼーロスは睨み付けるような目つきでテラスを見る。

「頼む……………ッ！　ことが終われば、わしが全ての責任を負って自害する！　わしが陛下に仇をなした反逆者としての汚名の下に果てよう！　だが、陛下は！　陛下だけは我々がお守りしなければならぬのだ！　その為にもルミア殿を——ッ！」

「……………なるほど、ルミアを殺さないで女王陛下の命が危ないということですな？」

全ての責任を取ろうとしているゼーロスの真意ある言葉に頷き、アリシアに視線を向ける。

「女王陛下。僭越ながら上申させて貰います。先程の王室親衛隊の総隊長殿の言葉は誠でしょうか？　ご自身の命を守る為にルミアを殺そうとするその理由をぜひともお聞かせください」

告げるテラスの言葉にグレンとルミアもアリシアに視線を向ける。  
「……………私はこの国にはなくてはならない存在。そこにために他のあらゆる者を犠牲にしなければなりません」

その言葉にグレンとルミアが固まる。

「ゼーロスを解放し、彼と共にその娘を……………ルミア＝ティンジェルを、討ち果たしなさい。これは女王である私からの命令です」

「……………ッ!？」

ルミアは青ざめる。

それに構わず、アリシアは冷酷な氷のような表情で淡々と続ける。

「その娘は、私にとって存在してはならない者です」

「ちよ……………陛下、何を言って……………?」

「いなければ良かった。愛したことなど一度もなかった。どうして、その子がこの世に存在してしまっているのか……………我が身の過ち、悔やむに悔やみきれません」

「そ、そんな……………」

そんな母親の言葉に、流石のルミアも耐えきれなかった。

「まさか……………ほ、本当にそう思っていたの？　それが、あなたの本音だったの……………?　あの優しさは……………?　あのぬくもりは……………?」

がたがたと肩を震わせ、後ずさりしながら、それでも縋るように問



う。

「ええ、全部、嘘です。政務に疲れた時、気分転換に興じた戯れですよ？　だから、私の為に死になさい」

突きつけられる残酷な言葉に、がくり、とルミアはうな垂れて涙を浮かべる。

「い、いや、ちよつと待ってくれよ、陛下！　なんでそんな心にもないことを……………」

焦燥に身を焦がすグレン。

「……………そうですか」

淡々とアリシアの言葉を耳に傾けたテラスは爪を伸ばす。

「なら、僕はルミアの為に女王陛下、貴女を殺します」

ゼーロスを拘束したまま、吸血鬼の身体能力でアリシアの首を跳ね飛ばそうと凶爪を振るうテラスだが、その前にセリカが立ちはだかる。

「止めろ！　アリス——女王陛下を殺せばこの国がどうなるかわからないのかッ!？」

「怪物の僕にこの国の問題など関係も興味もありませんよ？　アルフォネア教授。どいてください、ルミアの為に女王陛下を殺しますの  
で」

「それを止めろと言っているんだ!？」 《馬鹿野郎》!!」

紅蓮の炎の衝撃が渦巻き、爆音が結界内に響く。

「グレン！　早くこの状況を打破しろ！　それができるのはお前だけだ!!　というよりも！　なんなんだ、こいつは!?!　後で色々聞くから覚悟しろ!」

愚痴を飛ばしながらもアリシアを守るように魔術で応戦するセリカにテラスは吸血鬼の力を使ってアリシアを殺そうと動く。

「馬鹿野郎、テラス！　そんなことしてルミアが喜ぶかよ!？」

「でしたら、グレン先生がどうかしてください」

「チッ!」

指を鳴らし、視界までも断絶する。これで外界から中の様子はわからない。

「《いい加減・大人しく・してろ》！」

放たれる冷気がテラスの足を凍結させて動きを封じるが、テラスは自ら足を爪で切断して逃れると瞬く間に足が元に戻る。

「異能者だったか!? いや、違う!? お前はなんだ!？」

「ただの怪物。吸血鬼です」

「ああ、そうか。ふざけているのはよくわかった……………」

テラスの返答に額に青筋を浮かべるセリカだが、正直に答えたテラスは心外だった。

(本当の事を言ったのに……………)

「だが、今は大人しくしてろ。後はグレンに任せておけばどちらも殺さずに済む」

「……………本当ですか?」

「ああ。グレンを信じろ」

「……………わかりました」

セリカの説得に動きを止める。大人しくなったテラスに一息するセリカはグレンの方に視線を傾ける。

グレンがアリシアに近づくと、不意にアリシアは身に付けている翠緑の宝玉のネックレスを放り投げた。

「陛下、なんてことを——ッ!？」

絶望に歪んだ表情で囚われのゼロスは叫ぶ。

「私は大丈夫ですよ、ゼロロス」

「な……………」

鬼気迫る表情のゼロロスだったが、アリシアが朗らかにただすむ様を見て取ると、茫然と言葉を失った。

「……………どういふことですか?」

怪訝するテラスにグレンが答えた。

「条件起動式……………条件起動型の呪い<sup>カース</sup>だ。そのネックレスは呪殺具だったんだよ」

「……………そういうことだったんですね。ですが、どうして呪いが……………?」

「俺の得意技だ」

グレンがポケットから取り出したのは古めかしいアルカナ、愚者のカード。

「こいつは俺の魔導器。愚者の絵柄に変換した術式を読み取ること  
で、俺は一定効果領域内における魔術の起動を完全封殺できる。呪い<sup>カース</sup>  
も魔術に変わりない。俺の固有魔術<sup>オリジナル</sup>【愚者の世界】の影響下じや条件  
満たしても起動できねーってことさ。まあ、それは置いといて」

グレンはズガズガとテラスの近づいて拳骨を入れる。

「お前はいつからそんなに短絡的になった!? 魔術のことしか頭にな  
いのか、この魔術馬鹿! 女王陛下を殺すなんて、どう考えてもルミ  
アが悲しむことに気付かなかったのか!？」

「……………それは」

「グレン、その子を責めないであげてください。そのように頼んだの  
は私なのですから」

二人の間に割って入るようにアリシアが口を開いた。

「その子には何においてもルミアを守ってあげて欲しい。そう私から  
頼み、実行してくれました」

「じよ、女王陛下が!?! いつ……………!?!」

「女王陛下を先生とルミアのところにお連れしたときにですよ。その  
ようなことを言われなくてもルミアは守りますけど」

テラスはただ女王陛下とルミアを天秤にかけてルミアを選んだだ  
けだ。

どちらかが死ななければならぬのならテラスはルミアを生かす  
方を選んだ。

しかし、二人とも死なずに済むのならそれにこしたことはない。

「それよりも、事後処理どうします?」

「お前は先にゼーロスのおっさんを解放しろ」

今も炎の拘束に囚われているゼーロスのことを完全に忘れていた。

結論から言えば、騒ぎは大事なく収まった。

ゼーロスの投降宣言、アリシアの巧みの話術によって何もかも綺麗に丸く収まった。

事件の中心人物であるテラス達は事情聴取や勲章授与式などの日程調整などで時間が経ち、夜の帳に包まれたフェジテの町でテラスは二組の優勝の打ち上げには足を運ばずに夜の町を一人で歩いていた。「……………」

呆然とした眼差しで夜空を眺める。

吸血鬼にとつては昼よりも夜の方が調子がいい。夜風が心地よく感じる。

「テラス君！ やつと見つけた！」

「ルミア……………打ち上げには行かなくていいの？ システイーナが待っていると思うよ？」

「もう、それを言うならテラス君もだよ！ 競技祭の功労者がいないと盛り上がらないよ？」

「僕は大了したことはしていないよ。皆の努力のおかげだ」

駆け付けてきたルミアは頬に薄っすらと汗が出ている。

自分を見つけるためにかなり探し回ったのが、見てわかる。

「謙遜だな……………もう少し自分の事を褒めてもいいんだよ？」

「褒められるまでもないよ。それよりも女王陛下と話はできたの？」

「……………うん、あの後、お母さんと色々話せたよ」

事件後にルミアは母親であるアリシアと言葉を交わしていた。

「言いたかった事も不満も全部……………そしたら、何だかすつきりしちゃって。どうしてあんな意地を張っていたんだろう……………私って馬鹿だよな」

「そういうものだよ、人間は」

「……………どうか、したの？」

いつもよりもどこか、素っ気ない態度を見せるテラスにルミアは心配そうに顔を覗き込む。

「……………母親のことについて思い出していた」

「それって、テラス君の……………？」

「うん。ルミアのお母さん、女王陛下とルミアを見て思ったんだ。これが人間同士の親子関係なんだなって。僕と母さんとはああはならなかったから」

「仲が、悪かったの……………?」

「いや、腫物を扱うように僕と碌に関わろうともしなかったよ。家族で食事なんて物心ついたときからしてこなかったからね」

「淡々と昔、人間だった頃の記憶を思い出しながら家族のことについて話した。」

「特に寂しいとか、不満を持ったことはない。それが僕の家族にとっての当たり前だったから、文句一つ言わずにそれを受けれた。両親も教育費としてか、お金だけはくれたからそれで自分で料理して食べた。母さんの手料理とか食べた覚えがない」

「辛くはなかったの……………?」

「うん。僕はそれが辛いとか、寂しいとは思えなかった。思い返せば僕は産まれた時から他の人とは違う存在だったんだろうね。二人を見て、僕は周囲の人達の気持ちが少しはわかった気がする。特に母さんが僕に『近づかないで!』と手を叩いたことにも」

それは本当に偶然だった。

母親が台所で包丁で指を切って血を流しているのを見て、救急箱を持って治療しようと近づいた時に怯えた顔で、声で手を伸ばした彼の手を叩いた。

自分は他人とは違う異質な存在。

だから、■■■■だった頃の彼は怪物と呼ばれたんだ。

何が、なのかわからない。けど、その何が原因は紛れもない自分自身にある。

「吸血鬼にもなって僕ははつきりと自覚したよ。僕は身も心も誰もが恐れられる怪物だったんだって。その素質を持って産まれたきたことにも」

今になれば身も心も混じりもない怪物となったのはこれが本当の姿だからだ。

邪神がテラスを怪物にしたのではない。

元々が怪物だったんだ。邪神をそれを後押ししたに過ぎない。

「私はテラス君のことが怖くないよっ。」

ルミアは両手でテラスの手を包むように取る。

「例えばテラス君が怪物でも私は恐れたりはしない。だって、この手は何度も私を守ってくれたから」

「ルミア……………」

彼女は知っているはずだ。

その手に持つ爪が人の肉を裂き、人の命を奪おうとした凶器だということを。

それでも、その手を穢れがない綺麗な手で握ってくれた。

「私だけじゃない。今回の競技祭だって皆の為にハーレイ先生と決闘してくれて、皆が一丸となつて優勝を目指すためにも色々考えてくれた。優しいテラス君を怖がる理由があるのかな？」

「……………それでも僕は人間じゃない。今のこの姿が僕自身に相応しい姿なんだよ」

ばさり、と人間ではない証を現すテラス。

そう、この姿こそが“怪物”と呼ばれた■■■■の本当の姿だ。

“怪物”は世に嫌われるのが常だ。これまでもそうだった」

「でも、これからも同じとは限らないよ？」

距離を縮ませ、ルミアはテラスに体重を預けるように抱き着いた。

「私がテラス君を一人にはしめない。だから、少しでいいの……………私を頼って」

そんなことを言われたのは初めてだ。

これまで、セラと出会うまでは一人で生きてきた。

それが彼にとつての当たり前で、当然の事だった。

誰かに頼られたことも、頼ったこともない。ましてはそんなことを口にする人など目の前のルミアを除いて誰もいなかった。

（どうしてルミアはそんなことを言ってくれるのだろうか……………？）

それがわからない。

どうして彼女はこんなにも“怪物”である自分に優しくしてくれ

るのだろうか？

身体に伝わるルミアの温もりはとても温かく感じる。

「ルミアは温かいね……」

「夜の外は寒いもんね」

“怪物”である彼に彼女はいつもと変わらない優しい微笑みを見せてくれた。

## 授業参観

魔術競技祭が終わっていつもの学院生活に戻ってから数日。

『えええええ——っ!!』

二組の生徒が絶叫を上げていた。

「マジかよ、先生ー!!」

「数日前に競技祭がおわったばかりなのに、そんな事……」

それが嘘であつてほしいと叫ぶ者。

頭を抱える者。

嫌そうに呻く者。

それぞれの反応を示す中でグレンは面倒くさそうに頬杖しながらもう一度クラス全員に告げる。

「そう嫌そうな顔すんなよ、俺だつて嫌なんだよオ。っつーワケで明日の午後はお前らの親御さん達を招いて授業参観をします。やんねーと給料カットなんだと」

クラス全員のそれぞれの親御が自分の子供達の授業風景を見学にくる。

全員はそれを嘆いているのだ。

羞恥心を感じないと言えば嘘になる。

「あー何で俺がんな教師みてーな事しなきゃなんねーんだ……」

『教師だろ!!』

生徒一同でグレンに突っ込みを入れる。

「あーなんか熱っぽくなってきた。ワリイ、俺、明日休むわ。っーわけでテラス、任せた」

「いや、任せたじゃないでしょう……」

サボろうとするグレンにテラスは呆れながら突っ込む。

(にしても、授業参観か……)

思い出す過去の記憶。

両親は一度たりとも自分の授業を見に来たことなどはなかった。



「もちろん明日は行くよー！」

住処に帰って明日の授業参観のことをセラに話すと乗り気だった。

「一度テラス君の授業姿を見てみたかったからね。明日は絶対に行くから」

「……………いや、無理しなくてもいいよ？ 来なくても大丈夫だから」

それは遠慮ではなく、ただ単に慣れているからだ。

一人でいることに。

「また、そんな寂しいことを言つてえ〜ツ！」

頬を膨らませて怒るセラはとても不満そうに見えた。

「私達は家族だよ？ テラス君がどんな風に学院で生活しているか見てみたいよ」

「……………そんなものなのかな？」

「そんなものだよ」

首を傾げるテラスの疑問を頷いて肯定する。

いつもの教室。その後方では親御さん達が小声で談話しながらこれから始まる授業を待っていた。

その中にはシステイーナの両親であるレナードⅡフィーベルとその妻フィリアナⅡフィーベルも噂で聞いたグレンⅡレーダスの授業を待っている。

しかし、レナードは大の親馬鹿。

娘であるシステイーナとルミアに相応しい講師かどうかを自らの目で見定めようと厳しい眼差しを向けている。

その近くではセラが目を丸くして何が起きているのかわからずに首を傾げ、席に座っているシステイーナやルミアははらはらと落ち着きのない様子を見せる。

親子揃って集うその視線の先は――

「ようこそ保護者の皆さん。僕がこのクラスの担当講師グレンⅡレーダスです。どうかお見知りおきを」

そこには正講師用のローブを身に付けたテラスが引きつった笑みを見せながら挨拶をした。

(なんで、こんなことに……………?)

心の中で静かに嘆いた。

それは数時間前の事。

グレンが午前の授業中で突然倒れたことが始まりだった。

「先生ッ!」

突然倒れたグレンに駆け寄るシステイナ達。少し遅れてテラスも駆け寄る。

額に手を当て、脈を計り、触診をする。

「テラス!? 早く法医呪文を!」

悲痛の声を上げるシステイナ。その隣ではルミアは心配と不安の表情を募らせる。

「……………先生、まともな食事を取ったのはいつですか?」

「え……………?」

「あー、いつだったっけ……………?」

辛うじて口を開いたグレン。その腹部からは腹の虫が盛大になった。

「ど、どういうこと……………?」

「皮膚はボロボロ、白目には黄疸が出てる。典型的な栄養失調の症状。……………そういえば魔術競技祭の時からやつれていると思ったら」

やや呆れるように溜息を吐いた。

「今すぐ医務室に連れて行って点滴でもすれば問題はないよ。もしくは何か栄養があるものを食べさせて少し休ませたらすぐに回復する」

「よ、よかった…………」

テラスの診察に安堵する生徒達。

男子生徒がグレンを担いで医務室に連れていくとシステイナはあることを思い出した。

「ど、どうしよう……………!? 先生がいないと午後の授業が……………ッ!」

「落ち着いて、システイ!」

慌てふためくシステイーナを落ち着かせようとするルミアだが、グレンが倒れた問題は大きい。

午後からは授業参観。それもグレンのクビがかかった重要な授業になる。

それなのにその本人が倒れてしまったらほぼ間違いなくグレンのクビが飛ぶ。

「もう他の先生に頼むしかないだろうね」

「無理よ！ 他のクラスも私達と同じように親御さんが来るのだからこちらに手を回せる余裕なんてないわ！ ああもう、なんて時に倒れるのよ!？」

他の講師も二組に回って授業をするほどの余裕はない。

このままでは間違いなく、グレンはこの学院から追い出されてしまう。

「せめて、せめて……………代理か、臨時講師の人がいれば……………ん？」

「そんな、そんな都合のいい人なんていない……………よ？」

「代理か、講師と同じぐらいの授業ができる人を今から探すとしても……………ん？」

どうにかしようと案を練っているテラスは不意に気付いた。

クラス全員の視線が自分に向けられていることに。

「……………うん、ちよつと待とうか」

何を言いたいのか、何をさせようと考えているのかを察したテラスは全員に制止の言葉を送る。

「……………この際、背に腹は代えられないわ」

「いや……………」

「幸い先生は他の先生方よりも若いし、うん、何とかなりそう！」

「ちよつと、待って」

「ルミア、先生のローブをお願い」

「お願いだから」

「テラス、貴方だけが頼りよ」

「僕の話を」

「大丈夫、貴方ならきつとできるわ」

「聞いてよ……」

有無も言わずにここにグレン＝レーダスの代理講師が決まった。  
(何をしているの………ッ！ テラス君!?)

他の親御さん達の中でセラは頬に冷汗を流しながら内心荒れていた。

授業を見に来たはずが、どういうわけか講師の恰好をして教壇に立っている。

驚くのも無理はない。

「ほう……あれがこのクラスの………」

「随分とお若い。娘達と歳も変わらないように見えますなあ」

「それに堂々としておりまする」

親御さん達の声がテラスの心を突き刺す。

「ふん……奴がグレンか………」

「中々立派そうな人じゃないですか」

グレンの身代わりとなっているテラスを見定めるような目つきで睨む。

それに気付いているテラスは内心でため息を吐いて、システイーナ達を睨む。

二人は手でごめんと謝っていた。

二人の事情は把握している。だけど、まさか講師をさせられるのは些か納得は出来ない。

色々と言いたいことはあるが、グレンのクビを阻止したい二人には同意する。

「それでは授業を始めます」

グレンのクビを阻止する為にも手抜きはしない。

「………という様に三属呪文は根本的には同じものなのです。  
ご理解頂けましたでしょうか？」

授業が進む、親御さん達の方からは感心の声が出てくる。

学士とはいえ、テラスの魔術に関する造詣は深い。

これぐらいは朝飯前とまでは言えないが、これぐらいならまだなんとでもなる。

「いやあしかし本当に見事なものだ」

「本当にね!! 私達まで勉強になるわ」

親御さん達の声を聞いてセラも嬉しそうに頷く。

だが、面白くないと思う人も中にはいた。

「先生、質問があります」

システイーナの父親であるレナードが挙手してテラスに質問した。

「グレン先生は今、三属呪文が根本的に同じものと言ったが、今の説明では導力ベクトルは根源素中の電素エトロンの振動方向と流動方向の二つしかないぞ? どうやってその二つで三属の呪文を構成するのだ?」

露骨過ぎるほどの質問にテラスは表情を変えずに説明を続ける。

「三番目のベクトルは実は電素エトロンの振動現象の停滞する方向なのです。つまり、電素の振動運動には振動加速方向と振動停滞方向の二つがあり、これがそれぞれ炎熱と冷気の二属エネルギーとなるのです」

「む……………」

説明をするテラスにしぶしぶ引き下がる。

「ち…………。知っていたか若造め…………」

引き下がるレナードに安堵の息を漏らすシステイーナとルミア。

いくらテラスが魔術の造詣が深くても正式な講師ではない。下手な質問で正体がバレたらと思うと気が気ではない。

(ああいう人を親馬鹿というのか……………)

そんなことを思いながら授業が進むも、レナードにより何悶着かありつつ授業参観は進んでいった。

「では、次の『魔術戦教練』は外の競技場で行います。休み時間の間に皆様も移動をお願いします。それでは」

「ふん…………グレン||リーダーズ…………どうもあの男は気に入らん」

「まあ…………まだそんな事を言つて……………貴方もいい加減、子離れし

ないと……」

「違う!! いや、娘達の件があることは否定せんが……」

レナードは鋭い眼差しをテラスに向ける。

「先の授業で奴が優秀なのはわかった……だが、あまりにも若すぎる。本当に奴がグレンIIレーダスなのか……?」

そんな疑問を横耳で聞いたセラが心配そうにテラスを見守っていた。

(何してるの……グレン君ツ!)

後で説教しようと決めたセラは何事もなく、無事で終わることを祈る。

そんなことに気付かずにテラスは授業の説明に入る。

「本日はこの戦闘訓練用のゴーレムを相手に魔術を使った戦闘訓練を行ってみましょう」

テラスの隣には人型の人形が置かれている。

魔導人形と呼ばれているゴーレムで戦闘レベルにあつた力を発揮するように設定されている。

「今日はゴーレムの戦闘レベル2で『戦闘』そのものを経験してください。………というか、して。じゃないと………」

「こらあああ——ツ! ゴーレムを使った戦闘訓練だとおっ!? それで方が一に私の可愛いシステイナとルミアが傷物になったらどう責任取ってくれるつもりだあア——ツ!!」

「ああもう………」

「ご、ごめん………テラス」

レナードの物言いに頭が痛くなるテラスにシステイナは申し訳なきように謝る。

ここでテラスは知った。

親馬鹿ほど面倒な人種はないことを。

「ちよつと保護者の皆様に説明してきます」

「テ、先生、私達も行きます。その方がお父様も説得しやすいし………」

システイナとルミアを連れてレナードに安全を伝えるテラス。

「本当に大丈夫なんだろうな!!」

「ですから絶対にそんな事にはさせませんから」

「だから、グレン先生が何度も説明しているじゃないお父様」

「二人に万が一の事があれば私は泣くぞ!? 分かっているのか!!」

(知らないよ……………)

「うわああああああああ——っ!!」

突然の悲鳴に振り返るとゴーレムがロツドの首を掴んで持ち上げていた。

どう見てもレベル2の動きではない。恐らく勝手に設定を弄ってレベルを上げたのだろう。

「レ、レベル3の動きがこんなに速いなんてえ——っ!!」

「助けてええ——っ!!」

ゴーレムはロツドを無造作に放り投げ、地面に倒れているロツドに止めをさそうと腕を振り上げる。

「ロツド!!」

「いかん!! 《大いなる——…》」

ロツドを助けようとレナード、セラ、テラスが動こうとした瞬間。

ゴーレムの側頭部に石が直撃した。

石を投げたのは—— 医務室にいたはずのグレンだった。

「お前ら全員下がれ!! 俺が相手だツ!! このテクノボーが!!」

ゴーレムはグレンに向かって突進し、鋭い拳を振るうもグレンは紙一重で躲して、ゴーレムを一撃で沈めた。

「やった…………!!」

「おい!! だれかロツドを見てやれ!!」

ゴーレムが動かなくなったことに安堵する全員。

「だ、誰だ……………? あの男は……………?」

突然現れた男に戸惑うレナード。

「グレン先生!! 何しているんですか!? 体の方は……………!!」

「ん? ああ、んなもん腹いっぱい食ったら治ったぞ」

「グレンだと!?!」

「あ…………ツ!」

父親の叫びに我に返ったシステイナーは自分の失言に口を塞ぐ。

「それではこの男は……………ッ!?!」

「あー、もう、すみません。あちらが本物のグレン||レーダス先生です。僕はその教え子のテラス||ヴァンパイアです」

「教え子だと!?!」

もう誤魔化せれないと踏んで正体をばらすテラスにグレンが歩み寄ってくる。

「何でお前が俺のローブ着てんだよ!? 返せ!」

「元はと言えば倒れた先生が悪いんでしょうが……………」

ローブをグレンに返すとグレンは迷うもなくローブを破り、腕を折ったロッドに応急処置を施した。

「ほら、後は医務室で看てもらえ」

「あ、ありがとうございます」

「すみません先生!! うちのバカ息子のせいでケガを……………そのうえ大切なローブまで……………!!」

「あーいいんですよ。そんなモンただの服ですからどーでも。俺も少しすりむいただけですし」

「……………貴様がグレン||レーダスか……………」

グレンに歩み寄るフィーベル夫妻にグレンも思わず冷汗を流す。

「……………い、いや……………少々不足な事態がありました……………」

「やかましい!! 男が言い訳するんじゃない!! 何だ貴様!! あれが魔術師のやる事か!?!」

「待ってください! お義父様!!」

「そうよ!! 話を聞いて!!」

「教え子に授業をさせ、魔術ではなく野蛮な暴力を使い……………魔術師の誇りあるローブを破く……………全く見るにたえん行動だ……………」

弁明しようとするシステムとルミアを無視してレナードは叫ぶ。

「おかげでウチのシステイとルミアの活躍が見られなかっただろう!?!」

「……………は? そこ」

予想外の言葉に目が点となる三人。



「せっかく仲間のため、魔術でゴーレムを打ち倒すシステイを見られると思つたのに!! さっきの怪我の手当てもだ!! ルミアはヒール・スベル法医呪文はプロ顔負けなんだぞ!! フン……貴様に言つてやりたい事は山ほどあるが………」

レナードはグレンに頭を下げた。

「授業の邪魔をして申し訳ない。先生……」

態度が一変したかのように謝罪の言葉を述べた。

「システイーナはその類い稀なる才ゆえに知らず天狗になるところがある。逆にルミアは心優しさのあまり自己主張が欠け、才の成長を妨げている部分がある。二人を上手く指導してやってくれ。……………」  
話はそれだけだ」

踵を返したレナードは次にテラスに視線を向ける。

「先ほどの授業は全て先生から教わつたことなのか?」

「あ、いえ、自分で勉強しましたが……………」

戸惑いながら質問に答えるとレナードはテラスの肩に手を置いた。

「まだ将来を決めてないのならうちに来なさい。面倒を見よう」

「は、はあ……………? ありがとうございます?」

何故か内定を手に入れてしまったテラス。遠目でセラが妙に喜んでいた。

「何が、どうなつてるの……………?」

「さあ……………?」

その後、授業参観は滞りなく行われ、無事に終わった。

## 早朝と拳闘と

「……………また徹夜をしたな……………」

いつものように魔術の没頭してしまったテラスは不意に時間を見ればもうすぐ朝日が昇ろうとする時間帯だった。

吸血鬼というハイスペックな身体を持っているテラスは三日三晩ぶつ通しでも余裕なのだが、やり過ぎるたびにセラに怒られてしまう。

今日も説教かな……………？ そんなことを思い、椅子から立ち上がって背伸びをする。

「血でも吸いに行くか……………」

たまには朝の一杯。という気軽な感覚で早朝の誰かを襲い、その人の血を吸おうと住処を後にする。

相手の事も多少なりは考慮して「スリープサウンド」で眠らせ、その隙に血を啜り、後が残らない様にきちんと治療も行う。

多少貧血になるが、心身共に傷は残ることはない。

向かうはフェジテの北地区学生街の一面に敷地を構える自然公園。北地区に住まう人々が日中、森林浴と散策を楽しむ憩いの場となっている。

そこは吸血鬼であるテラスにとって絶好の狩場でもある。

セラはテラスの眷属で吸血鬼ではあるが、テラスほど強い吸血本能はなく、人の血でなくても満足できる為に普段は動物の血で補っている。

「やて……………」

テラスは公園を訪れると誰かいないか、と視線を動かして周囲を探る。

すると……………。

『……………はは、期待していたってやつか？ とんだマゾヒストだな、お前』

『ば、馬鹿！ そ、そんなんじゃないわよ……………ッ！』  
聞き覚えのある声が聞こえてきた。

声のする方に意識を集中させると、より鮮明に聞こえてくる。

『しつかし、お前も悪い奴だな、白猫。まだ嫁入り前のお前が両親に黙って、俺と毎日こんなことしているなんてな……………親御さん、知ったら泣くぞ?』

『そ、そんなこと……………だって仕方がないじゃない……………私は……………その……………』

『まあ、いい。生憎、ここなら誰もいない。誰にもはばかることなく、心置きなくできる。さっそく始めるぞ』

『……………ま、待つて……………私……………まだ、心の準備が……………ッ!』

しびれを切らしたように告げるグレンに満更でもなさそうな声を出しているシステイーナの声が聞こえてテラスは自分の耳を疑った。

(これが世に聞く、逢引というもの……………?)

孤立され、一人で生きてきたテラスにとって人間関係は疎い。

本で得た知識やセラと一緒に生活して身に付けた程度しかない。

だが、そんなテラスでもわかる。

(いつの間にあの二人がそんな関係に……………? ルミアは知っているのかな? もしくは二人だけの秘密というものなのかな……………? それにしても二人は何を……………?!?)

こんな朝早くから二人で、それも立ち並ぶ木々の間に身を隠すように二人の男女が出会うことすれば……………。

(まさか……………そうなのかな? 節操がないと言わべきか? それとも空気を読んで去るか? いや、流石に外ではと注意するべき……………いや待て、まだそうだと決まったわけじゃないし……………)

二人の事を考えるテラスは次のシステイーナの言葉で疑念が確信に変わった。

『その……………痛くしないで……………なるべき優しくして……………』  
『保証しかねるな』

決定した。

これはもう決定だ。

別にグレンとシステイーナがそういう関係になっいて、そういう

ことをする為にこの公園にいたとしてもそれを口出しするつもりはない。

講師と生徒の恋でも、二人の性癖事情にまで割り込むつもりなど微塵もない。

だが、聞いてしまった以上は進言しなければならぬ。

(流石に人目がつくかもしれない外はまずいし、せめて人払いの結界でも張るように言っておかないと)

二人の生々しい姿なんて見るつもりはないが、今言わなければきつと学院では顔が合わせづらくなる。

優しく、出来る限りオブラートに注意して、今後は控えるように言えばきつとわかってくれるはず。

テラスは二人がいる場所に歩み寄り、出来る限りの優しい表情を作って二人の前に姿を見せる。

「テ、テラス……………?」

「お前、なにしてんだ……………?」

突然姿を見せたテラスに二人は目を丸くするも、テラスは二人がまだきちんと服を身に付けていることからまだしていないことに少し安堵して二人に告げる。

「えつと、二人とも。別にそういうことをするなどは僕は言いませんが、誰が見ているのかわからないところではせめて人払いの結界を張るなりしたほうがいいですよ?」

テラスの言葉を聞いて、一瞬の空白の後で二人の顔が真っ赤に茹で上がる。

「な、なななな何言ってるのよ!? ベ、別にやましいことなんてしてないわよ!」

「そ、そうだ! 白猫の言う通りだ!! お、俺は別に何も! 白猫から言ってきたから応じたただけだつーの!!」

「わ、私のせい!! そもそもこんな場所に待ち合わせにしようって言ったのは先生の方じゃないですか!」

「馬鹿野郎! お前が誤解を招くことを言うのが悪いんだろうか!」

そんな仲のいい二人を見てテラスは優しい眼差しを向ける。

「大丈夫です、二人とも。二人の関係を邪魔するつもりはありません。ただ、少しは周りに気を遣って欲しいだけで」

「だから誤解なんだったってば!？」

「だからそんな、わかってます、みたいな優しい眼差しを俺達に向けるな!!」

「大丈夫、大丈夫ですから。ええ、勿論、わかっていますから」

「だからわかってないだろう（でしょう）!？」

テラスの誤解が解くまで数十分かかった。

「拳闘の訓練……………?」

二人の誤解が解けたテラスはグレンがシステイーナに拳闘を教えていることについて聞いた。

グレン曰く、拳闘も魔術も根っここの部分は一緒。

拳闘の練習をすれば、魔術戦の基礎が身につき、攻守の感覚が磨かれる。

拳闘が魔術戦における攻守の機を読む感覚向上に役に立つ。

「ああ、そういえば僕もセラ姉さんとよく組手をしましたね」

「ほら見ろ、白猫。テラスだって拳闘を身に付けている。この修練法は間違ってるねーだろう?」

「むう……………」

どうにも納得いかないシステイーナはむくれる。

「しかし、ちょうどいい。白猫には一度誰かと拳闘するところを見せてようと思ってたんだ。テラス、少し付き合ってくれ」

「わかりました。ルールはどうしますか?」

「あー、どっちが一撃決めたら終了で、どうだ?」

「それで構いません」

互いにある程度距離を取って構えるとグレンはテラスの構えを見て少しほくそ笑む。

（流石に似てんな……………）

教えられただけあってその構えがセラに似ていた。

「よし、いつでもいいぜ? かかってきな」

「では、いきます」

一気に距離を詰めて、右拳を構えるテラスにグレンはそれを避けよう意識を右拳に向ける。

「ッ!？」

だが、右拳はフェイント。本命である側頭部を狙った蹴撃に咄嗟に気付いたグレンはそれを躲す。

(初手からフェイントかよ……………ッ!?)

だが、そんな愚痴をこぼすのも束の間。

テラスは流れるような動きでフェイントを込めた拳と蹴りを放つ。システイーナから見ればテラスの動きはまるで踊っているように見える。

(セラから教わった拳闘をかなりアレンジしてんな……………!?!? だが)

もう慣れた。と言わんばかりに蹴撃を躲し、軸となっている足を払う。

それによつて体勢が崩れたテラスに止めをさそうと拳を――。

「おつと!？」

「うわっ、これを普通防ぎますか?」

振るおうとしたが、空中で身を捻らせて攻撃してくるテラスの一手をグレンは読んで防いだ。

しかし、その隙にテラスは体勢を元に戻せた。

「これでもお前らの教師だぜ? 生徒の考えぐらいお見通しだったっの」

「今のを外したのは痛かったですよ」

「馬鹿言え。そこまでできりや上等だろ? 今のだって俺だから防げたもんだぞ。っーか、今のでわかった。お前、拳闘と魔術。両方を使った戦闘が得意だろう?」

「……………そこまで見抜きますか」

「お前の呪文改変を考えればそれぐらいわかる」

テラスの呪文は一節に切り詰めたものが多い。それは吸血鬼の身体能力も活かした戦闘を行えるようにするためでもある。

「まあ、拳闘のみなら俺の勝ちだな」

ニツ、と笑って接近するグレンにテラスは迎撃するように身構える。

放つグレンの左ジャブを払って、もう一度攻撃に移ろうとするが、不意にグレンの左拳が消えた。そう思った瞬間にグレンに胸ぐらを掴まれ、足払いされて、気が付けば地面に寝そべっていた。

「攻撃はいいが、まだ防御が疎かだったぞ？　いくら不老不死で再生能力があるからといっても油断しすぎだ」

見下ろすグレンは地面に寝そべっているテラスの欠点を述べる。

「……………参りました」

素直に敗北を認め、起き上がるテラス。

その顔は少し悔し気だ。

(あんな顔もするのね……………)

初めて見るテラスの悔しそうな顔。その顔を見てシステイーナは思った。

テラスも努力と研鑽を重ねて今の実力にまで至った。

才能だけでは決して到達することができないところに立っているのが今のテラスだ。

(私も頑張らないと……………)

目標であるテラス。まずはそこに追いつけられるようにと意気込みを上げる。

趣味は

「おはよう。ルミア、システイーナ」

「あ、おはよう！ テラス君！」

「おはよう」

学院へ続く歩道でテラスは二人を待っていた。

『天の智慧研究会』がルミアを本格的に狙われていると判明された以上、出来る限りはルミア達と登下校を共にしている。

しかし、それはテラスだけではない。

「……………おはようさん、お二方」

いかにも眠そうに仏頂面で挨拶を投げってくるグレンもテラスと同じ理由で登下校を共にしている。

だが、ルミアの事情を知らない講師、生徒達から心ない中傷が飛び交う。

学院でもルミアは非常に人気が高い。そのルミアに必要以上に干渉している二人を疎ましく思い、誹謗中傷や悪意が二人に向けられているもグレンもテラスもどこ吹く風のように平然としている。

元々そういうのに慣れていているテラスはそんなこと今更の話だ。

それで満足するなら好きなだけどうぞ、と思っっているぐらいどうでもいい。

いつもどおり、四人で学院へ向かっていく——

「あ、そういえば、先生。今日、編入生が来るんですよね？」

「ああ、そうだ。仲良くしてやってくれよ？」

「テラスの時もそうでしたけど、珍しいですよ？ こんな時期にやってくるなんて……………」

他愛のない会話を交えながら登校する、見慣れた光景。だが。

その日は、そんな光景に異物が紛れ込んでいた。

「……………あれ？」

ふと、システイーナが気付く。

学院正門へ続く上り坂の麓に、学院の制服を見に包んだ小柄な少女





うだつて」

「んなわけあるかッ!? てか、アイツの仕業かッ!? くつそおアルベルトのやつ、そんなに俺が嫌いか!? 覚えてやがれ! ちくしょーッ!」

「……………痛い。やめて」

グレンは喚きながらリエルの頭にヘッドロックをめりめり極めている。

そんなコントのなかでテラスは頭を抱えた。

(ある程度は聞いてはいたけど、大丈夫なのかな……………?)

テラスは以前にグレン同様に学院長室に呼び出されて、帝国宮廷魔導師団がルミアの護衛として編入してくることを聞いていた。

だが、その護衛として来るリエル・レイフオードの話を聞いて不安を募らせてはいたが、それが的中してしまった。

グレン曰く、暴走脳筋イノシシ娘、ナチュラルボーン破壊神、一緒に任務に就きたくない同僚ランキング万年ぶちぎりナンバーワンのリエル、作戦なんて立てる意味ないだろう、だつてリエルがいるから。と、護衛に適したとは言えない人物が編入してきたんだ。

「大丈夫。グレンは私を守るから」

あまつさえ、護衛対象であるルミアではなくグレンを守ることを優先しているこの少女に流石のテラスも頭を悩ませた。

「と、言うわけで……………だ」

所変わつて。

アルザーノ帝国魔術学院、二年次二組の教室にて。

「本日から、新しくお前らの学友となるリエル・レイフオードだ。まあ、仲良くしてやってくれ」

グレンがリエルを連れて教室に姿を現すとクラスの生徒——特に男子生徒は新しい仲間の姿に色めき立つ。

端正な相貌、無駄なみじろぎ一つしない、彫像のように静謐な佇まいは人形という評価が的を得ていた。

リエルの存在に騒ぎ出す教室の中で、テラスは現在思案中の魔術を完成させる為に羊皮紙に魔術公式を書いていた。

新しいクラスメイトの前に行儀が悪いというのはわかっているが、ここ最近ではサボる講師や講師役に教壇に立たせる生徒のせいで自分の魔術に集中できていない。

今しなければいつしろ、という話だ。

隣でルミアが何か言いたそうな眼差しを向けてはいるが、今は気にしない振りをしておく。

「……………」

ルミアの無言の圧力が襲ってくる。

しかし、脳に魔術公式で埋め尽くして逃れようとしてもその眼差しからは逃れられない。

「……………」

じつ、と物言いたそうに見据えてくるルミアにテラスは手を止めた。

「……………」

にこり、と微笑みを見せるルミアにテラスは小さく溜息を吐いた。

(続きは帰ってからにしよう……………)

玩具を取り上げられた子供のようにしゅんと大人しくなるテラスは視線を上げると、リエルの自己紹介にグレンが介入して妙なコントになっていた。

ウエンディの質問では妙にぎこちない空気になったが、次のカツシユのグレンとの関係について質問でそれは完全に吹き飛んだ。

「グレンはわたしのすべて。わたしはグレンのために生きると決めた」

はつきりと、大胆に、堂々と、リエルはそう言った。

「きやあああああ——ツ！——ツ！——大胆！——情熱的！——」

「ぐわあああああツ！——出会って一目で恋に落ちて、もう失恋だああ

あああ——ツ!?!」

上がる女子生徒の黄色い声と、男子生徒の悲鳴で教室は大混乱に陥った。

「禁断の関係！ 先生と生徒の禁断の関係よ〜ッ！ きゃーっ！」

「……………先生と生徒がデキているのは、倫理的問題としてい  
かがなものかと」

「へえ、やるなあー、先生！」

「な、何を仰ってるの、カツシユさんッ!? これは問題！ 問題ですわ  
——ッ！」

「ちくしよう、先生よお……………アンタのことはなんだかんで尊敬  
してたが……………キレちまったよ……………久々になあ……………表に  
出るやあああああ——ッ!?」

「夜道、背中に気をつけるやあああああ——ッ!?」

恋愛に盛り上がり、言いたい放題の大騒ぎ。

何をやっているのやら……………。と他人事のように思っていると。

「……………テラスと、ルミアは付き合っている……………? 恋人、同士  
……………?」

「ふええッ!?」

不意にリエルがそんなことを口走った。いや、グレンがリエル  
にそう言わせた。

隣で顔を真っ赤にして妙な声を上げているルミアだが、テラスは平  
然としている。

（そんな取って付けた言葉に信じる馬鹿はいないでしょうに  
……………）

如何にもわかりやすい嘘を信じる馬鹿はいない。

「ッ!?」

そう思っていたのだが、殺気がテラスに襲いかかる。

「テラスウウウウウウウウウウウウウウウウッ!! お前ってやつ  
はあああああああああああああああああああッ!!」

「許さん、許さんぞおおおおお——ッ!!」

「よくも俺達の天使をおおおお——ッ!!」

「ルミア!? 貴女、いつの間にそんなに進んでおりましたの!?!」

「きゃーッ！ きゃーッ！」

皆、そんな嘘を信じる馬鹿だった。

血涙を流さんとばかりに怒りの形相で睨み付けてくるカツシユ達男子生徒とテラスとルミアの二人の關係に黄色い声を上げて盛り上がる女子生徒達。

その中でグレンは爽やかな笑みで親指を立てていた。

「いや、皆落ち着いてよ？ グレン先生が適当に言ったただけだよ？」

よく話す僕とルミアをダシに使っただけなんだから」

全員を落ち着かせようと言葉を述べるテラスだが、クラス全員（リエルを除く）はその隣にいるルミアに視線を向けられる。

そして察した。

ルミアの満更でもないその顔に男子生徒達の何かがキレた。

「『『『雷精の紫電よ』!!』』』」

「ちよっ!？」

ルミア派の男子生徒達がテラスに向けて一齐に「ショック・ボルト」を放った。攻撃してくるとは思ってたテラスは思わず身をずらして避けた。

「あ」

だが、その代わりといわないばかりに先ほどまでテラスが仕上げていた魔術公式がびっしりと書き込まれた羊皮紙に直撃し、焼き焦げた。

黒くなった羊皮紙、書き込まれていた魔術公式は見えず、というよりも持ち上げたら簡単に崩れ落ちてしまうほど脆くなっている。

「ふ、ふふふ……………」

「テ、テラス……………君？」

静まり返る教室。

不気味な笑い声が静まった教室に響くなか、ルミアはテラスの顔を心配そうにのぞき込む。

「大丈夫だよ、ルミア。僕は別に怒ってないよ？」

そう怒ってはいない。

ただでさえ自分の時間が少なく、この魔術公式にたどり着くまで三日かかったものが一瞬で消炭になったことに怒ってはいない。

ただ、やられたらやり返さないといけない。

「上等だよ……………」

「お、おい……………テラス……………?」

何に対して怒り、「ショック・ボルト」を放ったのかは知らない。

だが、そのお返しはしつかりとしてやる。

「怪物の恐ろしさをその身にたっぷり沁み込ませてあげるよ……………ッ!」

【ショック・ボルト】デイレイ・ブード ラビット・ファイアの時間差起動の連続起動。

「やめろおおおおおおお——ッ!! おい、テラス! 俺が悪かったから落ち着けえええええええ!!」

「黙ってください! あそこまでどれだけ苦労を重ねてきたと思ってるんですか!? それに僕はやられた分は何倍にして返す主義です!」  
「つておおおおお!! 俺まで巻き込むな!!」

グレンも巻き込んでテラスは「ショック・ボルト」を連発するも、巧みな魔力制御で女子生徒には当てずに男子生徒だけの確に当てていく。

「やかましいぞ、グレン!! レーダスツ! 貴様、何あああああああああああああああああああ!!」

「ハーレム先輩!! マジすんません!!」

一組の担当講師ハーレイはテラスの「ショック・ボルト」に巻き込まれ、グレンは心から謝った。

「だあああああああッ! もう! 誰かこいつをとめてくれええええええええええええ——ッ!!」

電光が飛び散る二組でグレンは魂の叫びを上げる。

人の趣味は決して邪魔をしてはいけない。それを台無しにするのはもつといけない。

それを骨身まで沁みた二組だった。

## 仕返し

暴走した怪物テラスを天使ルミアがなんとか宥めて、落ち着きを取り戻したがこの一連の騒動で思わぬ時間が浪費して本日の授業予定が大幅に狂ってしまった。

仕方がなく、グレンは予定を変更し、魔術の実践授業を急遽行うことにした。

二百メートル先にある人型のブロンズ製ゴーレムの頭、胸、両足、両腕の六ヶ所に円型の的が設置していて魔術で的を当てる授業だ。

「《バン》《バン》《バン》《バン》《バン》《バン》……………」

暗い表情で「シヨック・ボルト」の切り詰めた一節詠唱の連続起動ラビッド・ファイア。雷閃は吸い込まれるように的に的中する。

「流石だな、お前にとっちゃこれぐらい距離でもなんでもねえか……………つか、いい加減元気出せよ」

「努力します……………」

六発全体的中し、生徒の輪の中に戻る。

「や、やっぱ凄えな！ 全弾命中って！ 流石はテラスだ！」

「そうだね……………」

「わ、私だって負けてはおりませんわ！ 次こそは私が勝利を頂きませわ！」

「そうだね……………」

「僕も競技祭のテラス君のアドバイスのおかげで僕も最近は狙撃の腕が上がったんだよ！」

「そうだね……………」

クラスメイト達が落ち込んでいるテラスを励まそうと声をかけるも効果がなかった。

よほど、あの魔術公式が燃えたのがシヨックだったのだろう。

「いつまで落ち込んでんのよ！ シャツキとなさい！」

だが、そんなテラスの背中にシステイーナは喝を入れた。

「いつまでもその調子だと私がすぐに貴方を追い抜くわよ！ それが嫌ならもつとしっかりしなさい！」

テラスに喝を入れてシステイーナも全ての的に「ショック・ボルト」を全弾命中させる。

システイーナは密かにテラスをライバル視している。

そのライバルが落ち込んでいるところを見たくはないし、無様な姿を見せたくはない。

「凄いね、システイ！ ほらテラス君！ システイも六発撃って、全部の的に当てたよ！」

「……………そうだね。ふう、落ち込んでいる余裕もないよね」

システイーナの真剣な横顔を見て、一息ついたテラスは何とか立ち直らせる。

「……………もう一度頑張るよ」

「私にできることがあつたら言つてね？ 私もテラス君の力になりたいから」

「ありがとう。助かるよ」

そんな二人の会話に男子生徒は齒を噛み締め、女子生徒はひそひそと内緒話。

おのれ……………。とか、やっぱり……………。などと、聞こえては来るがもう聞く耳もない。

「よし、リエル。お前の番だ。やれ」

「……………ん」

「いいか？ 同じ的を狙ったらダメだぞ？ 一つの的につき、狙っていいのは一回だけ、とりあえず今回はそういうルールだ。わかっているな？」

「ん、わかった。攻性呪文アサルト・スベルであの的を壊せばいい。そうでしょ？」

「おう、そうだ」

「任せて」

グレンの促しを受けて、リエルが定位置に立った。

その際にクラス中がリエルの実力を持っているのか気になり、見守る。

それはテラスも同様だ。

帝国宮廷魔導師団、特務分室の一員であるリエルの実力を知って



おきたい。

(少なくとも錬成速度は目を見張るものがあるけど、魔術は……………?)

朝方、グレンを襲う際に行使した錬金術の錬成速度にはテラスも驚かされた。

錬金術はテラスも使える。その気になればその場で武器を錬成することぐらいはできても、早くて数秒は時間が有する。

だが、リエルは秒数も掛からずに武器を錬成した。

(お手並み拝見だね……………)

魔術の場合はどうなのだろう? 興味と期待に眼差しを向ける。

「雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ」

三節で呪文を唱え、紫電は二百メトラ離れたゴーレムに放たれる。

だが、的どころか、ゴーレムそのものを大きく右に外して飛んでいった。

その後もリエルの「ショック・ボルト」はゴーレムに掠る気配も見せない。

それにはテラスも首を傾げる。

(実力を隠すためにわざと外しているには流石におかしい。なら、本当に……………?)

よくそれで生き延びているものだ。と思っていると。

「ねえ、グレン。これって「ショック・ボルト」じゃないと駄目なの?」

「駄目とは言わねーが……………この距離じゃ、他の攻性呪文アサルト・スベルだとマト

モに届かねーぞ? 言っておくが軍用魔術は禁止だからな?」

「つまり、呪文自体はなんでもいい?」

「まあ、一応、そうだが……………」

「わかった。なら、問題ない」

リエルは二百メトラ先のゴーレムに対し、再び向き直ると、呪文を唱えた。

「《万象に希う・我が腕手に・十字の剣を》」

ばちん、と。リエルが身を屈めて触れた地面に紫電が走る。

次の瞬間――

「二」な、なんだああああああああ—— ツ!」「二」  
リエルの両手に十字架型クロス・クレイモアの大剣が出現し——その足元には十字型の窪みが出来上がっていた。

錬金術による高速錬成で、競技場の土から鋼の大剣を瞬時に作り出したのである。

「お、おい……………リエル、お前、一体、何を……………?」

頬を引きつかせたグレンの言葉も虚しく——

リエルは大剣を頭上に大きく振りかぶって——

「いいいいいいああああああああ—— ツ!」

乾坤一擲の気合と共に、たんつ、と地面を蹴って——

リエルは身の丈を超える大剣を、全身のバネを存分に振るって——

——投擲する。

びゅごお、と空気を引き裂いて投じられた大剣は、嵐のように縦回転しながら二百メートルもの距離を一瞬で消し飛ばし——

ドガンツ! と凄まじい破砕音を立てて、大剣がゴーレムの胴を貫き——

次の瞬間、ゴーレムはバラバラに砕け散って四散した。

無論、ゴーレムに設置されていた六つの的は、全て跡形もなく粉々である。

「二」……………「二」

(なるほど……………滅茶苦茶だ……………)

グレンから聞いたリエルという人物が話を聞いていた通りの人物だと理解して額に手を当てる。

「……………ん。六分の六」

リエルは眠たげな表情を崩さぬも、どこか得意げに、ぼそりと呟いた。

派手なデビューをしてしまったリエルは孤立してしまった。

話しかけようにも、先ほどの身の毛もよだつ破壊を目撃してしまったクラス生徒達は話しかけ辛くて、最初の一言のきっかけが掴めない

でいる。

「つーわけで、頼む！」

そんなリエルを放っておけないグレンは両手を合わせて頭を下げてテラスに懇願した。

「……………人選ミスですが」

懇願してくるグレンにテラスは半眼を作りながらそう答えた。

元々孤立、孤独の存在であったテラスにとってこれは非常に難しい。

遠くからリエルを見て、こんな感じだったんだな、と。……………過去の自分を照らし合わせているほどに。

「そこはほら？ お前の……………何かでどうにか」

「ないんですか。……………まあ、事実ですからいいですけど。僕よりも上手く立ち回れる人がいるでしょ？ このクラスには、ほら」

「ご機嫌よう、リエル」

テラスが指した先には先に行動に移っていたルミアがリエルの昼食を誘っていた。

「流石はルミアですね……………」

「ああ」

学院で天使と呼ばれているだけはある。

ルミアの慈愛ときっかけを作ろうと行動する勇気は学院一だろう。

ルミアの誘いに応じたリエルは二人と一緒に食堂に赴く。

「よし、俺達も行くぞ」

「……………僕もですか？」

はんば呆れながらグレンの後をしぶしぶついていくと、三人の座るテーブルから少し離れた位置にあるテーブルに腰を下ろして三人の様子を窺う。

「……………思っているより打ち解けていますね」

「だな」

母のタルトを黙々と食べているリエルを優しい眼差しで見据えている二人。

「……………今更なんだが、お前は交ざらなくてよかったのか？」

ルミアとシステイーナ。この二人とよく食事を共にしているテラスだが、今回は離れてグレンと一緒に食事を取っている。

「僕だつて空気ぐらひは読めますよ？ それに先生には聞きたいことがありますし」

「なんだ？ 恋の相談なら受け付けねえぞ？」

「はいはい、先生はそこらの動物にでも発情しといてください」

「……………お前、俺のこと嫌いだらう？ 恨みでもあんのか？」

「苦勞を重ねてあそこまで辿り着いた魔術公式をダメにした元凶が何を言いますか？ これぐらひの愚痴は言わせて貰いますよ」

食事を進めながら軽い愚痴を溢すテラスは本題に入る。

「リエルの実力は多少なりは理解しました。ですが、一つだけわからない点があります。……………何者なんですか？ リエルは」

「……………おいおい、何言つていやがる？ どこからどう見ても可愛い女の子じゃ——」

「誤魔化さないでください、グレン先生。先生は嘘が下手だということとは自分でも理解している筈です。だから先生は誤魔化すではなく隠すを選ぶ人です。つまり、先生が誤魔化したということはリエルには何かあるのですね？」

「……………」

「沈黙は是ですよ。それに僕は鼻がいいのですから嗅ぎ分けることができます」

鼻に指を当てる。

吸血鬼の嗅覚がリエルの何かを嗅ぎ分けて付き合いが長いグレンに直接問いかけている。

周囲にも気を遣い、余計な言葉は使わずに語りかけてくるテラスにグレンは頭を掻き篋る。

「たくつ、わつーたよ。だけどあいつには絶対に言うなよ？」

「わかりました」

真剣な声音で告げられるその言葉に真意に頷く。

（今の言い回しだと、リエル自身も知らないことなのかな……………？）

妙な言い回しをするグレンにそんな疑念を抱きながらテラスは立ち上がる。

「では後程に聞きますので、先生も早く食べた方がいいですよ？」

「はあ？」

その時、昼休み終了の予鈴が、学院内に響き渡る。

食事を食べ終えたテラスとは違い、グレンのトレイの上には大量の食事が残っている。

リエルとテラスの言葉に気を取られ過ぎて食べるのを忘れていた。

「それでは失礼します。——ふ」

慌てふためくグレンを見て鼻で笑った。



血鬼であるテラスにはまさに熱帯地獄。

「でも意外だね。テラス君にこんな弱点があったなんて」

「……………吸血鬼には弱点が多い種族……………だから、うう……………」

背中をさすってくれるルミアの優しさが今は非常にありがたい。

滅多に乗れない船を満喫したいはずなのに、それを捨ててまで看病してくれる。

「あんなに出たのに……………まだ、出るのか……………」

もう何度目になるかわからない嘔吐感。

顔色は既に青白く、輪郭も少々げっそりとしている。

「何か食べ物でも貰ってこようか？ それとも薬の方がいいかな？」

「……………血が飲みたい」

出すものを出して空腹感が襲うテラスは血を求めるようにそう呟いてしまい、すぐに自分の不本意な発言に謝る。

「あ、ごめん……………別にそのつもりは」

「いいよ」

ルミアは自分の腕をテラスの前に出すと、テラスは思わずかぶりついてしまう。

餌を目の前に本能のままにかぶりつく獣のようにルミアの腕を噛み、その血を啜る。

「……………っ」

前回の吸血とは違い、乱暴に噛みついたせいかルミアの顔が少し痛みで歪む。

それでもすぐに笑顔を作り、ルミアはテラスに血を捧げる。

「……………ありがとう、ルミア」

「ううん、私にはこれぐらいしかできないから」

いつも助けて貰ってばかりのルミアにとつてせめてもの恩返しだが血を上げることぐらい。

「少しは気分は良くなった？」

「多少は……………でも、ごめん。少し寝るね？」

「うん、着いたら起こすからゆつくり休んでいて」

寝台に夜になるテラスは自身に「スリープ・サウンド」を施して眠りにつく。

その横でルミアは寝息をたてて休んでいるテラスの横顔を到着するまで満喫していた。

シーホークを出港して数時間。

やがて、船はサイネリア島に到着した。

「……………どうも、先生……………」

「おお、お前も……………酷いな……………」

「いえ、先生ほどでは……………」

「……………無理すんなよ」

「先生も……………」

テラスはルミアにグレンはシステイーナに肩を借りながら互いを励まし合う。

そんなグロッキー二人に他の生徒達も苦笑いを溢していた。

「ほら、先生もテラスもしつかり」

「もう少しで旅籠だから頑張ろうね？」

二人の慰めにテラスもグレンも足に力を入れて、宿泊予定の旅籠に向かう。

旅籠に到着するとすぐにテラスは割り当てられた宿泊部屋のあるベッドに横になる。

「だ、大丈夫なのか……………？」

「宿の人に言っただけでも貰ってこようか？」

「ああ、大丈夫……………もうひと眠りしたらよくなるから……………」

同じ部屋に割り当てられたロッドとカイに心配され、まだ完全に酔いが消えていないテラスは心配かけないように声をかける。

「おおい、三人共。今いいか？」

扉の外からカツシユの声が聞こえた気がするが、意識が朦朧気になっているテラスはその後の三人の会話は耳に入らず、意識を闇の中へと沈めた。



その夜。就寝時間——

「……………男ってバカね」

旅籠本館の屋上テラスでシステイーナはジト目で眼下に展開されているグレンと男子生徒の馬鹿騒ぎを見ていた。

カツシユが主犯の『女子の宿舍へお忍びで遊びに行つて一夏のウフ体験作戦』という年頃の少年のリビドー全開で行われた決死作戦は己の生活を守る為に立ちはだかるグレンに阻まれたが、カツシユ達は『樂園』<sup>エデン</sup>を目指すためにグレンと死闘を繰り広げていた。

林の中、飛び交う雷閃と怒号と悲鳴。

欲望に塗れた熱い男達の戦いをシステイーナは冷ややかな眼差しで見下ろしていた。

「はっはっは！ どうした!? お前らの力はそんなもんか——つて、おい!? ちょっと待て!? お前ら、そんな風に隊伍を組んでの面攻撃は反則——ふんぎやああああああ——ツ!? あたたた、痛い!? 痛いって!」

戦い続けるグレンと男子生徒達にルミアは視線を泳がせるが、その中にはテラスはいなかったことに安堵半分、悔しさ半分だった。

「流石にテラスはいないわね? まだ部屋で休んでいるのかしら?」  
テラスが参戦していればもつと大惨事になっていただろう。  
いないということはまだ部屋で休んでいるのだろう。

大広間での食事もテラスは顔を出してはいない。グレンが言うには部屋で寝ていたらしい。

システイーナ達はその後、ウエンデイからカード・ゲームに誘われてリエルと一緒に遊んでいる際——

「さあルミア! キリキリ話しなさいな!! さあさあ!」

ウエンデイが興奮気味にルミアに詰め寄っていた。

「な、何も無いよ……………ッ! 何も無いから!」

「嘘おっしやい! 貴女とテラスの関係を聞くまでは逃がしませんわ!!」

女子生徒達の話題はルミアとテラスの交際関係で盛り上がって

た。

「だから本当に何も無いよ！ 私とテラス君は仲のいい友達で——」

「仲が良いという理由だけで付きっ切りで看病するわけがありませんわ!!」

「そ、それは……………」

船の上でテラスの容態に気付いて部屋に連れて行ったのはルミア。その姿をクラス全員が目撃している。それから到着するまで誰もルミアの姿を見ていないことも。

「ネタは上がっていますわ！ さあさあ！」

「そこまでよ、ウエンデイ！ ルミアが困っているわ!!」

度を越した行動に流石のシステイーナも黙って見過ごすことは出来ず、止めに入るも——

「貴女方はご存じありませんの!? 学院でのテラスの評判を!」

ウエンデイのその一言で押し黙る。

「テラスは男子生徒からは嫌われてはおりますが、女子からは人気が高いのですわ！ 魔術の知識から紳士的な対応、少々怖いところもあります……………それもミステリアスな一面として女子から高い人気を誇っておりますのよ！」

力説するウエンデイの言葉にルミアは初耳のその言葉に驚く。

「ですので、私は心配しているのですわ！ お二方の関係に明確にしなければきつと後悔なさいますわ!!」

「そ、それは……………」

否定しようとするも、よくよく思い返せば確かにテラスに声をかけてくるのは殆どが女子生徒ばかりだった。

ウエンデイが言っていることもあながち間違いではない。

「確かに前の魔術競技祭でテラス君の活躍は凄いものでしたね」

「わ、私も……………テラス君のおかげで、頑張れたよ……………」

テラスの人気を同意するように肯定の言葉を述べる女子生徒達。

「さあ、ルミア！ この遠征学修で攻めなければいつ攻めますの!?! ここでテラスの心を驚掴みにするのですわ!!」

「ふ、ふえええ!?!」

爛々と輝く眼差しで熱く言い寄るウエンデイにルミアは顔を赤くする。

一方その頃。

「なにをしているんですか……………うっ!」

復活したテラスは騒ぎを嗅ぎ付けてグレンと男子生徒達に<sup>ヒラー・スベル</sup>法医呪文を呆れながらかけていた。

## 浜辺

どこまでも青い空。燦々と輝く太陽。焼けた白い砂浜。清らかな潮騒と共に、寄せては引き、引いては寄せ——千変万化する波の色。

そんなサイネリア島のビーチにグレン達はいた。

「やっほー、システィ〜」

ばしやりと、水着姿のルミアが海から姿を現す。

青と白のストランプが可愛らしい、ビキニ水着姿。

その優雅な曲線を描く艶めかしいボディラインを伝い滴る水。

潮風に乗って舞い上がる水飛沫が太陽の光を受けてきらきらと輝き、手を振って無邪気に笑うルミアを美しく彩った。

「水が気持ちいいよ！ システィもリィエルもおいでよ！」

「うん！ わかったわ！ 今、行く！」

控えめなカーブのラインが清楚な、そのスレンダーな肢体。

腰に巻かれた花柄のパレオがお洒落な、セパレートの水着姿。

元気よく、ルミアが泳いでいる場所へ向かってリィエルの手を持つて砂浜を駆けていく。

「……………え、『楽園』<sup>エデン</sup>ここにあったのか……………ツ!？」

女子生徒達の水着姿とその光景を前にカツシュ達は感涙の涙を禁じえなかった。

「……………何言ってるの?」

そんなカツシュ達を氷の中にいるテラスは怪訝そうに首を傾げていた。

「お前こそ……………なんだよ、それ?」

投球状の氷の中にいるテラスの外から声をかけてくるグレン。

「黒魔改【アイス・バリゲート】。冷気の魔術を応用した熱遮蔽です。

魔力消費も少なく、中はわりと快適ですよ?」

高い気温に弱いテラスが熱から身を守る為に考案した魔術。

「ほう? それなら俺にも一つ」

「はいはい」

グレンにも「アイス・バリゲート」を使うテラスにその快適さにグレンも満足そうだ。

「おお、中々いいじゃねえか!? これならぐっすりと眠れそうだ!」  
喜ぶグレン。その隣でテラスもシートに横になろうとする。

「テラスくん」

声をかけられて起き上がるテラスにルミアとシステイーナそれにリエルが駆け寄ってきた。

「貴方ね……………こんなことで魔術を使うなんて……………」

「僕にとつては一大事だよ? ここから出たら熱で倒れるから」

こんな風に日常的に魔術を行使しているテラスにシステイーナは何か言いたげだが、そう言われたらそれ以上は何も言わなかった。

「おうおう、なんともまあ、眼福な恰好してくれちゃって……………」

その横でグレンがニヤニヤと悪そうに笑った。

「じつ、じろじろ見ないでよ……………」

身体を腕で抱くように隠し、不機嫌そうに身じろぎするシステイーナ。その頬には仄かに赤みが差している。

「……………えっと、どうかな? 似合う?」

「うん、似合ってるよ」

「ふふ、ありがとう、テラス君」

「白猫、お前もなかなかセンスいいじゃねーか。気に入ったわ」

「う、うるさいわねっ! ベっ、別に貴方に見せるために買ったわけじゃ……………」

テラスとグレンは二人に何気ない賛美を送る。

リエルが一步グレンの前に出て、意味深にじつと見つめ始めるが、その意図がわからないグレンは首を傾げていた。

「ところで……………お前ら、一体どうした? 皆で遊んでいたんじやなかったのか?」

「あつ、それがですね。これから皆でビーチバレーでもしようっていう話になって……………二人を誘いに来たんです」

「ビーチバレー?」

いかにも気乗りしないグレンはぼやいた。



テラスの【アイス・バリゲート】をこの砂浜全体を覆い、快適空間のなかでビーチバレーに参加している。

「テラス……………お前には競技祭の時や、昨夜の治療でさんざん面倒をかけてばっかだが——」

カツシユは震える手を握りしめてチラリとテラスとチームを組んでいるルミアを見て、テラスを指す。

「俺はここでお前を倒すツ！ 無念に散った俺達の恨みをお前にぶつけてやる!!」

「全く持つて身に覚えがないんだけど……………」

コート外にいる男子生徒が何人かカツシユの言葉に同意するように頷き、それに気付いたルミアは苦笑いを浮かべていた。

当の本人は困ったように頬を掻く。

「……………まあ、折角なんだから少し面白いものを見せてあげるよ。ルミア、トス！」

「うんー」

ルミアにボールを移動させてルミアの絶妙なトスにテラスは跳び、敵陣地にスパイクを炸裂させる。

「《見えざる手よ》————ツ！」

テレサが着地時点を指して【サイ・テレキネシス】の呪文を唱えるも、ボールは右へ曲がって地面に当たった。

「へ、変化球だと……………!?!」

驚きの声を上げるカツシユにテラスは得意げに語る。

「白魔【サイ・テレキネシス】は遠隔物質操作。その物質を指定し操る魔術。だけど、動いている物質、今回だとボールがくる場所を予測して指定しなければ魔術は使えない。つまり、どのような変化球がくるかまでも予測して、その場所を的確に指定しなければ操ることは出来ない」

「くっ……………まさか、これほどの実力差があつたとは……………ツ！」

だが、こっちにはリエルちゃんがいるー」

ボールをトスしてリエルにスパイクを放たせるも——

「《手よ》」

そのバカげた威力で放たれるリエルのスパイクをテラスが拾う。「リエルのスパイクはあくまで真つ直ぐ。僕の魔術で容易に捉えられる」

「な、ん、だと……………ッ！」

「ついでに僕の変化球は千変万化。予測不可能な僕の攻撃を拾えるかな？」

自信満々に敵の攻防を無力化させるテラスの技量に背後にいるルミアとウエンデイは互いに苦笑い。

「やれやれですわ。テラスも熱にやられたようすわね」

「あはは……………でも、楽しそうだよ？」

「まだだ……………俺は諦めねえ！ 行くぞ、二人とも！」

「ルミア！ ウエンデイ！ サポートをお願い！」

勝手に発熱する二人に女性陣は顔を見合わせて苦笑する。

燃え上がるビーチバレーだが、発熱し過ぎたテラスは魔力制御を怠り氷が消えて太陽の陽光を受けたテラスは高い気温と発熱した肉体も合わさり、速攻でダウン。

倒れたテラスは日陰でまたルミアの看病を受ける羽目になった。

「……………結局こうなるのね」

氷嚢を頭に載せてテラスはぼやいた。

吸血鬼というのも案外不便なものだと、今回の遠征学修でそれを知った。



## 白金魔導研究所

研究所見学の日。

グレンと二組の生徒達は観光街の旅籠を出発。サイネリア島の中心部にある白金魔導研究所を目指し、そろそろと歩き始める。

白金術は生命神秘に関する研究を行う複合術。その研究実験の展開は、大量の綺麗で上質な水が欠かせない。

そのせいもあり、白金魔導研究所はサイネリアの中心部。今もなお手付かずの樹海であり、未知の領域でもあり、その今回の遠征学修の目的地である白金魔導研究所がある。

舗装された道とは違い、自然の起伏がはつきりと残っている道なき道。

基本的に都会っ子な生徒達は早くも音を上げていた。

「はあー。はあー、うう……………」

「ぜえ……………ぜえ……………」

「おいおい、大丈夫か？ リン。俺、まだ余裕あるから荷物持とうか？」

「……………あ、ありがとう、カッシュ君……………流石、将来、冒険者希望だね……………」

「ははっ、田舎者なだけさ」

「きいいいい……………どうして……………高貴なわたくしが……………」

「このようなの……………ツ！ 馬車を回しなさいな……………ツ！ 馬車を……………ツ！」

「ふん……………随分……………だらしが……………ないね？ ……」

ウエンディ、君のような……………お嬢様には……………荷が重かった……………かな？」

「そういう……………貴方こそ……………皮肉に……………いつものキレが……………なくってよ……………ギイブル！」

音を上げている二組のなか、一人だけ涼しげに進んでいる生徒が二人いる。

「皆頑張って」

一人はテラス。漆黒の日傘をさして陽日を防いでいるテラスは昨夜のうちはこの日傘を完成させたことが功を制した。

もう一人はリエル。軍に所属しているだけあって息一つ乱さず、汗一つかいていない。

「ルミア、大丈夫?」

「あんまり……………大丈夫じ……………ないかも。……………テラス君は?」

「この日傘のおかげで移動だけならもう大丈夫……………あ、そうだ。失礼」

「え? きやつ!?」

テラスはルミアをお姫様抱っこで抱きかかえる。

「この島についてルミアには面倒かけてばかりだからルミアは休んでて」

「い、いいよ!? お、下して……………ッ!」

「疲れているでしょ? それにこうやって運ぶのだって初めてじゃ——」

「大丈夫だから!! 大丈夫だから下して!!」

テラスの言葉を遮るように大声を出すルミアにテラスは渋々とルミアを下す。

幸いにもクラスの皆はこの移動で二人の会話に耳を澄ませている余裕はなく、ただルミアの大声だけが響いただけだった。

「っ!」

雑に舗装された石畳に崩れかかった箇所にはリエルは体勢を大きく崩した。

「リエル!」

ルミアは片膝をついているリエルに駆け寄った。

「……………大丈夫? 。。。こら辺、足場が悪いよ? 気をつけて」

そして、ルミアが心配そうにリエルにを差し伸べて……………ぱちん。

リエルは差し伸ばされたその手をはたいていた。

「……………え?」

何をされたかわからないという顔で、呆然とするルミア。

「……………触らないで」

「どこか攻撃的に冷たくそう言い放ち、リエルは立ち上がり、二人を置き去りにしてすたすたと歩き去ろうとする。

「……………ちよつと待って、リエル。何があつたか知らないけど、今のは酷くない？ ルミアは貴女心配して……………」

だが。

「……………うるさい」

「え？」

「うるさいうるさいうるさいっ！」

突然張り上げられた声に、クラス全員が思わず足を止め、リエルに注目する。

「関わらないで！ もう、わたしに関わらないで！ いらいらするからー！」

「……………っ!？」

「わたしは——あなた達なんか、大嫌い！」

一方的に子供のようにわめき立て、システイーナの手を振り払うと、二人に背中を向け、肩を怒らせて歩き去って行く。

後に残されたのは、呆気を取られて言葉を失ったルミアとシステイーナ。

そんなルミア達の様子を気まずそうに窺いながら、生徒達が口々に囁き合う。

「どうしたの？ あれ」

「私ができるわけじゃないでしょ！ リエル、貴女一体——」

一言抗議しようと、リエルの後を追って駆け出そうとしたシステイーナの腕をルミアは掴んだ。

「何があつたのかはわからないけど……………今はそつとしておいてあげよう？」

「……………貴女がそう言うなら」

納得はしていないが、システイーナは気を落ち着かせるように深く息を吐いた。

「でも、本当に一体、何なの？　昨日今日であの態度……………わけがわからないわよ」

「……………ねえ、システイ」

憂いと悲哀に彩られた表情で、ルミアは言葉を続ける。

「やっぱり、嫌だったのかな……………？」

「！」

「リエルは……………私達と住んでいる世界が違うのに……………私は勝手にあの子を振り回して……………本当は嫌だったのに、今まで無理して付き合ってくれただけなのかな？　私……………お節介だったのかな……………？」

「それはないと思うよ」

悲しげに言うルミアの言葉を否定した。

「本当に嫌ならもつと早くそれらしい態度が出ているはずだし、突然あんな風に言うことはない。僕達の知らないところでリエルに何かあったんだろうね。そうでしょ？　グレン先生」

振り返るとそこには移動体列の殿を務めていたグレンがいた。

「ああ、すまん。実は昨夜、俺が余計なことを口走って、リエルを怒らせちゃってな……………あいつ、ちよつと不安定になっちゃったんだ」

「すまんって……………リエルのあの調子は貴方の仕業ぬぐ?!」

「システイーナ」

口を塞いでふるふると首を横に振るテラスにシステイーナは頷く。

「リエルにも色々ある。今はそつとしておいてあげたら少しは落ち着くと思うから今はそれで納得とはでは言わないけど、わかって欲しい」

「……………わかったわよ」

「何かあったら僕も力を貸すよ。それでいいよね？」

「うん、その時はお願いするね」

「了解」

それから二時間が経過して一行はどうとう白金魔導研究所に辿り着いた。

「ようこそ、アルザーノ帝国魔術学院の皆様。遠路はるばるご苦勞様です」

グレン達の前に、ローブに身を包んだ一人の初老の男性が現れた。「私はバークスⅡブラウモン。この白金魔導研究所の所長を務めさせていただいている者です」

「や、あんたがバークスさんか。アルザーノ帝国魔術学院、二年次二組の担当講師グレンⅡレーダスだ。本日はうちのクラスの『遠征学修』へのご協力、心から感謝します。生粋の研究型の魔術師であるバークスさんにとつちや、ヒヨコどもが所内でほつき歩くなんて鬱陶しくて仕方ないでしょうが、まあ、今日明日は我慢してください」

「いえいえ、いいんですよ」

互いに挨拶を交わしているグレンとバークスにテラスは目線を鋭くする。

(消毒液に交えて人間の血の匂い……………それもこの匂いは相当に濃い……………)

人間の血の匂いに敏感なテラスはバークスから嗅ぎ取る血の匂いに警戒を強いる。

少なくともこのバークスという所長はここ数日で確実に人間の血を浴びた何かをしているのだけはわかった。

「ルミア、あのバークスに気をつけて」

「う、うん……………」

耳打ちして警告を促すテラスにルミアも頷く。

流石に今ここぞでなにかをするとは思えないが、警戒をすることに損はない。

それからバークスに引率される形で、グレン達は白金魔導研究所内を見学に戻る。

室内、通路問わず、水路が張り巡らされた所内はまさに『水の神殿』という形容が当てはまる。

「白金術は……………白魔術と錬金術の複合術。この術分野が主に扱う

のは、皆様もご存じの通り生命そのもの。ゆえに研究には新鮮な生命マナに満たされた空間が常に必要とされます。だからこそこのような有様になっているのです。まあ、少々歩きにくいのはご愛嬌」

ボックスの案内で様々な研究所内を練り歩く。

これまでに見たことのない設備、環境に圧倒される生徒達。

「……………本当に凄いわ。まさか、人がここまでできるなんて……………」

それはシステイーナも例外ではない。

「私は将来、魔導考古学を専攻するつもりだけど……………これを見る……………ちよつと心が揺らいじゃうわね……………二人はどう？」

「私は、ほら……………研究者じゃなくて、魔導官僚志望だから」

「興味はあるけど、特にというほどじゃないね」

「それに……………ここを見てみると……………なんか、気が引けちゃつて」

「……………気が引ける？」

「その……………人がこんな風に命を好き勝手に弄って、本当にいいのかな……………つて」

ルミアの素直な物言いに、システイーナは思わず息を呑む。

「……………人間は度重なる犠牲の下に、今の生活を成り立てている。好き勝手命を弄るのも全ては人間が安全安心で生活ができる為」

だけど。

「それでも道を踏み外し、己の欲望を満たすために命を命と思わない研究をする者もいる——外道。あまり魅入られない様に気をつけた方がいいよ？」

一瞬だけ、ボックスに視線を向けると目が合った。

氷のような眼差しが一瞬だけ互いを見据え合うも、二人は何事もないように笑みを見せる。

「二人はあの研究、死者の蘇生・復活に関する研究を知っている？」

「え？ えつと……………確か名前は」

「……………『Project: Revive Life』」

突然、背後から第三者の声が割って入った。

振り返れば、そこには好々爺然とした顔のボックスが立っていた。

「まさか学生さんの口からその言葉を聞けるとは……………よく勉強していらつしやる。あなたのような優秀な若者がいれば帝国の未来は明るいですな」

「いえいえ、今回の遠征学修の際に予習して偶然に知ったことです。褒められるものではありませんよ」

「ふふ、謙遜なさるな」

にっこりと笑うバークスにルミアがふと浮かんだ疑問を口にする。

『Project: Revive Life』って……………?』

「生物の構成要素には三つあるんだよ。肉体たる『マテリアル体』、精神たる『アストラル体』、霊魂たる『エーテル体』の三要素があり、人間は死ぬとこの三要素が分離し、それぞれがそれぞれの円環に還る。だけど、この計画は生物の三要素を別のものに置き換えて、死者を復活させようとする計画なんだよ。復活させたい人間の遺伝子情報から採取された『ジーン・コード』を基に、代替肉体を錬金術で錬成して、他者の霊魂に初期化処理を施した『アルター・エーテル』を大体霊魂として、最後に復活させたい精神情報を『アストラル・コード』に変換して代替精神とする。この三要素を一つに合成して、復活させる術式。簡単に言えばコピー人間だね。だけど、それでも有用性はあると人間は考え、研究をするも最終的には破棄された計画だよ」

「ど、どうして……………?」

『ルーン』の機能限界。ルーン語はこの世界で生み出された最初の魂が発した音色『原初の音』に近く作られた言語。だけどルーンじやどこをどうやっても先の三要素を一つに合成する魔術関数と魔術式が構築できなかつたんだよ。ルーン語のポテンシャル・スペックでは、その術式を成すことは不可能と証明されたんだ。だけどそれ以上に致命的な問題が一つあったんだよ。復活に必要な三要素の一つ『アルター・エーテル』には複数の人間から霊魂を抽出して加工・精錬する手段しかなかった。一人を生き返らせる為には複数の人間が死なないといけない」

「いやはや、まさか学生さんに良いところを持っていかれましたな。付け加えて言わせて貰えばそういう様々な問題が噴出し、このプロ

ジエクトは封印されることになったのですよ」

補足で説明を加えるバークスにテラスは言葉を投げる。

「そういえば風の噂で聞いたことがあるのですが、どこかの魔術結社が完成に漕ぎ着けたと……………」

「そういう眉唾ものの逸話もございますな」

「ですよ。少なくともこの研究を完成させるにはこの計画に特化した術特性パルナリテイを持つ者、もしくはルーン語以上に『原初の音』に近づいた魔術言語を使用すること。どちらも限りなくゼロに近い」

「そうですね」

互いに笑みを崩すこともなく、本性を隠し通す。

だが、瞳の奥に隠されたその眼差しは互いを嘲笑う様に見据え合っていた。

「さあ、お話はこれくらいにして、次の部屋へ参りましょう。今日はまだまだ、あなた達にご覧になっていただきたい場所はたくさんあるのですから……………」

研究見学が終わった時は既に夕方。

宿舎に戻ってきた時は既に日が落ちて暗くなり、自由時間が始まると各自で好きなように動く。

ルミアはリエルを食事に誘ってが拒絶し、どこかに姿を消してしまふ。

グレンはリエルを探し、ルミアとシステイーナは部屋で二人の帰りを待つことに。

テラスはカツシユに強引に誘われて皆に付き合っていた。

「ここだぜ？　すげーうまい魚介料理が出てくる店！」

カツシユの案内でその店に辿り着いたテラスは皆と一緒にその店に入ろうとする。

「っ!？」

——が、その足を止めて、振り返る。



「ど、どうしたんだ……………?」

「ごめん、先に宿に戻る!」

跳躍し、宿伝いで移動するテラス。後ろからカツシユ達の声が聞こえたが今はそれに気にする余裕はない。

(この血の匂いはグレン先生ッ! それもこの血の濃度はマズイ……………!?)

致死量に匹敵する血の濃度。それを嗅ぎ取ったテラスは臭いを辿ってグレンがいる場所に辿り着くもそこには誰もいなかった。

ただ、大量の砂に血がこびりついていた。

「ルミアは……………ッ!」

遠見の魔術を使い、ルミアの様子を確認するもそこにはルミアを担いでいる血まみれのリエルの姿が見えた。

次にシステイーナの方を確認すると、そこには魔術競技祭でグレンが変身していたアルベルトに担がれていたグレンの姿が見えた。

(……………グレン先生の詳細な容態はわからないけど、少なくとも助かる見込みはあるとみて考えておこう)

一旦ここでグレンは切り捨ててルミアに集中し、もう一度遠見の魔術を行使するも使えなかった。ルミアに設置しておいた魔術を壊されたのだろう。

(だが、居場所はつき止められる)

目を瞑り、意識を集中させる。

吸血鬼であるテラスは血を吸った相手の居場所を数日は把握することができる。

どんなに離れた場所でも感覚で探し出せれる。

(こっちだね……………)

ざっざっ動き出す怪物<sup>テラス</sup>の歩みを止められる者はいない。

## 止まらない怪物

攫われたルミアは薄暗い何らかの儀式魔術が行われる場所で目を覚ました。

自分は鎖付きの手枷に両手を繋がれ、その鎖で天井から法陣の中心に吊るされていた。

諸手を上げた状態で固定され、足先は床に届くものの踵は浮いてしまっている状態では最早ルミアには何もできない。

その部屋にいる青い髪の男性と自分を襲い、攫ったリエルの姿。

男性は天の智慧研究会のメンバーでリエルの兄。

聡いルミアはすぐに自分が天の智慧研究会に攫われたことを理解する。

男性が語るリエルの裏切りとグレンの死を聞かされて茫然自失するも、実際にその死を自分で確かめない限り、信じない。

頑なまでの強い意思をその瞳に宿す。

「ほう！ その娘が例の『感応増幅者』か！ ご苦労だった！」

大広間の扉を開けて、初老の男性が無遠慮に入ってくる。

「バークスさん……………やっぱり……………」

テラスの警告を聞いていたルミアはなんとなくではあるが、そんな気はしていた。

だが、気のせいであってほしかったと思っていた。

「ほう？ あまり驚きはしない辺り、例の吸血鬼の小僧に私の事を聞かされていたらしいな？」

「っ!？」

ルミアは目を見開いた。

テラスが吸血鬼であることをバレている。

「まあ構わん。私のような優れた魔術師は、さらに上の位階を目指さなければならぬのだ。ゆえに私は倫理だの、生命の尊厳だのとうるさい帝国を見限り、天の智慧研究会に鞍替えする——貴様を利用したとある魔術儀式の成功成果を手土産にな！ それだけよ！」

「そんな……………バークスさん、天の智慧研究会に近づくなんて

……あんな邪悪な組織に肩入れするなんて、やめてください！  
あなたの優れた才覚はそんなところで使われるべきものではないは  
ず……ッ！」

ルミアはは必死の表情で訴えかける。  
すると。

バークスはさも愉快だと言わんばかりに、含み笑いを始めた。

「……バークスさん？」

「くくく……これは、傑作だ。何も知らぬのだな、貴様は……  
こんな滑稽で愉快なことがあるか……ッ！ ふははははははは  
はは——ッ！」

呆気を取られるルミアの前で、バークスはひとしきり笑い倒し、不  
意に言った。

「ルミア……テインジエル……と言ったか。王室の血を引きながら放逐  
され、廃嫡された哀れな異能の娘よ……貴様、なぜ帝国王室の家  
系に『女』が不自然なまでに多いか知っているか？」

「……？」

「貴様ら王室の血族で異能が発現した者……貴様で何人目になる  
と思う？ まさか自分一人だけだと思っははいまいな？」

「……えっ!？」

「天の智慧研究会が邪悪？ くつくつく……私に言わせれば、貴様  
ら帝国王家の方がよほど邪悪で汚らわしいわ！ 反吐が出る！ 仮  
初めにもそんな呪われた一族にかつて忠誠を誓わされていたなど、我  
が身を切り刻んでやりたくなくなるわ！ そんな薄汚れた血の女  
王に統治される帝国の行く末など、わかりきったもの……そのよ  
うな国、早々に滅ぼし、真に優れた魔術師達——天の智慧研究会  
が実権を握って、愚かな民衆を管理してやるべきだと思わぬかね？  
ん？」

「やめてください」

「ッ!？」

強い意思が籠ったルミアの言葉が、嘲笑を浮かべていたバークスに  
冷や水を浴びさせる。



せる。

「何だど!? 馬鹿な! どうしてここが割れた!? そんなはずは――

――いや、それよりも」

ボックスが困惑するにも無理はない。

いくらなんでも速すぎる。

この場所が割れて、ここに辿り着くまで時間が有するはずなのにここまで速いのは想定外すぎる。

「いや、今はそれはいい! どういうことだ!? エレノア殿ツ!」

「さあ、どういうことでしょうか? とにかく敵勢力は一名。帝国魔術学院学士、テラス様ですわ」

「馬鹿な!? 件の吸血鬼が!」

「テラス君……………ツ!」

エレノアの情報にルミアの表情は明るくなっていく。未だ自分は絶体絶命の身のままだというのに、もう何もかもが救われ、満ち足りてしまった顔だ。

一方、そんなルミアとは対照的に、エレノアとボックスの表情はどこまでも苦々しいものだった。

「ふん! 所詮は小僧一匹! 私の作品の餌にしてくれるわ!」

ボックスはわなわなと震えながら、傍らのモノリス型魔導演算器に取り継り、呪文を唱えながら指を動かし、操作を始める。

「作品、とは?」

「ふふふ、あの第四区画には私が作った無数の合成魔獣が封印されているのだよ。その合成魔獣どもの封印を解き、小僧にけしかけてくれるわ」

己の勝利を何一つ疑わないボックス。

だが、彼は知らない。

怪物の恐ろしさを。

――その強さも。

貯水庫のような場所でテラスは合成魔獣を相手にその歩みは止め

ず、突き進む。

近づいてくる合成魔獣キメラをその爪で切り裂き、魔術を使用して倒す。数の利で攻めてくる合成魔獣キメラ達の攻撃が当たっても瞬く間にその傷は癒えて元に戻り、テラスの攻撃にやられる。

「《穿て》」

雷閃が空気を切り裂いて、獅子の合成魔獣キメラの頭を貫く。

葉と蔓の人間の姿を模った植物の合成魔獣キメラをその爪で切り裂く。

「ルミア、今行くよ……………」

夥しい合成魔獣キメラ達の亡骸を後にテラスはこつ、こつ、こつ、と足音を鳴らしながら先に進んでいく。

「……………止まりませんね」

その時、からかうようなエレノアの言葉に、バークスは拳を震わせていた。

「くそ……………小僧ゴごときに……………ッ！」

モノリス型魔導演算器の表面上に次々へと送られてくる自慢の合成魔獣キメラの惨憺たる戦闘結果を目の当たりにしたバークスは、忌々しげにモノリスを拳で叩いた。

「い、いいいだろう……………これまではタダの小手調べだ！あの程度でくたばってしまったては、こちらも面白くはないッ！こちらも最高傑作で出迎わせてもらおう……………ッ！」

血走った目で、バークスがモノリス型魔導演算器を操作していく――

「ふ、ふはははッ！今度のこいつは凄いだぞお！かき集めた魔鉱石から作り上げた宝石獣だッ！三属攻性呪文アサルト・スペルなど効かんし、いかなる武器でもこの獣を傷つけることはできません！真銀ミスリルか日緋色金オリハルコンの武器でもない限りなあ!?ふははははは――ッ！」

エレノアは、そんなバークスを実に楽しげに見守っていた。

「今度は大亀だね……………」

通路を踏破して大部屋に侵入したテラスを待ち構えていたのは見上げるほどの大きな亀。その大部分が透き通る宝石のように構成されている。

「ウオオオオオオオオオオオン……………」

大亀が後ろ姿で立ち——テラスめがけて、倒れ込むように、その剛腕を叩きつける。

避けるも、テラスがいた場所を大亀の腕が叩きつけられて、施設全体が震えた。

「ウオオオオオオオオオオ——ツ！」

そして、大亀が雄叫びをあげると——その身体に埋め込まれた宝石のあちこちが、激しく帯電し始める。

目前でバチバチと稲妻を爆ぜさせる大亀の姿に、テラスは身体を霧にする。

「ウオオオオオオオオオオ——ツ!？」

不意に獲物がいなくなつて戸惑う宝石獣。

すると、ドバ、と突如宝石獣は大量の血を吐き出して体中を痙攣させ、最後にはピクリとも動かなくなった。

そして、霧から再び実体に戻ったテラスは何事もなかったように歩き続ける。

「便利だよね、この能力……………」

吸血鬼の能力『霧化』は何も身体を霧にして姿を晦ませるだけの能力ではない。敵の口や鼻孔から体内に侵入して内側から攻撃することもできる。

テラスはこの能力で宝石獣の内臓という内臓を切り裂いて内側から殺した。

いくら最硬の防御力を誇っているものでも内側は弱いものだ。

エレノアは啞然とするバークスに、くすりと笑った。

「……………ば、……………馬鹿なツ！」

目の前の信じられない光景に、ボックスは顔を真っ赤にして震えていた。

「なんなんだ、なんなのだあれは………ッ!?、もはや人ではない怪物の類か!? ああ、あの男は一体、何者なんだ!?!」

「落ち着いてくださいませ、ボックス様。魔術師にとって、相手が思いもよらない切り札を隠し持つておくことなど実に基本的なこと。それよりもいかが致しましょう。あの区画を突破されてしまいましたら、この中央制御室まではもう、目と鼻の先——早急に対処する必要が御座います」

「そんなことは、わかっておる! ええい! 私が自ら打って出る!

あの小僧に我が魔導の力を見せつけてくれる! エレノア殿!

貴女も来い!」

「畏まりましたわ、ボックス様」

(……………さて、いかがいたしましたでしょうか)



## 人外の領域

ルミアを助けるために、その歩みを止めないテラスは暗く狭い通路を進んで行くと、不意に開けた空間に出た。

そこは何かしらの保管庫のようだ。

大広間のような室内は薄暗く。床や壁、高い天井の所々に設置された結晶型の光源——魔術照明装置の光はかなり絞られており、辺りには謎の液体で満たされたガラス円筒が、無数に、延々と規則正しく並んでいた。

「……………うわぁ」

ガラス円筒の中を覗くと、流石のテラスも思わず声が出てしまう。

その中にあるのは人間の脳髓だった。

それが、延々と標本のように並べられている。

「全部、異能者か……………」

ガラス円筒につけられているラベルの文字を読んで、それが異能者だと知った。

異能はこの世界では『嫌悪』の対象。

異能者だけだという理由で差別と迫害の対象に成り得るが、バークスは典型的な異能嫌いなのだろう。

進むと、テラスは一つのガラス円筒の前に足を止める。

立ち並んでいるガラス円筒の一つにあるのは脳髓ではない。

人の形を残した少女が入られているのだが、その少女は『生かされている』状態だった。

手足は切断され、全身に無数のチューブに繋がれて、魔術的に生かされているだけで、もうあらゆる意味でその少女は終わっている。

「……………」

こんな状態でも、僅かに意識があつたらしく、少女が身じろぎする。

少女の虚ろな目と、テラスの目が合う。

少女の口から弱弱しく動く。

コ、ロ、シ、テ。

そう告げている。

「僕は神父でもなければ牧師でもないし、経も聖句もわからないけど。君の来世に幸があることを願うよ」

テラスはスベル・ストック詠唱済みの「ライトニング・ピアス」を起動した。

雷閃はガラス円筒ごしに少女の心臓を貫いて、命を刈り取った。

「貴様!? 私の高貴な実験材料になんてことをしてくれただ!?」

「昼ぶりですかね? バークスさん」

円筒の群れの向こう側に入入り口から罵声と共に姿を現した。

「おのれえッ! 今、貴様が壊したサンプルがいかにも魔術的に貴重なものか、それすらも理解できんのか!? これだから物を知らんバカガキは困るッ!」

「生憎と僕の興味ではありませんしね。これらの貴重性を問われても困りますよ?」

やれやれといわんばかりに肩を竦める。

「貴方みたいな人間を相手にする暇も今はないですよ? どいていただけませんか?」

「フン! そんなにあの薄汚い小娘が気になるか!? 小僧! だが、貴様はこの私が自ら滅ぼしてくれるわ!!」

「《そうですね》」

呪文改変で「ライトニング・ピアス」を唱える。

「《霧散せり》!」

だが、バークスは「トライ・バニッシュ」を唱えて打ち消した。

「冥途の土産に見せてやろう。真の魔術師が振るう本物の神秘の魔術を」

いつの間にか取り出した金属製の注射を、自分の首筋へと打ち込んだ。

「なんですか? それは」

「気になるか? ふつ、これはな……………貴様のような小僧には想像もつかぬ神秘の産物よ」

その時、バークスの身体に異変が起きた。

バークスの全身の筋肉が突然、隆起し始めたのだ。初老にしては体格の良いバークスの身体が、めきめきと、さらに不自然に脹れ上がった。

ていく——その全身に視覚的にわかるほどの圧倒的な力が漲って  
いく——

「ふはははは！ お前にこれの凄さがわかるか!? 今、この私に何が  
起こっているのか理解出来るか!? 無理であろう！ なんなら私に  
魔術を放つといい!!」

「《そうですか・では・お言葉に甘えて》」

「ライトニング・ピアス」を起動させて、一閃がバークスの額を貫く。  
「効かん、効かんなあ……………」

バークスはほんの少しだけ、仰け反っただけで穴の開いた額はめき  
めきと音を立てて、塞がっていく。

「……………再生能力。それがバークスさんの仰ってた本物の魔術  
ですか?」

「最近の若造は結論を急かすのう。これはそれだけではないわ!」

バークスの右腕が激しい勢いで燃え上がり始めた。

(炎熱系のアサルト・スベル攻性呪文……………?)

詠唱済みの炎熱系と思い、「トライ・バニツシュ」で打ち消そうと呪文  
を唱える。

「《消えろ》」

バークスの腕から炎の帯がうねり上げて、完了した呪文で打ち消そ  
うと試みたが、炎は消えずにテラスの半身を吹き飛ばす。

「……………なるほど、魔術ではないのですね?」

しかし、瞬く間に再生して元に戻るテラスはその威力を身をもって  
知り、バークスが先ほど自身に打ち込んだものの正体がわかった。

「半身を吹き飛ばしてもまだ生きておるとは……………まさに怪物に相  
応しい存在だな、貴様は」

「頭に風穴空いて生きている今のバークスさんがそれを言いますか  
?」

「私を貴様のような怪物小僧と一緒にするではないッ！ 私はな  
……………生命の神秘を解き明かすため、無数の異能者を調査・研究す  
る過程でな……………その異能力を異能者から抽出し、己の能力として  
意図的に引き起こせる魔薬ドラッグの合成に成功したのだよッ！ ふははは

ははっ！ 異能ごとき、真の魔術師にとっては使われる道具の一つにすぎぬ！ もはや用済みとなったこの生ゴミ共と一緒に貴様も処分してくれるわ！」

興奮の絶頂のように高らかと己の研究の成果を語るバークスにテラスは呆れた。

「……………そんなものですか？ 正直期待外れですよ、バークスさん。そんなただのドーピングを使ったぐらいでそこまで自慢できるものなのですか？ その神経の太さだけには尊敬の念を抱きますよ」

「な……………ッ!? なん、だと……………ッ!?」

「所詮借り物の力。貴方は異能という力を使っているだけで、使いこなせていない。真にその力を扱えるのはその力を授かった者のみ。借り物の力を使って吠えないでください」

「借り物……………ッ！ 私のこと、この力を……………私の力を……………ッ!?」

みるみる顔を真っ赤に染めるバークスに、テラスは告げる。

「貴方のそれが真の魔術と仰るのなら僕は僕の真の魔術をお見せしましょう。本当なら、貴方のような人間には過ぎた代物なのですが……………」

「ほざけ!」

手をかざして発火能力を発動させる。

降り注ぐ炎獄の豪雨の前にテラスは静かに手を前に突き出す。

「《氷狼は疾走す》」

一節詠唱のC級軍用魔術、黒魔「アイス・ブリザード」の呪文詠唱を聞いてバークスは鼻で笑った。

(所詮は小僧！ そのような魔術で相殺できるわけがなからう!?)

バークスが発動している発火能力はB級軍用攻性呪文アサルト・スベルに匹敵する。

完全にこちらが有利。口先だけの小僧であるテラスはそのまま灼熱炎の餌食だと高をくくっていた。

「……………は?」

根本的な威力規格が違うにもバークスは信じられないものを見た

かのように啞然とする。

「炎が……………凍った、だと……………ツ!?」

バークスが放った発火能力の炎が凍っていた。

眼前で起きたこの光景に驚きを隠せれない。

「バ、バカな……………ツ!? あ、ありえん! いったい何が起きて……………ツ!?」

理解が追いつかない。

そんなバークスにテラスは言葉を飛ばした。

「驚くものではありませんよ? これは僕の固有魔術オリジナルですから」

「なんだと!? 炎を完全凍結するのが貴様の固有魔術オリジナルというのか!? ならば——」

次のバークスは冷凍能力を発動させて、テラスを凍り漬けにしようとするも。

「《吠えよ炎獅子》」

圧倒的熱量の炎に異能の氷でさえも溶かした。

「あ、ありえん!? たかが一節詠唱でそれほどまでに高威力の魔術が使える訳が——ツ!?」

そこでバークスが気付いたのは本当の意味で優秀だからだろう。

「僕の固有魔術は指定したあらゆるものの次元を高め、別の領域に至らせる。これが僕の固有魔術【人外の領域】。今回は三属攻性呪文アサルト・スベルを指定しました」

「そ、そのような固有魔術が……………ツ!? だが、いくらそのような固有魔術をもつてしても不死身の私を倒すことは不可能——ツ!?」

己を鼓舞するように語るバークスにテラスは腕を上げる。

「不死身? それは塵一つ残らず消滅してから言ってください」

「《紅蓮の獅子よ・憤怒のままに——》」

三節で呪文を唱えるテラスにバークスは笑みを見せる。

(馬鹿め!?! いくら威力を上げようとも所詮は三属エネルギーには変わりない!)

物質中の電素操作エトロンで生まれる、炎熱、冷気、電撃の三属エネルギー。

ならそれを零基状態に戻すことが出来る【トライ・バニツシュ】で打ち消せられる。

「《霧散せり》！」

——勝った。

「——吠え狂え」

だが、呪文は何事もなく完成されて黒魔【ブレイズ・バースト】は起動した。

収束熱エネルギーの炎は太陽の如く輝き球体が姿を現した。

「言ったでしょう？ 僕の固有魔術オリジナルは次元を高め、別の領域に至らせると。【トライ・バニツシュ】で打ち消すことなどできませんよ？ ではさようなら」

馬鹿げた熱量で放たれる灼熱の太陽を前にボックスはこれ以上にならないぐらい目を見開いた。

「そんな……………選ばれし者である私が……………」

その言葉を最後にボックスは塵一つ残らずにこの世界から消え去った。

「さて、急がないと……………」

消え去ったボックスを背にテラスは先に進む。

涙を流すのは

「お待ちしておりましたわ。テラス様」

延々と続く通路を歩いていると、その先には優雅に一礼する黒髪の侍女服の女性がいた。

「私は天の智慧研究会、アダプタス・オーダー第二団《地位》が一翼、エレノアⅡシャーレツトと申します。以後、お見知りおきを」

「ご丁寧にも。僕はアルザーノ帝国魔術学院学士、テラスⅡヴァンパイアです。テロリストとはいえ、女性とは戦う気はありません。そこを通しては頂けませんか？」

「あらあら、随分とお優しいです事。女性の扱いには慣れていらっしゃるよう  
で」

「いえいえ、少し前までは男女平等で敵なら女子供も関係なく殺してましたが、口うるさいお姉さんから口酸っぱく女性は大切に扱うようにと教え込まれたもので」

脳裏を過る説教する銀髪の女性。

「それは良いお姉様ですこと。では、私がテラス様の行方を阻むと申しましたらいかがなさるのでしょうか？」

「殺しますが？ 邪魔をするのでも殺します。ルミアを傷付けても殺します」

「ああ、過激ですわ。王女の為なら殺害も辞さない。ふふふ、羨ましい限りですわね」

妖艶に笑うエレノアにテラスは少しばかり困惑している。

眼前にいるエレノアは間違いなく強い。負けはしないが、固有魔術オリジナルを使わなければきつと勝てないだろう。

(だけど、僕の固有魔術オリジナルには制限が多い……………)

テラスの固有魔術【人外の領域】

指定したあらゆるものの次元を高め、別の領域に至らせる。

一度発動すれば、一見最強の力を持っているように思われるが弱点もある。

テラスの固有魔術オリジナルには回数制限と使用時間が存在する。

使えるのは一日に二回まで、それも三分という短い時間しか使えない。

それも、一度指定したら変更は不可能。一度解除してもう一度使わなければ使えない。

おまけに消耗も激しい。

今のテラスが二回目の固有魔術オリジナルを使ったら確実にマナ欠乏症に陥る。

念の為に予備魔力が詰まった——魔晶石を二つ常備しているとはいえ、出来ればエレノアは避けて通りたい相手だ。

「ご安心くださいまし。私の目的は既に達成しております。テラス様と戦う気は毛頭ありませんわ」

テラスの心情に察したかのように戦闘は行わないと告げる。

「テラス様の迅速な行動で少々焦りはしましたが、それはもう結構。バークス様を囿に私はこの場から去ろうと思いましたが、その前に少々テラス様とお話がしたくて参りましたわ」

「なんででしょうか？」

「我等大導師が率いる組織、天の智慧研究会までご足労を願いませんか？ 貴方様の實力でしたらすぐに第二団アデプタス・オーダー《地位》の席をお約束致しますよう。……………いえ、吸血鬼も力も踏まえて第三団ヘヴンズ・オーダー《天位》に加えて貰えるように私が口添え致します」

「それは随分と好待遇ですね……………」

帝国有史以来、歴史の裏で暗躍を続けてきた謎の魔術結社——天の智慧研究会。

だが、実際に行動を起こすのは、常に第一団ポータルス・オーダー《門》と第二団アデプタス・オーダー《地位》の位階の者達ばかり。

その上、最上位階、第三団ヘヴンズ・オーダー《天位》は都市伝説とされている。

実在していることにも驚くが、エレノアがテラスを自分の組織に加えようと勧誘スカウトすることにも少々驚いた。

「ただの学士を随分と買ってくれますね……………？」

「御冗談を。魔術師の腕と吸血鬼の力も踏まえればこれぐらいは当然のことです。ただの学士で収まるなど御冗談が過ぎますよ？」



吸血鬼であることがバレていることは別段驚きはしない。

そもそも隠す気などもとからないのだ。それで怖がられようが別段テラスには痛くも痒くもない。

「いかがでしょう？ 他に何かございましたら出来る限りはその要望をお聞きしますが？」

「いえ、結構です。僕は天の智慧研究会に入るつもりはありませんから」

「……………その理由をお聞きしても？」

好待遇の勧誘<sup>スカウト</sup>を断るテラスにエレノアはその理由を問いかけた。

「僕はルミアと契約を結んでいます。例えば、世界を敵にしても僕はルミアの味方です。敵である天の智慧研究会には入りません」

ルミアの血を対価にテラスは何があってもルミアの味方でい続ける。

その契約の下にテラスは動いている。

——のだが

「それにこんな怪物を恐れずに優しくしてくれるルミアを傷付けている貴女方、天の智慧研究会を許す気はありませんので」

今はそれだけではない。

孤立して孤独に生き、怪物となったテラスをルミアは人間にしてみせると言った。

自分なんかの為にそこまで言ってくれた。そんなルミアをテラスは助きたい。

「あらあら、お熱いですこと。羨ましくて、嫉妬に狂ってしまいそうですわ」

艶を帯びた熱っぽい息も漏らす。

「そうであれば致し方ありません。今日のところはこの辺で失礼させて貰いましょう。それでは失礼」

最後に優雅に一礼してその姿を消した。

恐らく短距離の転送魔術によってこの場から去ったのだろう。

何がどうあれ、戦闘が避けられたのはテラスにとっても好都合だ。

歩みを進ませるテラスは最奥の部屋の扉を開ける。

「テラス君ッ!!」

「ルミア……………凄いい格好だね?」

入ってルミアの声を聞いて安堵したが、ルミアのその姿に思わずその口走った。

まあ、傷らしい傷も出血の匂いもしない辺りは最悪よりも大分マシではあるが。

「助けに来たよ。遅れてごめんね?」

簡素に謝り、テラスは青髪の青年と大剣を構えているリィエルに視線を向ける。

「リィエル。君はルミアとシステイーナの友達じゃないの? どうして助けずに敵の味方をしているの?」

「……………だれ? わたしは貴方を知らない」

「……………まあ、碌に会話をしていないからそうかもしれないけど、一応同じクラスなんだから顔ぐらいは覚えて欲しかったよ……………」

「そう」

地味にショックを受けるテラスだが、リィエルは素っ気ない態度のまままだ。

「馬鹿な……………なぜ、君がここに……………バークスとエレノアはどこへ行ったんだッ!? まさか、やられたというのか!?!」

「二人ならもういませんよ」

青髪の青年が顔を青ざめながら叫ぶ、その疑問にテラスは答えた。

「後は貴方だけですよ?」

一歩踏み出そうとした瞬間――

「それ以上、兄さんに近づかないで」

リィエルがテラスの前に立ちちはだかった。

「リィエル!?! さ、流星は僕の妹だ!」

リィエルがテラスに立ち向かったのを見た『兄』は、すぐにその余裕を取り戻す。

「リィエル! そいつを倒してくれ! 僕の為に!」

「……………わかった」

その『兄』は、慌てて奥の儀式魔法陣へと駆け寄り、再び作業を開始する。

「……………お兄さんがいたんだね？　それで？　リエルはお兄さんの為にグレン先生を殺しかけて、ルミアとシステイーナを裏切ったの？　グレンはわたしのすべてって言っておきながら随分とあつさりと殺しかけたね」

「……………グレンは生きてるの？」

「多分ね。ほら、あの先生は無駄にしぶといから」

「……………そう」

「リエル。先生は優しいからきつと許してくれるし、ルミアやシステイーナもきつと君の事を許してくれるから、戻ってこない？　そして僕も今回の件は目を瞑るけど……………」

「わたしは兄さんのために、戦う。それがわたしの存在理由」

低く深く、剣と大勢を構えていく。

それを見て、テラスは嘆息する。

「はあ、やっぱりこういう正義の味方のような説得は怪物の役割じゃないね。じゃ、リエル。戦う前に一つ訊いてもいいかな？　同じクラスメイトのよしみで」

「……………なに？」

「どうして人間じゃない君にお兄さんがいるの？」

「……………え？」

そのあまりにも突発的な言葉にリエルだけではなく、ルミアもリエルの『兄』も動きを止めて呆然としていた。

「……………な、なに……………を……………言っているか、わからない……………？」

明らかに動揺を見せるリエル。その絶対的な隙をテラスは見逃さない。

「《風よ・四肢を・封じる》」

瞬時、風の拘束魔法でリエルの動きを封じた。

「さて、悪いけど大人しく僕の話聞いて貰うよ？　今のリエルなら話を聞かずに暴走して貰っても困るから」

「ぐう、——うっ！」

拘束から逃れようとするも逃れられない。そんなリエルの横を通り過ぎてテラスは爪を伸ばす。

——奥にある儀式場にある三体の氷晶石柱に向けて。

「ま、まさか……………やめろ、おい、やめてくれ!!」

切羽詰まったように『兄』は叫ぶが、そんなのお構いなしといわな  
いばかりにテラスはその氷晶石柱を切崩して中にあるものを取り出  
す。

「え……………?」

「う、そ……………?」

困惑、戸惑うルミアとリエル。

何故なら氷晶石柱から出てきたのはリエルと瓜二つな人形だ。

「やっぱり、『Project:Revive Life』。ルミアを  
使ってそれを成功させようとしていたんですね? ライナーさん」

「ッ!? ど、どうしてその名を……………ッ!」

「グレン先生から全てを聞きましたからね」

リエルが編入生としてやってきたその日にテラスはグレンから  
二年前の事件のことを聞いていた。

「——『Project:Revive Life』……………通称

『Re<sup>リエル</sup>ll計画』」

テラスは視線を拘束しているリエルに向けて告げる。

「リエル。君は世界初の『Project:Revive Life』の成功例。君の記憶の中にあるの『兄』の名は『シオン』。二年前、  
天の智慧研究会に囲まれている妹——『イルシア』とそこにいるシ  
オンの友人であったライネルを逃そうと帝国宮廷魔導師団に亡命を  
打診して、結局裏切り者として粛清された稀代の天才錬金術師。リ  
エル、君はシオンの妹であるイルシアの『ジーン・コード』から、錬  
金術的に錬成された身体を持ち、イルシアの記憶情報……………『ア  
スラル・コード』を引き継いだだけの魔造人間。そんな君に兄どこ  
ろか家族すらないよ」

「……………あ……………あ……………」

「嘘だと思う？ だけど、事実だよ。グレン先生はこれを隠していたから君は知らなかっただろうけど、そのグレン先生から直接聞いたから間違いはないよ」

「だって……………それなら……………」

がたがたと震えるライエル。

「妹の記憶を引き継いだ君の記憶をこのライネルという人間が改変したんだらうね？ 人の認識は意外だけど容易に修正できる。確か白魔術には記憶操作系の術式系『キーワード封印』があったからそれをライエルに使ったんでしょ？ ライネルさん」

「ひいつ!？」

テラスの爪がライネルの喉元に突きつけられる。

「ま、待って……………テラス君、それなら、ライエルの本当のお兄さんは……………」

「だから言ったよ？ 死んだって。それにこの人形を見る限りはライエルも不用品として処分しようと考えていたみたいだけど……………それも失敗に終わりましたね？ ライネルさん。最後に言い残すことがあるのなら聞きますが?」

「た、《猛き》——」

呪文を唱えようとしたライネルだが、テラスの爪が肩を貫いた。

「あ、ああああああああああ—— ツツ!？」

貫かれた肩を押さえて、床に倒れるライネルをテラスは見下ろす。「グレン先生なら組織の情報を探るといふ目的で生かしたでしょうが、僕はそこまで優しくはないんですよ？ 大人しくするのなら苦痛を与えずに殺してあげますが?」

日常生活のように話すテラスが、ライネルにとってはもはや狂気すら感じる。

殺すことなどまるで日常茶飯事のように告げられたライネルは身を震わせた。

「い、嫌だああああ—— ツ!? や、やめろツ! やめてくれええええええ—— ツ!?」

「命乞いですか? してもいいですけど僕は貴方を助ける気はないの

で止めた方がいいですよ?」

「お、お願いだ、殺さないでくれツ!? し、死にたくない……ツ!?」

「テラス君! そんなの駄目! いくらなんでもそこまでは……ツ!?!」

ルミアもライネルを殺そうとしているテラスを止めようと叫ぶ。

「駄目だよ、ルミア。敵は殺した方がいい」

「だけどテラスは止まらない。」

一切の躊躇いも同情も良心の呵責をなく、テラスはその爪を振り上げる。

「う……うあ……た、助けて……死にたく……な……」

「さようなら。地獄があるのならそこで会いましょう」

その命を刈り取る狂爪が振るわれる。

——その刹那、一発の銃弾が振るわれたテラスの腕に直撃し、その軌道を強引に変えられた。

「……酷いですね。普通撃ちますか? グレン先生」

呆然自失のライネルを置いて、視線を部屋の扉に向けるとそこには見知った人物であるグレンとその隣にはアルベルトの姿がそこにある。

「……先生ツ?! 良かった……」

グレンの健在な姿に安堵するルミアの視線の先にいるグレンは銃を下に向ける。

「馬鹿野郎。生徒に人を殺させる教師がいるか」

「それにしてもお早い到着で」

「どっかの天才様のおかげで真っ直ぐここに来れたからな。たくつ、一人で全部解決しようとしてんじゃねえよ。俺の出番がなくなっちまうだろうが」

ふざけたように愚痴を溢すグレンだが、真剣な顔でテラスに告げる。

「殺すな。ルミアの為でもお前がその手を血で染める必要はねえ。もう、誰も殺すな」

「……………保証はできませんが、善処はします」

リエルの拘束を解いて、ルミアを自由の身にするテラスは自分の上着をルミアに羽織らせる。

「ルミア。悪いけどリエルをお願い」

「……………テラス君」

「落ち込んでいる人を励ますのは僕には無理だから」

「うん……………」

テラスの言葉に頷き、ルミアは膝をついて俯いているリエルに歩み寄る。

「リエル、帰ろう」

優しく、その手を伸ばすルミアにリエルは俯きながら小さく首を横に振る。

「……………わたしは生まれた意味がわからない……………もう、何の為に生きればいいのかわからない……………」

「リエル……………」

「この記憶も他人のものだし……………わたしはただの人形……………」

自分の正体を知り、存在理由を失くしたリエルにあるのは孤独感と喪失感。

何の為に生まれて――

何の為に存在し――

何の為に生きればいいのか――

リエルにはもうそれがわからない。

そんなリエルをルミアは優しく抱きしめた。

「ルミア……………」

「そんな寂しいこと言わないで。リエルはリエルだよ。他の誰でもない私の大切な友達」

「でも……………わたしは、ルミアやシスティーナに酷いことをした……………」

「酷いことをしたら謝ればいいんだよ？ きちんと謝ればシスティーも許してくれる」

「……………」

「それともリィエルにとって私やシステイは友達じゃないの？ それ  
は嫌だな」

「違う。…………でも、わたしは……………」

「何の為に生きていいのかわからないのら、これから探せばいいんだ  
よ？ 突然だから戸惑うかもしれないけど……………探そうよ。

……………私達と一緒に」

「……………一緒にいても……………いいの？」

「今、こうやって私がリィエルを抱きしめているのが答えじゃない？」

「……………う」

そして……………

「……………うあ……………ぐずつ……………る、ルミア……………ルミアあ

……………ひつく……………うああ……………」

「ほらほら、よしよし……………泣かないで、リィエル……………」

リィエルはルミアの腕の中で、ぐすぐすと泣き始めた。

そんな二人のやり取りを見て、テラスは微笑を浮かべる。

(流石は、ルミアだね……………)

怪物が与えるのは残酷な現実と絶望のみ。だから、テラスにはリィ  
エルは救えない。

だけど、そんな怪物にでも広い心を持って優しく接してくれるルミ  
アならきつとリィエルは救えると思っていた。

(リィエル。君は『人間』だよ……………。怪物である僕が保証する)

涙を流すのは人間である証。

流さないのは人形と怪物だけだ。

その証拠にテラスは■■■■だった時から一度も涙を流したこと  
がない。



そんな二人に朝日は

東の空も白む明け方頃。

グレンとテラスはルミアとリエルを連れて旅籠に帰ってきた。帰りを待っていてくれたシステイーナやクラスメイト達は無事な姿に安堵の息をつく。

そして、システイーナはリエルの頬に平手を張り、固く抱きしめて涙を流し、リエルもぼろぼろと涙を零した。

二人の様子を微笑みながら見守っているルミアの目元にも、やっぱり大粒の涙が浮かんでいる。

カッシュ達は三人の様子を見て何も言わず、自分達の寝所に向かい始めるなか、テラスは静かにその場から離れていく。

「これにて一件落着……………かな？」

微笑を浮かべながらそう口にする、背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「もう、どこに行こうとしてるの？」

「いや、ルミアこそ二人の傍にいてあげなよ？ 空気を読んで離れたんだから」

「……………そうだけど、テラス君の後ろ姿を見たらどこか遠くに行つてしまいそうだったから」

「心配性だな。別にどこも行く気はなかったけど？」

「……………それならどうして、旅籠とは正反対の方を歩いてるの？」

「……………」  
「私達に気を遣ってくれているからだけじゃないよね？ 何を隠してるの？」

よく見ていると、思った。

そんな挙動すら見せた覚えはないのに。

「大したことはないよ」

「大したことはあるんだよね？」

逃がさないようにテラスの腕を捕まえるルミアに流石のテラスも一歩後退った。

「……………今日はどうしたの？ 随分と強引だね？」

「……………この手を離したらテラス君がもう私の前からいなくなってしまうそうなんだもん」

握られている手に力が込められる。

払えないことはないが、それでも払う気にはなれない。

さて、なんて言い訳して納得してもらおうかと思案する。

「……………テラス君があんまり人と関わろうとしないのはどうして？ 人間じゃないから、じゃないよね？」

「……………」

「時々だけど、まるで自分を戒めているような、そんな目をしているから……………」

一瞬、息ができなかった。

何を言っているのかわからなかった。

「上手く言葉にできないけど……………どこか線引きされているような、そんな気がするの。深く関わらない様に距離を置かれているみたいなの……………」

「それはそうだよ？ 僕は男でルミアは女性。男女間を気にして距離を取るのとは普通で——」

「嘘だよね？」

ルミアと目が合う。まるでそんな嘘などお見通しといわないばかりに真っ直ぐに向けられる。

「……………どうして嘘だって言えるの？」

「だってテラス君が男女間を考えるような殊勝な人じゃないもん」

「失礼な……………」

思いも寄らない失礼な発言にテラスも本気でそう思った。

「多分だけど……………誰かを傷付けないように距離を取っているんじゃないかな？ 自分を怪物と口にするのも、自分に近づけさせない様にするために」

「僕が怪物だということは正真正銘の事実だよ。それはルミアも知っているでしょ？」

「……………うん。でも、それ以上にテラス君が優しい人だってことも

わかるよ」

「僕は優しくなんかないよ。優しいやつが人間を平然と殺すようなことはしない。必要であれば僕は人を殺す手段も容易に取る怪物だよ」

■■■■だった頃、人を殺しても何も思わなかった。

この世界で生まれてからも多くの人間を殺して、その返り血を浴びてもテラスは何も思うことはなかった。

周囲から見ればテラスは紛れもない——怪物だ。

「……………テラス君は自分のことが嫌い、だよね？」

確信染みたその言葉に僅かにテラスの目元が動く。

「わかるよ、私も自分の事が嫌いだから。私のせいでクラスの皆を巻き込んで、システイやグレン先生を傷付けて、私なんかいなくなっただけ。そう思っていたから。でもね」

柔らかな微笑みを浮かべながらルミアは言った。

「テラス君が変えてくれたんだよ？ 傍にいてくれて、守ってくれて、救ってくれた。私は三年前のあの日からテラス君のことが好き。私は貴方の事をお慕い申し上げます」

「ルミア……………」

「私の事はどれだけ傷つけてもいい。だから、テラス君。私を貴方の傍においてはくれませんか？」

思いも寄らなかつた。

ルミアがこんな気持ちを抱いていたなんて、想像もしていなかった。

真意あるルミアの言葉は本当だろう。

本当に心から自分の事を慕い、寄り添ってくれようとしてくれる。だからこそはつきりとテラスは言い切った。

「ごめん、ルミア。僕はその気持ちを受け取ることは出来ない」

だからこそはつきりとテラスは言い切った。

「僕は怪物。君は人間。この境界線は決して交わることはない。僕の事を慕ってくれる気持ちは嬉しいけど、それでルミアを悲しませる気はない」

断り、己の立場を考えて物事を言う。

「僕じゃない、人間の別の誰かを好きになるべきだ。だから、これかも友人として接して欲しい」

そう、それが一番の最善の案だ。

なにより、それは残されるルミアの為にならない。

「それにね、ルミアにはまだ話してはなかったけど、実はと言うと不老不死である僕を殺せる方法が一つだけあるんだ」

「……………え？」

「愛だよ。恋愛、家族愛、友愛。そこに愛があればいい。心から愛し愛されることを僕が理解し、納得して幸せに満たされたら僕の肉体と魂は灰へと変わり、この世を去る。それが、僕を殺せる唯一無二の方法だ」

「そんなのって……………」

その方法を聞いたルミアはあんまりだと思った。

孤立し、孤独で生きてきたテラスが生まれてから一度も与え、与えられなかったもの。

その愛を知った時にテラスの命は尽きる。

怪物として永遠の生を味わうか。

愛を知って、それを成就しないまま命が尽きるか。

それが邪神がテラスに与えた条件だ。

「セラ姉さんはこれを承知の上で僕を家族として愛してくれる。それを僕が納得すれば僕は死ぬ。眷属であるセラ姉さんと一緒にね」

セラは自分の命をかけてテラスを愛する。

それが自分も破滅になったとしてもセラに後悔はない。

だけど、ルミアは違う。

ルミアは人間。吸血鬼でもなければその眷属でもない。

万が一に、テラスとルミアが愛し合う関係になった時、残されたルミアは一生テラスの死を嘆き、悲しむだろう。

「わかってくれた？ 僕達は決して幸せにはなれない。だから、互いの為と思って諦めて——」

「簡単に言わないでッ!!」

諦めさせようとしたが、ルミアは大声を張り上げて遮った。

「簡単に言わないですよッ！　簡単に諦めきれないよ……………ッ！　私は、私はずっと……………ッ」

地面に落ちる雫はルミアの頬を伝って落ちていた。

「……………嫌つてもいい。辛いだろうけど、諦めて欲しい」

踵を返してルミアの傍から離れようとする。

嫌われても、恨まれても、憎まれても。テラスはそれを全て受け止める。

それが、ルミアを最悪な形で振った最低限の義務だ。

(これでいい……………ルミアは僕とは違う……………)

怪物と人間の愛はいつだって悲劇を生む。

恐らく邪神はその悲劇を見たいが為に、テラスを怪物にする後押しをしたのかもしれない。

そう思っていた時。ルミアが抱き着いてきた。

逃がさないといわなければかりに力の限り、強く抱きしめてくる。

「……………諦めて」

「諦めきれないよ……………」

「僕と君とでは何もかも違う。これは互いの為にはならない」

「そんなこと関係なく、私はテラス君と一緒にいたい……………」

「そんなの後悔するだけだ。君は人間としての幸せを成就するべきだ」

「……………なら、私も吸血鬼になる」

思い掛けないその言葉に目を丸くするもテラスは首を横に振る。

「それは駄目だ。君には皆やグレン先生……………なりよりシステイナーがいる」

「システイも皆もきつとわかってくれる。その上できつと受け入れてくれる」

「それはあくまで可能性があるだけであつて確定じゃない」

「それでもいいの。私が吸血鬼になることでテラス君を愛せて、傍にいられるのなら私は喜んで人間を捨てるよ」

「……………僕を人間にするんじゃないか？」

「うん。だから私も吸血鬼になったら一緒に人間に戻る方法を探そう」

？ ふふ、長生きできる分可能性も増えたね」

「それはそうだけど……………」

人間よりも遥かに長い時間を生き続けられるのなら確かに可能性は増える。

「だけど、それは——」

「理屈じゃない？ そうだね。でも、女の子の本気の恋も理屈なんかじゃないんだよ？ 相手がどんな人でも、それが怪物でも関係ないの」

心を読んでいるからのように話したルミアは力を緩める。

テラスは振り返ってルミアと対面する。

そこにはいつもの優しい笑みを見せるルミアがいた。

「貴方の傍に居させてください。ううん、どんなにテラス君が突き放そうとしても私が勝手に傍にいるから覚悟してね？」

ウインクするルミアにテラスは言葉を詰まらせる。

告白のほすが、何故か妙な宣言を受けてしまう嵌めになったことに呆ればいいのか、ルミアが意外にも根が強いと諦めればいいのか。

どちらにしろ、ルミアがテラスの事を諦めるといふ選択肢はないというのはわかった。

「……………ルミアがこんなに強いなんてね」

「ふふ、恋する女の子は強いんだよ♪」

「身をもって知りました……………」

苦笑しながら降参するように両手を上げる。

「でも、僕はルミアを吸血鬼にする気はない。例え人間に戻れる手段があつたとしてもそれをしない」

「うん」

「僕は誰かを愛したことも愛されたこともない。知らず知らずのうちに君を傷付けるかもしれない」

「うん」

「心に一生消えない傷を背負わせるかもしれない。苦痛を強いらせる生活を送らせるかもしれない」

「うん」

「僕の傍に居ることが幸せになれるかわからない。それでも、それでもルミアは僕の傍にいるの？」

「はい。私をテラス君の傍においでください」

「……………わかった」

ルミアの強い覚悟にテラスも頷いて応じる。

「こういう時はここで愛の言葉を言うと思うけど僕は愛を知らない。代わりに一つ約束する。僕はこれからも君を守り続ける。だから、僕の傍にいて欲しい」

「うん。私はテラス君の傍にいるよ。どんな時でもずっと……………」

背中に手を回して抱きしめるルミアにテラスもルミアを抱き返す。

朝日はそんな二人を祝福するように穏やかな光を差し込む。

## 安息

今回の遠征学修は、結局中止の運びになった。

なにしろ、白金魔導研究所所長、バークスIIブラウモンの突然の『失踪』。

政府上層部より突如下った研究所の一時的な稼働停止命令と、帝国宮廷魔導師団からの何の前触れもないサイネリア島内の調査探索隊——調査隊と銘打つにはどうも装備が物々しく物騒な一隊——の派遣。

それと同時に勧告された、島内の全観光客、全研究者への島からの退避命令。

最早、遠征学修どころではなくなった。

退避するまでの空いた一日をグレン達は自由時間に使っている。

二組の殆どがビーチバレーをしている。

その中にはリィエルやルミアも楽しそうに遊んでいる姿をテラスは離れたところから見守っていた。

「……………本当、これを見ているとあの事件があったことが嘘のようですね」

「そうだな」

リィエルも自分の正体を知り、ルミアも過酷な目にあつたというのに楽しそうに笑い、遊んでいるその姿はまるでそんなことがなかったように思えてしまう。

「……………成る程。これがお前の守りたかつた光景か、グレン」

「俺は何もしてねえよ」

テラスの魔術で氷の中にいるグレンへ、研究員に装っているアルベルトは淡々と言葉を投げけるもグレンは手を振ってそう返す。

「テラス、と言ったな？ 今回の件、お前の迅速な行動のおかげで王女を救出することが出来た。その点には感謝する」

「お気になさらず。そちらの都合関係なしで僕は勝手に動いていたでしょうから」

「だが、俺はお前を信用しているわけではない。万が一の際は俺は躊





アルベルトもそんなグレンに深いため息を吐いていた。

「まあ、大した話ではありませんよ」

テラスの視線の先にはシステイーナとリエルと一緒に笑っているルミアを見つめながら言う。

「ルミアは僕よりも強かった。それだけです。女性って本当に強いですよね？」

突き放しても、現実を教えても、それでも諦めずにくれた。

無理矢理にでも、強引にでも傍にいようとしてくれた。

テラスはルミアに負けた——根負けだ。

「……………だな。俺も身を持って知ってるぜ？ それ」

腰を下ろしてテラスの言葉に同意する。

グレンの周りにいる女性も皆強いからだから。

「僕はルミアを守りたい。その為なら誰であろうと協力は惜しみません」

「……………熱いな、氷の中にいるってのに日焼けしそうだ」

テラスの言葉に小さく笑みを浮かべるグレンは思った。

(……………変わったな、お前も)

そう思えた。後はルミアがテラスを人としての道に導いてやればきつと——

「テラスくん！ あ、それに先生も皆と一緒に西瓜、どうですか？ ツ!?」

「今、行くよ。先生はどうしますか？」

「ん？ ああ、俺も行くとしますかね……………」

氷を解いて日傘を差すテラスとグレンは皆がいるところに足を運ぶ。

「はい、テラス君の分」

「ありがとう、ルミア」

テラスはルミアや皆と一緒に西瓜を食べる。

こんな日が続けばいいな、と心の中で本当に少しだけ思った……………。

## 広まる噂

遠征学修が終えてからテラスとルミアは日課のように放課後は図書室で魔術の勉強に励んでいる。

「うくん、テラス君。ここなんだけど……………」

「ああ、これはね」

二人で共に魔術の勉強に専念している二人にはそれぞれの目的がある。

ルミアは吸血鬼であるテラスを人間にする方法を探して。

テラスは今よりも強くなってルミアを守る為に力を身に付ける。

互いの為に分厚い教本を開いては、睨めっこする仲睦まじい様子をシステイーナとグレン、それにリエルが遠目から見守っていた。

「……………ルミア、頑張れ」

親友であり家族であるシステイーナはテラスに想いを告げて、成功したことをルミア本人から聞いている。

その時のルミアの幸せに満ちた笑みにシステイーナは感極まって泣いてしまった。

自分の事のように嬉しくて、ルミアの幸せを心から願っている。

「……………ルミアのところに行かないの？」

「駄目よ、リエル。放課後は二人にしてあげる約束でしょ？」

「……………うん」

「にしてもよ、何で俺までお前らに付き合い合わなきゃならねえんだ？」

面倒そうに欠伸をするグレンにシステイーナは言う。

「何を言っているんですか？ 一番張り切っていたのは先生じゃないですか？」

「いや〜そうなんだけどよ……………なんかな、その、ね？」

曖昧に返すグレンの本音は美少女のルミアと距離を縮めて、頬を染めたり、恥ずかしかったり、思春期らしからぬ言動をするテラスの弱みを握り、それをネタにからかってやろうという魂胆だったのだが……………。

（もう、本当に鈍いにもほどがあんだらう!? もっと初心な反応しろ

よ!?! 本当に魔術のことしか頭にねえのか!? あの魔術馬鹿は!?!) それらしい反応を一切見せず、魔術のことばかり語るテラス。それでもルミアは楽しいのか、微笑みながらテラスの話に耳を傾けている。

真面目と言えば真面目なのだが、正直つまらん。それが本音だ。

何か面白いことでも起きないかと、ふと、そう思っていると——  
「テラス!! ヴァンパイアツ!!」

不意に大声が響いてグレンはその声の方に——テラス達に視線を向けると、一人の男子生徒がテラスに左手の手袋を投げつけていた。

「君に決闘を申し込む! 僕が勝ったらルミアさんを解放しろ!!」

「……………いや、言っている意味がよくわからないんだけど?」

突然に決闘を申し込まれて、ルミアを解放しろなどと言われたテラスは戸惑いながら訊き返すと男子生徒は喚き散らす様に答えた。

「聞いたぞ!? 君はルミアさんの弱みを握って手籠めし、よからぬことをしているぞ! そんな卑劣で非道な君を放っておくわけにはいかない!!」

(ブフツ!?)

男子生徒の発言にグレンは思わず噴き出した。

「……………なに、それ? 初耳なんだけど……………」

「ふざけるのも大概にするんだ! 他にだって魔術を悪用してルミアさんを操っているや、心優しいルミアさんの優しさに付け込んで独占しているなど……………ツ! そんな君を僕は許すつもりはない!!」

腹を抱えて、身体を震わせているグレンは必死に込み上げてくる笑いを堪えていた。

(あいつも、災難だな……………)

恐らくは学院でも屈指の人気を誇るルミアを独占しているテラスに嫉妬して噂が噂を作り、そんな風になったんだろう。

その噂を聞いて下心か、正義感を募らせてテラスに決闘を申し込んだ。

その話を聞いたテラスは自分がどういう風に言われているのかと



「でも、ルミアの口から言ってくれないと多分、納得してくれないよ？」

「そ、それはそうかもしれないけど……その、私は別に酷いことはされていませんよ。テラス君、優しいですし……むしろ、気を遣わせてばかりで」

「口ごもりながらも誤解を解こうとするも、男子生徒は静かに首を横に振る。」

「ルミアさん……貴方は心優しいからその男を庇っているとは思いますが、その男は聞く限り、悪辣非道の限りを尽くす外道です。貴女の優しさを彼にまで与える必要は——」

「やめてください」

「ッ!？」

強い意思の籠ったルミアの言葉が、気丈な瞳が男子生徒を射貫いた。

「彼を悪く言わないでください。彼は何度も私の為に危険も顧みずに私を助けてくれました。そんな彼を悪く言うのは絶対に許しません」

「う……………」

そんなルミアに気圧される男子生徒は思わず後退りする。

「……………まあ、その、というわけで、陰で僕の事をどう言ってもいいけど、あまりルミアを甘くみないほうがいい。ルミアは僕よりも強いからね」

確かにルミアは優しい。だけど、ただ優しいだけじゃない。

芯の強い優しさを持つ、その強さにテラスは負けたのだ。

「それでも納得できないのなら決闘を受ける。だけど、ルミアは僕にとっても大切な人だから本気でするよ？ それでもいい？」

「……………いや、僕が悪かった」

「わかってくれたのなら、いいよ」

男子生徒は手袋を拾って去っていくと、ルミアは安堵するように息を吐く。

だが——

「うおおおおおおお……………ルミアちゃんが、ルミアちゃんが

「……………」

「くそおおおおおおおおお……俺、ずっとルミアちゃんのこととを……………」

「ううううううううう……………」

この場にいる男子生徒達はルミアの本気の発言に滂沱の涙を流して、足元に水溜りを作っていた。

それを聞いたテラスは頬を掻きながら言う。

「僕とルミアの関係……………広まるね、これ？」

事実だから遅かれ早かれ広まるとは何となくではあるが、想像はできていたテラスはともかく、ルミアは公の場で先ほどの自分の発言と周囲の反応に耳まで赤く染めて俯いていた。

「うう〜テラス君のせいだよ〜」

「僕のせいなの？ ……………えっと、ごめん」

涙目で睨んでくるルミアに抗えず、素直に謝罪の言葉を述べる。

この日を境にテラスは『夜、背後から刺すべき男リスト』でぶつちぎりの一位となった。

## 婚約者

「《万象に希う・我が手中に・十字の剣を》」

アルザーノ魔術学院の前庭<sup>アプローチ</sup>で地面に手をつけて呪文を口にする。

すると魔力が紫電となつて爆せると共に、テラスの手中に十字の短剣が瞬時に生み出される。

「凄い！ リィエルの錬金術が使えるようになったんだね！」

「……………よく真似できたわね」

テラスの錬金術に自分のように喜ぶルミアの隣ではやや呆れた表情を浮かべるシステイーナはもはや、驚きはしない。

リィエルが得意とする高速武器錬成。それを実現させたテラスなのだが、本人は溜息が口から出る。

「でも、これで限界だよ。どうやってもリィエルの劣化バージョンにしかならない……………」

リィエルから教わった高速武器錬成の魔術式は一步間違えれば脳内演算処理がオーバーフローして、廃人確定なのだが、テラスはそれを改竄、改良してようやく実現可能状態にまで完成させた。

しかし、ここで限界。

出来ても短剣が精々で、大剣を錬成しようとしたら強度が低下して脆くなる。

リィエルが使う錬成よりかは簡略化された分、精度に変化が生じてしまった。

「それでも凄いわよ。まったく貴方の才能が羨ましくなるわ」

「私からしてみたら、二人とも凄いんだけどな……………」

システイーナから見てテラスは天才と思っているが、ルミアからしてみたら二人とも自分では足元にも及ばない天才だ。

それに気付かないシステイーナにルミアは苦笑いするしかなかった。

「そういうルミアだつて最近は成績の伸びがいいじゃない？ やっぱリテラスと一緒に勉強しているからかしら？ ふふ、愛の成果ね？ ルミア」



「もう、システイ！ からかわないですよ！」

「あはは！ ごめんごめん」

仲睦まじい二人を見てみると、前庭の隅アブローチにいるグレンとリエルがいることに気が付いた。

「あそこにいるのはグレン先生と、リエルだね？」

「え？ あ、そうね。……………何をしているのかしら？」

頭を下げているグレンにそれに頷いているリエルは石を拾って呪文を唱えると、その石は黄金色の光を眩く放ち始める。

「あれって……………」

何をしているのか、何を頼んでいるのか理解したテラス。その隣ではルミアは苦笑。

「あいつ……………ッ！」

そして、システイナはグレン達の下に駆け寄って——

「《何考えてるのよ・この・お馬鹿》——ッ!？」

即興改変による「ゲイル・ブロウ」の呪文が、局所的に収束する突風に轟、と巻き起こし、グレンを吹き飛ばす。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア——ッ!？」

女のような悲鳴を上げて空高く舞い踊り、グレンは前庭アブローチの端の池の中へと墜落し、盛大な水柱が上がった。

「さ……………最近のお前の呪文改変力はマジですげえな……………先生は嬉しいぞ……………」

「ですよね……………《あ・服を・乾かしますね》」

「おう、サンキュー」

風の魔術による呪文改変でグレンの服から水気を飛ばす。

どっちもどっちだな……………とルミアは思った。

「リエルに金を錬成させて、一体、何を企んでいるんですか!？」

「売るんだよー！」

何の臆面もなく、グレンは真顔で最低最悪なことを言っただけのける。

「だから、それは犯罪ですって!?! リエルを巻き込まないでくださいー！」

「うっさいやかましい！ リエルの暴走のせいで、俺の給料はカツ

トされまくり！ このままだと餓死は確定ツ！ 背に腹は代えられないんじゃないやあああツ！」

そして、いつものように侃々諤々、説教とみつともない言い訳合戦が始まり、テラスとルミアもいつものように苦笑しながらそれを見守っていた。

「あ、相変わらずだなあ……………二人とも」

「本当、金の錬成はもつと……………したらいけないのに」

「テラス君？ 今、なんて言いかけたのかな？」

「……………うん？ なんのこと？」

視線を逸らして誤魔化そうとするが、ルミアがテラスの両頬を掴んで強引に目を合わせる。

笑っているけど目は笑っていないルミアの視線から逃れられない。

「私の目を見て言える？ ちゃんと正直に話して欲しいなあ」

「う……………」

付き合い始めてからいつの間にかルミアに尻を敷かれている気がしてならない。

何故か逆らえないルミアの微笑みにテラスはいつも負けてしまう。

「……………ごめんなさい」

「はい、よろしい。もうしたら駄目だからね？」

「……………」

「テラス君？」

「はい、もうしません」

人々は怪物を恐れるもの。だが、怪物が恐れるのはなんなんだろうか？

それがなんなのか、テラスはわかってきた気がする。

「へーんだ、うっさいわい————つとおー！」

「あつ!? こら、待ちなさいツ!? ら、《雷精の紫電よ》————ツ！」

「ふう————はっはっは！ 当たらなければどうということはない！」

いつもの光景に生徒達は呆れたように騒ぎを眺め始める。

最早、この学院ではすっかりとお馴染みで、見慣れてしまったその

光景。

……………と、そんな時だ。

背後から追ってくるシステイーナをあしらうことに集中するあまり、前方不注意だったグレン。ふと前を見れば、目の前には馬車は停留しており……………

「どおわああああああ—— ツ!? 馬ああああああ——  
——ッ!」

グレンは馬車に繋がれた馬に顔面から衝突しそうになって尻餅をついていた。

「もう、先生ったら何をやっているのよ!? あやうく人様に迷惑かけるところだったじゃない!」

駆け付けたシステイーナは御者台に腰かけている御者に、ぺこりと頭を下げる。

「すみません! この人には後できつく言っておきますので——」  
「……………」

だが、システイーナの謝罪に御者は無反応。その表情すらも窺い知れない。

気まずいシステイーナはさらなる謝罪をかけようとした……………その時だった。

「ははは……………この学院に着いて早々、真っ先に君に会えるなんてね……………」

馬車の客室の脇に据えられていた扉が開き、新たな第三者の音が響き渡る。

「これには流石に、私も運命というものを信じてしまうかもしれない」  
客室から一人の男が姿を現し、優雅に地面へと降り立った。

緩くウェーブのかかった柔らかな金髪。すらりとした身長。片眼鏡モノクルをかけた面立ちはいかにも貴族然と甘く整っており、気品に満ちあふれている。

服装や立ち振る舞いから貴族のそれである。

「久しぶりですね、システイーナ。君は相変わらず元気がいい。……………まあ、そこが貴女という女性の魅力的なところでもあるので

すが……………」

「あ、貴方は——」

現れた男の姿を前に、システイーナは目が丸くなる。  
男も優しげにシステイーナを見つめる。

「ルミア、知ってる？」

「ううん」

歩み寄ってきたテラス達は二人の様子を見て、ルミアに尋ねるも首を横に振った。

「……………え？ 何？ 何なの？ この空気？ そもそも、アンタ……………誰？」

その問いは、一連の騒ぎを遠巻きに眺めていた全ての傍観者達の胸中を代弁したものだ。中。

「……………私ですか？」

すると、成り行きを見守る一同の中、その男はこう答えた。

「私はレオス……………レオスⅡクライトス。この度、この学院に招かれた特別講師……………そうですね、有り体に言えば……………そう、その娘——システイーナの婚約者、ファイアンセですね」

一瞬の沈黙の後。

「……………ええええええええええええええええええええええええ————ツ  
!?!?!?!」

学院内に、男女多数の素っ頓狂な叫びが響き渡るのであった。

「ちよ、ちよつとレオス！ 貴方、何言ってるの!?!」

レオスの突然の爆弾宣言に、システイーナは思わず顔を真っ赤にして叫んでいた。

「そうつれないことを言わないでください、システイーナ。事実、私達は互いの両親が決めた許嫁同士ではありませんか？」

ひそひそざわざわと、どよめく観衆達。

「お、親同士が決めた……………って、ま、マジかよ……………?」

はたで聞いていたグレンも、ごくりと唾を飲む。

「だが、お前……………いくら親が決めたからって……………それマジで言ってるの？ 馬鹿なの？」

「いや、グレン先生が何言ってるんですか？」

システイーナの婚約者フイアンセと名乗った男——レオスを本気で哀れむように、悼むような顔を向けているグレンにテラスが割って入った。「いや、だってよ………考えてみるよ、テラス。マジでこのヒス女と結婚するって。………こいつとくつついたら、人生の墓場入りどころか冥界第九園入りだぞ？　ロクなことにもならないぞ？」

「いやいや、流石に酷過ぎませんか？」

「その心底、哀れむような顔は何!?　一体、どういう意味よ!？」

ふかーつと、システイーナはグレンに食ってかかる。

「ははは、冗談でこんなことは言いません……」

対するレオスは、そんなグレンの超失礼な物言いを軽く受け流し………

「それよりも、私の将来の伴侶を侮辱するような言動は慎んでいただけませんか？　彼女に対する侮辱は、私に対する侮辱と同義です」

微かに鋭くなったレオスの双眸に、グレンは思わず気圧される。

「うっ………す、すまん………」

気圧され、謝るグレンにレオスは帝国紳士として物言いをしようと思っただが——

「………グレン先生？　なるほど………となると、貴方があのグレン＝リーダーダスさんですか」

テラスの言葉にグレンのことに気が付いたレオスは穏やかな表情でグレンと向き直った。

「な、なんで俺のこと知ってるんだよ………?」

「私が講師を務めるクライトス魔術学院でも、貴方と貴方の後ろにいるテラス＝ヴァンパイアのこととは噂になっていますので」

「え？　僕も………?」

思わないところで名を呼ばれ、驚いた。

「ライバル校に突如現れた、期待の新人講師。魔術理論の根本的な理解を重視した、実践派の魔術講師………取得呪文を競う昨今の詰め込み魔術教育の場には、中々いないタイプの人です。貴方の講義、是非とも一度拝聴してみたいと思ってきました」

続けてレオスは。

「そして同じく期待の転入生。二年次生からの転入にも関わらず、並みはずれた魔術の造詣と技量を持ち合わせ、その実力は第五階梯クインティにも匹敵すると。貴方のこれからが楽しみですよ」

「いや……………別にんな大層なモンじゃねーんだが……………」

「まあ、あまり期待はしないでください」

レオスの完璧な紳士っぷりにグレンは調子を狂わし、テラスは遠慮がちで告げる。

この学院、アルザーノ帝国魔術学院の特別講師として派遣されたレオス。

そのレオスとシステイーナとの関係は婚約者ファイアンセでレオスも臆面することもなく、システイーナに情熱的に愛を語る。

その馴れ初めを聞いたグレンは妙に納得したように頷くと、システイーナが慌てて、グレンに弁解し始めた。

「だ、だから違うんですって！ 誤解です！ 婚約っていうのは、その……………」

「良かったじゃねーか、白猫ツ！ 見事な玉の輿じゃねーか！」

燦然と輝く太陽のような笑みでデリカシーの死滅した台詞。

「クライトス伯爵家つつたら有力貴族でお金持ち！ お前、そんなところに嫁げるとかマジ幸せモンだな！ 一生、遊んで暮らせて超うらやましいわー！」

びくびくと、システイーナの頬がひきつる。

「あつはっは、実は先生、お前のこと、とおつても心配してたんだぜ？

なんせ『お付き合いたくない美少女』、『説教女神』、『真銀ミスリルの妖精』……………ルミアとリエルと違って、お前に対する男子生徒の評判って結構ズタボロでさー？」

「ルミア、リエル、ちよつと下がっておこう」

システイーナのこめかみに青筋が立てるのを見てグレンから距離を取る。

「正直、将来、お嫁の貰い手いんのかなって心配だったんだが……………いきなり解決ツ！ しかも、およそ考えられる限り最高の条件！ 先

生は素直にお前を祝福するッ！」

ぶるぶると、システイーナの肩や握り固めた拳が震え始める。

「いやあ、たで食う虫も好き好きとはよく言ったもんだ！ 良かったな、白猫！ あつ、そうだ、この話が上手くまとまったらテラスとルミアと一緒に結婚式なんてどうだ!? 俺が結婚披露宴で祝辞を述べてやつても——」

「《この・馬鹿ああああああああああああああああああ——

——ッ!》」

「ぎやああああああああああああ——ッ!? ナンデ!?!」

システイーナが唱えた「ゲイル・ブロウ」に風に舞う木の葉のように、高々と空へ舞い上がる。

「よく飛ぶな、グレン先生は……」

「あ、はは……な、なんか大変なことになってきちやっとなあ……」

## 彼氏の務め

レオスⅡクライトスの専門講座では『軍用魔術概論』が開設された。レオスの専門分野が軍用魔術に関する研究である必定、レオスの開講する専門講座も当然、軍用魔術に関わるものとなったのである。

レオスは生徒達に各軍用魔術を支える根本的な理屈と概念を教えていた。

その講義にテラスも参加して受けていた。

「……………完璧だ」

「ですね……………」

「レオスⅡクライトス……………噂にや聞いていたが、確かにヤツはすげえ」

「マテリアル・フォース物理作用力理論を生徒達に完璧に教えるなんて、凄い……………」

「うん、本当に凄い授業だったね……………」

レオスの講義に感嘆の声を漏らす。

そのレオスは生徒達に囲まれて、質問や食事の誘いなどを受けてそれを一人一人丁寧に対処している。

「グレン先生、レオス先生の授業は完璧なんですが……………」

「ああ、まだこの内容はガキどもには早過ぎる」

レオスの講義は魔術師としての戦闘能力・戦闘技術を高める一辺倒の授業。

いかに効率よく魔力を破壊力に変換するか。いかに効率よく人を殺傷するか。人殺しに特化した術をどう運用するかを、レオスは血生臭い部分を言葉巧みに美化し、強大な魔術の力に対する華々しい一面のみ高々と歌い上げていた。

レオスの講義を聞いて出来のいい生徒なら【ショック・ボルト】でもやり方次第では人を殺せることに気付いているだろう。

「力を得るとそれを試してみたくなるのは人の道理。問題が起きないといいのだけど」

下手に過ぎた力を試し、それが最悪な事態にならなければいい。

「やっぱり、先生はこういう授業、あまり認めたくありませんか？」



ルミアが曖昧な笑みを浮かべながら、囁いた。

「……………私も思ったんです。まだ、私達には……………過ぎた力だ  
なって」

「……………」

「気をつけないといけませんよね……………大きな力には。先生は常日  
頃、力の意味と使い方をよく考えろ、力に使われるな、と口を酸っぱ  
くして仰ってますけど……………今はなんとなく意味がわかる気がし  
ます」

グレンはちらりとルミアを横目で流し見た。

「大丈夫ですよ、先生。少なくとも先生の教えを受けた生徒で間違え  
る人は、きつといません。ご不安になるのはわかりますが、もっと私  
達を信じてください」

「……………別に。なんかあの噂のイケメンが、俺の思った以上にやる  
ようだから、嫉妬しているだけだし。くっそ、天は二物を与えずって  
格言はどこ行った……………二物どころか、あいつ四つ、五物あるじゃ  
ねーか、卑怯だぞ……………ッ！」

「格言はあくまで格言でしょ？ 世の中そんなものですよ？」

「うるせー！ お前にだって可愛い可愛い金髪美少女ルミアちゃんを  
独占している時点でお前もあいつと同類だつーの！」

「まあ、ルミアが可愛いのは否定はしません……………」

「もうテラス君、そんなにはつきりと言わないでよ」

「くっそ！ なんだ!? 今は恋愛ブームってやつなのか!? 爆発しや  
がれ、コンチクショウ！ どうせ俺は寂しい寂しい独り身ですよ!!」

二人だけの空気に完全に邪魔虫となったグレンは嘆き叫び、そこ  
から逃れるように後ろの席へ振り返る。

「おい、白猫、よかったな！ お前の将来の婚殿は実際、大したやつだ  
ぜ。お前、マジでいい買い物したな？」

「だ、だから、違うって言っているのに……………ッ！」

グレンのちやうど真後ろの席に座っているシステイーナは握り固  
めた拳を震わせ、いかにも不機嫌そうにグレンを睨み返す。

「違うって……………何がだよ？ あいつはお前の婚約者ファイアンセなんだろう？」

「確かに形式上はそうかもしれないんですけど！」

「形式上はそうかもって……………形式もクソも、両親が決めた許嫁とかガチじゃねーか」

「だから違います！」

そこでテラスが首を傾げながらシステイーナに尋ねる。

「でも、システイーナ。システイーナの家は名門なんだから御家存続の為にいつかは婿養子を受け入れないと駄目じゃないの？ それなら互いを知っているレオス先生の方がまだいいと思うけど？」

「そ、それは……………そうだけど、今は無理、なのよ……………」

「？……………まあ、すぐに結婚は……………いひやいよ、ふみあ」

「女の子にとっての結婚はとっても大事なことなんだよ？ 御家存続も大切なことだけど、女の子にとっての結婚は理屈で決めて良いものじゃないの」

ルミアは頬を膨らませてテラスの頬を引っ張る。

「……………テラス、お前もう尻に敷かれているのか？」

「……………先生、ルミアが凄く強いんですけど、どうやったら勝てますかね？」

「諦めろ。男は生まれ時点で女より弱いつて決まってるんだ。お前はルミアに一生勝てないのはもう決定事項だ」

「一生ですか……………」

「一生だ」

感慨深く頷くグレンにルミアはにこにここと笑みを見せる。

(……………何故だろう？ 勝てるイメージがしない)

というよりも、攻撃を行うという選択すら思い浮かばない以前に、顔を見ただけで負けを確定しているように思えてしまう。

「……………なるほど。相手の戦意を完全に無力化するのがルミアの固有魔術オリジナルだったのか……………いつの間になんか固有魔術オリジナルを」

納得するように頷くテラスにグレンは呆れ、ルミアは優しい眼差しを向けている。

「おい、ルミア。この魔術馬鹿の面倒は任せるぞ？」

「はい、任せてください。先生」

笑顔で了承するルミア。

と、その時だ。

「やあ、システイーナ」

「あ、……………レオス……………」

「私の講義、聞きにきてくれたのですね？」

生徒達から解放されたレオスは柔和な笑みを浮かべ、システイーナの下へ歩み寄ってきていた。

「私の講義はどうでしたか？ 貴女の忌憚のない意見が聞きたいですね」

「その……………とても素晴らしい講義だったわ……………正直、文句のつけようがないくらい……………」

「それは良かった。貴女の夫に相応しい授業ができたようですね」

「だ……………だからそういう事を人前で言うのは……………ああ、もう！  
どうして貴方はそう昔から……………」

「ふふ、それは貴女のことを愛しているから。別に隠し立てする必要なんてありません」

レオスに主導権を握られてシステイーナはたじたじだ。

「……………あれ？」

不意にテラスは鼻を鳴らして首を傾げた。

「システイーナ。少し、外で一緒に歩きませんか？ 貴女と話したいことがあります」

「そう言つて、真摯な目をシステイーナに向けるレオス。

「うう……………それは、今でないと駄目なことなの……………？」

「別にいまでもなくても構いません。でも、いずれ話さなければならぬ  
必要なことです」

システイーナはレオスに伴われ、ルミアの前から去って行った。

「あの、テラス君、それに先生にも一つお願いがあるんです。その  
……………大変、申し訳ないことですが……………」

「どうしたの？」

「……………なんだ？」

システイーナ達の後方十数メートル先にある庭園の茂みの中に。

「なーんで、俺が他人の恋路を覗き見せにやならんのだ……………」  
「言動が一致していませんよ?」

ジト目でぶつくさ、ぶーたれるグレンの今の恰好は頭に木の枝を括り付け、両手にも木の枝を持ち、いかにも怪しい迷彩姿だ。

更には自身の中心に音声遮断結界まで張っている周到ぶりである。

「ご、ごめんなさい、変なことを頼んでしまつて……………」

「システイーナが心配なんですよ? なら、気になるのも無理はないよ。それに僕も少しレオス先生が気になっていたんだ……………」

今、システイーナ達の近くにはグレンとテラスの召喚した鼠と蝙蝠が放たれている。

「なんだ? ルミアという可愛い彼女がいるのに、白猫まで狙つてんのか?」

ふざけた口調でからかいの言葉を投げってくるグレンにテラスは首を横に振る。

「そんなんじゃないやしませんよ。ただ、レオス先生から以前に嗅いだことのある匂いが僅かにしまして……………なんだったかな? あの不味そうな匂い……………」

「野郎の血なんて可愛い女の子に比べたら残飯以下に決まつてんだろ? おお——ツ!? あのお男、やるなツ!? 今、いきなり結婚を申し込みやがった!? 見かけによらずなんて大胆なヤツ!? さあ、盛り上がって参りました——ツ!?!」

使い魔と聴覚同調を通して聞こえてくる会話にグレンは全力で集中し始める。

「さあ、一体どんな返答をしてくれるのかなあ!? 白猫ちゆわあゝんツ!?!」

「グレンが一番、張り切ってる」

「あ、あはは……………」

グレン同様、木に変装しているリエルが眠たげに眩き、ルミアが曖昧に笑う。

「あー、システイーナ戸惑っているね」

「だな！ 柄にもなく顔赤くしちゃって……………初々しいねえ……………ぷっ、これでまた一つ、からかうネタが増えたわ……………しかし……………」

ひとしきり邪悪に笑い、グレンはふとルミアに振り返る。

「ルミア……………お前、何がそんなに不安なんだ？」

グレンとテラスはルミアに頼まれてこの出歯亀行為をしている。

「確かに、俺個人には気にくわんやつだが……………レオスはそれなりに信頼できる男だとは思うぞ？ あいつが何か不名誉なことをやらかせば、家名が傷つくわけだしな」

押し黙るルミアに、グレンは肩を竦め続ける。

「古参な貴族にとつて家名は命同然だ。だから、あの野郎が白猫に対して力づくで……………とか、そういうことはするわけがねえって、正直、俺は思……………」

「嫌な、予感がするんです」

はつきりと言い放つルミアの言葉に、今度はグレンが押し黙る番であった。

「ごめんなさい、テラス君、先生。こんな曖昧な理由で二人の手を煩わせてしまつて……………でも、レオスさん……………あの人からはなんとなく嫌なものを感じるんです……………先の遠征学修先で……………初めてバークスさんと会ったときに感じたような……………」

「……………」

「なるほどね、納得したよ」

不安げに目を伏せるルミアの頭に手を置いて力強く頷く。  
「ルミアの勘を僕は信じているよ。何事もないのが一番だけど、警戒しておいた方がいいというのはよくわかった」

「テラス君……………」

「彼女の言葉を信じるのも彼氏の務めだと思うし、任せて」

「うん、お願いするね？」

不安の色が消えていつもの笑みを見せるルミアにグレンは二人の様子に肩を竦めてシステイーナ達の動向を再び気を配り始める。

恐怖を感じない

「俺が見事、白猫とくつついて逆玉の輿、夢の無職引きこもり生活をゲットするために——今からお前らに魔導兵团戦の特別授業を行う！」

「「ふっぎけんああああああああああああ——  
——ッ!?」」

教壇に立つや否や、突然の授業内容変更を宣言したグレンに、クラス中が非難囂々となるなかで、テラスは溜息を吐き、ルミアは苦笑を浮かべていた。

あの日、レオスとシステイーナの会話を覗き見していた日に、レオスはシステイーナに結婚を申し込んだが、システイーナはそれを断った。

その理由は祖父——レドルフ・フィーベルが求めた『メルガリウスの天空城』の謎を解くという夢を叶えるために。

だが、レオスはその夢を否定した。

魔導考古学——古代遺跡を探索し、アーティファクト魔法遺物を発掘し、究極的には古代文明の謎を解き明かし、古代の魔術を現代に再現させることを狙いとする魔術分野……でも、それを成した者は誰一人もいない。

それ故に無意味で不可能な夢。それでシステイーナの人生を無駄にして欲しくなく、自分を支え、女としての人生を歩んで欲しいと告げる。

これを聞いていたテラスは互いの価値観の違いとっていると、そこにグレンが割って入った。

ここまですら、まだ良かった。

これはクライトス家とフィーベル家の問題。ここでグレンが割って入っても部外者で終わるのだから。

だけど、ここでシステイーナがグレンと恋仲という真っ赤な嘘をついた。

その嘘が大きくなってグレンはレオスに決闘を申し込み、シス

ティーナを賭けての決闘が始まり、その内容は魔導兵団戦とつて今に至る。

そしてシスティーナは顔を怒りで真っ赤に染めてぶるぶると震えていた。

「……………それでグレン先生。決闘もその内容も別にいいのですけど、どうして僕は参加禁止なんででしょうか？」

そう、テラスは今回の魔導兵団戦の参加は一切禁止されている。

テラスの実力を知っているクラスの何人かはそれに同意するように頷く。

明らかな戦力低下。それもこれはレオスがテラスに参加禁止を言い渡したのではなく、グレンがテラスを参加禁止にした。

二組はごく一部を除いて、どんぐりの背比べ。

だが、レオスが臨時で担当している四組は成績優秀者が集まっている。

わざわざ自ら戦力を低下するような行為にテラスは少し納得できなかった。

「決まってるだろう？ お前は強すぎるんだよ。白猫ならともかく強すぎるお前はこいつらを歩幅を合わせらんねえ。集団戦に尖った戦力はいらねえの」

それがグレンがテラスを参加禁止にした最もな理由だ。

テラスの実力は少なくとも学士では圧倒的に群を抜いて最早、他の生徒達と足並みを揃えて戦うのは不可能と言ってもいい。

仮に足並みを揃えて戦わせたとしても、それは味方の足を引っ張るだけだ。

「ま、安心しろ。お前の可愛い可愛い彼女はうちの白猫が守ってくれるさ」

「先生ッ!？」

「ルミア、ほら落ち着いて。可愛いのは事実なんだから」

「テラス君まで!？」 もう！ 二人で私をからかわないでよ!!」

顔を赤くして叫びルミアを宥めると、男子生徒達は羨ましい眼差しを向けられ、女子生徒達からは黄色い声が教室に響き渡る。

「……………さて、バカップルをからかうのはこれぐらいにしてきつそく魔導兵団戦……………戦場における魔術師の戦い方、心得つてやつを教えようかと思うんだが……………まず、始めに。お前らは多分、盛大に勘違いしてる」

生徒達の注視の中、グレンが肩を竦める。

「魔術師の戦場に——英雄はいない」

そんな宣言から、グレンの特別授業は始まった。

「ねえ、少しいいかしら……………?」

「どうしたの?」

魔導兵団戦の練習の時に使い魔を使つての四組の偵察と二組の練習の見学をしているテラスに不意にシステイーナが声をかけてきた。

「えっと、どうしても貴方に聞きたいことがあるの」

「僕に? なに?」

「……………どうしたら貴方のように恐怖を感じることなく戦いに挑めるの?」

「……………」

「悔しいけど、貴方の実力は本物よ。知っていると思うけど、私も先生の教えを受けてかなり魔術師として上達したと思うの」

「……………」

「でも、前に遠征学修の時にリエルと対峙した時……………怖くて震えて、何もできなかつた。戦いの技術が上達しても……………いざという時にちつとも戦える気がしないの」

「……………」

「今の私が、リエルと対峙しても……………きつと、私はあの時と同じように震えて何もできない……………いくら力を研鑽しても、私は本当に必要な時に、きつと怖くて戦えない」

「……………」

「どうしたら、貴方や先生のように戦えるの……………?」

真つ直ぐと真意ある意思で告げるシステイーナの問いにテラスは



答える。

「先生がどうしているのかはわからないけど、僕にその質問は意味がないよ」

「どういう意味よ……………」

「僕は恐怖とか感じたことが、いや、感じられないが正しいかな？」

「……………え？」

その予想外な言葉にシステイーナは目を丸くする。

「僕はね、人間を殺しても何も思わないんだよ。それこそ自分が死ぬ時でも別に怖くもなんともなかった。ああ、死ぬんだな。……………つて思っただけ」

「う、嘘よ……………そんなことあるわけ」

「はいこれ」

テラスの言葉を否定しようとしたシステイーナにテラスは錬成した短剣をシステイーナに持たせて、ナイフを持たせた手を自身の首元にくつつける。

「な、なににして——」

「どう？ システイーナの手元が少しでも狂ったら僕の首から血が大量噴出するはずなのに、僕は別に何とも思わない。……………ああ、それとも試しに人を殺す練習でもしてみる？ どうせ僕は死なないから人を殺すいい練習になるよ？」

ぐつと力を入れて自ら首を斬ろうとするテラスにシステイーナは慌てて短剣を手放す。

「はあ……………はあ……………」

震える手を押さええて呼吸を乱すシステイーナとは対極にテラスは首筋から血が流れているにも関わらずにいつものように平然としている。

だけど、システイーナは理解した。

あのまま短剣を持っていたらテラスは間違いなく自分の首を斬っていたことを。

「それが人間の正しい反応だよ、システイーナ。君が人間でいたいのならその感覚を忘れない方がいいよ。それを忘れたら最後、外道魔術

師に堕ちてしまうからね」

いつものように、日常会話のように話すテラスにシステイーナは少し怖かった。

彼はいつものように話をしているのに、それが異常に感じられた。

「僕は人間の枠外にいる存在——怪物だ。生まれ持って人間の感覚を持ち合わせていない僕にシステイーナが参考になるアドバイスは与えられない。こういうことはグレン先生の方がシステイーナには向いているよ？ 少なくとも僕なんかよりもずっとね」

「……………」

黙り込むシステイーナは初めて気付いたのかもしれない。

彼は強い。だけど、それはシステイーナの知っている強さではない。強い決断、強い覚悟、戦う為に必要な強い力。

それがシステイーナの知っている強さという概念だが、彼が持っているのは強い力のみ。

圧倒的強さを持って、敵を倒す。

それこそ、彼がよく口にする怪物のように。

「システイー！ 先生が呼んでるよー」

「ルミア……………」

不意に駆け寄ってきたルミアがシステイーナの手を取る。

「ほら、一緒に行こう？ テラス君も勝手にいなくなったりしたら嫌だよ？」

「了解。ここで待ってるよ」

「うん」

いつものように会話をする二人。

ルミアはシステイーナを引っ張って皆のところに戻る途中——

「ごめんね、システイー」

ルミアがシステイーナに謝ってきた。

「怖かった……………よね？ それでも怖がらないであげて欲しいの。

……………テラス君にはまだ時間があると思うから……………だから……………」

「ルミア……………」

哀しげな眼差しで告げる彼女の言葉はどれだけ彼の事を大切に想ってあげているのかがわかる。

「これからも、変わらずにいてあげて……………」

切なくて儂い声で必死に親友に懇願するルミアにシステイナは頷いた。

「……………ええ」

ルミアが心から信じているテラスをシステイナも信じる。

## 正義

夜のフェジテの繁華街を、グレンとテラスは歩いていった。

しつこい客引きをスルーしながら、賑やかな繁華街に背を向け、とある路地裏へ。

人気のない路地裏を進んでいると、ひっそりと隠れるように据えられた、場末のバーが現れる。

その店に足を踏み入れると、店内は薄暗く、客は殆どいない。

この店は客に対して徹底した秘密厳守・非干渉を貫くことが売りの店で、密談・密会に使うような店だ。

そんな店内のカウンター席、その端の席に。

「……………遅かったな。二分の遅刻だ」

「すみません、アルベルトさん」

「うっせーな、二分くらい誤差の範疇だろうが」

グレンはアルベルトの隣に腰かけ、毒突く。

「また何やら、派手に動いているようだな、グレン」

「ま、お前なら当然、こっちの状況も把握しているか」

「惚れてもいない女を賭けて勝負など……………下衆の極みだ。少しはシステイーナ||フィーベルに申し訳ないと思わないのか？」

「はっ……………いーじゃねーか？ 成功して白猫とくつついちまえれば、もう働かなくてもいいんだぜ？ こんな逆玉の輿、滅多にねーよ。こりや乗るつきやねーよなあ？」

にやりと口の端を吊り上げ、くつつと喉を鳴らして笑うグレンにテラスは呆れながら言う。

「独善ですよね？ 先生のそれは」

「はあ？ 何言ってるんだ？」

「だってそうでしょ？ レオス先生とシステイーナの間には家同士が決めた強い拘束力があっても先生とシステイーナにはそれはないのですから、先生がレオス先生に勝てば後は自分が嫌われてしまえばシステイーナは自由の身に。それがグレン先生の筋書きでしょ？ そうじゃなかったら逆玉の輿なんてわざわざ連呼せず嘘でも愛の言

葉の一つでも囁いている筈ですから」

「……………教え子にまで見透かされているとはな」

「うるせえよ」

「ちなみにルミアも気づいていますよ。先生は理由もなくそんなことをする人じゃないと」

「……………ルミアもか」

肩を落とすグレンは不貞腐れたようにグラスに注がれた酒を口に  
する。

「ところでお前……………なんでまた突然、俺達と接触した？」

グレンはアルベルトの使い魔が届けたメッセージの端切れをちらりと見せながら、神妙に尋ねる。

アルベルトはしばらくの間、重苦しい沈黙を保ち——恐らく探査  
魔術で周囲の様子を確認しているのだろう——そして、不意に  
言った。

「このフェジテに『天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>が、何者かの手によって持ち込まれて  
いる」

「な——ッ!？」

「……………すみません、その天使の塵とは何ですか？」

強張ったグレンの表情からとんでもないことというのはわかって  
もそれがどういふものなのかわからないテラスは尋ねた。

「天使の塵<sup>エンジェル・ダスト</sup>とは錬金術の悪夢とも言われている魔薬<sup>ドラッグ</sup>だ」  
天使の塵<sup>エンジェル・ダスト</sup>。

非投与者の思考と感情を完全に掌握し、筋力の自己制限機能を外  
し、ただ投与者の命令を忠実なまでにこなす無敵の兵士を作ること  
目的として開発された魔薬<sup>ドラッグ</sup>。

だが、一度この薬を投与された人間は確実に廃人と化し、もう二度  
と元には戻らない上、定期的に『天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>を投与されなければ、た  
ちどころに凄まじい禁断症状と共に肉体が崩壊し、死に至る。投与を  
続けてもいずれ末期中毒症状で死に至る。

たった一度の使用で、肉体的に生きてはいても、人としては死んだ  
も同然となるのだ。

「馬鹿なツ!? 『天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>に関する研究資料と製法は、一年とちよつと前のあの事件で全て抹消されたはずだ! あの高度な錬金術知識を要する複雑怪奇な製法……………正確な製法抜きに『天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>を再現するなんて不可能だツ! 『天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>は、とつくに失伝魔術<sup>ロスト・ミステイク</sup>なんだよ!」

(一年前とちよつと前の事件……………?)

それはあの変死体と死にかけたセラを眷属にした時期と合致する。

「その通りだ。そして唯一『天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>の製法を自身の頭の中だけで完全把握していた規格外のあの男は——一年余前、お前と……………セラが始末した」

「だったら、なんでまた——」

「それがわかれば苦労は無い。現在、政府上層部はこの事態をかなり重く見ている……………軍は勿論、魔導省の高級官僚達も総出で、この事件の調査に当たっている……………無理も無い、かつてこの魔薬<sup>ドラッグ</sup>が引き起こした甚大な被害を思えばな」

「あの、規格外のあの男とは……………?」

二人の会話に出てきた人物を尋ねるとグレンはぎりつ、と拳を握り固める。

「錬金術の天才にして、元・帝国宮廷魔導師団特務分室に所属していた——執行官ナンバー1、《正義》のジャティスIIロウファン。一年余前、『天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>を使って帝国政府の要人や軍の高位魔導士達を片端から殺しまくった最悪な事件の首魁だ」

「つまり、お二人の元同僚と?」

「……………ああ、胸糞悪いがな」

アルベルトも、『天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>にまつわる一年余前の事件を思い出したのだろう。忌々しそうに鼻を鳴らしていた。

「急遽、俺も暫くこの『天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>の出所に関する調査に当たる事が決定した。王女の護衛はリエルに一任される。以前は不安だったが、今の奴ならば大丈夫だろう」

「まーな。今のリエルも、ルミア好き好きオーラは半端じゃねーしな……………それに頼もしい彼氏様もいることだし」

ちらりと横目でテラスを流し見る。

「こんな事を、お前達に言うのも筋違いだが……お前達も王女や生徒達の身边には気を付けてやれ。天の智慧研究会……どういいうわけか最近は大入りしいが……この『天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>の件、ひよつとしたら連中が裏で一枚噛んでいるやもしれん」

「わかりました」

「……………なあ、アルベルト……………」

「断る」

グレンが何かを言いかけた瞬間にアルベルトは即答した。

「ま、まだ何もいってねーだろ……」

「お前の言いたい事などお見通しだ。大方、『俺も天使の塵』<sup>エンジェル・ダスト</sup>の出所調査に参加させる』……………だろう？」

「ぐ……」

凶星だったグレンは苦い顔で押し黙る。

「情報を共有したのは助力が必要だからではないし、お前が今回の件に関わる資格もない。魔導士である俺にしか為せない責務があるように……今は教師であるお前しか為せない責務を果たせ」

立ち上がって出入口に向かいながらアルベルトは最後に――

「尤も、道化を演じている今のお前では……そんな事は夢のまた夢だろうがな……」

そう言っただけで店から出て行った。

「ちっ……………わかってるよ、んなの」

アルベルトが去った後、グレンは苦々しい表情で頭を掻いた。

「……………それで、どうするんですか？ 多少でよければ僕やセラ姉さんが動きますが？」

「いや、お前らにそんなことはさせたくはねえし、それに……………この件のことをセラに知らされたくはねえ。テラス、悪いが……………」

「了解しました。セラ姉さんには言いません。最悪の場合は命令で強引にでも止めます」

「……………助かる」

一年余前の事件でセラは一度死んだ。

今は吸血鬼として第二の生を受け、血塗られた世界から離れることが出来た。

そんなセラをグレンは巻き込みたくはなかった。

だが、もし、あの場にテラスがいなければもうセラと会うことさえ叶わなかっただろう。

「……………全てを救える『正義の魔法使い』ですか？」

「!?」

不意に放たれたテラスの言葉にグレンは目を丸くする。

「セラ姉さんからよく聞きました。先生は『正義の魔法使い』という理想を目指している、と。現実を直視しながらもその夢を諦めなかった」と

席から立ち上がり、テラスは語る。

「ならそれが続けてください。先生は怪物である僕とは違い、日向の世界に在るべき人間です。その手がどれだけ血で汚れているのかわかりませんが、先生のその理想と魂はどこまでも尊く、気高いものだと思います。なら、教師という今の先生の立場が一番先生に合っていると思いますよ?」

「お前、何言って——」

「お休みなさい、グレン先生」

その店から去っていくテラスはある疑問が確信にへと変わっていた。

路地裏を歩き、更にその奥まで進んで行くとテラスは不意に足を止める。

「……………さて、と」

テラスは人払いと音声遮断の結果をこの周囲に展開させて振り返る。

「……………よく僕がグレン先生とあの店に行き、この場所に来ることがわかりましたね? レオス先生の御者さん——いえ、それとも元・帝国宮廷魔導師団特務分室所属、執行官ナンバー1、《正義》のジャティスⅡロウファンさんと呼んだ方がよろしいですか?」

すつ、と物陰から姿を現した山高帽を目深に被った青年が姿を見せ



る。

「なに、君がここにくることは読んでいただけさ。テラスⅡヴァンパイア。いや、吸血鬼と呼んだ方がいいのかな？」

「出来れば名前の方でお願いします。今の僕にはそちらの方が呼ばれ慣れておりますので」

「ならそうさせてもらうとしよう」

「それで？ レオス先生を『天使の塵』エンジェル・ダストで操り、こうして僕と接触した理由をお聞かせ願いませんか？」

「なに、大したことじゃない。君を僕の正義の礎になつてもらいに来ただけさ」

穏やかな口調で語るジャティスは耳を傾ける。

「悪の塊ともいえる怪物である君を倒すことで僕は僕の正義を高め、グレンの正義と対峙する……ッ！ これはグレンの正義と僕の正義、どちらが上か、それを証明する為に必要な前哨戦なんだ！」

己が捧げている正義を高める為には悪であるテラスを打倒する必要がある。

その為にジャティスはテラスと対峙している。

だけど、テラスにとってはいい迷惑だ。

戦う理由もなければ、戦う必要もこちらにはない。

さつさと飛んでも逃げてしまおうと一考していると――

「逃げれば君が守っているルミアⅡティンジェルを殺すよ？」

その言葉に一瞬、逃げようとした体が硬直した。

「いずれ根絶せねばならない、穢れた邪悪な血を持つ王室の家系を持つ少女だ。廃嫡された存在とはいえそのような悪を見逃す――おっと」

ジャティスの言葉を遮るようにテラスは時間差起動で「ライトニング・ピアス」を起動させるもジャティスはそれがわかつているかのよう容易に避けた。

「……………僕の事を悪や怪物と呼ぶのは構いません。それは紛れもない事実ですから。ですが、ルミアを、僕の彼女を悪く言うのは止めて頂けませんか？」

いつものように言葉を交えるテラスの瞳は真つ直ぐジャティスを見詰める。

「出なければグレン先生と戦う前にここで貴方を殺します」

今日の夕飯を決めるかのように手軽に殺すと宣言するテラスにジャティスの狂気の笑みが深まる。

「それでいい……………それでこそ、正義に倒されるのに相応しい怪物だ！」

「その怪物に戦いを望んだことを死んで後悔してください」

正義と怪物がぶつかる。

## 正義と悪

フエジテの路地裏で二人の戦いの幕が開いた。

「《吠えよ炎獅子》」

黒魔【ブレイズ・バースト】を唱え、火球をジャティスに放つもジャティスの両手の手袋からきらきらと輝く微少な粉末パウダーが周囲に広がり、謎の半霊体生物で防いだ。

「人工精霊タルパですか………？」

「ご名答だ」

人工精霊タルパ——それは錬金術の奥義、人工的に神や悪魔、精霊を生み出す秘術。

錬金術的に調査された特殊な魔薬ドラッグで瞬間的にトランス状態に陥ることで、空想上の存在を『そこに居る』と己が深層意識へ強固に暗示認識させ、周囲の空間に散布した疑似霊素粒子パラ・エテリオンと呼ばれる粉末パウダーをスクリーンに、その空想存在を投射させて現実世界に具現化させる術である。

一歩間違えれば廃人確定の禁呪法をジャティスは当たり前のように使った。

手を振りかざし、疑似霊素粒子パラ・エテリオンを舞い散らして人工精霊タルパ【彼女の左手】を投影・具現化する。

“黄金の剣を握る左手”という奇妙な姿の精霊を無数に出現し、一斉に剣を振りかざし、ジグザグと縦横無尽の高速機動でテラスに殺到する。

「《散らせ・戦風》」

一節を追加させて黒魔【ブラスト・ブロー】を改変して風の散弾で飛来する【彼女の左手】を全て撃ち落とし、ガラスが割れ砕ける音と共に、砕け散って霧散する。

すぐにマナ・バイオリズムを整えてテラスは「ライトニング・ピアス」を時間差起動デレイブド。続けて壁を跳躍して接近する。

「無駄ヤー」

腕を振るい、ジャティスの前に現れた、天秤を下げた右手——

人工精霊【彼女の右手】を具現化。

テラスの【ライトニング・ピアス】は、その右手が構えた天秤に触れる直前で、不可視の力に捕まり、逸れてしまう。

その背後からテラスは凶爪を伸ばして振るうも、その前に腕が宙を舞った。

「不可視の刃ですか……………」

「ああ、人工精霊【見えざる神の剣】————疑似靈素粒子で構築した質量ゼロ、不可視の刃さ」

腕が再生し、距離を取ると先ほどまで自分がいた場所に血が宙を置いて垂れていた。

「まだまだ、正義の執行は始まったばかりだ！」

ジャティスは腕を振るい、新たな人工精霊【彼女の怒り】を召喚する。

“ 一对の翼が生えた一房の葡萄 ” というまたまた奇妙な姿の精霊が、テラスに飛び込んで大爆発。

だが、テラスは翼を広げてそれを回避した。

「読んでいたよ」

「!？」

だが、回避した先ではマスコット銃を構えた姿の天使——人工精霊【彼女の御使い・銃刑】の複数が銃口をテラスに向けて一斉射撃。

しかし、テラスは吸血鬼の能力である『霧化』を使用して己の肉体を霧に変えてそれをやり過ぎした。

「それも読んでいた」

そのテラスにジャティスは全身に炎を纏った天使の姿——人工精霊【彼女の御使い・火刑】で霧となったテラスを襲う。

「《氷狼は疾走す》」

黒魔【アイス・ブリザード】を一節詠唱で起動。

炎と氷が衝突し、相殺。塞がる視界。

(人工精霊も厄介だけど、一番はこちらの動きを読んでいることか……………)

こちらが攻撃を仕掛けてもジャティスはそれがわかっているかの

ように待ち構えている。

彼の知らない魔術か、それともジャティスの固有魔術かはわからないが、厄介極まりないのは間違いはない。

「いやはや、大したものだ。いやそれでこそ僕が倒すべき悪と言うべきだろうね」

自身の周囲に複数の【彼女の左手】を召喚したジャティスはテラス賛美の言葉を送る。

「……………先ほどから僕の動きが読まれているように感じるのですが、それが貴方の固有魔術でしょうか？」

「それを探り当てるのも魔術戦の醍醐味じゃないか」

「ごもつともな意見で」

はぐらかす様に話すジャティスだが、テラスは確信した。

相手の動きを先読みするのがジャティスの固有魔術。

「どうやって、どのようにかはわからないが、それならそれでまだ対処できる。」

「……………それにしても君も良く戦う。それほどまでにルミアIIティンジェルが大切なのかい？ 彼女はこの帝国の王室の家系。いずれ根絶しなければならぬ存在だ」

「……………何故です？」

「君は知らないだろうけどね。この帝国は……………滅びなければならぬんだ。この帝国は、とある邪悪な意思の下に創られた魔国なんだ。……………この世にあってはならない国なんだ。僕はその真実に気付いた」

芝居がかった大仰な手振りと共に言葉を連ね……………

「本当の悪がなんなのか……………気付いてしまったからには、それを見て見ぬ振りをするのは偽善者だ……………僕の正義が許さない。ゆえに僕は一年余前、正義を執行した」

『天使の塵』……………

先ほどのグレンとアルベルトの話の思い返す。

「……………一つ聞きますが、その事件で多くの人間が死んだと聞きます。中には『天使の塵』によって末期中毒症状の一般人もいたとか」

「いずれ、この世の全てを救う真に『正義の魔法使い』になる僕の、揺るがない『正義』を証明する礎になれるんだ。痛ましいことだが……必要な犠牲だったんだ」

「つまり、必要なら何の関係もない人間も巻き込むのも厭わないと？」  
「ああ。仮令、その歩み道がどんなに罪深く血に塗れていたとしても、辿り着く先に理想が存在するなら、それは正しい道だ」

「……………世界を救う為には多少の犠牲は仕方がないというわけですね？」

「そのとおりだ！ この世全ての悪は、真の『絶対正義』なる僕の手によって裁かれ、滅殺されるんだッ！ この僕がいる限り、この世界に『悪』という存在は一片たりとも許さないッ！」

全ては己が捧げた正義の為に悪を滅殺する。それがジャティスⅡロウファン。

「そしてその『悪』には君もいる！ 吸血鬼などという人を脅かす存在はこの世界にはいてはならない！ 怪物は『正義』に相応しい僕が倒す！」

氷のような視線を向けられるテラスは小さく頷いた。

「なるほど、グレン先生とはまた違う『正義の魔法使い』だね……………」  
全てを救う『正義の魔法使い』。

悪を倒す『正義の魔法使い』。

過程は違ってもどちらも誰かを助け、救おうとしている。

一人ではない。多くの人を救う為に彼等はきつと理想を追い続けているのだろう。

(グレン先生もきつと……………)

まだその夢を、理想を完全に諦めたわけではないと思う。

「ジャティスⅡロウファン。僕は貴方の正義を肯定しましょう」  
「なに……………」

静謐に響き渡るその言葉にジャティスは訝しむ。

「理想を抱き、現実から目を背けず。全を救う為に一を切り捨てる。その偉業、その過程は余りにも遠く、険しい道のり。それでは貴方に救いが無い。だから僕が肯定しましょう」



「……………」

目を閉じるとそこに最初に思い浮かぶのは変わらない笑顔を見せてくれる彼女の顔だ。

屈託のない笑顔を向けてくれたのはルミアが初めてだ。

「これから先もルミアが笑ってくれるのなら、僕は喜んで『絶対悪』を背負います。そう思える人間なんですよ、ルミアは」

「……………そうか」

その言葉にジャティスは認めざるを得ない。

「テラスⅡヴァンパイア。君を僕の対等の『敵』として認めよう。君を倒して僕の正義はより高めに立てる——感謝する」

世界ではなく、たった一人の少女の為に『悪』を背負うテラスに敬意を称する。

正義が悪を認めるのはおかしな話だが、それでも認めざるを得ない。

彼は自分が倒すべき『敵』として、全身全霊を持って倒さなければならぬ存在だと。

だが——ジャティスは周囲に召喚していた人工精霊タール【彼女の左手】を解いた。

「……………どうしたんです?」

「いやなに、君と僕との戦いをこのような場所でしたくはなくてね」

路地裏という汚く、薄暗い場所で敵として認めたテラスとは戦うのに相応しくはない。

「いずれ、僕は君に勝負を申し込む。その時は互いの掲げた存在をかけて勝負と行こうじゃないか——だが、動きぐらいは封じておきましょう」

ジャティスはパチン、と指を鳴らした。

「?」

不意に行動に怪訝しながら周囲を警戒するも魔力の波動も、それらしいものも見当たらなかった。

すると——

「ぐっ!?!」



突然その場で膝をついて倒れ込み、苦しみだす。

「半信半疑だったのだけど、吸血鬼である君には絶大の効果があるようだね」

召喚した天使の肩に乗り、宙にいるジャティスはテラスを見据えながら告げる。

「錬金術で錬成させた純銀の塵を君は知らず知らずのうちに吸い込んでいたんだよ。当初の予定ではここで弱っている君を倒す算段だったのだが、見逃そう。君との勝負はまたどこかで」

純銀——それは吸血鬼にとって最凶で最大の弱点。

かすり傷を受けただけでも吸血鬼の能力は低下してしまう。

天使と共にこの場から去っていくジャティスに見逃されて、テラスは地面に野垂れ苦しむ。

「あ……………ぐ……………」

身体が銀という毒に蝕まれて苦痛を強いられる。

碌に身動きが取れないテラスの意識がだんだん薄くなっていく。

(このままじゃ……………)

動きを封じるといふのはこの事だったのだろう。

少なくとも身体から銀が抜けるまで一週間近くは時間がある。

不老不死だから死ぬことはないが、元に戻るまでは碌に動けない。ジャティスはその間に何かしようとしているのだ。

(知らせ……………ないと……………)

這いずって動こうとするも、半ばテラスの意識は完全に途絶えた。

## 二人

ここ数日、ルミアとリエルは学院が終わるとある場所に必ず訪れる。

「いらつしやい、二人とも」

「ん、セラ。昨日ぶり」

「お邪魔します」

いつものように挨拶を交えると、ルミアは心配そうに尋ねた。

「あの、テラス君は……………？」

その問いにセラは神妙な顔で小さく首を横に振る。

「まだ、なの。ごめんね？」

「あ、いえ！ セラさんが謝るようなことでは……………ッ！」

「……………起きないテラスが悪い」

「ここじゃなんだし、中に入って」

セラに招かれてお邪魔するルミアとリエルは居室<sup>リビング</sup>まで案内されて腰を落ち着かせる。

セラは台所で紅茶を淹れてそれを二人の前に置く。

「あ、いつもすみません……………」

「いいのよ、私が好きでしてるからね」

恐縮するルミアにセラは笑顔で対応し、椅子に腰を下ろす。

「……………セラ、苺タルトないの？」

「うくん、流石にそれはないかな？」

いつも通り平常運転のリエルに困り顔をするセラにルミアは言う。

「あの、私にできることは何かありませんか？」

「……………気持ちだけ受け取っておくね？」

「でも、私……………何もできないままにいるのは嫌なんです……………ッ！」

心からテラスの事を心配してくれている、とセラは思った。

数日前からテラスは意識不明の昏睡状態に陥り、まだ意識が目覚めていない。

システイーナを賭けた決闘前日からテラスは学院に姿を現すことはなかった。

何かあった、と心配になったルミアはテラスを探すためにこの家に訪れたのだが、丁度その時に出会ったのがテラスを抱えているセラだった。

『テラス君ッ!』

心配で、テラスに駆け寄ろうとしたルミアだったが、リエルがその行き先を阻んだ。

『……………ダメ、よくはわからないけど、今のテラスに近づくのはダメな気がする』

「……………え?」

突然のリエルの言葉に戸惑うルミアはセラに視線を向けるとセラはリエルの言葉に同意するように頷いた。

『今のテラス君は危険なの。近づいたらルミアちゃんが危ない』

そう告げられてルミアはテラスの傍にいても許されず、ただ呆然と運び込まれるのを見るしかできなかった。

「……………ルミアちゃんの気持ちはよくわかるよ? でも、今は駄目なの。今のテラス君はとても危なくて、危険な状態だから」

同じ吸血鬼であるセラは発見と同時にすぐにテラスの容態に気付いた。

テラスから聞いていた吸血鬼の弱点の一つである——純銀。それが体内に入っている事に気付いたと同時に少なからず安堵した。

発見した場所が人気のない路地裏であったということに。

吸血鬼は瀕死・重症を負うと本能的に人間の血を求めようになる。

それこそ、理性を簡単に吹き飛ばすほどに。

それも吸血鬼にとつて最も秀でた弱点ともいえる純銀なら尚更だ。

例えば意識がなくても、本能がその人間を嗅ぎ取ってその人間の血を一滴残らず吸い尽くすだろう。

だから今はテラスは厳重に隔離している。

身体に拘束術式を施し、テラスの周囲には何重もの結界が覆われて

いる。

そこにルミアを連れていけば、それは生贄と同じ。ルミアが死ぬまでテラスはルミアを血を吸いつくそうとするはず。

「私は、テラス君ほど吸血鬼の本能は強くはないからまだ大丈夫なんだけど………テラス君は人以外では補えない程に吸血鬼の本能が強い」

セラは初めから人を襲って血を吸うことに抵抗があり、代わりに動物の血を代用して補えることがわかったからいいが、テラスはそれは無理だった。

完全人間専用。人間の血でなければテラスの吸血本能は満たされない。

「今は時間をかけてゆっくりと身体にある銀を分解するのが、一番安全な方法だから………待ってて？」

テラスが死ぬことはない。

再生能力と不死性で少しずつではあるが、体内にある銀を分解して、元に戻ろうと動いている。

それまでは苦痛に強いられるが、耐えて貰うしかない。

「………私、いつも助けられてばかりなんです」

ぽつり、とルミアが口を開いた。

「辛い時も苦しい時もテラス君はいつもそんな私を助けてくれました、励ましてくれました………テラス君の方がずっと傷ついて苦しんでいるのに、彼は自分のことを放ってでも私を助けてくれるんです」

ルミアは異能者ということまで追放された身だ。

だけど、母親や姉から確かな愛情と優しさを貰って育てられてきた。

一人ぼっちになった時に、彼に救われ、システイナという大切な親友であり家族が傍にいてくれた。

だけど、テラスには家族の愛情すら注がれてもいない。

物心ついた時からずっと一人で孤独に生きてきた。

それなのに、彼は自分の事よりもルミアの方を優先した。

「私は、テラス君の優しさに甘えているのはわかっているんです……彼は凄く、凄く優しい。自分の辛さを捨ててまで優しい彼に甘えて、何も返せていない……」

世界よりもルミアを選び、いつも守り、助け、救ってくれた。

それなのに自分を彼に何をしてあげた？

精々、血を提供した程度。それだけだ。

「お願いです、セラさん！ 私を彼に会わせてください!!」

立ち上がり、ルミアは真意な瞳でセラを見据えながら言った。

「今、テラス君が苦しんでいるのなら、辛いのなら今度は私が助けてあげたい！ 傍にいてあげたい！ もう、助けられるだけは嫌なんです………ツ!!」

瞳に涙を溜めて懇願するように頼み込むルミアにセラは沈痛な表情で首を横に振る。

「今のテラス君に会わせるわけにはいかないの。きつと、後悔すると思う」

「それでも構いません！ それにここで彼に会えない方がもつと後悔します！」

強い意思の言葉。何を言っても引き下がろうとはしない姿勢にセラは嬉しそうに笑った。

(ちよつと嫉妬しちゃうな……)

彼と出会い、共に生活を始めた当初は同情だった。

放っておくことはできない。そう思っただけでセラは彼の傍にいた。

だけど、魔術を教え、拳闘を教え、苦楽を共にして、いつしかはそれが当たり前になった。

一緒に生活するのが当たり前のように。

彼の面倒を見るのが当然のように。

共に生活するのが本当の家族のように思えるようになった。

だからセラは家族としてテラスを愛すると決めた。

母のように愛情を与え、姉のように面倒を見て、恋人のように寄り添う。

家族として彼を——テラスⅡヴァンパイアを愛そうと。

(ルミアちゃんも同じなんだね……………)

テラスの事を慕っているから、大事に想っているから、傍にいたいようとしてる。

「……………うん、わかったよ」

ルミアのその強い意思を汲み取ってセラは二人をテラスがいる場所に案内する。

セラが二人に案内したのはこの住処の地下室だ。

空き家だったものを買取り、魔術で改造したこの地下室には万が一に吸血鬼の本能が暴走した時に拘束できるようにテラスが自分で作った部屋だ。

作ったテラス自身も使うことはないと思っただけだったが、その万が一の予防策が役に立った。

暗く長い階段下り、セラの指先に灯した黒魔【トーチ・ライト】……………魔術の光を頼りに一步一步下りていく。

すると――

「ああああああああああああああああああああああああああああ――  
――ッッ!!」

「テラス君!」

苦痛の叫びがルミア達の耳に届き、ルミアは慌てて駆け降りる。

黒くて足元が見えなくてもそんなことは構うことなく、下りて行ってルミアは彼を見つけた。

「ぐっ……………うっ……………ぐっ、あ……………ああ……………」

両腕、両足、首に術式が施された魔術で拘束されている。だが、その瞳は妖しく光り輝き、狂気に満ちて、鋭い犬歯は剥き出で、口からだらだらと涎が零れ落ちている。

「……………っ」

絶句するルミア。

そこにいるのは自分が知っているテラスではない。

血に飢えた吸血鬼――その言葉通りの怪物がそこにいた。

遅れてセラとリエルがルミアの傍にやってくると、リエルはすぐに得意の高速武器錬成で大剣を錬成してルミアの前に立つ。

「リエル。お願い……………それを下して」

「……………でも、今のテラスはすごく、すごく危ない」

「お願い……………」

ルミアの懇願にリエルは大剣を解除する。キャンセル

「……………ありがとう、リエル」

柔和な笑みを見せながらリエルに礼を言つてルミアは真っ直ぐにテラスを見据える。

一歩、近づこうとした時にセラに肩を掴まれる。

「私も一緒に」

「はい」

二人は理性を失い、本能のままに血を求めるテラスに一歩、また一歩と近づいていく。

「あぐ……………う、ぐう……………」

もがき苦しんでいるテラスは不意に動きを止めて視線を近づいてくる二人——人間であるルミアに向ける。

「ああああああああああああああああ——っ!!」

凶悪な獣のように咆哮を上げてルミアの血を貪ろうと動くが、拘束の魔術により碌に動けない。それでもその血を求めるかのように手を伸ばす。

「……………今から結界を解いて中に入るよ？ 覚悟はいい」

「はい」

セラは結界を解除してテラスに近づく。キャンセル

「チ……………血ヲ……………」

血を吸いたいという渴望を求めるように呻き、ルミアに手を伸ばしている。

それでも二人は歩む速度を変えことなくテラスに近づいて——抱きしめた。

「——ッ！」

瞬時、テラスはルミアの首筋に鋭い犬歯を突き立てて噛みついた。

「……………ルミアアッ!？」

リエルはすぐに大剣を錬成し、テラスを斬ろうとしたが、ルミアがリエルに向けて首を横に振った。

「……………ごめんね。こんな苦しいのに何もしてあげられなくて」

噛みつかれて激痛が走り、血を吸われているのにルミアはいつもの笑みを浮かばせながら

テラスを強く抱きしめる。

「だから、今度は私が貴方を救わせて。私の血でテラス君が少しでも楽になれるのなら全部あげる」

どこまでも穏やかで優しく……………そして、覚悟を決めた表情で語るルミアにセラも続ける。

「テラス君。それ以上ルミアちゃんから血を吸えば君はきつと後悔する。私はそんな君を見たくないよ……………戻ってきて」

切なくも懇願するセラもテラスを強く抱しめる。

「……………ルミア? セラ姉さん……………?」

不意に声が聞こえ、離れると先ほどの怪物のような顔をしていたはずのテラスは二人の知っているテラスに戻っていた。

「……………なに、してるの? 死にたいの……………?」

完全に戻ったわけではない。ルミアの血を吸い、多少は理性を取り戻せれたテラスは二人に呆れるように告げた。

暴走した自分にわざわざ近づいて自ら首を捧げるなんて行為、自殺しか考えられない。

あと少し、理性を取り戻すのが遅かったら間違いなくルミアは死んでいた。

「……………それでも、私はテラス君を助けたかったんだよ?」

青ざめた表情で穏やかに笑うルミアにテラスは乱暴に噛みついたルミアの首筋を舐めて傷を癒す。

「……………もう、二度としないでよね?」

「ふふ、保証できません」



笑うルミアの笑顔にテラスは呆れるように息を吐いた。

何もできない

「……………大丈夫なの？ テラス君」

「まだ、理性が保つ程度だけど……………それよりもセラ姉さん、どうしてこんなことをしたの？」

拘束を解いたセラはテラスの容態を尋ねるとテラスはルミアを支えながら半眼で視る。

「人間を、ルミアを僕の前に連れてくるなんて……………理性を取り戻すのがあと少し遅かったらルミアは死んでたよ？」

「……………」

「吸血鬼の本能がどんなものか、それを知らないセラ姉さんじゃ——」  
「……………私がお願ひしたの。だから、怒らないで」

沈黙するセラ。ルミアはそんなセラを庇う様にテラスを宥める。

「セラさんは何度も止めてくれたけど……………私が無理を言っただけで会わせてもらったの。だから、悪いのは私。ごめんなさい……………」

強引にテラスに会いに来たルミアは頭を下げた。謝った。

「……………はあ、わかったよ。結果的には僕も理性は取り戻せたし、ルミアも辛うじて無事だったからこれ以上は何も言わない」

溜息を吐いてそれで強引に自身を納得させる。

「テラス君、ごめんね……………」

「もういいよ、面倒をかけたのは僕の方なんだから」

セラもルミア達を連れて来たことを謝る。

「それよりも地下<sup>こ</sup>下室<sup>こ</sup>を出よう」

テラス達はとりあえず地下<sup>こ</sup>下室<sup>こ</sup>から出て、居室<sup>リビング</sup>に一度集まる。

「……………それで？ 決闘はどうなったの？」

「それが……………」

腰を落ち着かせてテラスは決闘の事についてルミア達に尋ねると、その表情は芳しくはなかった。

というよりも既に決闘から数日が経過していた。

魔導兵団戦での決闘は引き分けで終わったが、レオスが改めて決闘を申し込みグレンがそれを受けた。

だが、決闘の場にグレンは現れず、システイーナはレオスと結婚することになった。

そして、その結婚式が明日だ。

「私、どうすればいいのかわからなくて……………?」

「それでリエルはルミアの護衛?」

「ん、グレンが絶対ルミアから離れるなって……………」

二人の言葉にテラスは納得と同時に理解した。

もうジャティスの掌の上で踊るしかない、と。

テラスも理性を取り戻し、身体を動かせるぐらいまではなったが、まだ身体は重いし、頭も痛い。精神性も完全とは言えない。

今の状態では碌に魔術も使えず、吸血鬼の能力も満足には使えない。

動きぐらいは封じておこう。あの時のジャティスの言葉はこの事だったのだと今更自覚した。

「……………今から話すことを落ち着いて聞いて欲しいんだけど、その前にセラ姉さん」

「どうしたの?」

『今回の件に関わることを禁止』にするからね」

「ッ!? テラス君!? どうして……………ッ!」

不意に命令を下されて目を見開いて問い詰めるセラにテラスは話す。

「グレン先生との約束。今回の件でセラ姉さんを関わらせないように言われたからね。それにルミアにリエル。システイーナはレオス先生と結婚することはないよ。もうレオス先生は死んでいると思うし」

その言葉に三人は目を丸くする。

そして、テラスは今回の件の主犯とその計画を大雑把に話した。

「うそ……………ジャティスが生きて……………?」

「そんな……………」

「……………狙いが、グレン?」

「嘘のように聞こえるけど本当だよ。ジャティスさんの本当の狙いは

グレン先生でシステイナーはグレン先生が本気を出せれるようになる為に利用しているだけ。僕を倒そうと戦ったけど、あの場で僕を倒すのはよく思わなかったらしく、僕の動きを封じてどこかに去ったよ。おかげでこの通り」

両腕を広げて動けないことをアピールする。

「それなら尚更だよ!? テラス君、グレンを助けに行かないと!」

今すぐにも動きたいセラだが、テラスの命令により動けない。

「お願い! 命令を解いて! テラス君が動けないのなら私が動かないと!」

「約束は約束。命令を解く気はないよ。それに……………多分だけセラ姉さんじゃジャティスさんには勝てない。人工精霊も厄介だったけど、それ以上にジャティスさんの未来予知のような固有魔術<sup>オリジナル</sup>。あれは危険。相手が僕じゃなかったら軽く三回は殺されていた」

必死に懇願するセラだが、テラスは首を縦には振らずに淡々と語る。

「素の身体能力ならセラ姉さんの方が強いよ。だけど、ジャティスさんは強いだけじゃ勝てない相手だ。セラ姉さんがグレン先生のところに駆けつけても無駄死にする可能性が高い。いや、グレン先生に本気を出させる為に真っ先に殺す可能性の方が高い」

「……………ッ!」

「もう、僕達にできることはない。完全にジャティスさんの掌の上だ」  
もしかしたらこの会話の内容自体も既に予測されているかもしれない。

仮にそうだとしてもテラスは満足に戦えず、セラも動けず。何もすることができない。

「月並みの言葉で悪いけど、グレン先生を信じるしかないね」

椅子に身体を預けながら申し訳なさそうにそう口走るテラスの言葉に誰も口を閉ざす。

「……………ルミア、今日は泊まっていった方がいい」

「え? でも……………」

「無理をしているのはわかかってるよ? もう碌に歩けないでしょ?

それなりの量を吸ったんだからこれ以上は体に障る。リエル、悪いけどルミアの護衛をお願いするよ」

「……………ん、任せて」

「二階の奥に空き部屋があるからそこを使って」

「……………ルミア、行こう」

リエルに連れられてルミアは居室リビングから出て行くもその顔は何か言いたそうな顔だった。

それでも今は聞く余裕はない。

あのままルミアがいたらまた理性がとんで襲いかかるかもしれない。

リエルはそれに察してルミアを居室リビングから出したのだろう。

「……………ねえ、テラス君」

「なに？」

「もし、もしもだよ？ 今回の件で狙われているのがグレン君じゃなくてルミアちゃんならテラス君はどうしたの？」

「……………グレン先生とシステイーナに攻撃を任せて僕は不死性を活かしての盾代わりになる。だけど、セラ姉さんは盾代わりにもなれないから」

「……………自分で守ろうとは思わないんだね」

「今の状態なら無理だからね。可能な限りの最善を尽くして必要なら他から力を借りるまで。誰かを守ろうと思うのはあくまで自己満足だから」

そう自己満足。

セラがグレンを助けに行こうとするのも。

テラスがルミアを守ろうとするのもあくまで自己満足だ。

「もし、今回の件で僕に嫌気を指したのなら好きなどころに行ってもいいよ？ 元々魔術を教わったら自由にするつもりだったんだから」

セラを眷属にした最もな理由が魔術を教わること。

今となってはテラスは魔術を修めて、固有魔術オリジナルまで作り上げた。もうセラから教わることは殆どない。

後はどこで何をしようがセラの自由のはずなのに、セラはずっとテ

ラスと一緒にいる。

「……………そんな寂しいこと言わないでよ」

儂い笑みを浮かばせながらセラは後ろからテラスを抱きしめる。

「こんなことをテラス君を嫌いになったりはしない。それに約束したでしょ？ 私は貴方の家族になって一緒にいるって。だから、そんな寂しいことは言わないでほしいな」

「……………家族、か」

ぽつりと呟いた。

■■■■にとつて家族はそんなものではなかった。

極力関わらない様に避けられ、無視されるのが当たり前だ。

家族というものが何なのか、彼には分らなかった。

(この世界は優しいな……………)

とびつきり残酷なほどに優しいこの世界で友達ができて、家族もできて、恋人もできた。

■■■■だった頃とはまるで違う。

(どうしてこんな怪物に当たり前のように接してくれるのだろう

……………?)

それがわからない。

## 新しい住人

フェジテの薄暗い路地裏で一人の少女は複数の男性達に暴行を受けていた。

嘲笑い、貶され、殴られ、蹴られる。

銀色の髪は泥で汚れ、身体には痣や腫れが目立つようになっている。

少女は身を丸めて、両腕で頭を抱えて暴行が終わるのを涙ながら耐えていた。

身を守ろうとするのは少女にとって唯一の防衛手段であり、僅かながらの抵抗だった。

だが、その抵抗が男性達の嗜虐心を擦らせる。

「……………こんなところで何をしていますのですか？」

不意に第三者の声がこの場に響いた。

「ああ？」

不快そうな声をと共に男性達と一緒にその声がした方に視線を向けるとそこには一人の青年がいた。

黒髪に血のように赤い目をした学生服の青年は当たり前のように歩み寄ってくると、少女に視線を向けて頷いた。

「ああ、自分よりも弱い者を貶めて憂さ晴らしですか？ わざわざこんな人気のないところまでご苦労なことだ」

「んだと!?」

息を吸うように男性達を煽ると、沸点が低いのか一人の男性は青年に大腿で近づいていくが、仲間の一人がその男性の肩を掴んで止めた。

「おい止せ！ あの制服はアルザーノ学院の学生だ！」

「なっ——！ チッ！」

魔術を教わるアルザーノ魔術学院。いくら学生といっても魔術が使える以上は一般人には勝てない。

男性達もそれは理解しているのか、素手で魔術師と戦うなんて無謀なこととはしない。

「ああ、安心してください。学院外での魔術の使用は禁止されています

すから魔術は使いませんか？ わざわざ魔術を使うまでもありませんし」

煽る青年の言葉に男性達の額には青筋が浮かび上がる。

「……………おい、ガキ。男に二言はねえぞ？」

「いいですよ？ もし、僕が魔術を使用したら学院でもどこへでも報告してくれるも」

その言葉に男性達は顔を見合わせてにやりと笑う。

こちらは複数で青年はただ一人。

いくら魔術師の卵である学生とはいえ、魔術を使わずこの数は相手にできない。

困んで袋叩きにしてやる。と意気込んだ男性達は青年に襲いかかる。

「ほら、使う必要はなかったでしょ？」

呻きながら地面に横たわる男性達の中心に青年は立っている。

「さて、と」

青年は地面に横たわる男性の腕を掴んで強引に立ち上がらせると、躊躇うことなく足を折った。

「ひぎっ！」

悲鳴が漏れる男性を無視して青年は今度は別の男性の腕を掴む。

「や、やめ——」

ぼきり、と鈍い音が響いた。

「いぐっ、あああああああああああぶっ!？」

「大声を上げるのは近所迷惑ですよ？」

男性の口を塞ぎながら周囲に迷惑をかけた子供に注意するように声をかける。

まだ無事な他の男性達は当たり前のように残虐なことを繰り返す青年に恐怖し、震える。

どうしてここまでされないといけない、と思った。

「た……………助けて……………ッ」



男性達の一人が懇願するように青年に助けを求めた。

「おかしなことを言いますね？ 貴方はさつきまで自分よりも弱い女の子を貶めていたのに、自分がその立場になったら助けを求めるなんて都合がいいとは思いませんか？」

常識を語るように青年は告げ、男性達の瞳は恐怖と絶望に染まる。

——殺される。

そう思った。

「まあ、今回被害を受けたのは僕の知らない女の子ですし、このぐらいにしてあげましょう。次からはこのようなことはないようお願いしますね？」

法医呪文ヒール・スベルで傷を癒すと男性達は一斉のその場から逃げ出す。

それを遠目で確認した青年は一息吐いて、少女に近づく。

「君、大丈夫？ 随分手酷くやられたね？」

呪文を唱えて少女の傷を治す。

「あ……………う……………」

身体を震わせる少女。その少女の外見を見て青年は首を傾げる。

「こんなところにいるなんて……………君、もしかして捨て子？ 迷子じゃないよね」

汚れた服、体に染みついている悪臭から少なくとも迷子の子供ではないことはわかった。

「行く当てはある？」

青年の問いに少女は小さく首を横に振ると、青年は頬を掻きながら少女に手を差し伸ばす。

「ここで会ったのも何かの縁だし、一緒に来る？」

その言葉に少女は顔を上げ、青年の顔と差し伸ばされたその手を何度も見返す。

「……………」

数秒、数十秒……………悩みに悩み、少女は青年の手を取った。

その青年の名は——テラスⅡヴァンパイア。

ジャテイスに動きを封じられ、全快を取り戻した彼は浮浪者と思われる少女を住処に案内する。

「お帰りー、どうしたの？ その子」

「ちよつとね。セラ姉さん、悪いけどこの子を綺麗にしてきてくれる？」

「そうだね。それじゃ、いこっか」

セラは少女の手を掴んで浴室に連れて行こうとすると、顔だけ振り返る。

「覗いちゃダメだよ？」

「覗かないよ。それぐらいの常識は弁えている」

悪戯笑みを浮かべながらセラは少女を連れて浴室に赴き、汚れきったその身体を清め、服も綺麗なものに変える。

「うん、すつごく綺麗になったね。こんなに可愛いなんて」

セラと共に再びテラスの前に姿を見せる少女は別人のようだった。汚れがついていた銀髪も光に反射して淡い輝きを放ち、泥がついていた肌も雪のように白い。しかし、黄金色の双眸はどこか昏く印象を残している。

「ちよつと座って待っていてね。今、ジュース持ってくるから」

セラは少女を椅子に座らせて台所からジュースを持ってきて、少女の前に置くもそれに手をつけようとはしなかった。

「テラス君、この子はどこで見つけたの？」

「前にジャティスさんと戦った付近で。ジャティスさん対策として何かヒントでもと思つて行つたら見つけた」

テラスは何も少女を助ける為にあの路地裏に行つたのではない。

次にジャティスと戦う為に何か対策のヒントでもと思つて足を運んだら偶然にも暴行を受けていた少女を見つけただけ。

あの場ではない路地裏だったらテラスは関わりようともしなかっただろう。

「行く当てもないみたいだから拾ってきた。名前も聞いていないよ」

「そんな……………犬猫じゃないんだから」

犬や猫を拾ってきたかのようにあつさりと答えるテラスにセラは

苦笑していた。

「こういう時はちゃんとした公共機関に預けるのが――」

「それは無理だと思うよ？ 多分、その子は異能者だから」  
「っ!？」

不意に放たれたその言葉に少女は肩を震わせた。

それを見逃さなかったセラは一層に真剣な顔つきになる。

「何の理由もなくにこんな子供に大の大人が寄ってたかって虐めるのはおかしいとは思ってかまをかけてはみたけど、やっぱりそうだったんだ」

少女の反応に疑念から確信へと変わったテラスは納得した。

嫌悪の対象とされている異能者なら差別も迫害も成り得る。

それが小さな子供でも例外は無い。

仮にこの少女を公共機関に連れて行き、異能者だということがバレたら最悪はバークスがしてきた実験道具のように脳髄だけの存在にされていた可能性もゼロではない。

「……………ッ」

異能者だとバレて自分を抱きしめる少女の身体は小刻みに震え、怯えた眼差しを見せる。

「大丈夫」

怯えている少女をセラは優しく抱きしめ、頭を撫でた。

「私達は君の事を虐めたりはしないから。もう、怖がらなくていいの」  
「僕達も似たようなものだしね」

「ばっ、と背中から翼を出すとそれを目撃した少女の瞳が丸くなる。  
「それに僕の知り合いにも異能者がいるから別に君だけをとやかく言うつもりはないよっ。」

「魔術も異能も似たようなものだもんね。君さえよければ私達と一緒に暮らさない？」

「……………いいの？」

「……」ここで初めて少女の声を耳にした二人は首を縦に振る。

「私の名前はセラⅡシルヴァース」

「僕の名前はテラスⅡヴァンパイア。君の名前は？」

「…………… ヴイオロ。 ヴイオロ 〓 シャンヴル、です」  
こうして、この住処に新しい住人が一人増えた。



「……………？ 今期の提出期限はとつくに過ぎているぞ……………？」

「え、提出していなかったんですか？」

「……………え？ 魔術論文？」

鳩が豆鉄砲をくらったが如くきよとんととして、目をぱちくりさせるグレン。

「……………なにそれ？ それ、俺も書かなきゃ駄目なの？」

「《当たり前前だ・この・馬鹿》 ああああああ—— ツ!」

「ちよ、ま——」

その瞬間、巻き起こる爆炎。

セリカが唱えた爆裂呪文が、グレンと進路状にいたテラスも巻き込まれて吹き飛ばされる。

「お前、学院の魔術講師だろ!? 定期的に自分の魔術研究の成果を論文にまとめて報告しなきゃダメに決まってるだろ!」

「……………あの、僕、関係ないのですか……………？」

巻き込まれたテラスは傷を再生させながら呟くもセリカは無視してグレンの胸倉を掴み上げていた。

どうやらグレンは講師職の雇用契約の更新条件である、定期的に研究成果を魔術論文にして提出するという学院のルールを知らなかったらしい。

このままではグレンはこの学院から去ることになるのだが、運がいいことにグレンには論文に書くネタが降りて来ていた。

それは『タウムの天文神殿』。

北の街道からやや外れた場所にある古代遺跡で、探索危険度F級、有益な魔法遺産アーティファクトも出土されず、霊脈レイラインも平凡、魔術的な価値も低ければ、歴史資料的価値も低い。僻地でなければ観光名所になっているような遺跡。

今更そんな遺跡に論文になるようなネタがあるのか？ という疑問が生じたが。

「今から数年前、とある魔術師の調査によって、その『タウムの天文神殿』は、古代の時空間転移儀式場である……………という説が浮上してのう……………」

「……………えっ!? ちょっと、それマジっすか!？」

思わず目を剥いて詰め寄るグレンだが、テラスも同じ気持ちだった。

時空間転移魔術……………少し魔術をかじっている者なら、一笑に付すような話だ。

とある時空間地点から別の時空間地点へと移動する……………所謂、時空間旅行と呼ばれるそれは、魔術理論的に不可能なのだ。

魔術の二大法則の一つ『零点収束の法則』——あらゆる世界法則は、常に最も自然で安定した形へと収束し、世界は矛盾を許さない——この法則に阻まれるのである。

その時空間転移儀式場が散々調べつくされた『タウムの天文神殿』にあるといわれても誰もが一笑にする与太話になるだろう。

だが、その説を提唱した魔術師があまりにも天才で優秀過ぎた為に無視することもできない。

そこでグレンに白羽の矢が立った。

グレンが調査隊を率いて、その『タウムの天文神殿』の再調査を行う。例え何もなくてもそれも一つの成果、文句はあっても乗り切ることはできる。

まさにグレンにとっては渡りに船な申し出だ。

「あの、それで僕がここに呼ばれた理由はその調査に参加してグレン先生の補佐をすればいいのでしょうか？」

グレンと一緒に呼ばれて学院長室まで足を運んだテラスは学院長に尋ねると、その疑問をセリカが答えた。

「それもある。悪いがこの馬鹿弟子の尻拭いをしてやってくれ」

「わかりました。もう一つは？」

「実は上のお偉い方からお前にも何か論文を提出するように言われているんだ。テーマも内容もなんでもいい。その辺はお前の好きにしろ」

「えっと、どうしてわざわざお偉いさん達が僕みたいな一学士に？」

最もな疑問を投げると学院長が口を開いた。

「君の噂はもうこの学院に留まらずに、他学院にも広まっているのう。」

もう一学士では収まらない君の実力を見定める為に君にも論文を発表するように言われたのじゃ」

「はあ……………そうですか……………」

「そういえばレオスがこの学院に来た時もそのような話があったな、  
と思い出した。」

「その論文の内容次第にも寄るが、位階を第一階梯ウッから第四階梯クァットルデまで  
上げるとのことだ」

「凄えじゃねえか!? 上手くいきや大出世どころじゃねえぞ!」

驚きの声を上げるグレン。

テラスは転入してきたこともあって位階は第一階梯ウッ。

ここで成功したら一気に三つも位階が上がり、第四階梯クァットルデとなればアルザール学院で歴史上初めての存在となる。

学士で、それも二年次生でその位階となればグレンの言う通り大出世どころではない。

「んゝまあ、頑張ります……………」

「おいおい、もつと喜べよ! こんなチャンス滅多にねえぞ!」

「グレン君の言う通りじゃ。不安が生じるのもわかるが、君の論文を楽しみにしとる教授もいるじゃろうし、ここは是非とも君に頑張ってもらいたい」

「……………わかりました。未熟な身ではありますが、努力させていただけます」

論文のネタを何にしようか、と思いながらテラスはそう答えた。

こうしてグレンはクビを、テラスは位階の為に『タウムの天文神殿』の調査に向けての準備に取り掛かる。

「凄い、凄いよ! 頑張つてね!」

学院長室での話をテラスはセラに伝えると自分のこと以上に喜んでいた。

「ネタは何にするか決まったの? テラス君の事だからどんな論文でもいい成果を残せるよ」



「とりあえず、軍用魔術に対する何かにしようと思っているけど、その前にグレン先生と一緒に行く『タウムの天文神殿』の調査を考えないと」

深いため息が出る。

グレンは調査員に対する人件費を削減する為に自分のクラスの生徒を使い回すつもりらしい。おまけに懐が寂しいせいとか、事情を知っているテラスまでも自腹。

自分が論文を提出していないというだけで、巻き込まれるこちらの身にもなつて欲しい。

「遺跡調査か……私も行ってみたいな。そう思わない？ ヴィオロちゃん」

「え………？ あ、あの、その………はい………」

不意に話を振られた銀髪の少女——ヴィオロ嬢は困惑しながらも首を縦に振った。

フェジテの路地裏でテラスが拾った異能者であるヴィオロは二人と一緒に生活している。

まだ、生活に馴染めていないせいもあるのか、戸惑いが見られる。

「セラ姉さん。ヴィオロが困ってるよ？」

「えー、そんなことないよね？」

こくこくと首を縦に振るヴィオロにテラスは嘆息する。

「ところで、どうしてヴィオロにセラ姉さんと同じ紋様があるの？」

拾ってきた日はなかったセラの部族に伝わる呪的な紋様が描かれている。

同じ銀髪のせいとか、セラ同様に不思議と違和感がない。

「だってヴィオロちゃんには私にとって娘みたいなものだもん。あ、その場合だとテラス君がお父さんかな？」

「………まあ、ヴィオロがよければ父親の代わりぐらいは務めるよ？ 拾ってきたのは僕なんだし」

拾ってきたからにはその責任と義務がある。

だからヴィオロにとって必要なら父親の代わりぐらいは務めるテラスだが、セラは冗談で言っただけで、真面目に受け取ったテラスに

苦笑を浮かべる。

「お母さん……………お父さん……………」

「うん。私達は君の本当の両親にはなれないけど、家族にはなれる。だから、いっぱい甘えてもいいからね？」

セラは優しい眼差しでヴィオロの頭を撫でると、ヴィオロは顔を赤く染め、もじもじする。

銀髪で紋様もあるためテラスから見たら本当の母娘に見える。

「ほら、お父さんも」

「ヴィオロ。僕は父親とは何をすればいいのかわからないけど、して欲しいことがあると言つて欲しい。出来る範囲ですよ」

セラに促されて言葉を紡ぐテラスは父親とはなにをすればいいのかわからない。

■■■■■だった頃、父親は挨拶も碌にしないどころか、存在していないかのように扱われて、仕事で家を空けることもよくあった。

父親と遊んだ記憶すら持ち合わせてはいるが為に、子供にとって父親はどんな存在なのかわからない。

だから、ヴィオロが何かを望み、言ってきたのならそれに対応しよう。

「えっと……………一緒に寝たい、です……………」

囁くような声でそう言ってきたヴィオロに二人は首を傾げて尋ねる。

「それは私達三人で、つてこと？」

親子三人で川の字で寝たいヴィオロの要望にセラは微笑みながら頷いた。

「うん、いいよ。テラス君もいいよね？ あ、寝ている時に変なことしたら駄目だからね」

「しないよ。うん、わかったよ。今日は皆で寝よう」

テラスも同意してヴィオロを挟む形で今日は眠りについた。

「ねえ、テラス君……………」

「なに……………」

寝息を立てて夢の世界に旅立っているヴィオロを見ながらセラは

テラスに言う。

「家族っていいよね……………」

「……………そうかもね」

その言葉の意味をテラスは知らない。だけど、これが家族というものならそうなのかもしれない、そう思った。

## 調査隊募集

アルザーノ魔術学院、二年次生二組の教室にて。

授業前、いつものように元気に賑わうクラスメイト達を他所にシステイーナは机に突っ伏していた。

「はあくく……………」

「どうしたの？ システイーナ」

「えつとね、実は……………」

論文を作りながら机に突っ伏しているシステイーナの様子が気になってルミアに尋ねた。

システイーナは魔術考古学を専攻する為に遺跡調査の経験を積もうと、調査隊のメンバーに立候補して論文を提出したが、落選。

それも様々な難癖をつけられた上での落選で、これで四度目となる。

理由を聞いて落ち込んでいることに納得するも、仕方がないとテラスは思う。

遺跡調査員は慣例的に第三階梯トレデ以上の魔術師から選ぶ。システイーナはまだ第二階梯デュオデで、今回の遺跡調査の予想危険度はB＋＋級。

よく準備された遺跡探索隊でも、たまに死人が出るほど危険だ。  
(でも、落ち込むことはないんだけどね……………)

どうせこの後、我等のグレン大先生様が人件費削減という理由で遺跡調査に行くメンバーを決めるのだから。

「ところでテラス君は何してるの？ また魔術の研究？」

「ん？ ああこれは論文。発表するように言われたから」  
クアットルクアットルデ

その手を止める。

「そういえばルミア、前はごめん」

「え？ なにが？」

「以前に僕の住処に泊まりに来た日のことだよ。乱暴にしたから痛かったでしょ？」

吸血鬼の本能が暴走し、乱暴に噛みついてしまった為にその痛みは相当なものはずだ。

そのことについてまだちゃんと謝っていなかった。

「ううん、気にしないで。私も嬉しかったから」

慈悲深い微笑みを見せるルミアは自分でもテラスの力になれたことが嬉しかった。

「でも、次からは優しくしてね？ 結構痛かったんだから」

気にはしていなくても、やはり痛いものは痛かったらしい。

「それは保証できない。我慢ができなかったらまたするかも」

また吸血鬼の本能が暴走したらルミアはまた我が身を犠牲にしてくるかもしれない。

ただでさえルミアの血は至高の味なんだ。あの時でもよく理性を取り戻せたと感心しているほどだ。

などと、二人は以前のことを話しているとクラスメイト達の賑わう声がいつのまにか静まり、二人を見ていた。

「……………?」

どうしたんだろうと、二人は顔を見合わせて首を傾げる。

女子達は頬を赤くして、羞恥と羨望の目を二人に向けて。

男子達は嫉妬と憤怒の目で射殺さんとばかりにテラスを睨み付ける。

状況がよく呑み込めていない二人にシステイーナが頬を桜色の染めながら言った。

「二人とも。今の会話は誤解を招くわよ?」

システイーナの言葉の意味に数秒理解できなかったルミアだが、その意味を理解すると耳まで顔を赤くする。

「ち、違うから! そういう意味じゃないから!!」

慌てて否定の言葉を叫ぶルミア。

少し遅れてテラスもようやくその言葉の意味を理解した。

ここはそういうことに興味津々な年頃の学生が集まる。恋話でも盛り上がるのならそういうことも話題になるのも無理はない。

それが学院で有名な恋人同士なら尚更だ。

「えーと、ルミアの言う通り、皆が想像するようなことは一切していないからね。僕達は碌に手も繋いだこともないから」

「……………ねえ、システイーナ。そういう意味ってどういう意味？」

「リエルはまだ知らなくていいの」

クラスメイト達の誤解を解き、システイーナはリエルを優しく宥める。

「……………ふっ、お早う、諸君！」

その時、教室前方の扉が開かれ、グレンが颯爽と姿を現した。

「どうか、この哀れでゴミくずな俺に力を貸してください、お願いします——ッ！」

身を捻りながら天井高く跳躍し、月面宙返りからの両手両膝額五点着地。

グレンの固有魔術オリジナル「ムーンサルト・ジャンピング土下座」を起動したグレンに生徒達は呆れ果てていた。

授業が始まると同時にグレンは熱く語った。

遺跡調査の調査隊を確保するためにそれらしいことを言って有志を募った。

だが、グレンが魔術研究の論文を提出していないことが既に噂となり、嘘を隠すのが下手なグレンの態度に生徒達は呆れ、論文を書いていないことに確信した。

なりふり構わずに恥も誇りも捨てて生徒に土下座で頼み込んだ。

「あー、僕も先生の尻拭いとして行くことになったんだけど、流石に二人だけだと大変だから……………手伝って欲しんだ」

テラスもグレンと一緒に頼み込む。……………その時である。

「どうか、お顔を上げてください、先生」

何の迷いもなく、ルミアが立ち上がった。

「……………その遺跡調査、私にもお手伝いさせてください」

胸元で手を組み、穏やかな笑みを浮かべ、まっすぐグレンを見つめている。

その佇まいはまるで聖女。後光が差しているかのような、神々しさだ。

「……………て、天使……………?」

グレンは土下座の体勢のまま、呆けるようにルミアを見つめていた。

「いや、天女でしょ?」

「いや、女神だ」

「では、崇めてください。ルミア女神に」

「はは〜」

「ノリがいいですね、先生」

「怒るよ……………?」

「ふおめん」

頬を膨らませてテラスの頬を抓るルミアに流石に悪ふざけが過ぎた。

「でも、ルミアが着いて来てくれるのは心強いよ。法医呪文は僕も使えるけど、僕は探知・探索に力を入れたいから」

「そうだけ?」 法医呪文ヒーラー・スベルは野外に出るなら必須技能さ。つーか、ぶっちゃけ言うと、生徒で調査隊を組むなら、ルミア、お前にはどうしても来て欲しかったぐらいだ。あんがとな」

「はい。先生が良い論文を書けるように、私、頑張りますね!」  
そして。

「よくはわからないけど……………わたしも行く」

ルミアに続いてリエルも立ち上がった。

これだけでも悪くはない組み合わせだ。

前衛戦力として申し分ないリエル、前衛後衛共にこなせるテラス、法医呪文ヒーラー・スベルに長けているルミア、最後に臨機応変に対応できるグレン。

万が一に戦闘が起きても十分に対応できる。

続いてギイブル、カツシユ、セシル、リン、テレサが立候補してテラスはテレサに尋ねた。

「ねえ、テレサ。確かテレサの実家は有力商家だったよね？」

「ええ、そうですが？」

「なら、欲しいものがあるんだけど、金銭的にもそこまで余裕があるわけないから厚かましいけど、融通することってできる？」

「勿論。これからもレイディ商会を頼って頂けるのであれば」

「……………抜け目がないね？ 了解。これからも仲良くしようよ？」

「ええ、これからも仲良くしてくださいね？」

苦笑するテラスに微笑みを浮かべるテレサは手を交わす。

(……………テレサとは長い付き合いになりそうだ)

互いに言葉の意味を理解しているからわかる。

テレサは将来的にも一躍活躍するであろうテラスを先に自分達の商会に確保し、テラスはテレサの商会——レイディ商会で融通を効かせて貰う。

きつと近いうちに契約書でも書くことになるかも、と思いながらテラスはテレサに手に入れたいものを告げておいた。

「出来れば、遺跡調査までには」

「ええ、お任せくださいな」

取引を行っている間にグレンは最後の一人、ウエンデイに声をかけていた。

暗号解読系の魔術に関して天才的なウエンデイに調査隊に加えたという考えはテラスでも理解できるのだが——

(システイーナ……………)

真つ白になっているシステイーナにテラスは嘆息する。

あれほど遺跡調査に行きたがっていたはずなのにどうして素直に立候補しなかったのか、もはや哀れみの眼差しを向けるしかない。

(仕方がないね……………)

「先生、システイーナも連れては行きませんか？」

「え……………？」



目を丸くするシステイーナを置いてテラスはグレンにシステイーナを勧めるように話す。

「このクラスで魔導考古学に詳しいのはシステイーナです。きっと何か役に立つはずですよ？」

「いや、白猫は連れて行くに決まってるだろ？俺、魔導考古学その者に関しては何となく素人だし………首に縄をかけて引きずってでも連れて行くぞ？」

「と、いうことだからシステイーナ。僕もそこまで魔導考古学は詳しくはないから頼りにしてるよ？」

助け船を出したテラスにルミアはシステイーナの後ろで手話（魔術師の必修技能の一つ）で礼を言ってきた。

（やれやれ、手のかかる猫だよ）

いつもの活気を取り戻したシステイーナを見据えながらテラスはそう思った。

## 出発

それから——一週間。

通常授業をいつも通り進める傍ら、遺跡調査計画の立案、スケジュール調整、必要物資の手配、参加生徒達を集めてのミーティング、生徒達への野外活動時における生存術サバイバルの指導……出発前にやるべきことは山のようにあった。

そして、慌ただしい日は過ぎ——遺跡調査前日の夜。

テラスはテレサに頼んでいた物を受け取り、その調整を行っていた。

「こんなものを本当に用意してくれるなんて……」

本音では本当に用意してくれるかは半信半疑だったが、本当に注文通りに用意してくれただけでなく、採算度外視で安くしてくれたテレサの実家に頭が下がる思いだ。

「さて、まあ……明日の準備もこれぐらいでいいだろう」

遺跡調査の準備も終えたテラスは、自分が発表する論文を書き上げて行く。

発表は遺跡調査が終わればすぐというあまりにも時間がないこの状況でもテラスは既に八割は内容は完成させている。

軍用魔術の改竄、呪文改変、簡易化。

それがテラスが発表しようと考えている内容だ。

通常の軍用魔術よりも威力などは落ちるも、魔力消費を減らし、より短く切り詰めた詠唱で簡単に扱えるようにする。

既にある魔術を改良するのはテラスの得意分野だ。

論文を仕上げて行くと、不意にノック音が聞こえた。

「どうぞ」

「お、お邪魔します……」

部屋に入ってきたのは義理の娘？ となっっているヴィオロシヤンヴルは一冊を本を抱えていた。

「どうしたの？」

「えっと、本を読んで欲しくて……」

遠慮がちにそう言ってくるヴィオロにテラスは首を傾げる。

「僕でいいの？ いつもはセラ姉さんに頼んでいるのに」

「その……………お、おおか……………」

「ああ、無理にお母さんでなくていいよ。呼びやすいように呼べばいいから」

セラのことを頑張ってお母さんと呼ぼうとしたヴィオロだが、まだそう呼ぶには抵抗があるのか、淀ってしまう。

「いつもセラさんばかりだと、迷惑かと……………」

言葉を濁らせながらヴィオロはそう呟いた。

毎回だと流石に迷惑だと思い、たまにはとテラスを選んだというわけか。

その言葉に納得するテラスは椅子から立ち上がってヴィオロが持っている本を手取る。

「いいよ。今日が僕が読んであげる」

ヴィオロのしたいことを出来る限りはさせてあげるつもりでいるテラスだが、明日からはしばらく住処を空けるのだから忙しくてもそれぐらいの我儘ぐらいは聞いてあげようと寝台ベッドに腰を下ろしてヴィオロを手招きすると、ヴィオロはテラスの膝上にちよっこんと座る。

「タイトル『メルガリウスの魔法使い』……………」

この国の子供なら一度は誰もが読むその童話をテラスはヴィオロに読み聞かせる。

遺跡調査へと出発する当日の早朝にテラス達は屋根上に二階席もある大型の貸し馬車に搭乗し、フェジテを発った。

「風が気持ちいいわね……………」

「うん」

吹きさらしの二階席の一角に陣取ったシステイーナが、緩やかにそよぐ風に流れる髪を撫で押さえながら、しみじみと呟き、その隣にいるルミアがにこにここと応じていた。

フエジテの城壁北門から外に出たシステイーナ達を迎えたのは、まず辺り一面に広がる広大な農地、そして自然の息吹を感じさせる冷たく澄んだ空気であった。

「この光景も久しぶりだね……………」

「あら？ テラスは以前にも見たことがありますの？」

「まあね。学院に入る前はあちこちと行っていたから」

「そう、なんだ……………」

同じく二階席に搭乗したテラス、ウエンデイ、リンはテラスの話に興味を示していたが、それはテラスがこの世界に吸血鬼として転生してからセラと出会うまでの事だ。

見聞を広げようとあちこち動いていた。

テラスが二階席に搭乗しているのは当然ルミアの為。いつ、どこで天の智慧研究会が襲ってくるかわからない以上は極力共に行動している。

恋人同士ということもあって何かと動きやすいのはありがたい。

「それにしても……………」

チラリと視線を下に向け、馬車内にいるグレン達は仁義なき死闘を繰り広げている。

自称賭博師ギャンブラーであるグレンや他の生徒達相手はテレサの圧倒的な天運・剛運の前に絶叫を上げている。

騒がしい馬車内は置いておいて、二階席も二階席でシステイーナの古代文明の熱弁が始まり、仕方なしにそれに付き合うテラス達。

その熱弁の途中でテラスは『魔法』と『魔術』の違いについて思考を耽らせる。

現代、テラス達が使用している魔術を『近代魔術』モダン。古代人が使っていた謎の魔術を『古代魔術』エインシャント。

魔術、いや、魔法とはいったいどのようなようにして生まれたのか。その根源には何かあるのかと、頭を働かせていると。

「……………ちよ、ちよっとお待ちくださいませー！」

ふと、ウエンデイの言葉に我に返る。

「わ、わたくし達……………今、どこに向かっているんですの？」

その指摘に周囲を見渡すと、鬱蒼と深く茂る森沿いを進んでいる。振り返れば、遙か後方の地平線、なだらかな丘と丘の狭間に、小さく見え隠れする街道。

馬車はいつの間にかあらぬ方向へと進んでいた。

「ちよ、ちよつと御者さんっ!?! こんなルート、私達、予定してませんよ!?!」

システイーナが慌てて前方の御者台へ駆け寄り、覗き込むも例の御者は相変わらず黙々と馬を操縦している。

(おいおい、無茶苦茶ですよ……………)

既に匂いで御者の正体を看破しているテラスは半ば呆れながら内心でぼやく。

街道は国策で軍が定期的に街道整備と魔獣掃討を行い、魔獣除けの魔術を施している為、比較的(アサルト・スベル)に安全だが、ここは既に人が安易に立ち入りを許さない領域——魔獣が我が物顔で跋扈する魔の領域だ。

すると、薄暗い森奥から複数の何かが駆け寄って、馬車を疾風のように取り囲む。

それに驚いた馬は天高く嘶き、足を止める。

「シャ、シャドウ・ウルフ!?!」

馬車は、十数匹のシャドウ・ウルフにすっかりと囲まれてしまった。

影のように真黒な毛並みを持つ、狼型の魔獣。

決して珍しい魔獣ではないが、人には真似できないその圧倒的敏捷性は、(アサルト・スベル) 攻性呪文にしる、銃にしる、並みの腕では捉えきれない。

更には『魔』の名を冠する獣だけあって只の獣にはない特殊な能力がある。

それは『恐怖察知』。

シャドウ・ウルフ達は、標的が自分達に対して抱く恐怖の感情を敏感に察知する能力を持っている。その恐怖で、標的が自分達の襲つてよい獲物かどうかを判断する。

「皆、怖がっちゃだめよー。怖がったら——」

システイーナが警告の声を上げるも、もう遅い。

「あ、あ……………う……………ひい……………魔獣……………あんなに

たぐさん……………ツ！」

「うう……………どつ、どうして、わたくしがこんな目に……………ツ!?」

リンやウエンディはすっかりと青ざめて、震えながら傍にいたテラスの腕を掴んでいる。

「大丈夫だよ、二人とも。怖がることないって」

当の本人はいつのもように変わらない態度で平然と二人を宥めている。

むしろ、落ち着いてくれないと身動きが取れない。

しつかりと腕を掴まれて離してくれないのだ。

(仕方がないよね……………)

二人共温室育ち(システイーナ達もだが)であり子供が野生の獰猛な魔獣に囲まれて、平静さを保つのは難しい。

テラスから言わせればどうしてそんなに怖がるのかわからないが、二人にとってはシャドウ・ウルフは恐怖の対象なのだろう。

(しようがない……………)

テラスは身動きが取れない為に目線だけをシャドウ・ウルフ達に向ける。

その目線に気付いたシャドウ・ウルフ達はぞくりと背筋を凍らせた。

——喰らうよ？

自分よりも圧倒的上位にいる怪物の存在に気付いたシャドウ・ウルフ達は目線で語られたその言葉を本能的に察知し、退いた。

あのままでは死ぬ。それに気付いたシャドウ・ウルフ達は諦めて森奥に姿を消していく。

「え……………う？」

突然にシャドウ・ウルフ達が去っていたのを見たシステイーナは啞然とするもテラスはいつものように自分の腕を掴んでいる二人に声をかける。

「ほら、二人とも。魔獣は自分達よりも怖い怖い凶暴な化け猫に怯えて消えていったから

大丈夫だよ」

宥めつつ落ち着かせるように優しく声をかけるテラスの言葉に二人は周囲にシャドウ・ウルフ達がいなかったことを確認して安堵し、テラスから手を離れた。

「も、申し訳ありませんわ……………」

「ご、ごめんなさい……………」

「大丈夫だよ。これぐらい気にしてないから」

二人の謝罪を気にも止めずに軽く受け流したテラスにシステイーナは憤慨する。

「ちよつとテラス！ 化け猫っていったい誰のことよ!？」

「さあ？ 誰でしょう?」

「こつち見てから言いなさいよ!」

憤るシステイーナから視線を逸らして誤魔化すテラスにシステイーナはくどくどと説教した。

## 魔女と吸血鬼

魔獣を退けて、システイナは御者に詰め寄ると、その正体がセリカⅡアルフォネアという衝撃な事実を目の当たりにして仰天する。

そんなシステイナを可笑しそうに笑うセリカに詰め寄ったグレンにセリカは今回の『タウムの天文神殿』の調査に協力するつもりで雇った御者と入れ替わった。

セリカの参加に、なし崩しに決定してしまうことにグレンは訝しんではいたが………セリカは大陸屈指の魔術師、第七階梯階位セブテンデを持つ。

生徒達の安全面を考慮すれば、願ってもない話だ。

しかし、ここで問題は生じた。

正午にさしかかることで日差しが強くなり、吹きさらしの二階席にいと余計な体力を消耗してしまうということで生徒一同は馬車内に集まっていたのだが………。

生きた伝説と称されるセリカⅡアルフォネアと一緒にいるこの空間はシステイナ達には緊張に身構えている。

しかし、それも無理はない。

セリカは良くも悪くも様々な噂や逸話、伝説がある。

おまけに魔性の領域と達している美貌、精緻すぎるがゆえに冷たさと硬質さを醸し出し、一種、近寄りがたい雰囲気を出している。

雲の上のような存在と数日共にするともなれば、緊張するのも仕方がない。

「〜♪」

当の本人は我関せずとばかりに、余裕の表情で本などを開いたりしている。

気まずい空気が馬車内に漂るなか、テラスがそんなものどうでもいかなのように口を開いた。

「それにしてもアルフォネア教授。教授が来るのでしたら僕はいらなかったのではありませんか？ 一応、論文を発表するようにと言われた身なんです………」



「まあそう言うな。私はこれでもお前の優秀さを買っているんだ。それぐらい片手間で済ませてみせろ」

「……………まあ、八割は完成していますからいいですけど」

あつさりと言いつ返し返されるセリカに嘆息するテラス。その言葉にシステイーナは反応する。

「ちよつ待つてテラス。論文の発表つてどういう意味よ？」

「ああ、言つてなかつたつけ？ 僕、上の人達から論文を発表するように言われていてね。その内容次第で階位が第四階梯クアットルデまで上がるらしいんだ」

聞けば誰もが驚く内容をテラスは今日の夕飯を決めるかのようにあつざりと答えた。

当然、その事実を聞かされたシステイーナ達は目を丸くし、驚きを隠せないでいる。

「な、な、な、な……………」

「な？」

「なんでそんなにも平然としていられるのよ!? すつごいことなのよ!?!」

「そうなの？」

「そうよ!! 私達の二年次生で第四階梯クアットルデになれる可能性はまずはないわ! もし、なれたらそれはアルザーノ学院の歴史のなかで初めての存在になれるかもしれないチャンスを……………どうして貴方はそんなにも平然としていられるの!?!」

うんうん、とシステイーナの叫びにカツシユ達は同意するように頷いているが。

「別に階位に興味はないし、僕は趣味で魔術ができればそれでいいからね」

呆気欄とそう答えたテラスにシステイーナは口をぱくぱく動かしながら啞然とすると、がくりと肩を落とす。

「……………そうね、そうよね。貴方はそういう人だったわね」

そう、テラスは魔術を身に付けているのはあくまで趣味の範疇。そ

の上実力はシステイーナ達以上にあるから本気で魔術に取り込んで  
いるシステイーナ達にとっては酷い話である。

「きいいいっ！ どうして、私ではなくテラスに……………！」

「ふん、精々本番でミスをしないように気を付けるんだな」

成績上位の二人はその事実を悔しそうにしていた。

「あらあら」

「す、凄……………」

どこか含みある笑みを見せるテレサや素直に驚くリン。

「すげえじゃんか!? クソ！ これがリア充の力なのか!? 爆発しち

まえ、この野郎!!」

「あはは、まあまあ」

嫉妬に拳を震わせるカツシユを苦笑しながら宥めるセシル。

当の本人は困ったように頬を掻きながら話題をセリカが読んでい  
る本に変える。

「ところでアルフォネア教授。それは『メルガリウスの魔法使い』です  
か?」

「ああ、今回の旅の道中の暇つぶしに、何か本をもって思ってた書架をあ  
さっていたら、これが目に留まって……………懐かしくて、つい」

「僕も読みましたよ。童話だからと思っていきましたけど割と面白いも  
のでした。ああ、そういえばメルガリウスの天空城を舞台にした物語  
だったよね? システイーナ」

不意に呼ばれて目を丸くするシステイーナは周囲に視線を泳がせ  
るテラスの考えを悟り、頷きながら肯定した。

「ええそうよ。空に浮かぶ城を舞台に、正義の魔法使いが、人々を苦し  
める悪い魔王をやっつけて、囚われていた姫を助け、皆を笑顔にする  
……………大まかな話はこんな感じだけど、群像劇のような体にも  
なっていて、大人でも楽しめる作りになっているだけではなく、私達  
メルガリアンにとっても、この本も重要な研究資料なんだから」

生徒達とセリカの溝を失くそうとその本を話題に持ち上げて行く  
二人の思惑が思いのほか上手くいって、馬車内の雰囲気は良くなつて  
いく。

「あれが……………『タウムの天文神殿』か……………」

石で造られた、巨大な半球状の本殿。周囲に並び立つ無数の柱。渦を巻くような不思議な幾何学模様が、石で構成されたその壁面にびっしりと刻まれている。

独特な建築様式で造られたその神殿は、背後に背負う圧倒的な勝景に負けることなく、その確かな存在感を誇示しながら、そこに在った。……………『タウムの天文神殿』……………私……………とうとう来たんだ……………」

神殿をじつと見つめながら、システイーナが感慨深そうに呟いた。他の生徒達も例外を除いてはその不思議な雰囲気と存在感に圧倒されている。

その例外であるテラスは馬車から荷物を下ろしたりなどしている。神殿などどうでもいいかのようだ。

「……………おいおい、お前ら、ぼおくとしてる場合じゃないぜ？」

グレンが手を打ち鳴らし、さつそく指示を飛ばす。

「本格的な調査は明日から、今日はここで野営だ。野郎共は天幕<sup>テント</sup>を張れ。リンとテレサは夕食の準備を。セリカ、念のため野営場周辺に守護結界の敷設を頼む。白猫、ウエンディその補佐だ。ルミア……………とテラスは馬の世話を。リエル、お前は周囲を哨戒し、危険な魔獣がないかどうか探れ、いたら遠慮なくやつつけていいからな？ そして、俺は——」

てきぱきと卓越したリーダーシップを発揮し、指示が終えたグレンは、唐突に、ごろりとその場で横になる。

「……………疲れたから、寝るわ……………夕飯できたら起こしてね、ふあ……………お休み……………」

「《アンタも・何か・働きなさいよ》——っ！」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ——

「?!」

「さて、ルミア。行こうか」

「うん、そうだね」

いつも通りの二人のやり取りを微笑ましく見守りながら二人は与えられた役割をこなしに行く。

野営中、全員が寝静まる時間帯でテラスは夜番をしている。

誰かに言われたわけではなく、吸血鬼であるテラスはむしろ夜の方が落ち着くから単なる気紛れで夜番しているだけだが。

「テラスⅡヴァンパイア」

「アルフォネア教授。お休みになられないのですか?」

そんなテラスにセリカがテント天幕から出て来て、声をかけてきた。

「単刀直入に言う。お前はイモータルリスト永遠者か?」

鋭い眼差しを向けながらセリカは問いかけた。

——  
イモータルリスト  
永遠者

それはセリカの特異体質。

身体は歳を取らない。一つの生命体として生命活動を行いつつも、時間が止まっている。

その原因は謎。原理も不明。セリカ自身も何の心当たりもない。

言い換えてしまえば不法不死といってもいい存在だ。

その証拠にセリカは既に四百年も生きている。

だが、もう一人セリカと似た存在がこの場に、眼前にいる。

それがテラスⅡヴァンパイアだ。

魔術競技祭後に知ったテラスの正体。不老不死の吸血鬼。

始めは半信半疑だったセリカだったが、テラスが自身が不老不死であることをセリカの眼前で証明した。

伸ばした鋭い爪で己の首を切断して。

瞬く間に元に戻ったテラスを見てセリカは思った。

こいつに何か自分の正体を知る手がかりがあるかもしれないと。

だからセリカは今回の調査に参加した理由の一つとしてこの場に

いる。

イモータルリスト

「永遠者ですか……………不老不死という点では確かにそうですね」

テラスはあっさりと言返した。

それがセリカの苛立ちを募らせるとも知らずに。

「はつきりと言うぞ？ 私はお前の優秀さを買ってはいるが、同時に

危険視している」

「でしょうね。それが正しい判断だと僕も思います」

セリカの言葉を肯定した。

「……………お前の目的はなんだ？ どこで生まれた？ お

前以外に吸血鬼はいるのか？」

恐ろしいほどに呆気なく肯定したテラスにセリカは続けて問いか

ける。

「目的は特にはありませんね。強いて言えばルミアを守ることですか

ね。僕以外にも吸血鬼はいますが純血の吸血鬼は恐らくは僕だけで

すね。どこで生まれたかといえば……………少々信じられない話なの

ですが、聞きますか？」

「……………ああ」

少し考えてセリカは頷いた。

「先に言っておきますが、僕はアルフォネア教授や他の皆さんと敵対

する気も意思ありません。ですので、これから話すことを言っても

攻撃しないでくださいね」

「いいだろう……………」

念押しするかのように告げられたテラスの言葉にセリカは肯定を

取るとテラスは己の正体について語った。

「僕はこことは別の世界で死に、邪神の手によって転生した元人間で

現吸血鬼——いわゆる転生者というやつですよ」

「馬鹿な……………ッ!？」

思わず声を上げたセリカは咄嗟に自身の口を押えて冷静になる。

周囲を見渡してグレン達に変化がないことを確認して一息吐く。

二百年前、セリカを始めとする『六英雄』は外宇宙からの邪神の眷

属達と戦った。

その邪神の手によって生まれた転生者が目の前にいる。

「邪神様は面白いと言って僕をこの世界に吸血鬼として転生しました。姿も顔もわかりませんでした。娯楽に餓えた感じの神様でしたね」

懐かし気に語るテラスにセリカは極力冷静さを心がける。

確かに信じられない話であり、念押しする理由も理解出来る。

だが、何が目的で邪神はテラスを転生させたのかわからない。

二百年間の魔導大戦で邪神との戦いは一応は終止符は打たれた。それからこの二百年間はそれらしい情報もセリカの耳には入っていない。

「この事を知っているのはアルフォネア教授だけです。あ、念のためにもう一度言いますが敵対する気は微塵もありません。そんなことをしたら彼女が悲しみますし、僕自身もせつかく知り合えた人と戦いたくはありませんので」

衝撃的な事実を告げた本人の態度には至って変化は見受けられない。

それが当たり前かのように話している。

「……………確認するが、お前は邪神の眷属ではないのだから？」

「はい」

「……………私やグレン達の敵に回る気もないんだな？」

「はい。そんなことをしたらルミアが悲しみますので」

その返答にセリカは顎に手を当てて思索する。

先ほどからのテラスの発言。まるでルミアの従者や眷属のような

答え方だ。

主の命令に従う従者<sup>ルミア</sup>。

少なくともこの吸血鬼の手綱はルミアが握っているということかと結論を出すと最後に一つだけ尋ねた。

「お前にとってルミアはティンジェルはなんだ？」

「彼女ですが？」

さも当然のように答えた。

## 心の病気

『タウムの天文神殿』へと足を踏み入れたグレン達は順調に遺跡内を探索……………ということもなく、探索危険度F級——初心者向けの遺跡のはずなのに遺跡内に湧いている狂霊という霊脈レイラインの影響で存在が変質した妖精や精霊——荒ぶる自然の体現に手荒い歓迎を受けた。しかしながら、それらを撃退しつつ奥に進む。

すでに完成している遺跡内の地図を確認しながら、ルミアがナビゲーションを務める。

時折、遭遇する狂霊を撃退しつつ……………一行はその場所へと辿り着いた。

「……………さて、あそこが第一祭儀場か」

通路の奥にアーチ型の出入り口があり、広間があるようだ。

グレンは背中のベルトに差した魔力が付呪エンチャントしている装填済みの弾丸がある己の愛銃を確認する。

「ま、何もねーとは思うが……………一応、俺が先に入って安全を確認してくる。お前らは、ちよつとここで待ってろ」

「僕が行きましょうか？」

「いや、このくらいやらんと、マジで俺が一番の役立たずだから……………」

ここまで碌に役に立てていないことに気にしていたグレンは歩を進める。

「先生、大丈夫かな……………？」

「大丈夫だよ。一応、索敵結界を展開しているけど中には人一人どころか虫一匹もない」

テラスの袖を掴みながらグレンのことを心配しているルミアの不安を追い払う様に告げる。

「ちらり、とセリカがテラスに視線を向けてはいるが、テラスはそんなこと気にしてない。」

「おーい、グレン。どうしたー？ 何かあったのかー？」

しばらくしてセリカが呑気な様子でグレンの下にやってくる。

それに連ねるようにテラス達も続いて第一祭儀場に足を踏み入れた。

「へえ〜」

第一祭儀場に足を踏み入れてテラスは感嘆の声を出す。

この空間そのものが象徴的に宇宙空間を躡っているかのようなこの場所は三次元的星図を模しているのがわかる。

古代宗教の一種、星辰信仰、星辰崇拜という古代人が空を大いなるものと神格化して畏怖を抱き、信仰と崇拜の対象とした。そのご神体の名は——天空の双子児<sup>タウム</sup>。

別にテラスは宗教や信仰に関心を抱いているわけではないが、この祭儀場には少しばかり目を奪われてしまう。

「……………謎の少女お〜?」

感心を抱いているテラスにセリカの呆れた声が聞こえた。

「お前、疲れてんのか? それとも欲求不満か? 息が荒いのは、そーゆーことか?」

「ばっ……………ッ!? ち、違っ……………ッ!」

「やれやれ……………その若い衝動のままに女子生徒達を襲つても困るし……………仕方ないなあ、今夜、私が相手をしてやろうか? ………………ん?」

「冗談でも、おつぞましいコトぬかすなああああ——っ!」  
わざとらしくしなを作るセリカに、グレンが目を剥いて吠えかかる。

なにやってんだが、と二人の話を耳にしたテラスは呆れていると、隣にいるルミアがチラチラと見てくる。

「どうしたの? ルミア」

「え、あ、ううん!? 何でもない! 何でもないよ!!」

顔を赤くして両手を振るルミアは次第にぼつりと言う。

「わ、私以外の人を襲っちゃ嫌だよ……………」

「僕は怪物だけど獣になった覚えはないよ?」

心外だといわんばかりに肩を竦めるテラスにルミアは安堵しつつもどこか残念そうに複雑な表情を作る。



そんな二人のやり取りの最中、グレンは生徒達に指示を飛ばしてこの部屋の調査を開始する。

……………遺跡調査開始から三日が経過する。

調査自体は、何事もなく順調に進んでいった。

時折、一行の前に現れる狂霊達を始末しながら、所定の各調査ポイントを念入りに調査しつつ、最深部を目指すグレン達は、日が沈む頃、遺跡前に敷設した野営場へと帰還して、生徒達は古代文明に関する独自の説や議論を展開し、魔導考古学者気分になっていた。

「あ……………皆……………夕御飯できたよ……………?」

「おお——っ！ リンちゃん、待ってましたあ——っ！  
俺、もうお腹ぺっこぺこ！」

そして、いつものように一行の中で一番料理上手なリンが、今晚の食事の配膳をし始め、焚火を囲む生徒達にもわかにかに色めきだっていた。

因みに今晚の食事は温かいシチューだ。

調査結果をまとめた束をめぐりながらやる気のない発言をするグレンに説教を始めるシステイーナの二人のやり取りに苦笑しつつ、配膳を行っているテラス。

「ずずず……………ずずず……………ずずず……………  
ん、おいしかった……………」

「え……………あ、あの……………リエル? それ、システイと先生の分だよ!? 食べちゃ駄目——ああ……………  
もう、空になっちゃってる……………」

いつの間にか、ちやつかりグレン達のシチューの皿もさらっていたリエルは、よほどお腹が減っていたのか、あつという間に平らげってしまった。

流石に可哀想なのでテラスは自分の分を二人にあげた。

(後でルミアから血を貰おう……………)

吸血鬼は後で食事を行うことにした。

そんな単調ながら、和やかな遺跡調査の日々は何事もなく緩やかに続いていき……そして、遺跡調査開始から五日の真夜中。

遺跡前の野営場から、北に少し歩いた岩山の陰に隠れるように、それは——あつた。

岩に囲まれた天然温泉。

セリカが見つけて入浴できる温度に調整された温泉はこれまで濡れタオルで体を拭いて済ますしかなかった女子生徒達はセリカを信仰と崇拜の対象と化した。

「それじゃ、先に温泉に入ってきてますね」

男子生徒、女子生徒が入浴を終えて次は自分の番かのようにテラスはグレン達にそう告げて温泉に向かった。

どうしてテラスはカツシュ達と一緒に入浴を済ませなかったのかというと、それは覗き防止だ。

女子生徒達が入浴の間はテラスが見張りをする必要があつた。

先日も一人の男子生徒<sup>カツシュ</sup>が勇敢にも楽園<sup>エデン</sup>を目指して怪物と対峙したが、完全敗北して天幕<sup>テント</sup>に放り込まれたのはまた別の話だ。

「……………やっぱ、どうすつかな……………」

後頭部を搔きながら判断に悩まされるグレンの悩みは遺跡調査のことではなく、テラスのことについてだ。

テラスは聞き分けのいい生徒だ。

何事にも文句を言わず、システィーナ達が危なければ即座にフロアに入り、頼まれれば断ることなくそれをしてくれるし、頼まれなくても夜番などして安全を確保してくれる。

魔術馬鹿で時折魔術に関して饒舌になることはあるが、それは愛嬌と思えばいい。

自分も論文があるというのに手伝ってくれる辺り、グレンからしてみても非常に助かっている。

「……ただ、あれは——」。

「あの、先生……………？　どうかしましたか？」

ルミアが心配そうに顔を覗き込んできた。

「ああ、いや、なんでも——」

心配させないようにはぐらそうと思ったグレンだが、そこで不意に気付いた。

テラスは唯一ルミアだけは特別視しているふしがある。

「……………なあ、ルミア。お前、テラスの事どう思ってる?」

「え? テラス君の事ですか……………? えっと、す、好きです

……………」

頬を朱色に染めながらも答えるルミアにグレンは苦笑い。

「あくお前らが熱々なのは知っている。そうじゃなくて、あいつ自身のことお前はどっと思ってる?」

「えっと、凄く優しいですよ?」

グレンにはもう惚気にしか聞こえなくなった。

はあく息を吐いてグレンは深刻な顔で話す。

「俺はあいつが病気だと思う」

「心の……………ですか?」

「ああ」

表情に影を作り、俯くルミアにグレンは頷く。

「テラスの事は俺も粗方聞いたし、あいつの態度や行動を見て思った。多分だがあいつは心が空っぽだ。何も無いのかもしれない。俺があいつと距離を感じるのには表面上しか付き合えないからだと考えてる」  
それにはルミアも同意した。

どこか距離を感じているのはルミアも一緒だからだ。

「医術は専門外だから詳しくは調べねえーとわからねえが、産まれた時からとなると先天性の精神疾患かもしれないねえ。だからあいつは俺達と気持ちや考えが理解できないのかもな」

少なくともグレンはいつもの態度で人を殺すことは出来ないし、その後も何事もなかったかのようなすまし顔もできない。

それにいくら不老不死で再生能力があると言っても平然と自身の首を斬るなんてしたくない。

普通の人間なら恐れることをテラスは顔色一つ変えることなく平

然とやつてのける。

それが人間グレンたちと怪物テラスの違いかもしれない。

「先生……………それでも私は彼を信じたいと思います」

優しい笑みを浮かべながらその瞳はどこまでもテラスを頑なに信じている。

「テラス君はただわからないだけだと思っんです。だから距離を取って接しているだけだと私は思います」

「……………たくつ、羨ましいね。こんな美少女にここまで言わせるなんて」

いつもの調子で物言うグレンは密かに微笑む。

（案外、お似合いなのかもな……………）

人間ルミアと怪物テラス。この二人はグレンの思っていた以上にお似合いのバカップルかもしれない。

## 二人だけの温泉

「んん〜……………はあく、いい湯だ……………」

天然温泉に肩までしつかりと浸かり、満喫する。

心地良い熱がテラスの体を包み込み、疲労が抜け落ちて行く気分だ。

夜空を見上げれば満天の星空に流れる雲の中に恥じるように隠れる月も風情がある。

前世でも温泉など入ったことがない為に、今の喜びも人一倍強いのかも知れない。

「遺跡調査も明日で終わりだから今日は少し無理して長湯にしようかな……………」

あと入浴を終わらせていないのはグレンだけ。仮に入浴してきても何も問題はない。

「それにしてもこの体……………温泉の熱は大丈夫なんだ」

改めて自分の体——吸血鬼の肉体を見て思う。

筋肉質というわけではなく、むしろ肉体面でいえば女性寄りの細い体にも関わらず見た目に反してその身体能力は常人よりも遥かに高い。

以前の遠征学修でサイネリア島に訪れた時は太陽の高熱によって倒れたが、温泉の熱はそれほどではない。

邪神の言葉通り、ハイスペックではあるが吸血鬼としての弱点がある。

日光の下で歩けるということは日光に耐性を持つデイウォーカーという種族かもしれないが、どうせなら吸血鬼の弱点も消して欲しかったと愚痴る。

しかし、あの娯楽に餓えた邪神がそんなつまらないチートをつけるわけもないか、と自問自答する。

条件付きとはいえ不老不死。それだけでも十分チートか、と内心でぼやいていると足音が聞こえた。

(先生かな……………?)

調査を書き終えて温泉にでも入りに来たのか、と思ったテラスはさほど意識することなくのんびりとしていると、湯煙から人影が見えた。

「先生、いい湯加減ですよ」

人影に向けて手を上げながら気軽にそんなことを口走ると、人影の姿がはつきりと見えて目を丸くした。

「ル、ルミア……………」

そこにいたのはグレンではなく、タオルで体を隠しているルミアだった。

さっと視線をルミアから逸らして尋ねる。

「どうしたの？ 二度風呂？ それはいいけど僕が出るまで待つて欲しかったよ。あ、僕がもう出るからどうぞごゆっくり」

「ま、待つて！」

そそくさと出て行くこうとするテラスにルミアは慌てて制止の声を飛ばした。

「……………」話がしたいの」

「話なら温泉から出て後でもできるよ？」

「それだとテラス君がさり気なく逃げるからちゃんと捕まえないと」

「僕はルミアのペットか何かですか……………」

文字通りに身体を張ってこの場にやってきたルミアは足を湯に入れて、テラスの傍まで行き座る。

互いに視線を相手の体に入れない様に背を預ける態勢で温泉に浸かる。

「……………」さつきね。先生と一緒にテラス君のことについて話してたんだ」

「僕のこと？ ………………」あ、僕の論文のことかな？ それなら何も問題はないよ。最後に少し書いて確認すればもう終わりだから」

「テラス君の心の病気のことだよ……………」

思い当たるふしを話すもルミアのぽつりと呟いた言葉に口を閉ざした。

「先天性の精神疾患じゃないか、って先生と話してたんだ。テラス君と距離を感じるから」

「……………そうかもね。でも、そうじゃないかもしれない」  
事実テラスはそうじゃないかもしれないと思っただことは何度かはある。

■■■■だった頃は精神科の病院に行くお金もなく、金の無駄ということで行かせてはくれなかった為に詳細はテラス本人もわからないでいる。

だけど、そうじゃない可能性もゼロではない。  
自分は正常である可能性も否定できる根拠もない。

第一、この世界では前世と基準が違うはずだ。それらも考慮して考えれば頭がこんがらってしまう。

「ということは、ルミアをここに来るように言ったのは先生なの？」

まったく、いくら僕が紳士でも男には変わりない筈なのに。ルミアの色香に惑わされて狼に変身したらどうするのなら」

「ふふ、テラス君はそんなことしないよ。それにここに来たのも私がテラス君と二人つきりで話したいって言ったからなんだよ？」

可笑しそうに笑うルミアはグレンに非がないことを弁明する。

「それに万が一の時はテラス君が責任を取ってくれば何も問題はないよ。」

「……………重いな、その言葉」

責任という誰もが目を背けたくなるその言葉を聞けば襲おうにも襲えなくなる。

冗談で言っているとわかっているでも実際に口にする事でその意味は増す。

「それで我が麗しき王女様は怪物の身である私にどのようなご用件でしょうか？」

「うん。ちょっと将来の事について話そうかなって」

「……………ルミアさんは気が早いですね」

「そ、そっちの将来のことじゃないよ!? 卒業してからの話だからね!!」

二人の将来についてではなく、卒業後はどうするかという話を持ち掛けた。

「卒業って言われても所詮は不確定要素の多い未来のこと考えてもねえ……………」

「だから楽しいと思うよ。未来のことを考えると少しだけ楽しくならない？」

「そんなものかな……………」

特にそうは思えないテラスは現在の自身の状況などを一考して答えを出す。

「そうだね……………先生からはよく講師に話を振られるけど、僕的には研究室を開発して魔術の研究でもしようかなって思ってるよ」

「えー、テラス君ならグレン先生みたいに講師の方が似合ってるよ。なんだって学士講師なんだから」

「……………久々に聞いたね、その二つ名」

今では『偽講師』『天使墮とし』『怪物』という二つ名が定着している。

既に講師と同等以上の実力を有していながら学士であり、ルミアという学院の天使を手に入れたからということまで気が付けばそのような二つ名が定着してしまった。

最後の三つ目にしたら本当にその通りだ、と感慨深く頷いたものだ。

あとは『リア充』『淫魔』『天使泣かせ』などという悪評もあるが、これは主にルミアを奪われた男子生徒達からの嫉妬の叫びだ。

「僕は先生ほどに上手く教えられないし、第一に怪物が人間に物事を教えるなんて馬鹿げているよ」

過小評価しているわけでも、卑下しているわけでもない。ありのままの事実を述べる。

テラスの授業は優秀ではあるが、グレンほどではない。

仮にどちらの方が上手く教えられているかというアンケートを出したとしてもグレンの方が上だろうと自負している。

「そんなことないよ。だって実際に教わっている凡才の私でもわかる



からね」

放課後は今も変わらずに共に魔術の勉強に励んでいる。

確かにルミアはシステイーナのように才能があるというわけではなく、悪いというわけでもない。

それでもルミアは一生懸命に魔術に向き合っているのは隣にいるテラスが一番よくわかっている。

それが、自分の為ということも……………。

「……………ルミアは、どうしてそこまで誰かの為に頑張れるの？」

不意に自然とその言葉が出た。

前世の自分以外の周囲の人間は常に自分の為に動いている。

安全、保身など、我が身の可愛さを案じて他人よりも自分のことを優先して努力している。

別にそれを責めることはしない。誰だって我が身は可愛いものだ。だけど、この世界は違う。

ルミアにしろ、セラにしろ、他にだってグレンやシステイーナ達だって誰かの為に何かをしている。

それがテラスにとって一番理解出来ないことだ。

その問いにルミアは微笑みながら答えた。

「ありがとうって言って欲しいから、かな？」

「……………そんな確証もない言葉の為に頑張れるものなの？」

「うん。だってその方が私も頑張った甲斐があつたなって思えるからね」

わからない。

どうしてそんな事の為に頑張れるのかがテラスにはわからない。

これまで周囲もそして自分自身も自分の為に何かをしてきた。

誰かからお礼を言って欲しいからではない、そんなのは二の次三の次だ。

だけどルミアはそんな一言のお礼を言って欲しいが為に頑張っている。

「……………僕にはわからない答えだね」

夜空を見上げながらぼやく。すると、不意に背中越しに暖かくて柔らかなものが当たる。

「……………ルミアさん？」

背後からルミアが抱き着いている事に思わずさん付けを呼ぶと――

「テラス君だってわかるよ。だって私は何度も貴方に救われた。例えばテラス君が意識して助けたわけじゃなくても、自分の目的の為に救ったつもりでも、私が貴方に救われたことには変わらないから」

「……………」

「大好きだよ」

耳元で囁くように呟かれたその言葉が耳朶から離れない。

暫くの間、二人は密着したまま動かないでいた。

扉

「ほう………？　このだだっ広い部屋が『タウムの天文神殿』が誇る大天象儀場か………」

遺跡調査から六日目。恐らくは最終日となるその日、一同は最深部  
——大天象儀場——へと辿り着いた。

綺麗に磨き抜かれた半球状の大部屋の中心に、謎の巨大な魔導装置が鎮座し、その傍らには黒い石板のようなモノリスが立っている。

この魔導装置の正体は天象儀場装置。これも古代魔術が生み出した一種の魔法遺産であり、光の魔術によってこの半球状の大部屋に星空を投射するという機能を持つ。

システイーナの提案もあつて一同は天象儀装置を使って『タウムの天文神殿』が誇る星空を眺める。

誰もがその光景に言葉を失う中で一人だけ冷めた目で見ていた。  
「……………」

テラスは星空を一瞥しただけで特にこれというものを感じない。別に感動を覚えないわけではなく、単純にこれとは違う形で見たことがあるからだ。

(前世の現代社会で何度か見たな……………)

ここではない別世界でプラネタリウムを見たことある彼にとっては今更こんなもので感動を覚えることはない。

一同が星空を眺めた後でいつもの単純な作業に取り掛かる。

テラスも他の皆と同じように隠し部屋や魔力痕跡を探したりなどしながら昨夜の事について思い出す。

(どうしてルミアはあそこまで……………)

テラスには好きや愛しているなどそういう気持や考えがまるで理解できない。

いったい何をもって好きと言えるのか？

どうして愛の言葉を述べられるのか？

その考えが本気でわからない。

(そもそもルミアは本当に僕のこと好きなのかな……………？)

それは疑念ではなく疑問だ。

ルミアと初めて出会ったのは三年前。外道魔術師に誘拐されていた路地裏だ。

攻撃してきた外道魔術師を殺して、血を少し分けてもらおうとルミアに声をかけただけ。

普通なら嫌悪したり、恐れたりするものだとしてテラスは思う。

外道魔術師とはいえ目の前で人を殺した相手を好きになる動機はなんだ？

テラスがルミアを守るには自分にとって都合や考え、理屈や根拠があるからだ。

ルミアの血は極上の一言。その血を飲めるのならその代価でルミアの守護をする考えは持ち合わせているし、今はルミアを失いたくない気持ちはある。

だけど、それはこちらの都合でルミアにとってはどうでもいいことだ。

毎回のように自分から血を提供する必要も、命の危険を冒してまでテラスを助けようとする意味はなんだ？

わからない。ルミアは彼——テラスⅡヴァンパイアの何が好きなのか？

人間は究極的にまで自分主義者だ。

これはテラスの自論である。

身体的、精神的、心理的、状況、運。全てを踏まえて人間は何においても自分の事を第一優先に考えて行動する。

それが悪いとは思わないし、言わない。

それが人間にとっての当たり前だからだ。

仮にルミアがテラスを見捨てたとしても恨むことも憎むこともしない。

それを淡々と受け止めるだけだ。

(でも、多分この話をしたらルミア怒るだろうな……………)

怒って平手打ちする気がする。

その怒ると思う理由もテラスにはわからないだろう。

乙女心は複雑怪奇。不意にそんな言葉が脳裏を過る。

「どうか……………あの天象儀装置を……………教授がもう一度、調べてみてください！」

そんなことを考えている途中でシステイーナがセリカに頭を下げ、  
てそう懇願していた。

その切羽詰まった様子にセリカは応じて魔術機能の分析・解析する  
黒魔「フアンクシオン・アナライズ」を小一時間ほど使って解析を行っ  
た。

「……………駄目だな」

しかし、その結果はなんの成果もあげられなかった。

「私もできる限り念入りに、この装置を隅々まで調べてみたが  
……………天象儀装置としての機能以外、見つからないよ」

「そ、そう……………ですか……………」

「……………ああ。残念ながらも……………」

肩を落とすシステイーナに何故かセリカも少し表情を曇らせ、息を  
吐く。

大陸最高の第七階梯セブテンデのセリカならひよっとしたらという淡い期待  
があったのかもしれないが、残念ながらそれはなかった。

結果的に何も無い。それを判明したテラスは再び作業に取り掛か  
ると、不意にそれが目に留まる。

大部屋にある一部の壁にある古代の文法。古代人が誇る魔法——  
—古代魔術エンシヤントの魔術式が記されている。

その中である一文にテラスは何故か惹かれるように目が留まった。  
何故か？ と問われればわからないとしか返せない。

ただ、吸血鬼が人間の血を求めているかのようにその魔術式に惹か  
れている。

テラスは皆に気付かれない様に黒魔「フアンクシオン・アナライズ」  
を使って解析を行うもそれらしいものはなく、もしかしたら吸血鬼と  
しての食欲が湧いただけでそう思っただけかもしれない。

その時だった。

きん、きん、きん——

辺りに突如、魔力反響音が響き………一瞬、床の紋様をなぞるように蒼い光が走った。

呆気を取られているテラス達を尻目に、ブラネタリウム天象儀装置のアームが先ほどと同じように室内に星空を投射し——星空が徐々に加速しながら回転していき——やがて、全ての星々が狂ったように頭上を暴走回転し、銀線となって無数の同心円を描き——やがて、ブラネタリウム天象儀装置がゆっくりと動作を止め——星空が消えていき——ブラネタリウム大天象儀場の北側の空間に、蒼い光で三次元的に投射された『扉』が出現した。それは明らかに、離れた空間同士を繋ぐワープゲートの類だ。

その虚空に出現した『扉』の奥は深淵の闇を湛え、その『扉』の向こう側が、一体、どこに続いているのかはまったくの不明だ。

そして、その『扉』を出現させたのはシステイナだった。

カツシュ達は謎を解き明かしたことに大騒ぎになっているが、少し考えればわかる。

ありえない、と。

セブテンデ第七階梯であるセリカでさえブラネタリウム天象儀以外の機能はないと結論を出した。それをデユオデ第二階梯であるシステイナが出し抜けるわけがない。

テラスがシステイナの代わりにブラネタリウム天象儀装置を弄ったとしても何も起こらないと言い切れる。

もし、それが可能とするのなら——

システイナの隣にいるルミアに視線を向けている最中。

セリカがその『扉』へ猛然と駆け出した。

グレンの声さえも無視してセリカは『扉』の向こうへ姿を消した。慌てて後を追おうとするも、セリカを閉じ込めたまま『扉』は消えてしまった。

「……………くそっ！ セリカッ!? セリカアアアアアアアアアア

ッ!？」

グレンが『扉』があった場所の床に飛びつき、拳を叩き、叫ぶ。

謎の『扉』の向こうへ、セリカは消えた。

この緊急事態に、グレンは一旦、生徒達をまとめ、野営地にまで戻り、システイーナから話を聞いた結果。グレンとテラスは納得した。

システイーナがルミアの異能をこっそり使って黒魔「フアンクション・アナライズ」で天象儀装置を魔術分析した。  
ブラネタリウム

ルミアの異能——『感応増幅能力』は触れている任意の相手の魔力を一時的に超増幅させる異能。ルミアのアシストを受けたシステイーナは偶然発現した例の『扉』を出現させた。

「どうします？ 先生」

「決まってんだろ！ セリカを連れ戻す！ テラス、お前は残って他の生徒達を頼む。俺とセリカが戻らなかった時はお前が生徒達をフェジテまで連れて帰ってくれ」

システイーナとルミアに朝昼夜の一回ずつ扉の開閉を頼み、グレンは一人で『扉』の向こうに行くこうとする。

その言い切った時。テラスが鋭い爪をグレンの喉元に突きつける。

「——っ!?!」

「冷静になってください、先生。狂霊一匹でも苦戦する先生が未探索領域に一人で踏み込むなんて犬死ですよ?」

爪をグレンから離してテラスは告げる。

「ここにいるメンバーでアルフォネア教授を助けに行くべきです。システイーナの魔導考古学の知識と魔術、ルミアの法医呪文ヒーラー・スベル、リィエルの剣。そして、不老不死の吸血鬼である僕。このメンバーなら恐らくは大丈夫でしょう」

「そんなことしたら残された生徒達は誰が仕切る!?! 誰が守アゴツ!?!」

「先生!?!」

グレンの顔面に拳を叩きつけてテラスは淡々と話す。

「落ち着いて考えてください、先生。これから先生が向かおうとしている場所は何が起こるかわからない完全に未知の領域です。なら、そちらに戦力を回すのは当たり前です。カツシュ達も危険はないわけではありませんが、自分の身ぐらい自分で守れるでしょう」

「だけど、万が一にも——」

「万が一は万が一です。どうしてもというのならここで先生を縛り上げて僕が一人で行きますが？　先生がカツシユ達を守ればいい問題ないでしょ？　その間に僕がアルフォネア教授を助けに行きます。少なくとも先生が一人で行くよりかは成功率は高いと自負できますが？」

「ぐっ……………」

正論だ。確かにグレンよりもテラスの方が生存率が高い。

不老不死だから死ぬこともない。危険な場所にはテラスは打ってつけだ。

「それでも——」

「ああ、それともこう言った方が効果的ですかね？　セラ姉さんを失った時の先生の気持ちをシステイーナ達にも味合わせたいのですか？」

なんとか言葉を出そうとするグレンはその一言で言葉を失った。

「僕には理解できない感情ですけど、人間にはよほど堪えるのでしょうか？　なんせグレン先生でさえ一年間は引きこもるほどなんですか？」

「やめろ……………」

「システイーナ達ならどうなんでしょうね？　一年？　二年？　もしかして一生？　システイーナに関しては初めての遺跡調査で大切な恩師を失うのですから下手をすれば引き籠るだけでなく、自分が掲げている夢も諦めてしまう程に強いショックを——」

「テラス君!!」

言葉を遮ってルミアがテラスの口を強引に塞いだ。

「それは言い過ぎだよ。いくらグレン先生の為でもそれ以上は言っちゃ駄目」

グレンの心の傷をほじくり返したテラスにグレンは少しばかり表情を青ざめて、システイーナとリエルは言い過ぎだと視線で訴えるように睨んでいる。

「これ以上、先生や皆を傷付けないで……………」



目尻に薄っすらと涙を溜めているルミアにテラスは小さく首を縦に振った。

(本当に理解できないなあ……………)

## 細切れと浄化

グレンは最終的にテラスの案を採用して再び訪れた大天象儀場。プラネタリウム

ルミアのアシストを受けてグレンは黒魔「ファンクシオン・アナライズ」を起動させ、プラネタリウム天象儀装置を魔術分析を行い、再び『扉』を出現させる。

そして、恐る恐るその扉をくぐると、その先にあつたのは——深淵の闇に煌めく無限の星々。扉と同じく光で構成された回路が、消失点に向かって、延々と真つ直ぐ続いている。

その無限とも思われる行程を、踏破しきり——

そして——

グレン達は光の扉を潜り抜けた先にて。

「な……………」

眼前に広がる光景に、グレンはただ呆然するしかなかった。

それはここが大天象儀場プラネタリウムと酷似したモノリスがあるからではなく、その場所が異常だった。

そこには、そこかしこに干からびた死体——無数のミイラが転がっていたのだ。

しかも、皆一様に恐怖と無念の形相に、その顔を歪ませて——

「ひ——ッ!？」

ミイラの存在に気付いたシステイーナが小さく悲鳴を上げ、グレンの腕に取り縋る。

「恰好と杖から見て全員が魔術師のようですね。それも何者かに殺された」

間近でミイラを見ながらテラスは冷静に状況の推測を口にする。

ミイラ達は例外なく、焼け焦げていたり、身体の一部を欠損していたりと外的損傷が激しかった。

「……………」

不意に感じた眩暈と吐き気に、グレンは片膝をついて頭を押さえる。

漂う濃厚な『死』の匂い。こうして、ここにいるだけで背筋から熱

が奪われていくような……………正気が、命が削られていくような  
気配……………

「ここは——地獄。怨嗟と死の穢れに満ちた、呪われた空間だ。  
「せ、先生……………」

不安げにこちらを見つめている生徒達（約二名はいつも通りだが）  
を前に、グレンは小さく震える拳を強引に握り固め、下腹に気合を入  
れた。

「さあて、行くぞ、お前ら！ さっさとセリカを探して、こんな辛気  
臭えとこ、オサラバしようぜ？」

グレンが空元気で、明るく言った……………その時だ。

ずる、……………り……………と、後方から何かが這うような音  
が響いた。

「——ツ!？」

音に反応し、一同は咄嗟に振り返る。

グレンが指先に灯した魔術の光を、その音がした方向へ向ける。

すると、後方にある曲がり角から、長い金髪の女が這い出してい  
るのが見えた。

「あ、先生。その人——」

吸血鬼で夜目が効くテラスは口を開こうとしたが。

「セリカか!?! おい、どうした!?! しっかり——」

グレンの声に遮られて、本人はその女に向かって駆け出して——  
—その足を数歩で止めた。

「死んでますよ？ 多分」

セリカではない。

ずるり。

その女には左腕がなかった。

ずるり、ずるり……………

もつと言えば、その女には下半身もなく、干からびた臓腑を引き  
ずっていた。

ずるり、ずるり、ずる……………り……………

「この眼でリアルバ〇オが見れる日が来るなんて……………バ

イ○ハザードでいいのかな？」

石像のように固まるグレン達とは違い、一人そんなことを口にして  
いる。

その女は幽鬼のように振り乱した髪の間隙から、グレン達を恨めし  
そうに見上げ……………

その眼窩には眼球はなく、無限の闇色が湛られていて……………  
「きゃあああああああああああああああああああああ——

—ッ!？」

システイーナの悲鳴が上がったのを皮切りに。

ガササササササササササササササ——ッ!

女が右腕一本をもつごい勢いで動かし、ゴキブリの如き挙動と素  
早さで這い酔ってくる。

金縛りに遭ったように硬直するグレンへ、右腕一本で跳躍し——

『憎イ——憎イ——憎イイイイイ——ッ!』

アアアアアアアアアア——ッ!』

古木の洞を抜けるような金切り声を上げ、グレンに掴みかかろうと  
する。

「なにしているのですか？ 先生」

刹那。女の身体は細切れとなった。

「テ、テラス……………」

だが、首は残り、女の髪は生物のように伸びてテラスに掴みかかる。

『《燃えろ》』

『アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——ッ

!』

だが、黒魔「フレイム・バースト」を至近距離で当てて女を灰へと  
変えた。

しかし、それだけでは終わりではなかった。

壁から無数の手が生え、足元にいたミイラ達が一斉に動き出してシ  
ステイーナ達に襲いかかろうとしている。

「死体が動くとは……………」

両手の五指から鋭い爪を伸ばして次々とミイラ達を細切れに変え

ていくテラスは死霊を見て呪文を口にする。

「《穢れを祓え》」

祓魔の浄化呪文——白魔【ピュアリファイ・ライト】を一節で発動させて、神々しい光は周囲を明るく照らしてミイラや亡霊達を怯ませる。

その隙にルミアが懐から香油の小瓶を取り出し——

「《送り火よ・彼等を黄泉に導け・その旅路を照らし賜え》」

「あ、やばい」

その呪文を聞いたテラスは瞬時に翼を広げて宙に舞う。

そして、少しずつ垂らす様に振りまかれる香油に、不意に炎が引火し、明るい橙色の聖なる炎が、轟と渦巻いて燃え上がった。

それは、死者・悪霊のみを清める浄化の火。

辺りを荒れ狂う炎嵐は、グレン達に火傷一つ負わせることなく

……

キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——

——ッ!?

……アアアアアアアア……

死者達だけを焼き尽くし、浄化消滅していく。

それを確認したテラスは地面に降りて翼をしまう。

「皆……大丈夫?」

「あ、ありがとう………テラス、ルミア………」

「ん。助かった」

システイナーナとリエルは二人に礼を言う。

「お………驚いたな………白魔【セイント・ファイア】………お前、そんな高位司祭が使うような高等浄化呪文を使ったのか………?」

「はい………昔、王室教育の一環として、お母さんから習ったんです………」

そして、ルミアは大切そうに握りしめた香油の小瓶をグレンへ見せる。

「もつとも、私の腕ではこの香油を触媒にしないと、とても唱えられま

せんけど……………」

「アレシアの香油だったけ？ 確か、死者に手向ける白い葬送花から精製される貴重な香油を使ってもよかったの？」

「そうよ。その香油……………こないだ、女王陛下——貴女の本当のお母様から、お守り代わりに貰った大切なものじゃない……………それを……………」

「いいの。皆を助けるためだもの。お母さんもきつと納得してくれるよ」

気遣うようなシステイーナへ、くすりとルミアが笑いかける。

「先生、良かったですね。僕達がついて来て。先生一人だけなら今頃ミイラ達の仲間入りでしたよ？」

「……………そ、そうだな、すまん。正直、ここの異様な雰囲気呑まれて……………というかお前は何でルミアの魔術から避けたんだ？ あれ、死者や悪霊にしか効かねえだろう？」

「吸血鬼は聖なる力が苦手なんですよ。十字架、聖水、聖火も苦手の部類です。問題はなくても本能的に避けてしまうんですよ」

「ほう……………？ 吸血鬼も意外と不便なんだな」

「本当ですよ」

はぁ、と息を吐く。

## 魔人

それはあまりにも異質だった。

グレン達はセリカの足跡を頼りに迷路のような通路を進み、襲いかかってくるミイラ達もルミア達のおかげで倒せて、そして死霊達が津波のように襲いかかっているセリカを見つけた。セリカはその死霊達を消し去り、グレン達は無事にセリカと合流を果たせた。

そこでセリカの口からこの場所がアルザーノ帝国魔術学院の地下迷宮、それも地下89階という衝撃の事実を聞かされた。

ここまではよかった。

ここで強引にでもセリカを連れて撤退すればそれには会わなかっただろう。

闘技場の奥にある巨大な門。

その門に近づかなければ、それを見ることはなかったと思う。

『愚者や門番がこの門、潜る事、能わず。地の民と天人のみ能う——  
汝等に資格無し』

地獄の底から響くような声と共に闘技場の中央に現れた。

緋色のローブで全身を包んでいる謎の存在。そのローブは丈長で、フードの奥は無限の深淵を湛え、その表情は窺えない。眼光一つ差さない。

その全身から立ち上がる、闇色の靈氣<sup>オーラ</sup>。

その魔人を目の当たりにした瞬間、グレンだけではなくシステイーナとルミアも魔人の異質性を感じ取り、リエルすら警戒心を剥き出しに深く低く身構え……………その剣先を震わせていた。

まずい、と根本的な存在としての規格外に気付いたグレンは即時撤退が脳裏を過った。

だが、セリカだけは違った。

普段の冷静さを捨てているかのように魔人に門の開け方を訊いた。

『……………ついに戻られたか、空よ<sup>セリカ</sup>。我が主に相応しき者よ』

「……………は？」

『だが……………かつての貴女からは想像も付かないほどのその凋落ぶ

り……………今の貴女に、その門を潜る資格無し……………故に、お引き取り願おう……………」

「何を……………何を言ってる……………ツ!? お前は私のことを知っているのか!？」

『去れ。今の汝に、用無し』

そして、セリカを完全無視し、魔人は戸惑うグレン達に向き直る。いつの間にか、手にしていたのか——魔人はその両手に二振りの刀を構えていた。

左手に紅の魔刀。右手に漆黒の魔刀。

その二振りとも、見るからに禍々しい呪詛と魔力が漲っている。

『愚者の民よ。この聖域に足を踏み入れて、生きて帰れると思わぬ事だ……………汝等は只、我が双刀の錆に為れ。亡者と化し、この《嘆きの塔》を永久に彷徨うがいい——』

明確なる敵意と殺気が、グレン達へと叩きつけられていく。

グレンはなんとか生徒達を逃げる隙を作り出そうとセリカへ目配せするが——

「聞けよ……………人の話をなッ!」

それに気付かず、セリカが据わった目で魔人へと突進していた。

話す気がないのなら強引に聞き出そうと得意に高火力の魔術で放つが——

『……………まるで、見戯』

魔人がゆるりと振るった左手の魔刀が、セリカの魔術を斬り裂き——

かき消した。

現象だけを見れば、セリカの攻性呪文アサルト・スベルを打ち消した……………それだけだが、セリカが放ったのはB級の軍用魔術。近代の軍用魔術においては、B級は打ち消しバニッシュ出来ない。

とある一定の威力規格を超えた攻性呪文アサルト・スベルは打ち消しバニッシュは不可能なのだ。

そんなことにも気づかない程に頭に血が昇っているセリカは真銀ミスリルの剣を振りかざし、魔人の懐に跳び込んだ。

その剣の持ち主である、かつては《剣の姫》と謳われた英雄の剣技



を白魔改〔ロード・エクスペリエンス〕。物品に蓄積された思念・記憶情報を読み取り、自身へ一時的に憑依させる術を施して、無双の剣士と化した。

だが、魔人は左手の魔刀でセリカの剣を受け止めた瞬間、セリカは狼狽えた。

『……………我が左の赤き魔刀・魔術師殺し……………そのような小賢しい見戯は我には通じぬ……………』

そしてセリカの持つ剣の本当の主に敬意を表し、セリカに失望と憤怒を抱いた魔人はセリカの背後に瞬時に回り込み、右手の魔刀を稲妻の如く打ち下ろす。

「ちい——ッ!?!」

間一髪。辛うじて掠り傷程度で済ませたセリカだが、全身を魂が抜け落ちるような感覚が襲った。身体に力が入らず、そのまま四肢を投げだすように、無様に倒れ伏した。

『……………我が右の黒き魔刀・魂喰い……………我が刃に触れた貴様はもう終わりだ……………』

無防備に倒れるセリカへ歩み寄り、魔人は右手の魔刀をその首筋に当てた。

力を失ってしまったセリカとは裏腹に、魔人が纏う闇色の靈気は先ほどと比べて明らかに勢いを増しており、見るからに力を漲っていた。

「……………う……………あ……………」

自分の首筋に感じる冷たい感覚に、セリカはおおのく。指一本動かすことすら一苦労する今のセリカには、最早成す術がない。

『見込み違いだったか……………今の汝に我が主たる資格無し……………神妙に逝ね』

「……………ッ!?!」

セリカは自分の首のすぐ側にある刃を呆然と見る。

この魔人がそつと刀を引くだけで、セリカの首はころりと綺麗に落ちるだろう。

……………終わる。

その瞬間、魔人の胸部から腕が生えた。

『……………ぬぐつ?!』

「やっと隙を見せた」

魔人の背後から姿を現したのはテラスは手刀で魔人の心臓を貫いた。

「テラス……………ツ!? セリカを!!」

「はい」

グレンの指示にすぐさま腕を抜いてセリカを抱えるが——魔人は心臓を貫かれたはずなのにそれがなかったかのように右の魔刀をテラスに振り下ろす。

「させるかよクソがあああああああああああ——ツ  
!」

咆哮する六連の銃声と共に、空間を過る六閃の火線。

グレンの拳銃早撃ちからの連続掃射。

『ぬ——ッ!?!』

テラスという存在に意識が移り、不意を打たれた魔人の心臓部に一発の弾丸が射貫き——。

その刹那、神速旋回する双刀、踊る剣線。

まさに超反応、電光石火の絶技。魔人は飛来する残りの五発の弾丸を全て弾いた。

『なんだ、その妙な武器は……………? 爆裂の魔術で鉛玉を

飛ばす魔導器か? 猪口才な……………二度はないと思え  
……………』

魔人は健在。注意深く刀を構える。

その間にテラスは無事にセリカをグレン達のところに抱えてきた。

「二度も心臓をやられて生きているなんて……………」

「畜生、まさかあいつも不老不死とかじゃねえだろうな!」

一度はテラスの手刀で心臓を貫き、二度はグレンの弾丸が心臓部を射貫いた。

確実に二回は殺したはずなのに魔人は健在だった。

テラスはグレンにセリカを渡して前に出る。

「僕が時間を稼ぎますので先生達は逃げてください」

「なっ！ お前、一人であんな化物と戦う気か!? さっき見てただろう!?! セリカだってやられたんだ！ お前一人残ったところで勝ち目なんかねえだろうが!?!」

「ですけどこの中で最も生き残れる可能性が高いのは僕です」

グレンの拳銃は警戒され、二度目は通じるかはわからず。

リィエルの錬金術も魔術には変わらず、魔人の左の魔力で壊される可能性が高い。

システイーナとルミアでは単純に力不足。

全員で逃げても魔人は必ず追いかけてくる。

なら、誰か一人が囷となつて残るしかないとするならテラスが一番の適任者だ。

「安心してください。本当にやばいと思った時は即座に逃げますから。それまでは同じ不死身同士仲良くしておきますよ」

「……………なら——」

「なら俺が残るなんて言わないでくださいよ？ アルフォネア教授の様子がおかしかったその原因は僕達よりもグレン先生の方がわかるはずですよ。それが解決して、戦えるのなら逃げられる可能性だって高まるはずですよ。先生、全員が生き残れる最善を尽くしてください」

「……………絶対に後から追いかけて来いよ」

「はい」

苦虫を噛み締めた顔で、声音を震わせながら絞り出すような声でそう言ったグレンにテラスは頷いて応じた。

「行くぞ、皆」

「先生!?! テラスを置いていくことなんてできません！ それならここで皆で一緒に——」

「システイーナ。今は勝つか勝てるかの問題じゃなくて死ぬか生き残れるかだ。全員で戦ったところで余計な死人が増えるだけ。誰一人死人を出さない現在で考えられる最善手はあの魔人と同じ不死身で

ある僕が囷になって皆が逃げる時間を稼ぐ。それだけだ」

「……………そういうことだ。行くぞ、白猫」

「でも——」

「僕は大丈夫だよ。だから行って」

唇を噛んで堪えるシステイーナはグレン達の後についていく。

「テラス君……………」

ルミアはテラスの傍まで歩み寄ってその手を掴む。すると、莫大の魔力が溢れてくる。

「私にはこれぐらいしかできないけど……………お願い、無理だけはしないで……………」

ルミアはテラスに自身の異能を施して魔力を増幅させ、悲しい瞳でその手を強く握りしめる。

「無理はするけど……………ちゃんと戻るよ。でも、ちよつとごめん」

ルミアの首筋に顔を近づけるテラスにルミアは察して首を傾げる。

「ん……………」

噛みついてルミアの血を少しばかり啜る。

「これでよし。それじゃルミア、行って」

「……………うん」

血を吸って体の調子を良くしたテラスはルミアがグレン達と一緒にこの場から離れるのを確認して魔人と対峙する。

「待っていてくれるなんて意外と紳士ですね」

『地に堕ちた人外の身である汝を殺してからでも遅くはない。後に始末するまで』

「まあ、そうですね。見逃してくださいと土下座すれば見逃してくれますか?」

『答えは否。聖域に足を踏み入れた以上、汝も先の愚者達も平等なる死を与える』

答えは変わらない。

なら、テラスがすることも変わらない。

「なら殺します。ルミア達に害を与える者は容赦はしませんので」

不死身だろうが関係ない。

ルミア達を殺すというのなら怪物が魔人を殺す理由はそれだけで十分だ。

『ならば足掻くことだ。人外よ、我を殺し尽くしてみせよ』

「ええ、もちろん」

怪物と魔人。二人はぶつかり合う。

## 怪物VS魔人

グレン達を逃がす為にテラスは一人残り、魔人と対峙する。

「《強化》！」

白魔【フィジカルブースト】で身体能力を増幅<sup>エンハンス</sup>。そこにルミアの異能によって引き上げた。

「ぬっ——」

想像を超えた速力を発揮するテラスの動きに魔人は一瞬だけ戸惑いを見せた。

元々は素の身体力で人間を超えて、そこにルミアの異能が施されている魔術を使った。その速度は完全に魔人を上回っている。

しかし、魔人は戸惑いを見せたがそれだけだ。

如何に身体能力を上げてもそれは魔術によって強化されたもの。

それなら左の魔刀・魔術師殺<sup>ウイザイヤ</sup>しに触れさえすればそれは強制的に解除する。

『見戯』

確かにその速力には舌を巻く。だが、それだけでは勝てない。

テラスの動きを先読みして左の魔刀を振るう。

「そう、来ますよね」

だが、それを読んでいないテラスではない。

パチン、と指を鳴らした。

『ぐう——ッ?!』

突如魔人の心臓から刃が飛び出した。そして、余りにも突発的な現況に怯みその隙をテラスは見逃さない。

爪を伸ばして魔人の首を斬り飛ばす。

宙を飛ぶ魔人の首。だが、気が付けば魔人は何事もなかったようにそこにいる。

『……………人外。何時の間に私の体内に刃を仕込んだ?』

「初めからですよ。貴方に最初の一撃を与えたその時に仕込ませていただきました」

テラスのポケットには魔術によって圧縮凍結保存した爪楊枝サイ

ズの武器をしまっている。

魔人を手刀で貫いたその時にこっそりと仕込んでおいたのが功を奏した。

「とある正義の方に酷い敗北をしまして、少し用心深く戦うよう心掛けていますよ」

テラスは人間の枠外にいる怪物、吸血鬼だ。

不老不死であり、素の身体能力も人間を上回っている。

それなのにテラスはジャティスに完全敗北した。

自分を殺すことなどできないという慢心と用心深くあの手この手と策を用意していたジャティスの作戦勝ちだ。

もし、あの場にルミアがいたとしたら間違いなくルミアは殺されていただろう。

あの時の敗北を糧としてテラスは更なる強さを求道する。

「さて、そちらの質問には答えました。今度はこちらの質問にも答えてもらいますよ？ ……もしかして貴方は魔煌刃将アール＝カーンですか？」

自分でも何を馬鹿なことを言っているのか、という自覚はある。

だけど、そう思えるほどに共通点多すぎる。

遺跡調査前日にヴィオロに読み聞かせた童話『メルガリウスの魔法使い』を不意に思い出してまさか、という疑念を抱いた。

二振りの魔刀。死なない身体。己が真に忠誠を捧げるべき相手を求める。

絵本の挿絵にも双刀の剣士の姿がある。

独特的な創作キャラだな、とヴィオロに読み聞かせながらそう思っていたのを思い出したテラスはここで思い切って尋ねてみた。

(仮にアール＝カーンなら残りの命は二つだ……………)

童話の話なら魔人はグレン達と出会う前に既に七回死んでいる。そこにセリカを助ける際に二回と先ほど二回を数えて後二つ。

それなら十分にここで殺せられる可能性はある。

尋ねらテラスを睥睨する魔人は答えた。

『我が真なる主すら知らぬ秘中を、汝がいかに知ったかは与り知らぬ

が……………その問いには肯定を持って答えよう』

己の正体を明かした魔人にテラスの疑念がここで確信に変わった。  
後二回。後二回魔人を殺せば勝てる。

『人外よ。汝を我が障害として認めよう。……………』

■———>>……………』

それは、如何なる術式なのか。

魔人が聞き慣れない響きの言葉を呟き始めると、頭上に、まるで太陽の如く燃え輝く球体が形成されていき、その場をまるで昼間のように明るく、眩く照らす——

馬鹿げた熱量がああ球体に封じられているのがわかる。それはまるで灼熱の太陽。

【人外の領域】起動。——指定、風の攻性呪文。アサルト・スベル

それを見たテラスは迷うことなく己の固有魔術オリジナルを起動させる。

『集え暴風・戦槌となりて・撃ち据えよ』

『>>—————』

固有魔術オリジナルによってその威力は桁外れに跳ね上がった圧搾凝集した風の破城槌と全てを呑み込み、焼き尽くす灼熱の極光が衝突する。

『我が一撃をよく凌いだー』

「っ!？」

それは魔人のフェイク。囷だった。

魔人の相手は人間ではない人の身ならざる怪物。なら、あの一撃をどうにかすると魔人は踏んだうえでテラスの背後から左の魔刀を振るう。

神速で振り下ろされるその一撃をテラスは回避したが、僅かに掠つてしまったのか増幅エンハンスされた身体能力が打ち消された。

『嵐の風狼よ・我が四肢に纏い・疾く烈しく荒れる』

黒魔【ラピッド・ストリーム】を改変した黒魔改【ラピッド・テンペスト】。

激風を身に纏い、機動力を爆発的に向上させる魔術。

帝国軍では『疾風脚シュートロム』と呼ばれる魔導技で、自ら起こした風の爆発に、自ら吹っ飛ばされることを連続で行って高速三次元機動する。



セラが最も得意とするこの術をテラスは両腕と両脚に激風を纏うように改変した。

『ぬぐっ！』

吹き飛ばされる魔人。態勢を整えられる前に再度吹き飛ばされる連続攻撃に囚われる。

先程の白魔【フィジカルブースト】以上の高速機動で今の魔人にはテラスを目視できない。

エテリオ・コーティンダ 霊素皮膜処理が施されている遺跡の壁は破壊することができない。

壁を跳躍しては魔人を両脚と同じ機動力を保有する両腕から放たれる拳撃を炸裂。魔人に息をする暇も与えない拳と蹴りを叩きつける。

更には今のテラスは固有魔術オリジナルを起動中。その機動力、威力は桁外れの高い。

『——っ』

「あと一つ」

高速機動から鋭利な爪を用いた刺突で魔人を一回殺す。

残り一つ。あと一回殺せばテラスの勝利だが、ここで固有魔術オリジナルの効果が切れた。

『よくここまで我を殺し尽くした！』

「《疾》ッ！」

シユトロム 疾風脚の連続起動で距離を取り、魔人の双刀の範囲内から逃れる。

「《穿て》—— 《穿て》ッ！ 《穿て》ッ！」

三条の雷閃——黒魔【ライトニング・ピラス】を的確に魔人の頭、喉、心臓を狙う。

『小賢し！』

左の魔刀によって霧散。通常アサルト・スベルの攻性呪文では魔人には届かない。

攻め続ける魔人の剣舞。シユトロム 疾風脚を連続起動させて回避するテラス。固有魔術オリジナルは一度使った。後一度使えばマナ欠乏症に陥る。

だがこのままではジリ貧だ。

テラスはもう一度固有魔術オリジナルを発動させる。

(ここで勝負をつける……………ッ！)

「《数多の大気・颯風の刃・顕現せよ》！」

黒魔「エア・ブレード」。固有魔術オリジナルの力を持って無数の風の刃を顕現させる。

それを魔人に向けて一斉砲火。無数の風の刃は魔人を微塵切りにする勢いで襲う。

『フーン！』

だが、魔人はその超絶技巧の剣技を持って無数の風の刃を霧散していく。

一発でも急所に当たればテラスの勝利は違いない。それでも魔人の技量、底力はテラスの想像を遥かに超えていた。

あと一つ。それが圧倒的までに遠い。

放ち続ける風の刃。それを防ぎ続ける魔人。

どちらも一歩も引かない戦いに先に地面に膝をつけたのは――

――テラスだ。

固有魔術オリジナルの時間制限を超えて、マナ欠乏症に陥った。

そして、全ての風の刃を防ぎ切った魔人はテラスに歩み寄る。

『……………人外よ、見事だ。地に堕ちた身なれど我を相手に一人で

ここまで追い詰めた汝に賛美の言葉を送ろう』

「……………それはありがとうございます」

肩で息をするテラスの顔が苦しそうに歪めていた。

『褒美として苦痛なき死を与えん』

「そうですかっ！」

近づいてくる魔人にテラスはソレを取り出した。

取り出したのは装填済みの一丁の拳銃。遺跡調査前にテレサに頼

んで買い取った物だ。

勿論テラスはグレンのように巧みは扱えない。

一定の距離内でないと相手には当てることが出来ない。

だが、その一定の距離内に魔人はいる。それも銃弾が通ることは既に証明済み。

用心の為に取っておいたテラスの最後の切札。

咆哮する銃声。一閃の火線が過る。

『……………往生際悪し』

「……………ダメ、か」

しかしながらも魔人はテラスの最後の切札を防いだ。

もし、初見であれば通ったかもしれない。でも、それはもはや言い訳だ。

(ごめん、ルミア……………)

もう手は残されてはいない。ここで霧化しても右の魔刀は肉体ではなく魂に攻撃するもの。霧の上からでもその魔刀は通るだろう。なら不老不死のテラスでも案外あっさり殺すかもしれない。

(二度目だな……………)

前世では全身をめった刺しにされて死んだ。

今度は魂を吸い取られて死ぬ。

(案外と早かったな……………)

割と楽しい生活だった。前世ではできなかったことやこの世界でしかできないこともできた。

ここで死んでも悔いはない。

潔く諦めて瞼を閉ざす。諦念を感じ取ったのか魔人は祈りを捧げるように、刀で円を描く。

『逝ね』

振り上げられる右の魔刀。

後はそれを振り下ろせばテラスは魂を吸い取られて死ぬだろう。

(悪くない第二の人生……………怪物生だった)

全てを諦めてその魔刀が振り下ろされるのを待っていると――

『ダメー!』

「っ!?!」

『ぬ!?!』

諦めたと思っていたテラスは不意に聞こえたその声に思わず身体が動いた。

「……………ルミア?」

視線を動かすもここにはルミアもグレンやシステイーナ達もいな

い。

いるのはテラスと魔人のみ。

「……………幻聴？　こんな時に？」

幻聴のはずだ。それでも確かにテラスの耳にはルミアの声が聞こえた。

死なないで、そう願っているかのような懸命な声だった。

それが幻聴なのか、もしくは走馬灯か。妄想の類が一番現実的な考えだろう。

「……………こんな時でも君のことを考えるなんてね」

前世では考えられないことだった。

自分は他の人達とは違う、異質な存在だ。

恐れられ、怖がられ、気味悪がれ、孤立し、孤独で生きていた。

前世ではそれに疑問に抱いたことさえなかった。

それを当然と受け入れ、当たり前のように応じた。自分でも恐ろしく冷めていたと思う。

だけど、この世界で吸血鬼という怪物として転生し、少しだけ周囲の考えや気持ち的理解できた気がする。

誰だって恐ろしいものに近づきたくはない。それが同じ人間でも怪物だろうと変わらない。

保身を第一に考える人間らしい行動だ。

でも――

それでも――

ルミアは違った。

人を殺す場面を見たのに、自分が人を襲う怪物だと知っているのに、本能に溺れて殺しかけたのに、ルミアはそれでも彼を――テラスⅡヴァンパイアを恐れることはなかった。

恐怖を引きつかせた笑顔ではなく本当の笑顔。

怯えを交えた震えた声ではなく優しい声を。

わからない。本当にわからない。

(どうして頭から君の事が離れられないのか……………)

この胸の奥から込み上げてくる感覚はなんだ？

どうしてこんなにもルミアのことを考えてしまう。  
何もわからない。理解できない。

だけど、一つだけわかることはある。

眼前にいる魔人をルミア達のところに行かせてはならない。

何があっても、どうなろうとも魔人だけはここでなんとかしなければならぬ。

『……………まだ足掻くか?』

「……………はい。貴方をルミア達のところへは行かせませ  
ん」

魔晶石を取り出してマナ欠乏症で失った魔力を回復させる。

それでも状況は絶望的だ。

相手は健在。こちらは固有魔術オリジナルの使用回数を超えて、手数も使い切った。

魔術を使っても左の魔刀によって打ち消される。

右の魔刀に斬られたら吸い取られて一巻の終わりだ。

逃げるといふ選択肢を放棄した今のテラスに勝機は無に等しい。

(本当に馬鹿だな、僕は……………)

何で自分がこんな無謀極まりない行動を取っているのか、もはや哀れみすら抱く。

(まあ、でも悪くはないよね? ルミア)

いや、本人がここにいたら馬鹿ツ! と怒るに違いない。

怒って、泣いて、生きている事に安堵するだろう。

こんな口クでもない怪物が生きている事に喜んでくれる。

その時だった。

頭の中で何かがかチリと失った破片パレットが嵌ったのは。

それと同時に流れ込んでくる何かにテラスは思わず口角を上げた。

それは邪神の気紛れか、悪戯か?

そうするように仕掛けていたのか、邪神の考えはテラスにはわからない。  
ない。

ただ一つ確かなのはあの邪神はやはり口クでもない神様だ。

「……………それでも感謝しますよ」

これなら魔人に勝てる。

それが自分も破滅することになろうとも構わない。

(後は頼みます、グレン先生……………)

切札は既に渡してある。後は上手いことしてくれるのを願うしかない。

(ごめんね、ルミア……………)

最後にルミアに謝罪の言葉を述べてテラスは呪文を唱える。

「———」

闇に沈む者の嘆きの声に聞こえる呪文。それを唱えたテラスに変化が生じる。

背中の蝙蝠の翼が二翼が四翼に変化し、その翼から闇色の靈氣オーラを生じさせる。血のように紅い瞳には狂気をおびて、鋭い犬歯は更に鋭利になる。

「ウウウウウ……………」

『……………理性さえも捨てたか、人外よ』

双刀を構える魔人はどこか哀れみを抱く思いで、双刀を強く握りしめる。

刹那、魔人の眼前にテラスは現れた。

『!?!』

初動すら見えない速度で眼前にまで訪れたテラスに魔人は右の魔刀で攻撃を行おうとしたが、テラスは魔人の両腕を掴んで、魔人の攻撃と動きを封じた。

『ぬぐ———』

そして、鋭利なその牙が首筋に突き刺さる。

『我を、吸収するとかいうのか?! 人外!!』

動きを封じられて叫びを上げる魔人にお構いなしに吸い続けるテラスの四翼に纏う靈氣オーラに勢いが増していく。

魔人の右の魔刀・魂喰ソウルトらと同じように噛みついた相手の魂を吸収して、自身の力へと転化している。

暴れても喰らいついた牙は離れない。

そして———

『……………無念』

塵一つ残さず完全消滅するまで魔人の魂はテラスに吸収された。眼前の獲物がいなくなり、テラスは鼻を鳴らす。

すると、いい匂いを感じ取った。

ニヤリと嗤うテラスはその匂いがする方へ歩み出す。

その声は

闘技場から離れたグレン達は距離を稼いだところで一安堵していた。

グレンはセリカの原因を無事に解決に成功したが、靈魂——エーテル体を著しく喰われてしまった為に魔術が震えるかわからない状態になり、今も昏睡している。

そして、システイーナは魔人の正体を『メルガリウスの魔法使い』に出てくる魔煌刃将アール・カーンと推測した。

偶然にしては出来過ぎている。システイーナの古代文明マニアがなせる発想力だろう。

その可能性に賭けてグレン達はテラスを助ける為に来た道に戻ろうとしていた。

『待ちなさい』

不意に背後から響いてきた声に、グレン達は一斉に振り返る。

そして、一同は息を呑んだ。

「な——」

そこにいたのは——少女だ。

燃え尽きた灰のように真っ白な髪、暗く淀んだ赤珊瑚色の瞳。身に纏う極薄の衣。

そして、その背中に生えている——この世に属するモノとは思えない、異形の翼。

「お、お前は——ッ!?!」

グレンはその少女に見覚えがあった。

「第一祭儀場の、天空の双生児像タウムの所にいた——幻覚じゃなかったのか!？」

『……………ふん。人間って本当に蒙昧ね。辻褃の合わないことは、すぐ自分で自分を騙して流す、現実を現実のまま捉えようとしな………愚かなことだわ』

蔑むような昏い目でグレンを睥睨し、鼻を鳴らす少女。

「ね……………ねえ……………貴女……………なんなの



「……………?」

システイーナが震えながら、少女に問う。

「どういう……………ことなの……………? 貴女、どうして……………そんな姿を……………ッ!?」

その問いは、システイーナに限った話ではない。

その場の誰もが等しく抱いた問いだった。

「貴女……………どうして……………? どうして、ルミアと同じ顔なのよ……………ッ!?」

震えるシステイーナが指摘するとおり。

その異形の少女の顔は——ルミアとうり二つであった。

「……………私? そうね、今はナムルスとでも名乗るわ」

誰もが抱いていた疑問に、少女はそんな風に答えていた。

「……………<sup>ナムルス</sup>名無し、ね」

そのあからさまな偽名に、グレンは呆れるように嘆息する。

色々とその少女に聞きたいことはあるが、今はそれどころではない。

「悪いが、今はお前に構っている暇はねえんだ。急いで戻らねえとテラスが——」

『彼はこちらに向かっているわ』

ナムルスはグレンの声を遮ってそう答えた。

「それって……………」

『倒したのよ。あいつを、一人で』

告げられたその言葉に一回は絶句する。あれほどの異質の存在をたった一人で倒した。

それと同時にテラスが生きている事に安堵するも——

『だから私は彼から貴方達を逃がすために来たのよ』

「……………どういうことだ? あいつは、テラスは勝つたんだらう? なら今からでも迎えに行かねえと」

『死にたいの? グレン。……………いえ、私も言葉が足りなかったわ。』

彼は勝ったわ。それは間違いはない。酷い代償を支払っての勝利だけど、ね』

「それってどういうことですか？」

意味深に話すナムルスにルミアが食いつく。

『私は遺跡の靈脈レイラインに継り付く残留思念みたいなもの。この国の遺跡にならどこでも姿を現せるわ。それが私の正体。そして私は見たの。彼は自我を捨てて怪物と成り果ててあいつを倒した。そんな彼がこちらに向かっている理由は言わなくてもわかるでしょ？』

リエルとルミアはその言葉の意味がすぐに理解できた。

一度彼の住処の地下で見た吸血鬼としての本能の暴走。

もし、それと同じかそれ以上に酷い状態になつていたら次の彼の狙いはグレン達だ。

「そんなのって……………ツ！」

「あのツ馬鹿！」

システイーナもグレンもナムルスの言葉に少なからずのショックを受ける。

自己犠牲がどうか自分で言っておきながら自分がそれをするなんて馬鹿としか言えない。

グレンはポケットから一発の銀色の弾丸を取り出す。

「クソ……………ツ」

悪態を吐くグレンは遺跡調査前にテラスと話したことを思い出す。

『先生に渡しておきたいものがあります』

『なんだ？ 金か？』

『生徒から渡すもので真っ先に金が出てくるのは……………まあ聞き流しますけど、これを先生が持つておいてください』

『チツ、金じゃねえのか。銀色の弾丸……………』

『万が一に僕が暴走して皆の敵と先生が判断したらそれを僕の心臓に撃ち込んでください。そうすれば弾丸に込めた純銀が血液と共に全身を巡り、僕の動きを封じることができます』

『おまッ！ なんもん俺に渡すんじゃねえよ！』

『先生だからこそ渡しておきたいんです。いざという時に制ストップ止がいなければ僕は先生達やルミアを殺すかもしれません。それを防ぐためにも自分以外の人に自分を倒す手段を用意しておかないと』

『テラス、お前……………』

『頼みましたよ、グレン先生』

(お前はそうなることを前提に考えているのかよ……………)  
彼は自分のことを怪物だと自称するが、いったいどこが怖いというのか。

常に自分を切り捨てる手段と方法を考えているなんて普通はできない。

ルミアの為とは言え、もう少し自分を大切にしろ。

「先生！　どうにか彼を、テラス君を助ける事は出来ませんか!?　私のできることならなんでもします！　だから！」

グレンの腕にすがりよって必死に懇願するルミアにグレンは何とか宥めさせる。

「落ち着け。誰もあの馬鹿を見捨てるなんて思っちゃいねえよ。取りあえず今は——」

『もう遅いわ』

それはやってきた。

ゆつくりとした足取りで闇の世界から最初にグレン達が目にしたのは血のように紅い二つの光。それはすぐに眼だと理解した。

足音がするたびに奈落に呑み込まれるような感覚がグレン達を襲うなかでそれは姿を見せた。

そこにはグレン達の知っているテラスではない。

獲物を見つけた捕食者の表情と狂気の瞳を迸らせる怪物だ。テラス

四翼からは闇色の靈氣オーラを生じさせている

「——ツ!?」

リエルとグレンは反射的に剣と銃を構えた。

先程の魔人とは違う。闇そのものが人の姿をしているその存在に心臓に悲鳴が走る。

「……………よお、テラス。少し見ない間に随分と変わったな?　なんだ?　ドツキリか?　魔術馬鹿のお前にしては面白いドツキリだぞ?」

それでもグレンはいつもの調子で声をかけるもテラスに返答はな

い。

完全に自分達の事を餌として見えていない。すぐに襲いかかってこないのは恐らくは値踏みをしているからだろう。

最初に食べるのは誰か？

グレンか、リエルか、システイーナか、ルミアか。誰から食べた方が美味しいのだろうかと思考に耽っている。

「ほら、なんとか答えろよ？ もっと面白いリアクションはなかったんですか？ とかいつもの小生意気みたいなこと言えよ。おい！聞いてんのか!? 頼むから返事をしやがれ!!」

「《■■■■》」

嘆きの声のような呪文が聞こえるとテラスの足元にある影が蠢き出して蛇のように襲いかかってくる。

「ちくしょう!」

「いやあああああああああああああああああつ!!」

グレンの正確無比の銃撃とリエルの剣技が影の蛇を破壊するも、蛇はすぐさまに再生し、何事もなかったように再び襲いかかる。

当の本人はただそこに突っ立っているだけで何もしようとはしない。

ただ単に影の蛇を操っているに過ぎない。

偶然か？ たまたまか？ もしくは嗜好か？

とにかくテラス本人は攻撃をしてくる気はないようだ。

(適度に動かせて血液の流れを良くしてから食べようつてか!? 完全に俺達は捕食対象かよ!!)

内心で愚痴りながらグレンは銃声を鳴らし続ける。

「《集え暴風・戦槌となりて・撃ち据えよ》!」

背後からのシステイーナの呪文に二人は即座に後方に跳ぶ。

システイーナの隣にはルミアが寄り添い、システイーナの左手に手を添えている。

システイーナの黒魔【ゲイル・ブロウ】がルミアの異能の力も載せて破滅的な衝撃波を周囲に撒き散らしながら風の戦槌が猛然とテラ

スに迫る。

そして炸裂。

システイーナが放った風の戦槌はテラスに直撃した。

だが――

「うそ……………?」

確かに直撃したのに、テラスは一切効果はなかった。

ルミアの力を載せたはずなのにテラスは防御すらしていない。

「やあああああああああああああ――ツ！」

システイーナの魔術を放った直後にリエルは烈風のごとくテラスへ襲いかかる渾身の斬撃が、テラスを肉薄にする。

甲高い音が響くとリエルは目を丸くする。

自分の渾身の一撃をテラスは歯で受け止めては錬金術によって錬成したリエルの大剣を噛み砕いた。

「う――！」

虫を払うように腕を振るうとリエルは咄嗟にセリカに真銀の剣で防いだが、システイーナ達のところまで飛ばされた。

悠然と値踏みするように見下している怪物に一同は悟った。

完全に遊ばれている。

その気になれば一瞬で殺すことも可能のはずなのに碌に攻撃らしい攻撃をしてこない。

逃げまとい、抗おうとする獲物を見て楽しむ捕食者の思考でグレン達を騙って狩りを楽しんでいる。

(どうする……………!? どうやってあいつを連れ戻す!?)

グレンはどうにかしてテラスを元に戻そうとする。だが、その方法がわからない。

唯一できる可能性があるのはテラス本人から貰った銀の弾丸をテラスの心臓に撃ち込んで動きを封じることぐらいだが、そう簡単に当たる相手とは思えない。

今こうして生きていられるのは単なる気紛れ。

テラスの影は蛇のように蠢いて、本人はもつと楽しませろといわんばかりに見ている。

「テラス君……………私達のことかわからないの?」

ルミアがシステイーナよりも前に出てテラスに声を投げる。

「グレン先生やリエル、システイも皆、テラス君のことを心配してるんだよ?」

「ルミア……………」

声を交えながら歩み寄るルミア。

「……………?」

だが、彼は首を傾げているだけだ。

何を言っているのかわからないような目でただルミアを見ている。

「そうなったのも皆を助ける為に頑張ってくれたんだよね? だからちやんとお礼が言いたいの。助けてくれて、守ってくれてありがとうって。だから、お願いだから……………私達の知っている優しい貴方に戻って……………ッ!」

「ルミアッ!」

しかし、ルミアの言葉は彼には届かなかった。

影が無数と棘となってルミアを襲う直前にグレンが駆け出してルミアを抱えて辛うじて避けることが出来た。

「テラス! お前、自分が何をしたのかわかってんのか!? お前がなによりも大切に行っているルミアを殺そうとしたんだぞ!」

激昂するグレン。だが、それでも怪物は<sup>テラス</sup>どうでもいいかのように息を吐いた。その時。

世界は灰色となつて無音となる。

音を失わずに済んだのはグレン達だけ。テラスまでも灰色となつて停止している。

『この状態はそう長くは保たないわ。急いでこの場から離れるわよ』  
ナムルスがグレン達に引くように告げる。

「待て! それじゃあいつは——」

『今の彼には私達の言葉は届かないわ。ここで無駄死にしたいの?』

正論過ぎるその言葉にグレン達は一度テラスを一瞥して苦渋に満ちた顔でこの場から離れていく。

## 偉大な力は

気が付いたら獲物達グレンが消えていた。

先ほどまでそこにいたはずなのに、気が付いたら目の前から姿を消した。

鼻を鳴らす。匂いはある。

何らかの方法で逃げたのだろう。

それを理解して怪物は嗤った。

ああ、まだ狩りを楽しませてくれる。

逃げまとい、抗い、僅かな可能性に縋る脆弱で矮小な人間達エサ。

逃げるのなら逃がそう。

抗うのなら遊んでやろう。

全てを諦めて絶望の底に墮ちるその瞬間までどうか醜くも抵抗し  
てきてくれ。

絶望すれば絶望するほどにその血は、魂は美酒に変わる。

そろそろいいだろう。

彼は再び動き出す。

人間達エサは対抗手段を考えてくれただろうか？

どういう風に抗ってくれるのか見せてもらおう。

だが、少々喉が渴いた。

次に会ったら……………そうだな、あの人間の男の血から頂  
くでしょう。

次に青髪の女子。

その次に銀髪の女子。

最後に金髪の女子を頂き、狩りを十二分に楽しむとしよう。

……………そういえば、あの金髪の女子は何かを訴えてい  
た。

何が言いたかったのだろうか？

命乞い？ しかし、恐怖に怯えた目はしていなかった。

何故だろうか？ どうしてあの女子の顔が脳裏から離れない  
……………。









「いいいいいいいいいやああああああああああああああああああ  
——ッ！」

グレンとリエルは疾風迅雷の如く疾く走る。

ルミアの『感応増幅力』を予め載せた白魔「フィジカル・ブースト」で身体能力を極限まで引き上げているために、その動きは既に人外だ。

そして、魔力を付<sup>エンチャント</sup>呪したグレンの拳が——

セリカから借り受けた真銀<sup>ミスリル</sup>の剣——  
怪物<sup>テラス</sup>へと迫る。

「        」

怪物は呪文を口にして先ほどと同じように影で遊ぼうとするが——

「!?」

影が操れないことにその余裕の表情が僅かに崩れる。

魔術が発動できない。それはグレンが持つ愚者のアルカナ——

グレンの固有魔術【愚者の世界】によって起動封殺された。

グレンとリエルは魔術を封じた怪物<sup>テラス</sup>に真銀<sup>ミスリル</sup>の剣と拳を叩きつける。

リエルの剣は怪物<sup>テラス</sup>を斬り裂き、グレンの拳は怪物<sup>テラス</sup>に直撃するが、瞬時に再生した。

その再生能力はグレン達が知っている範囲を大きく上回った再生能力。

この再生能力の前では相手の攻撃を避ける必要もない。

だが、それでは芸はない。

爪を伸ばす。迫りくるリエルの剣を爪で受け止め、グレンの拳には素手で対処し始めた。

先程よりかは確かに速く、力強い攻撃だ。

「《拒み止めよ・嵐の壁よ・その下肢に安らぎを》——ルミア！」

「うん！ 《送り火よ・彼等を黄泉に導け・その旅路を照らし賜え》！」

ルミアの異能を載せたシスティーナの風の呪文で怪物<sup>テラス</sup>の動きを封じ、ルミアがその風に香油を垂らし、聖炎をのせる。

「!?」

それは本能による回避行動。

己の両足を斬り裂いて翼を羽ばたかせて空を舞い、暴風に煽られた聖炎が燃え上がり、広場を聖炎で埋め尽くす。

「そうだよな！ お前は苦手だとそう言っていたよな！」

吸血鬼は聖なる力が苦手。問題はなくても本能的に避けてしまうと本人がそう言っていた。

空を飛ぶ怪物に向けてグレンは発砲。

シリンダーに装填されているのはテラスから渡された対吸血鬼用の銀の弾丸。

グレンの超絶な銃技巧によって銀の弾丸は真つ直ぐと怪物の心臓に向かう。

だが、怪物は避けた。

本能がそれを受けていけないと警報を鳴らして強引に回避した。

「……………悪いな、テラス。少しばかり弄らせてもらったぞ」  
避けた瞬間。不意に銀の弾丸は破裂した。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——  
——ッ!!」

至近距離で銀の礫を浴びる怪物の悲鳴。

肉を灼く音と共に地面に落ち、悶えるように地面に転がる。

グレンはテラスから渡された銀の弾丸に細工をした。

発砲すると途中で弾丸が破裂するように術式を込めたその一発は確かに怪物に損傷を与えた。

己の抑止力の為に渡したその一発の弾丸はどれほど強烈なのかを身を持って体験した。

「やああああああああああああああああああああ——  
——ッ！」

怯んでいる怪物にリエルは烈風の如く駆け抜けて、怪物を吹っ飛ばす。

「グウウウウウウウウウウウウ——ッ！」

吹っ飛ばされながらも態勢を立て直して苛立ちを露にする怪物の

瞳は瞋恚を宿して二人を睨み付ける。

「チエックメイトだ！」

グレンが指を鳴らすと同時に怪物の頭、胴、足に三つの光のリング  
刑法陣で魔術的に拘束された。

グレンが予めそこに組み上げておいた黒魔儀「リストリクシ  
ン」——封縛の結界。

これに捕らわれた怪物はもう指一本動かすことは出来ない。

「ふう、上手くいった……………」

先の戦いでグレンは怪物は完全にこちらを格下と見て油断してい  
ることは既にわかっていた。なら、その油断を利用した。

怪物はグレン達をすぐに殺すつもりはない。恐らくはゆっくりと  
蹴つてから殺すだろうと推測して短期決戦での捕縛作戦を行った。

戦って吸血鬼の苦手な聖なる力と純銀を用いて最後には組み込ん  
でおいた黒魔儀「リストリクシオン」で動きを封じる。

簡単そうだが、全て怪物が慢心して油断していることが前提とされ  
る。

少しでもグレン達を警戒しているか、殺すつもりがあるのなら今頃  
グレン達は死んでいた。

「先生！」

「おー、ご苦労だったな。白猫、ルミア」

駆けつけてきた二人に労いの言葉を送る。

「上手くいきましたね……………正直私も驚いています」

「ふ、教師に勝てる生徒などいないのさ……………まあ、今回は  
お前らがいてくれたのが大きいかな」

いつもの調子に戻るグレンは唸り声を出して暴れているテラスに  
視線を向ける。

「さて、捕縛できたのはいいが、どうすつかな……………」

「先生、どうにか元に戻す方法はないのでしょうか？」

ルミアは怪物の傍に寄って心配そうにグレンに尋ねる。

「どうにかできるのならするが……………正直わからん。そも  
そもこいつからこんな危険な状態になるなんて聞いたこともねえ。

もしかしたら魔人の戦いがキツカケに何かに目覚めたせいか  
………ああクソ！ 流石にこいつをこのまま地上には――

――  
どうにか元に戻そうと思いを働かせるグレンはソレを見て表情が  
固まった。

ソレは見覚えがある。

ついさつき見たばかりだ。

だが、それは本来は怪物テラスが持っているものではないはずだ。

怪物テラスの左手に握られているのは――紅の魔刀。

魔人が持つ魔術師殺しの魔刀だった。

「逃げるー！ ルミア!!」

「え？」

封縛の結界は霧散して、自由の身となった怪物テラスは凶笑を見せてすぐ  
傍にいたルミアの首筋にその牙を突き刺す。

「二」――ツ――「二」

三人は言葉を失った。

怪物テラスの動きを封殺して勝利したと思った。

それが予想外の力を取り出して無力化し、勝利の喜びを絶望に変  
わった。

「あれ……………?」

だが、おかしなことにルミアは自分が平気だったことに呆けた。

自分でも噛みつかれたと思った。

だが、違った。

怪物テラスの牙がルミアの肌当たる寸前で止まっていた。

「あ……………が……………」

「テラス君……………?」

止まる動きに何かに耐えるように唸る。

「テラス、お前……………」

「テラス、貴方……………」

「……………?」

全員（今すぐにも斬りかかろうとしているリィエルを除く）は何

となくだが、分かった気がした。テラスは抗っているんだ。己の中にいる怪物からルミアを守ろうと必死に戦っている。

(お前、どれだけルミアが大切なんだ……………)

大切な人を守る為に彼は今も必死に戦っている。その強い想いが伝わってくる。

「テラス君……………」

ルミアはそつと怪物の頬に手を当てる。

「大好きだよ」

そして口を塞いだ。

なぜそんな蛮行に及んだのかはルミアでもわからない。気が付いたら怪物と唇を重ねていた。

そつと触れただけの軽いキス。されど初めてのキス。

私は大丈夫。もう戦わなくていい。ちゃんと私を見て。私の声を聞いて。

そんな想いを込めてキスをした。

「リエル！ お前は見るな！ まだ早い！」

「グレン……………何も見えない。ルミアはどうなったの？」

「ルミア……………ッ！ 貴女……………ッ!」

三人は突然のことに驚き、困惑するも二人の耳には届かない。

テラスがこうなったのも全てはルミアのことを想ってだ。

本人はその自覚はないかもしれないけど、それでも自分の為にここまでしてくれる彼の優しさがルミアは大好きだ。

(私のせいで貴方が誰かを傷付けるのなんて見たくないよ……………)

相手を傷付け、自分も傷付き、自分だけが安全な所で守られているだけなんて嫌だ。

(貴方だけを傷付けたくない。私も一緒に貴方の傍にいさせて……………)

その想いが伝わるかのように四翼の翼が消えて、狂気に逆らせていた瞳から狂気が消えていく。

そして――

「……………逃げ、てよ……………ルミア……………僕な  
んか、放つて……………」  
「できないよ」

テラスは元に戻った。

自分なんか放つて逃げて欲しかったのに、本当にルミアは無茶をす  
る。

ルミアに体重を預けるように倒れ込むテラスをルミアは抱きとめ  
る。

「なんでだろう……………？ 自我なんてもうないと、思ってた  
のに……………ルミアの顔だけが頭から離れなかつた  
……………」

自我を失くしてもう何もわからないと思っていた。

それなのにルミアの笑顔だけは覚えていた。

「不思議だね……………どうしてだろう？ これが人間でいう愛なのか  
な……………？」

「さあ、私も愛なんてよくわからないよ」

「人間なのに……………？」

「人間だから、かな？」

互いに苦笑する。

「……………ルミア、ありがとう」

「うん、どういたしまして」

お礼の言葉を告げて眠るテラスにルミアは笑顔で応える。

その光景を見ていたグレンは肩を竦める。

「やれやれ、愛の力は偉大ってか……………？」

苦笑交じりにそう言った。

## 天使の抱擁

「——以上を持ちまして。私、テラスⅡヴァンパイアの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました」

遺跡調査を終えてテラスは調査前に告げられた発表を魔術学会で行い、無事に終えた。

テラスの魔術論文を聞いた魔術学会の人達は拍手と共に感嘆の声をを出していた。

「軍用魔術をあのように改竄して扱いやすくするとは思ってもよらなかった」

「ですな。まだ学士だというのに見事なものだ」

この場にいる多くの人達はテラスを褒め称え、新しい魔術の発見に喜ぶ。

そんなことに耳を傾けずにテラスはさっさと帰ろうとする。

「テラスⅡヴァンパイア」

「あ、ハツハツ八先生もいらしてたんですね」

「ハーレイだ！ ハーレイⅡアストレイだッ！ なんだ、その笑い声みたいな名前は!? 貴様、何度、人の名前を間違えれば気が済むものだ!?」

学院の講師であるハーレイは物凄い形相で詰め寄るもテラスは表情を崩すことは無い。

「それで何か御用でしょうか？ 僕は早く帰りたいたいのですが？」

「貴様は……………まあいい。今回の貴様の発表で第四階梯クアットルデへの昇格はほぼ間違いはないだろう。これからも魔術の発展に貢献するといい」

おや？ 意外なお言葉にテラスは思わず驚いた。

威圧的な態度は消えてはいないが、恐らくは褒めたのだろう。

まさか、この先生からお褒めのお言葉を頂戴する日が来るとは思わなかった。

「わかりました。それでここで失礼いたします。競技祭の時に負けたショックで口から泡を吹くという芸を披露してくださいましたハクシヨ

ン先生」

「しとらんわっ!!」

額に青筋を浮かばせながら相も変わらずな態度を取るテラスに怒る。

そして、魔術学会を終わらせたテラスは自分の住処に帰還。

「ただいま」

「お帰りなさい。発表どうだった？」

「お帰りなさい……………」

セラとセラに可愛がられているヴィオロに今回の発表の成果を伝える。

「上手くいったよ。第四階梯クァットルデの昇格はほぼ間違いないみたい」

「そつかく私と同じ階位になるんだね……………んく嬉しいけど魔術を教えた身としては複雑だなく」

セラは第四階梯クァットルデ。家族であり教え子でもあるテラスが自分と同じ階梯になることに少しばかり複雑な心境だ。

「そうかな？ まあでも階梯はあくまで階梯だしね。特に気にする必要……………は……………」

不意に視界が揺らいだ。

「テラス君!？」

「テラスさん!？」

セラとヴィオロの声を聞いてテラスの視界は真っ暗になった。

「凄い熱……………」

テラスが倒れた翌日。ルミア達はテラスの住処に訪れていた。

眠りについていてテラスの頭が熱く。見た感じでは風邪と同じ症状。

「原因はアレかもな……………」

そんなテラスを見ながらこうなった原因に心当たりがあった。

遺跡調査の際に怪物と成り果てたその力の代償が今になって一気



に襲いかかってきた。

タイミング的にもそれが一番原因の可能性は高い。

「先生……………」

テラスの手を握りながら心配そうにするルミアはグレンにどうにかできないか、と視線を向けるが、グレンは乱暴に頭を掻き毟る。

「んな目すんなよ。吸血鬼だから病院に連れて行っても治る保証もねえし、魔術も効果がなかった。死ぬことはねえだろうが……………今は様子見だ」

「はい……………」

テラスの傍に寄り添るルミア。

自分を助ける為にこうなってしまったテラスに少なからずの罪悪感があるのだろう。

グレンはそんなルミアを一瞥して部屋から出て行った。

「ごめんね……………」

息を荒げている。きつと辛くて苦しいのかもしれない。

その姿を見れば見るほどにルミアは申し訳ない気持ちになるは少しでも何かしようと思いの汗を拭う。

(私の血を吸えば少しはよくなるのかな……………?)

そう考えるが今の意識のないテラスに血を吸わせることはできない。

自分の血で少しでもよくなるのならいくらでも吸わせてあげられるのに。

「……………ん……………」

テラスの瞼がゆつくりと上がり、瞳を覗かせる。

「ルミア……………」

「テラス君、良かった……………意識が戻ったんだね」

目を覚ましたテラスに安堵する。そんな彼はルミアと周囲に視線を泳がせてはぼーとしている。

「吸血鬼も風邪引くんだ……………人間だった頃以来だな」

ようやく自分の状態を理解したテラスにルミアは尋ねる。

「大丈夫？ 私の血を飲んだら少しは良くなりそう？」

「今は食欲ないから……………」

「うん。でもいつでも言つてね」

呆然として答えるテラスにルミアは頷いて応える。

ぼー、と天井を見上げるテラスは不意に自分の手が握られている事に気付いた。

「手、握ってるの？」

「ごめんね、嫌だった？」

「ううん、そんなことはないよ。こうされるのは初めてだから」

「初めて……………」

「人間の時は自分で薬を飲んで御粥を作っていたから。誰かに看病されること自体初めてなんだ……………」

彼は淡々と何事もないかのように平然とそう言った。

風邪を引いても病院に行く体力もなく、近場の薬局で薬を買って飲んで、お腹に何かを入れようと思った時は自分で御粥を作っていた。

その時、両親は何もしなかった。心配することもなくただいつも通りにしていただけ。

彼の存在が見えないかのように扱っていた。

「……………」

その話を聞いたルミアはテラスの手を強く握った。

幼い頃、ルミアは風邪を引いた時は使用人だけでなく、母や姉だつて心配してお見舞いに来てくれる。フィーベル家に引き取られた時だつてシステイナが看病してくれた。

病気の時、心細くなる。そんな時に誰かが傍にいてくれるだけで凄く安心する。

でも、彼には自分を心配してくれる人なんていなかった。

一人、病氣と闘いながら眠りについていて。それが彼にとつての当たり前前。

仮にルミアがそのような生活をしていたらきつと耐えられない。ううん、耐えること自体がおかしい。

誰もが与えられる当たり前のことさえも彼は与えられなかった。

両親の愛情も、温もりも何もかも……………。

絶対的な孤独という闇のなかで生きることが当たり前だと彼は思っている。

「だから、こういう時はなんて言えばいいのかわからないんだ……………」

いつものように話す彼の声が心なしか寂しそうに聞こえる。

気のせいかもしれないが、そんな彼をルミアは放っておくことはできない。

「……………テラス君、ちよつとごめんね」

「ルミア……………?」

ルミアはテラスのベッドの中に潜り込み、テラスの隣で横になるとテラスの頭を自身の胸元に誘導して抱きしめた。

「どうしたの……………? 流石に今は狼にはなれないよ?」

ルミアの柔らかな双丘が顔に当たる。吸血鬼とはいえど一応は年頃の男の子にとっては刺激が強いが、冗談を言うぐらいの余裕はまだある。

「こういう時はたくさん甘えていいんだよ……………?」

慈悲と慈愛に満ちた声音がテラスの耳に届く。

「甘え方がわからないからいいよ」

「なんでもいいよ。して欲しいこととかを言えばいいの。私は何かしてあげたいな」

顔を上げるとそこには天使の微笑みを見せるルミアの笑顔があった。

天使とかそういうのを信じる宗教的な考えは持ち合わせていないテラスだが、ルミアがある日突然に純白の翼を広げる時が来たらルミアこそが天使だったのかと思えるほどに今のルミアは天使だった。

なら、自分は空に舞う天使を地獄の底に引きずり込もうとする悪しき怪物か?

思考が碌に働かないせいかな、そんなことを考えてしまう。

ルミアはテラスの頭を優しく撫でる。

子供をあやすかのような優しい手つきで撫でられるテラスはどこ

かこそばゆい感覚だ。

鼻を鳴らすとルミアから香るいい匂いが至近距離で嗅げる。

「……………エッチなことでもいいの？」

「ちよ、ちよつとだけだよ？」

それでも許すあたり、本当の貴女は天使ではないのですか？ と  
思った。

それだけ心が広いルミアの器量には感無量の極みだ。

「冗談。そんなことしないよ。万が一でもそれをしたらシステイーナの拳か蹴りか【ゲイル・ブロウ】の嵐を受けることになるしね」

「あはは……………」

苦笑するも否定はしない。

「だから、ルミアの気が済むまででいいからこのまま寝かせて」

「うん、ゆつくり休んでね」

ルミアに包まれながら重くなっていく瞼に身を委ねる。

抱きしめてくれているおかげか、凄く暖かい。

「ルミアちゃん。テラス君の様子は……………むう〜」

テラスの様子を見に来たセラは扉を開けるとその光景に頬を膨らませた。

そこにはルミアに抱きしめられながら共に眠りにについている二人の姿が。

それに嫉妬を抱くもセラは静かに扉を閉めた。

「先を越されちゃったな……………」

この嫉妬をちよつとグレンにでもぶつけようとセラはグレン達がいるところに向かう。

余談だが、吸血鬼は吸血した際に相手の体調も本人以上に知ることが出来る。

## イヴⅡイグナイト

原因不明の高熱が収まったテラスは住処の地下にいる。

そしてその両手には紅と漆黒の魔刀。魔煌刃将アールⅡカーンの武器を握っている。

「どうして僕が使えるんだ……………?」

テラス自身も感じる最もな疑問。アールⅡカーンは『夜天の乙女』から授かった双魔刀は伝授通り決まった手に持たないと発動しない。試しに左右入れ替えてみたが、能力は発揮されなかった。

そもそもこの双魔刀が持てる時点でおかしいのだが、こちらには好都合だ。

「あの状態で噛みついたら相手の力も吸収できるのか……………」

真正正銘の怪物となるあの状態をテラスは——ヴァンパイアロード吸血鬼王と名称をつけた。その方が色々わかりやすい。

全てを呑み込む闇の力。それが吸血鬼王ヴァンパイアロードの力だ。それはテラス自身の理性や自我さえも呑み込むほどの強力で凶悪な力。

今こうしているのも全てはルミアのおかげだ。

「そういえばどうやって僕は自我を取り戻せたんだろう?」  
首を傾げて怪訝する。

あの呪文を唱えてから戻るまでの記憶がない。気が付いたらルミアが目の前にいた。

(今度ルミアにでも聞いてみようか……………)

双魔刀を消して学院のある日にあの日のことを聞こうと決めてテラスは地下を出る。

「セラ姉さん」

「どうしたの?」

「ちよつと出かけてくるからついでに買い物も済ませておくけど、何かいる?」

「ん……………ちよつと待ってね」

セラは羊皮紙に必要な物を記してそれをテラスに渡す。

「それじゃお願いね」

「わかった。じゃ、ちよつと出かけてくるね」

「うん、いつてらっしやい」

セラに見送られながら住処を出て行く。

「さあ、ヴィオロちゃん。次に行ってみようか」

「が、頑張ります……………」

教育中のヴィオロは勉強に頑張っている。

ヴィオロⅡシヤンプルはこの国で『嫌悪』の対象とされている異能者だ。それ故に幼くも両親に捨てられた。

偶然に出会ったテラスが拾い、今はセラから一般常識、魔術の勉強に励んでいる。

時折ではあるが、魔術限定でテラスも教えている。

「これが家族って言うのかな……………」

同じ屋根の下で暮し、同じ食卓で同じ食事を食べて、苦楽を共にする。

■■■■だった頃にはないことだ。

そんなことを思いつつ街中を散策していると――

「テラスⅡヴァンパイアね？」

背後から声をかけられて振り返る。そこには真紅の髪をした女性がいた。

年齢はグレンと同じぐらいで、深紅の髪を、三つ編みに束ねてサイドテールにしている。

相貌は非常に精緻で目見麗しいが、どこか氷のような酷薄さを湛えている。

昏く燃えるような紫炎色を湛えた切れ長の半眼も、口元に浮かべる薄い笑みも、どこか他者に対する嘲弄のような印象を拭えない。

テラスはその女性とは初対面だが、女性が身に着けている服には見覚えがあった。

「帝国宮廷魔導士団特務分室の方ですか？」

「ええ、私は帝国宮廷魔導士団特務分室室長を務めているイヴⅡイグ

ナイトよ」

——イヴⅡイグナイト。

帝国古参の大貴族、イグナイト公爵家の姫君。

イグナイト家は数多くの優れた魔導士を輩出した帝国魔導士武門の棟梁。その当主は帝国最高決定機関たる円卓会にも席を持ち、大きな力と発言権を持っている。

セラから聞いたことのある人だ。

「初めまして。僕はアルザーノ魔術学院学士、テラスⅡヴァンパイアと申します。それで僕にどのようなご用件でしょうか？」

「ここで立ち話もなんだし、どこか落ち着く場所でゆつくり話しましょう。案内するわ」

こちらの返答も聞かずに踵を返して進んで行くイヴにテラスは肩を竦めながらついて行く。

(やれやれ、断れば狙撃ですか？ アルベルトさん)

建物の上から鷹のような鋭い眼差しを向けているアルベルト。それ以外にも二人。建物の影に隠れながらテラスの様子を窺っている。

吸血鬼の鋭い五感。特に嗅覚に優れているテラスはすぐに自分が今監視されている立場だと自覚して大人しくする。

向こうが警戒しているとはいえ、こちらから手を出すつもりはない。

手を出さなければテラスも何もしない。

テラスはイヴの案内の下、落ち着きのあるカフェに入る。

店の中は貸し切り状態。店員も恐らくは宮廷魔導士団の構成員。更には人払いの結界を張られている。

完全に相手に領域まで案内されたテラスだが、落ち着いた様子でイヴと対面するように腰を下ろす。

「単刀直入に言うわ。特務分室ちにきなさい」

淡々とした声音で勧誘するイヴにテラスは苦笑いを見せる。

「たかだか一学士を勧誘ですか？ 随分と買って下さるのですね？」

「なに？ 冗談？ それなら笑えるわ。私が直々にたかだか一学士を勧誘にくるわけないでしょう？ 不老不死の吸血鬼、テラスⅡヴァン

パイア」

「おや？ 僕の正体がバレてましたか？」

「バラすもなにも貴方隠す気なんてないでしょう？ 多くの外道魔術師を殺し、魔術競技祭では王室親衛隊を半殺し、正体を問いただせば吸血鬼と馬鹿正直に答える。これで隠しているつもりならとんだ間抜けね」

嘲笑を見せるイヴ。

全く持つてその通りですと内心で同意するテラス。

「魔術師としての腕前も文句なし。ああそれと宮廷魔導士団の方で貴方の階梯を第五階梯クインデに上げておいたわ。その方が色々都合がいいもの」

含み笑みを浮かばせながらさらりと第四階梯クアットルデの昇格が一段階上がった第五階梯クインデに昇格することになっていた。

「私の情報網で集めた貴方の実力は十分に使えるわ。その力を特務分室で使いなさい」

「何故か話が勝手に進んでいるのですが、僕が断るという選択肢はないのですか？」

「いいえ、勿論あるわ。でも貴方は素直に私の勧誘を受けてくれるもの」

策士気取りの笑みを見せる。

「貴方の学院でもうすぐ『社交舞踏会』があるわよね？」

「ええ、ありますわ？」

「そこで貴方の大切にしている恋人ルミアⅡティンジェルの暗殺を目論んでいると聞いても貴方は断るのかしら？」

「……………詳しくお聞きしても？」

その言葉にイヴの笑みが深まる。

ルミアの暗殺を目論んでいるのは最早馴染みとなっている天の智慧研究会。

その組織内は今も二派に分かれている。

古参メンバーを中核とした『現状肯定派』

新参メンバーを中核とした『急進派』



今回ルミアの暗殺を目論んでいるのは『急進派』でその中核——  
第二団《地位》<sup>アデフタス・オーダー</sup>が直接動いている。

社交舞踏会でそいつを捕まえるのがイヴ達、特務分室の目的だ。

「貴方の実力と立場なら付きっ切りで自然に王女を護衛ができる」

「僕が社交舞踏会が終えたら即軍を除隊する可能性があるのでは？」

「ルミアⅡティンジェルを守る為に貴方には軍で集めた情報と戦力が必要のはずよ。それとも貴方は自分一人だけの力でルミアⅡティンジェルを守るのかしら？」

無理だ。

一人だけでは決して守れない。

いつ、どこで、どのように、どのような敵が、攻め、狙い、襲ってくるかわからない。

それを事前に阻止する為にもテラスには情報と万が一の為の戦力が必要不可欠だ。

「私の下につきなさい。悪いようには使わないわ」

その言葉はもう覆らない決定事項だ。断れるわけがないとイヴは確信を得ている。

「……………いくつか条件があります」

「言ってみなさい」

「一つ、基本的の仕事はルミアの護衛。二つ、ルミアに関わる仕事は必ず僕に。三つ、ルミアに何かあれば僕は何よりもルミアを優先します」

「ええ、それで構わないわ」

「ありがとうございます」

テラスの条件を飲んだイヴはテラスの手を差し伸ばす。

「今日から貴方は帝国宮廷魔導士団特務分室執行官メンバー15、《悪魔》テラスⅡヴァンパイアよ。魔導士団の礼服とルミア暗殺計画の資料は後々に渡すわ」

「わかりました」

差し伸ばされた手を掴んでテラスはルミアを守る為に特務分室に入隊した。

## ルミアを巡って

アルザーノ帝国魔術学院伝統行事『社交舞踏会』。

何かと狭いコミュニティに納まりがちな生徒達のために、生徒同士で交流を深めることを目的として開催される行事、その来賓として、魔術学院卒業生やクライトス魔術学院などの他校生徒、時には帝国政府の高官や地方貴族、女王陛下すら顔を出すこともある、意外と大規模なパーティーなのである。

その社交舞踏会には伝統的な催し物としてダンス・コンペ、男女のカップルで参加して、社交ダンスの技量を競い合う催しがある。

そのコンペの優勝カップルの女性には、特典として一夜だけ『妖精の羽衣』ローベ・デ・ラ・フエ。魔法のドレスの着用権が与えられる。

そして『妖精の羽衣』ローベ・デ・ラ・フエには一つのジンクスがある。

それは『妖精の羽衣』ローベ・デ・ラ・フエを勝ち取った男女は、将来、幸せに結ばれるというジンクスがある。

だが、このジンクスには何の根拠もない。

それだけ仲がいい男女なら必然的に将来、結ばれる可能性が高いだけの話。

テラスも社交舞踏会の準備の際にちらほらとそういう噂話は聞いたが、そんなジンクスは別に信じてはいないのだが――

「《バン》」

「ああああああああああ――つ!？」

「はい。次」

「《大いなる――》」

「《バン》」

「おおおおおおおおおおおおお――つ!？」

「はい。次」

下心満載の男子生徒達は信じていたのであった。

そして、ルミアとダンス・コンペに参加するテラスにその男子生徒達は次々と長蛇の列を作ってまで決闘を申し込んできた。

「まったく……………」

どうしてそんな根拠もないジnkスを信じるのかテラスには理解できない。

「貴様なんかにはルミアちゃんは渡せない！」

「俺達の天使を返せ！ 悪魔！」

「ルミアちゃんと踊るのは僕だ!!」

見事なまでに妬みと嫉妬の嵐に巻き込まれているテラスは再度嘆息した。

男子生徒達の目的は決闘に勝ってルミアとダンス・コンペに参加すること。その為にはテラスは邪魔なのだ。天使に近づく害虫を駆除しなくてはならない。

そんな男子生徒達の決闘をテラスは渋々引き受けているのだ。

(相変わらずルミアは凄い人気だな……………)

彼女の人気の凄さを改めて知ったテラスは次の対戦者も瞬殺していく。

「カツシュ衛生兵。お願い」

「おう、医務室まで運んでやる」

また一人、また一人と担架で運ばれていく敗北者達は一週間学院指定の女子制服を着て通うという罰を与えておいた。

最早この一連の決闘自体が作業のようになっていた。

「くっ……………これが最速で第五階<sup>クインテ</sup>梯まで登り詰めた者の実力なのか……………ッ！」

「諦めるな！ 奴にだって限界はある！」

「ルミアちゃんと踊るのは俺達だ!!」

今も妬み、嫉妬、闘志を燃やす男子生徒達にテラスは告げる。

「もう面倒だから十人単位で来ていいよ？ そろそろルミアの所に行きたいし」

その余裕たっぷりの言葉に男子生徒達の何かがキレた。

「……………な、舐めるなっ!!!」

「《ババババババババン》」

【シヨック・ボルト】十連射という超絶技巧を披露すると同時にあつと

いう間に十人が地面に倒れる。

「二応二十連射まではできるけど、これ以上は手加減して貰えるとは思わないでね？」

圧倒的な實力を見せつけたテラスに頬を引きつかせている男子生徒達に告げる。

「焼かれるのがいい？ 氷漬けがいい？ それとも感電がいい？ 好きなものを選ばせてあげる慈悲はあげるよ？」

にっこりと微笑むその笑みは男子生徒達からはとても恐ろしく見えた。

「さて、終わった」

死屍累々（死んではない）の男子生徒達を背にルミア達がいる学院会館の多目的ホールに向かう。

「ルミア、システイーナ。何か手伝うことは——」

「なあ、ルミア。今度の『社交舞踏会』のダンス・コンペで……………俺と踊れ」

ルミアに強引に詰め寄ってダンス・コンペを誘うグレンの姿がそこにいた。

「あ、あの……………先生……………？ 私、テラス君ともうダンス・コンペに出るのですが……………」

「知らん、拒否する、しなきゃ単位を落としてやる」

にこやかな笑みを見せながらグレンの誘いを断ろうとするルミアにグレンは強引に迫る。

「あ、あの、先生……………」

システイーナと準備を進めている生徒達はグレンの後ろにいるテラスの存在に気付いたが、グレンは周囲のことをお構いなし。

「……………」

テラスは指先をグレンに向ける。

「せ、先生……………あの、」

ルミアもテラスの存在に気付いてグレンに声をかけようとするがグ

レンは止まらない。

「まあ、悪いようにはしないさ。お前に必ずあの噂の魔法のドレス………『妖精の羽衣』ローベ・テ・ラ・フェを着せてやるぜ?………さあ、大人しく首を縦に振りな」

「それが今世の最後の言葉で構いませんね? 《この・ロクでなし・講師》」

呪文改変による「ライトニング・ピアス」はグレンの後頭部に放たれる。

「ぬおっ!」

しかしながら流石は元帝国宮廷魔導士団特務分室に所属していたグレンだけあって、紙一重で「ライトニング・ピアス」を躲した。

「てめえ! テラス! 今の完全に俺を殺す気で撃つただろう!」

「安心してください。ルミアや他の人達には当たらない様にしっかりと制御しましたから」

「俺が安心できる要素がねえ!!」

完全に殺しに来たテラスにグレンは本気で憤る。

「人の彼女を強引に迫るロクでなしにはいいお灸です。それに大丈夫ですよ? 万が一に先生が亡くなったら遺体はちゃんと骨も残らず燃やしてあげますから」

「そのどこが大丈夫なんだ!?! コラッ!!」

表情を崩さないテラスにグレンは拳を握りしめて怒りを露にする。

「フン、まあいい。テラス、ルミアとダンス・コンペの相手を代われ。このグレン先生がルミアをエスコートしてやる」

「先生にしては笑えない冗談を言いますね? 何ですか? 本気ですか? どうせコンペで優勝カップルに贈られる賞金目当てなんでしょう? 嫌ですね、お金のない人は余裕がなくてもはや惨めとしか言えませんよ?」

「ハハハハ! 言ってくれるじゃねえか? テラス君。そもそも君、踊れるのかな? 魔術しか取り柄のない魔術馬鹿に『社交舞踏会』なんて出たら恥をかくだぞ? ここはこのグレン大先生に任せてチミは隅っこで大人しくしてなさい」

「それを仰るのなら普段から恥ずかしくて仕方がないグレン先生の方がよほど『社交舞踏会』に出場しない方がいいですよ？ わざわざ他校にまで学院一恥晒しを見せたらこちらまで恥ずかしい思いをしてしまいますしね」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

「あの、先生、テラス君……………?？」

互いに険悪な雰囲気な中で笑い出す二人は同時に多目的ホールの外を指す。

「ちよつと表に出ようか？ ガキ」

「全く同じことを考えてましたよ。第三階梯<sup>トレデ</sup>」

「聞いたぜ？ 第五階梯<sup>クインデ</sup>に昇格したつてな？ だが、位階が全てじゃないてことを教えてやる。特別授業だ。授業料はルミアのダンス・コンペの交代でいいぜ？」

「強引に授業を押し付けた上に授業料を筆り取るとは……………講師の風上にもおけませんね。一度は痛い目を見た方が先生も今よりはまともになるでしょう」

迫力のある笑みで牽制し合う二人。当事者であるルミアはおろおろ戸惑うしかない。

二人は左手の手袋を相手に投げつける。

「決闘内容はダンスだ」

「いいでしょう。どちらがルミアの相手に相応しい踊りを見せられるか、シルワ・ワルツで勝負です」

シルワ・ワルツ。

『大いなる風霊の舞<sup>バイレ・デル・ヴィエント</sup>』を貴族の遊興用に簡略化されたものだ。

「泣いて謝るなら今の内だぜ？ テラス君。グレン大先生の超絶ダンスを見ても後悔すんなよ？」

「先生こそ後で泣きべそかいても知りませんよ？」

譲れないもののために二人は衝突する。

「……………どこかで見た光景だわ」

システイーナはぼそりとそう呟いた。

どちらが相応しいのか

グレンとテラス。

二人はどちらがダンス・コンペでルミアと踊るのに相応しいか勝負をする為に中庭に訪れていた。

「ふっ、テラス。恥をかく前に辞めるなら今だぞ?」

「先生こそ辞退したらどうですか? 意地を張るのも疲れるでしょう?」

互いに笑みを浮かばせながら言葉で牽制し合う。

「先生! 最低! ルミアの気持ちも少しは考えなさいよ!!」

「うるせえ! 今日を生きる為にも俺に協力してくれそうなのはルミアしかないだろうが! こっちは死活問題なんだよ、白猫!!」

ふうくと猫のように憤るシステイーナとグレンでいつもの言い争うが中庭で行われるなかでテラスはルミアの傍に歩み寄る。

「ルミア。絶対に勝つから安心して」

「う、うん……………でも、テラス君は踊れるの……………?」

ルミアが心配するのはそこだった。

ルミアは元・王家の人間ということもあってダンスは得意だ。

だが、テラスは魔術に関してには凄いのを知っているけどダンスが得意とはお世辞にも見えない。正直ルミア自身も踊れるとは思っていない。

「少なくともシルフ・ワルツならこの学院で誰よりも踊れる自信はあるよ? まあ、見てから判断してよ」

「え、う、うん……………」

予想外にも自信満々に言い放つテラスの返答に呆気を取られる。

「よしテラス! このグレン大先生がお情けぐらいくれてやるよ!

お前はルミアと踊れ! 俺は白猫と踊ってやる! 審査員は二組

でいいだろう?」

「構いませんよ。どうせ勝つのは僕達なのですから」

「ちよっ!? 私まだ了承してないんだけど!」

システイーナの手を強引に引つ張って中庭の中央に向かうグレン

はどうやら先に踊るようだ。

(悪いな、テラス。今回ばかりは我慢してくれ……………)

内心でグレンはテラスに謝った。

今回グレンがルミアと踊ることに固執しているのは賞金というわけではない。

『ルミア暗殺計画』を企んでいる『急進派』の天の智慧研究会からルミアを付きつきりで護衛する為にもルミアとダンス・コンペに参加する必要がある。

二人の仲を斬り裂く真似は本当はグレンもしたくはなかったが、背に腹は代えられない。

テラスと協力を得るのが最善の判断かもしれないが、グレンはテラスをこれ以上戦いに巻き込みたくはない。

グレンはわかる。

テラスはルミアの為なら平然と危険なことを冒す。それが最善だと判断したのなら殺しも厭わない。

お節介だろうがこれ以上テラスの手を血で染めたくはない。

(そっぴやイヴの奴、新しいメンバーも紹介するって言ってたな？  
どんな奴だ?)

含み笑みを見せながらイヴはグレンにそう告げた。

しかし、顔も名前も知らない奴のことを考えるよりも今は勝つことに専念する。

「システイク、先生、準備はいいですか？ 行きますね？」

ルミアが蓄音機を操作し、円盤コードをのせ、針を置く。

すると、蓄音機の上部に据えられた角笛部分ホーンから、シルフ・ワルツ用の楽曲『交響曲シルフィード第一番』の前奏が流れてくる。

今回の『社交舞踏会』のダンスであるシルフ・ワルツは一番から七番まで。一番難しい八番は使用される曲の都合のため無い。

雄大で優雅なオーケストラの前奏が終わり、礼式通り互いに一礼し

——互いに歩み寄り、手を取って——そして、曲を合わせて、い

よいよ、ダンスが始まった。

その瞬間だった。



「——ッ!?!」

ぐん、といきなり荒々しくグレンに引き寄せられるシステイーナの身体。

「行くぞ」

戸惑うシステイーナを力強くリードするように、グレンがステップを踏み始め——

そして、全身を生き生きと躍動させて、踊り始めた。

その踊りはお世辞にも優雅とは呼べない。

だが、それを必要としないほど熱に満ちて情熱的で荒々しい野性的な生命力に溢れている。グレン達はこの場にいる誰もが惹き付けられる踊りを披露してみせた。

周囲から自然と集まる拍手。

「どうよう?」

得意げな笑みを見せつけるグレンにテラスは小さく笑みを見せて拍手する。

「お見事です、グレン先生。まさかここまで踊れるとは予想外でした」

「ハーハッハッハッハッ! このグレン先生がちよーと本気を出せばこんなもんよ!?! さあ、どうする? テラス君」

挑発的な笑みを見せるグレンにテラスはルミアの手を取る。

「ですが、僕達の敵ではありません」

そう告げると二人は前に出て踊りを披露すると全員が言葉を失った。

その踊りはもはや完成された一つの芸術。

神秘を連想してしまうほどの舞を披露する二人の息は完璧に合い、一切の淀みすら窺えない。どちらがエスコートし、どちらが補佐しているわけもない。

二人が二人共互いの思考を読んでいるかのように舞い踊っている。グレンでさえも見惚れ、息をすることさえ忘れるほどだ。

最後のフィニッシュが終わると二人に待っていたのは盛大な喝采と拍手の嵐と——

「な、なんだそりゃああああああああああああああああああああああ



「ルミア。僕は君の為に必ず『妖精の羽衣』ローベ・デ・ラ・フエを勝ち取って見せる」  
多くの人がいるなかで宣言するテラスの発言にルミアは嬉しそうに笑みを見せて頷く。

「うん。一緒に頑張つて、優勝を目指そうね」

見せつけるかのような二人のやり取り。

女性陣はそんな二人のやり取りを羨ましそうに見て。

男性陣は血涙を流しながら怒りと妬みで拳を強く握りしめる。

その中でテラスはグレンを一瞥して内心で謝る。

（すみません、先生。今回ばかりは絶対に譲れません。先生よりも僕の方がルミアの護るのに適しているので）

テラスはグレンがルミアの為に強引な手段を使ってルミアと踊ろうとしていたことに気付いていた。だからグレンに合わせて挑発するように話した。それでも譲れなかった。

グレンよりも自分の方が護衛に適している。そう判断したからだ。  
（ルミア、君を殺させはしない。君を殺す者がいるのなら僕はそいつを殺してでも君を守る……………）

密かにそう誓う。

## 練習の間際

「いったい何の用ですか？ 先生」

ルミアのダンス・コンペのパートナーの座を死守したテラスはその後も一通りルミアと踊りの練習をして一区切りつけると急にグレンに呼び出されて人気のない場所までやってきた。

「……………テラス。何も聞かず、何も言わずにルミアのダンス・コンペの相手を代われ」

先程とは違う真剣みを帯びた顔と声でテラスに告げるグレン。

「事情も教えずに代われとは都合が良過ぎませんか？ 勿論断りますが」

「それには悪いとは思ってる。頼む！ 事情なら後で説明してやるから！」

グレンは頭を下げ、テラスに頼み込んだ。

それを見てテラスは息を吐いて人払いの结界を張る。

『ルミア暗殺計画』ですよ？ だから自然でルミアの傍で護衛ができるパートナーになる必要がある。そうですね？」

「お前……………!? どうしてそれを!？」

予想外な言葉にグレンは頭を上げて目を見開くとテラスは名乗りを上げる。

「改めて自己紹介をしますね。帝国宮廷魔導士団特務分室執行官ナンバー15、《悪魔》テラスⅡヴァンパイアです。今の僕は特務分室に所属し、イヴさんからルミアの護衛を命じられています」

「イヴが言っていた新人ってお前の事だったのか!? いつの間に、いや、それよりもお前わかってんのか!? 特務分室がどんなどころか!？」

「外道魔術師を殺す仕事。そうですね？」

「わかってんなら今すぐそんなとこ除隊しろ！ 俺からもイヴに言っ

て——」

「どうしてです?。」

「なっ——」

何としてでもテラスを血塗られた世界から引き戻そうとするグレンだったがテラスは怪訝そうに首を傾げた。

「ルミアを守る為にも特務分室、帝国宮廷魔導士団から得られる情報と戦力は必要な手段であってルミアを守れる確率を大幅に上げることもできます。イヴさんからの誘いはよりルミアを安全かつ確実に守ることができるのですから入隊しない理由はありません」

「そうかもしれないねえ……………だがな、あの女はセラを見殺しにしようとした女だぞ!? お前の事だって利用価値のある駒としか思っただけであらう。えはずだ！ それに、自分の生徒を血塗られた闇の世界に行くのを黙って見過ごせれるか……………ッ!」

グレンはきつと心からテラスのことを心配してそう言ってくれているのだろう。

普段はロクでなしな講師ではあるもその心は誰よりも熱く、優しい心を……………それこそ正義の味方としての正義感を持っているのぐらいテラスも理解できている。

「ありがとうございます、先生。ですが、除隊はしません」

「……………ルミアの為か」

「はい」

「……………お前が特務分室に入隊したのを知ったらあいつは自分を責めるぞ」

「そうでしょうね。ルミアは優しいですから」

容易にそのことが想像できてしまう。

私なんかの為に、とテラスを怒り、血塗られた世界に送る原因として自分を責めるだろう。

「それでも僕はルミアを護りたいのです。そして知りたい。ルミアが言っていた人間が持つ理屈ではないその感情を。ルミアが僕に抱く好意を、僕がルミアのことが好きかどうかという気持ちを。その為にもルミアはこの身を挺して護り通します」

「……………」

「それに元より怪物は闇の世界の住人です。外道魔術師もこれまで多く殺してきましたが僕にはどうでもいいことです。ですから心配し

ないでください」

「……………無茶言うんじゃんねえよ。馬鹿野郎」

グレンの手に力が入る。

心配するなという方が無理だ。それでもきつとグレンが何を言ってもテラスは首を縦に振らない。

「ルミアのダンス・コンペのパートナーは変わりません。先生はシステイーナと一緒に参加してください。土下座でもなんでもすればきつとシステイーナも応じてくれるでしょう」

あれこれと弁明しながらきつと最後には了承する光景が目に見えぬ。

「では。ルミアとの練習がありますから。今夜、遅れないでくださいね」

特務分室が集まって行う任務の確認と内容。それとテラスにとっては他の特務分室と顔合わせとなる。

そこにグレンが参加するのは既にイヴから知らされている。

そう言つてテラスはグレンを置いてルミアの元に戻る。

「あ、お帰り。先生は？」

「今月の食費が……………って嘆いていたよ。システイーナ、先生を助けると思つてダンス・コンペに出てあげてよ。もう憐れ過ぎて……………」

「しよ、しようがないわね……………先生が倒れて貰つても困るものね。仕方なく、そう仕方なく出てあげるわよ！ その代わりこっちも優勝する気で参加するから覚悟しなさいよね！」

「ふふ、お互い頑張ろうね。システイー」

素直じゃない親友に暖かい眼差しを向けるルミア。

後はグレンがシステイーナを誘えばルミアの安全は一層に増す。

「さて、ルミア。もう一通り練習しておこうか」  
「うん」

一休憩してからもう一度ダンスの練習をする二人の姿に生徒達は羨ましさや嫉妬を交ぜた視線を向ける。

「はあ、ルミアが羨ましい……………」

「魔術だけでなくダンスまであの技量とは……………」

「二人の息もぴったり……………優勝はほぼあの二人で確定でしょう」

「ちくしょう……………俺達の天使が……………」

「おのれえ……………この恨みで人を殺せれるのなら……………」

「死ね……………もがき苦しめ……………」

嫉妬と共に恨み言までテラスの背中に突き刺さるも当の本人は完全無視<sup>スルー</sup>。

痛くもかゆくもない。

「ふふ」

「どうしたの？」

練習中に不意にルミアが笑みを溢した。

「テラス君の事だからってつきり誘ってくれないかと思ってたの。だってテラス君そういうの疎いし」

(うん、正しい……………ルミア、正解です)

ルミアの言う通り、本当は誘う気などこれっぽちもなかった。

ルミアから誘われれば参加する程度のことしか考えていなかったが、イヴから『ルミア暗殺計画』のことを聞かされてテラスはルミアの誘ったのだ。

それがなければきつと今のように踊りの練習もしていないだろう。

「私ね、今、凄く嬉しいよ？好きな人とこうして踊ってみたかったから」

「まだ早いよ。その嬉しさは優勝した時に取っておいた方がいいと思う」

「そうだね、一緒に優勝しよう」

「もちろん」

柔和な笑みを見せるルミアに応じるように頷くとルミアはその笑みから一転して真剣な顔に変わる。

「……………ねえ、テラス君。お願いがあるの」

「なに？」

「私に、軍用魔術を教えてくださいませんか……………？」

「ルミアには必要ないよ」

不意に告げられたその言葉に即答で返す。

「でも、私はずつとテラス君や皆に守られてばかりで………私も皆の力になりたいの」

「ルミアがいなかったら僕はこうしてルミアの手を握っていないよ？」

「それでも私は皆の、テラス君の力になりたい。その為にはやっぱり力がいると思うから」

哀しい笑みを作りながら必死に懇願するルミアにテラスは悩む。

正直、ルミアに軍用魔術が扱えるとは思えない。

才能云々以前に相手を傷付ける類はルミアには向かない。

それよりも白魔術に磨いてヒーラー・スベル法医呪文に魔力を回してくれた方がいいとさえテラスは思っている。

だけどそれでルミアが納得するとは思えない。

了承すればルミアは根を上げることなく軍用魔術を覚えようとするだろう。

それが容易に想像できる。

「まず拳闘、軍用魔術は防衛呪文だけ。それを約束してくれるなら教えるよ」

「うん、ありがとう」

笑顔で頷くルミアにテラスは嘆息する。

ルミアと出会えて本当に変わったと自分自身でも思う。

出会わなければ今だってルミアには軍用魔術なんて意味がないと言いついていただろう。

(これが人間の感情でいう甘さなのだろうか?)

テラスはそんなことをふと考えてしまう。

「今日の夜に迎えに行くから」

「うん。よろしくお願いしますね、先生」

冗談交じりにルミアはそう言ってきた。



## 夜の公園

夕日が沈み、星空が見え始める夜の時間帯にテラスはフェジテにある自然公園でルミアに拳闘を教えていた。

『社交舞踏会』のダンス・コンペに向けて練習している際にルミアから軍用魔術を教わりたいと頼まれ、拳闘と防御呪文だけという条件で妥協してその日から訓練は始まった。

まずは拳闘ということから教わった拳闘十前世の格闘技を織り交ぜた独自の格闘技オリジナルをルミアに教えている最中。

「やつー！」

一通りの型を教えてその型通りに動くルミアの筋は悪くはないとテラスは思っている。

ただそれは今は虚空、相手がいない状態だからこそで実際の戦闘になればルミアがその拳を相手に当てられるかどうかと言われたら無理だろう。

ルミアは優しい。それこそ自分よりも他者を優先するほどに。

別段、テラスは誰かの為に誰かを犠牲になろうとするその考えを否定する気はない。

それは個人の自由だ。

それがルミアであつてもそうならないように自分が動けばいいだけの話だ。

その為に特務分室に入ったのだから。

「テラス君？ どうしたの？」

「ううん、なんでもないよ。ただ先生のお腹が大丈夫かなって」

「うくん、大丈夫だと思うけど、少し心配だね……………」

グレンをダシに誤魔化すテラスにルミアは苦笑いを浮かばせながら心配する。

「システイーナにお弁当を作つて貰う？ 先生が倒れたら困るからつてお膳立てして」

「あ、いいね。それならシステイもなんだかんだ言つて作ると思うよ」  
万年金欠のグレンとシステイーナを引っ付かせようと日頃から世

話を焼く二人はグレンとシステイナの二人の話に盛り上がる。

テラスはシステイナがグレンのことを好いているのは理解している。

ルミアがこっそり告げ口してくれたから。

しかし、どうしてシステイナがグレンの事が好きなのかわからない。

好きだということはわかってても、どうしてそうなった経緯がわからないテラスは世話を焼くついでに二人を観察している。

動き、言葉、行動、本人達の何気ない仕草まで観察して理解出来る部分はあった。

グレンがシステイナ以外の女性と話をしている妙に機嫌が悪くなる。

それは嫉妬といわれる感情だと理解できる。

少なくともグレンに好意を抱いているからそういう感情が表に出してしまう。

(そもそも僕は今でもルミアが好きなのかどうかもわからないけど………)

他人のことを観察しつつも自分のことは言えないテラスは今もその気持ちはわからない。

傍にいたいや守りたいと思う。

こんな怪物に好意を向けている彼女<sup>ルミア</sup>。そんなルミアを守りたいというこの気持ちが愛や恋心というものなのか？

それともただ単に吸血鬼として彼女の血は至高だから。自分の餌を守りたいからなのか？

もしくはもつと単純にルミアに欲情しているからか？

じつとルミアを見つめる。

「？」

髪から足先までじつと見られて怪訝するルミアはテラスから見てもその容姿は優れていることはわかる。学院でも天使と名高いルミアの性格はまさに天使という言葉がよく似合う。

テラスも性欲ぐらいはある。そういう経験はないが、一度は経験し

てみたいは思ってる。

「……………ルミア、少し抱きしめてもいい？」

「ええっ!? きゅ、急にどうしたの!？」

突然のことに驚くルミアにテラスはその理由を説明しようとするもルミアはテラスから少し距離を取って首を横に振る。

「だ、駄目! 今は、その、汗も掻いているし……………臭いって思われたくないから」

「別に気にしないけど?」

「女の子は気にするの!? 特に好きな人の前なら尚更だよ!」

(乙女心は複雑怪奇というものか……………)

そういえばセラからも似たようなことでデリカシーがないと言われたことがあることを思い出す。

テラスは別にルミアから変な匂いがしないことぐらい離れていてもわかる。

吸血鬼の嗅覚は些細な変化にも敏感。ルミアは臭くないと言い切れる。

しかしそれを口にしたらもつと怒ることぐらい想像はできる為に言わないが。

「……………ごめん、ルミア」

「え?」

一瞬でルミアの背後を取ったテラスはルミアの匂いを嗅いで我慢できなくなった。

「もう、我慢できない匂い……………」

がぶりとルミアの首筋に噛み付いて血を啜る。

「ん……………だめ……………」

口から甘い声を出してしまうルミアは離れようとするもしつかりと捕まれている為に逃げられない。

血を求める本能のままにルミアの血で喉を潤すテラスは満足してルミアを放すと、ルミアに睨まれてしまう。

「テ〜ラ〜ス〜く〜くん?」

「……………ごめん」

怒るルミアに素直に謝るテラスにルミアは「もうっ！」と頬を膨らませる。

「私だからいいけど、テラス君はもっとデリカシーを知るべきだよ」「とは言われなくても……………」

これでも学院では紳士的に振る舞っているつもりだ。という以前にこんなことをする相手はルミアぐらいしかない。

「それじゃあ、私が教えてあげる。拳闘と魔術を教わっている代わりにね」

そう言つて微笑む彼女のその笑みは楽しそうだ。

つい今しがたまで怒っていたのが嘘のように。

「それじゃお願いします、先生」

「はい、任せなさい」

本当にルミアは不思議な人だ。

前世では気味悪がれて両親も含めて誰一人、好き好んで近づこうとする人はいなかった。

それなのにルミアはこうして笑つて近づいてくる。

眷属になって吸血鬼にしたセラや異能者で親に捨てられたヴィオロならまだ多少なりの理解はできるも、ルミアの好意はそれとは違うもつと別の何かとしか形容できない。

(本当に不思議だよ……………)

彼女のことを知れば知るほどに謎が深まる。この理解しがたい何かが人間の心なのかもしれない。

「さて、そろそろ帰ろうか。送るよ」

「うん、お願い」

ルミアを抱えて翼を羽ばたかせるテラスはルミアをシステイーナの家まで飛んでいく。

(でも、今はそれは置いておこう)

これからグレンを含めた特務分室が集まる会議がある。

天の智慧研究会『急進派』の『ルミア暗殺計画』を阻止することを今は第一優先にして考えなければならぬ。

人間の理屈ではない感情と心を、ルミアがテラスに抱く好意を、そ

してテラス自身がルミアの事が好きかどうかという気持ちを知る為にもルミアを守らなければいけない。